



北海道大学大学院農学院

Graduate School of Agriculture, Hokkaido University

包括的先進農学フロンティア育成のための 国際教育プログラム

Global Education Program for AgriScience Frontiers
2019.4 - 2022.3

自己点検評価報告書

Self-Evaluation Report



2023年3月

March 2023

目 次

はじめに	1
I 特別プログラムの教育目的と特徴	2
I - 1 目的・教育理念	2
I - 2 特徴	2
1. 沿革	2
2. 募集対象	2
II 各分析項目および講評	3
II - 1 実施体制	3
1. 教育面	3
2. 運営面	4
3. 自己評価／点検評価	5
II - 2 実施内容	6
1. 入試	6
2. 教育	6
3. 生活面	7
4. 自己評価／点検評価	9
II - 3 成果	11
1. 入学者数・在籍者数・国別内訳	11
2. 学業	11
3. 研究	12
4. 進路	12
5. 人的ネットワーク形成	12
6. 修了者による評価	12
7. 自己評価／点検評価	13
III 今後の課題	15
資料編目次	17

はじめに

「包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム」は文部科学省による「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に 2018 年度に採択され、2021 年度まで実施された。本プログラムの最終年度に渡日した修士課程学生が博士後期課程を修了するのは 2026 年 9 月の予定であるが、申請書に記載した通り、前プログラム終了からの 4 年間のプログラム運営について総括し、外部評価に向けた自己点検評価を実施した。

この特別プログラムは、1997 年 10 月に北海道大学として最初に設置され、その後二期 10 年に亘り実施された英語コース「農芸化学特別コース」（開設時は 10 研究室）を前身とし、これを拡充発展させた「共生基盤科学のための英語による特別プログラム」（第三期、17 研究室）を土台として設計されたものである。第四期（43 研究室）「生物圏に立脚した生存基盤確立のための英語による特別プログラム」を経て、現在の第六期まで、通算して 26 年の長きに亘り実績を積み上げてきた本学院の特別プログラムは、300 名以上もの修了生を世に送り出し、その多くは母国の教育・研究機関において高度の専門性を有する人材として活躍している。また本プログラムは、農学研究院・農学院のみならず、大学全体の国際化にも大きく貢献してきた。さらに農学院においても、本プログラムの存在が、教員、学生、事務部という組織全体に国際化の必要性を強く認識させる結果となり、留学生数の増加を始め、大学院講義の英語化率の大幅な向上、留学生受入事務組織の体制改革などの実現に向けた牽引役を担ってきた。この度 2021 年度に新たに採択されたが、これまでの北海道大学農学分野が実践している高い教育・研究実績を生かし、実施してきた特別プログラムを継承しつつ、農学に立脚した人類生存基盤たる農学の確立に寄与する国際フロンティア人を育成し、ASEAN 地域を中心とした途上・中進国支援のための共同拠点を形成することを目的にしている。今回の自己点検評価が新プログラムの進展に貢献することを強く望む。

最後に、第一期の「農芸化学特別コース」を立ち上げられた北海道大学名誉教授富田房男先生、本プログラムの専任事務担当職員として第二期の 2005 年 4 月から第三期までご尽力いただいた原田和子様、農学・食資源学事務部の歴代の担当職員の方々、本報告書をまとめるに当たりご協力いただいた本学大学院農学研究院の園山慶教授、歴代のコース長である本学大学院農学研究院の浅野行蔵名誉教授・波多野隆介名誉教授・生方信名誉教授・岩渕和則教授・平野高司教授・園山慶教授、アドバイザーの本学大学院農学研究院の川端潤名誉教授・森春英教授・波多野隆介名誉教授・岩渕和則教授、さらに本プログラムを統括して頂いた北海道大学大学院農学研究院の歴代の研究院長、諏訪正明名誉教授・故服部昭仁名誉教授・松井博和名誉教授・丸谷知巳名誉教授・横田篤副学長に、厚く御礼申し上げます。

2023 年 3 月

北海道大学大学院農学研究院
研究院長・細胞組織生物学研究室・教授
西邑 隆徳

北海道大学大学院農学院
英語特別コース・コース長
北海道大学大学院農学研究院
作物栄養学研究室・教授
信濃 卓郎

I 特別プログラムの教育目的と特徴

I-1 目的・教育理念

北海道大学農学分野は、2012年に教育研究の基本理念を「生物圏に立脚した生存基盤の確立を通して人類の持続的繁栄に貢献する」と定めた。その実現のための具体的な重点教育研究領域として、生命科学を土台とした食料生産、環境保全、食品科学の3本柱を設定した。第五期となる本プログラム「包括的先進農業フロンティア育成のための国際教育プログラム」は、これまでの経験、第四期プログラムの自己点検評価（2019年3月実施）の結果などを踏まえて、この基本理念の実現に留学生受入と教育の面から貢献することを目的とした。

I-2 特徴

1. 沿革

「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」は文部科学省の事業であり、新たに海外から我が国の大学に留学する優秀な留学生を獲得する仕組みの構築を促すことを目的としている。

本特別プログラムは、1997年10月に北海道大学として最初に設置され、その後二期10年にわたって実施された英語コース「農芸化学特別コース」（開設時は10研究室）を前身とし、これを拡充発展させた「共生基盤科学のための英語による特別プログラム」（第三期、17研究室）、「生物圏に立脚した生存基盤確立のための英語による特別プログラム」（第四期、43研究室）を経て、文部科学省の2018年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択され、2019年10月より3年間、修士課程4名、博士後期課程4名の国費留学生の配置が決定した。なお、4月入学も設定したため、農学院内での本プログラムの運営は2019年4月から開始している。

2. 募集対象

本プログラムは修士2年+博士後期3年の形態をとり、本プログラムの趣旨・教育理念に基づき、毎年、修士課程・博士後期課程にそれぞれ4名、合計8名の留学生を配置した。さらに、国費留学生とほぼ同数の私費留学生（8名程度）の受け入れを目指した。東南アジア（ASEAN）諸国からの留学生を主な対象とした。入学時期は、国費外国人留学生の場合は10月、私費留学生（本プログラムでは優先配置研究留学生以外を全て私費留学生と区分している）については10月の他に4月、の年2回とした。また、日本人の博士後期課程学生（2名）の受け入れも目指した。

II 各分析項目および講評

II-1 実施体制

1. 教育面

大学院農学院は「共生基盤学専攻」、「生物資源科学専攻」、「応用生物科学専攻」、「環境資源学専攻」の4専攻から構成され、本プログラム所属留学生は研究分野に応じて各専攻に所属する。本プログラム担当教員は、農学研究院の「基礎研究部門」（7分野）と「連携研究部門」（2分野）のいずれかに所属し、各教員が担当する各専攻の研究分野に所属する留学生を指導した。なお、2019年度に農学研究院の改組があり、4専攻は「生産フロンティアコース」、「生命フロンティアコース」、「環境フロンティアコース」の農学専攻3フロンティアコースに再編された。また、2017年度に大学院国際食資源学院が設立され、一部の教員は農学院博士後期課程と国際食資源学院修士課程を兼担することとなった。

研究室数で見ると、2021年度の時点では農学研究院の全60研究室のうち、44の研究室（「農芸化学特別コース」設置時は10研究室）が本プログラムに参加することになった。（表1）参加研究室数の増加は、農学院が一体となり、横断的に本プログラムに取り組んでいることを意味している。

表1 英語特別コース参加の研究室および教員一覧（2022年1月現在）

グループ	領域	研究室名	教授	准教授	講師	助教	オブザーバー
1	食料生産 13研究室	作物学			柏木純一	中島大賢	
		動物機能栄養学	小林泰男	小池 聡		鈴木 裕	
		ビークルロボティクス	野口 伸	岡本博史		Ricardo Ospina Alarcon	
		循環農業システム工学	●岩渕和則	清水直人			
		生物生産応用工学					石井一暢
		作物栄養学	信濃卓郎	渡部敏裕		丸山隼人	
		開発経済学	◎近藤 巧	合崎英男			
		環境生命地球化学					内田義崇
		遺伝繁殖学		川原 学		唄 花子	高橋昌志
		農資源経済学					齋藤陽子
		植物育種学	貴島祐治			小出陽平	高傘禮逸郎
畜牧体系学	上田宏一郎			呉 成真			
植物ゲノム科学				Maria Stefanie Dwiyanti			
2	環境保全 11研究室	土壌学	当真 要	中原 治	倉持寛太		
		農業土木学			山本忠男		井上 京
		生態環境物理学	鮫島良次 平野高司		岡田啓嗣 山田浩之		
		土壌保全学	石黒宗秀				柏木淳一
		造林学	渋谷正人		◎齋藤秀之 宮本敏澄		
		流域砂防学	山田 孝	笠井美青		桂 真也	
		陸域生態系モデリング					加藤知道
		生態系管理学	中村太士	森本淳子			
		森林政策学	柿澤宏昭	庄子 康			
		花卉・緑地計画学		愛甲哲也	松島 肇		
林産製造学	玉井 裕	幸田圭一					
3	食品科学 8研究室	食品栄養学	石塚 敏	比良 徹			
		食品機能化学	※園山 慶	加藤英介		逢坂文那	
		食品加工工学	小関成樹			小山 健斗	
		分子酵素学	木村淳夫			奥山正幸	田上貴祥
		生物化学	森 春英			佐分利亘	
		微生物生理学	横田 篤	吹谷 智			前田智也
		応用分子微生物学					曾根輝雄
		応用食品科学	◎玖村朗人				
4		生物有機化学	松浦英幸			北岡直樹	

生命科学 12 研究室	生態化学生物学	橋本 誠		崎浜靖子		
	木材化学	浦木康光		重富顕吾		
	分子生物学	尾之内均			山下由衣	
	応用分子昆虫学	◎浅野眞一郎			佐藤昌直	
	植物病原学	増田 税		中原健二		
	根圏制御学		江澤辰広			
	生物情報分子解析学		◎福士幸治			
	基礎環境微生物学	田村具博 湯本 勳 鎌形洋一	森田直樹 北川 航 菊池義智 加藤創一郎			
	動物生態学	荒木仁志				
	ゲノム生化学					高須賀太一
	昆虫体系学	秋元信一 大原昌宏	吉澤和徳			

※コース長 ●アドバイザー ◎副コース長

2. 運営面

本プログラムの運営は、独自の教授会（「英語特別コース会議」）の意思決定に基づいて行われる。英語特別コース会議で協議し議決された事項は、上位にあたる農学院教授会に付議されて決定される体制となっている。また、学位審査については、留学生の所属が全専攻にわたり、通常の専攻教授会議にて審査することが難しいため、内規を整備し、英語特別コース会議にて審査できる体制としている。また、英語特別コース会議は、農学研究院／農学院／農学部教授会とほぼ同等の頻度（年6～8回）で開催され、本プログラムに参加する全ての研究室から担当教員が出席するため、密な情報共有・意思疎通が可能となっている。議題の一例を以下の囲みに示した。さらに、前プログラム終了から4年間の英語特別コース会議の議事録は、資料編（資料1（p.18））に収録している。

本プログラムは、生命科学、食料生産、環境保全および食品科学を包括した農学全体を対象としたため、参加研究室を4つの研究領域（食料生産、環境保全、食品科学、生命科学）に分けて運営を行うこととした（表1）。また、本プログラムの運営責任者として、2016年度からは、4領域の教授が任期2年でコース長に選任されることとなり、平野高司教授、園山慶教授、2021年度からは信濃卓郎教授が担当している。また、各領域から1名ずつ（任期2年）および元留学生担当教員1名（福士幸治准教授、生物情報分子解析学）の5名が副コース長を務めることとなった。「農芸化学特別コース」から参加している研究室の教授にアドバイザー（任期2年）として助言をもらう体制も整えた。2018年度～2021年度のアドバイザーは、森春英教授（生物化学）、波多野隆介教授（土壌学）、岩渕和則教授（農業循環システム工学）であった。さらに、農学・食資源学事務部農学院教務担当職員が組織的に本プログラム運営を支えている。本プログラムの運営を通じて培われたノウハウやシステムを一般コースの留学生受入事務にも生かすことで、農学・食資源学事務部の留学生支援体制の戦略的強化が達成できた。

英語特別コース会議の議題一例（2021年11月11日（木））

1. 合否判定（私費）
2. 合否判定（MC→DC）
3. 次年度の国費採用予定
4. 日本人学生の英語特別コース参加について
5. コース長・副コース長の選出
6. 2022年3月修了予定者（DC）のスケジュール
7. 学位論文審査の要旨（記入例8）について

3. 自己評価／点検評価

教育面での実施体制は、教員組織（研究院）の改組および全学的な大学院の新設などにもとまない名称等が変更になった部分はあるが、実施期間中に参加研究室が増加し、プログラムの厚みが増した。運営面では、コース長、副コース長およびアドバイザーからなる執行体制を強化できた。また、事務部による組織的な支援体制は、一般コースの留学生支援の改善にもつながり、特別プログラムの長期実施による留学生事務改革への波及効果といえる。

II-2 実施内容

1. 入試

留学生の便宜を鑑み、本プログラムの選考は書面選考およびメールインタビュー（あるいはスカイプ面接、直接面接）で行っており、基本的に事前来日が不要である。メールインタビューでは、主指導教員（受入れ予定教員）と副指導教員（2名）がそれぞれ3回ずつ、基礎学力、入学の動機、研究の目的や内容、計画などについて質問することにより、入学希望者の能力および適性を保証している。

本プログラムでは、農学院のウェブサイト内で専用のページを運営し、教育・研究や入試に関する情報を公開している。また、2015年度に英文リーフレットを作成し、留学生の獲得に活用している。本プログラムの募集要項および入学願書（英語版）については、専用ホームページにて公開されており、本報告書の資料編（資料2（p.49）、3（p.76））には博士後期課程の募集要項（英語版・日本語版）および出願・入学スケジュールを収録した。出願枠により以下のように流れが異なっている。

(1) 国費留学生の場合（10月入学のみ）

本プログラム修了生等の人的ネットワークを活用し、農学研究院の教員は関係大学の大学長、教員に成績優秀者の推薦を依頼する。また、農学院のウェブサイトを開覧し、それぞれの教員に直接受入を打診する留学希望者も多い。各教員はその候補者の成績や人物の事前評価を行い、候補者が国費留学生の応募要件〔成績等：GPA（最大値3）が2.30以上であることが必要〕を十分に満たすと判断した場合、国費留学生として推薦する。その際、場合によっては相手国へ出向いての面接も実施している。なお、国費留学生は毎年度修士課程・博士後期課程各4名という人数の制約があるため、上記の4研究領域に各1名ずつを割り当て、グループ内で協議して翌年度留学生を採用する受入れ研究室（教員）を決めることとし、特定の研究室に留学生の配置が偏ることのないようにした。受け入れ国については、東南アジア（ASEAN）諸国を主な対象とする。

(2) 国費枠外（大使館推薦等）留学生・私費留学生の場合（10月、4月入学）

入学希望者は募集要項を入手のうえ、関心のある研究分野の教員に受入を打診し、該当教員の受入内諾を得た上で本プログラムに出願する。

英語特別コース会議は、(1)(2)の手順により候補者から提出された出願書類および受入れ予定教員によるメールインタビューの経過説明を基に審査を行い、可否を判定した後、農学院教授会に付議し、最終決定を得る。以上の流れは資料編募集要項内にもフローチャートとして示してある（資料2（p.49）、3（p.76））。

過去25年の特別プログラム（「農芸化学特別コース」時代も含む）の博士後期課程修了者のうち、すでに130名以上が母国において主に教員や研究者として活躍している。このような卒業生とのネットワークを活用して上記のような選考を行うことにより、修士課程・博士後期課程ともに優秀な学生の獲得が実現している。なお、博士後期課程の入学者については、多くの場合修士課程からの継続であるため、修士課程における学業成績にて博士後期課程進学に足りる研究能力が十分保証されている。

2. 教育

(1) 指導体制

研究指導、論文作成指導については、基本的に日本人学生と同じであり、学生ごとに3名以上の指導教員が配置され、そのうちの1名が主任指導教員として指導を行っている。このよう

な体制のもと、複数名の教員による綿密な指導を行い、修業年限内での修了を実現している。

(2) カリキュラム

研究（修士・博士論文）、演習（ゼミ）、講義（座学）からなるカリキュラムは農学院共通であるが、これらを資料編（資料5（p.88））に一覧表として示した。この一覧表を履修ガイダンス時に示し、履修計画を立案させ、指導教員と相談して履修登録をするように指導している。その他、北海道大学の全大学院生向けに開講される「大学院共通授業科目」も履修可能である。このため、本プログラムの留学生は幅広い分野の科目を選び、履修することができる。

必要取得単位数は日本人学生と同様に、修士課程の学生は研究（修士論文）、演習（ゼミ）、講義（座学）により30単位、博士後期課程の学生は研究（博士論文）、演習（ゼミ）により12単位となっている。

(3) 使用言語

本プログラム所属の留学生の使用言語は英語が基本である。講義に関しては、農学院の全科目は原則英語対応となっており、少なくとも講義資料には外国人が理解できる程度の英語を用いている。また、完全英語対応の講義も多く、英語対応の講義のみで必要単位を取得することが十分に可能である。完全英語対応の講義については資料編（資料5（p.88））の一覧表にマークし区別した。

修士課程については、完全英語対応の講義は77科目中34科目（44%）である。具体的には、農学院必修科目6科目のうち4科目（「人口・食料・環境学総論」・「温暖化影響学総論」・「実践農学総論」・「農学フロンティア総論」）、3フロンティアコースそれぞれに特徴的な授業科目では必修科目の「研究」（修士論文）、選択科目では、「植物育種学特論」、「食品科学特論」、「生態進化学特論」、「国際農学特論」などいくつかの「演習」である。博士後期課程については、完全英語対応の講義は17科目中9科目（53%）で、必修科目の「演習」（ゼミ）と「研究」（博士論文）などである。英語の講義の実態、教員の意識、受講生の要望などを把握するために、教員と留学生に対するアンケート実施し、授業の改善に努めた。

また、研究室における研究指導、論文作成指導、事務連絡は英語で行われ、実験資料や実験機器マニュアルの英語版も整備されており、留学生に不便のない体制が整えられている。そのため、日本語能力を持たない留学生にとっても無理なく学ぶことができる。また、講義の教科書あるいは副読本として利用できるように、農学全般をカバーした英文テキスト「Frontiers of Agricultural Science（松香堂、277ページ）」を、若手の参加教員が中心となって2015年に出版した。

(4) 日本人学生の参加

本プログラムの申請書では、「2名の博士後期課程学生を受け入れる」ことを目標とした。参加研究室の日本人学生に英語特別コースの内容を伝えた結果、2018年度に1名、2019年度に1名、2020年度に1名、2021年度に2名、合計で5名の日本人学生が参加した。これらの日本人学生には、修了時にCertificateを授与している。なお、正式に参加した学生は5名であるが、英語により実施されている研究や演習を除くいわゆる座学（完全英語対応の講義）の履修者は大部分が日本人学生である。また、本プログラム所属研究室では留学生に対して英語で研究や演習の指導を行うが、日本人学生も合同で指導を受けている。このように本プログラムは日本人学生の国際化にも貢献している。

3. 生活面

(1) 全学的な取り組み

本学では、留学生に対して、渡日時の諸手続き等を手助けする日本人学生によるサポーターの配置、日本語授業の提供、在留資格申請手続代行、宿舎の提供、疾病等に対する経済的支援等のサービスが全学的に提供されている。特に、日本語授業の提供は、留学生本人が日本で生活するためにも有益であるが、日本留学のメリットを最大限に活用し、帰国後も母国と日本との架け橋となる人材を育成するという本プログラムの趣旨を鑑みても非常に重要である。

(2) 農学院独自の取り組み

本プログラム創設後は、農学院独自で以下のような取り組みに力を入れており留学生へのきめ細かいサポートを実現しつつある。

(A) 留学生担当教員によるサポート

農学院には留学生担当教員が2名配置されており、受入れ教員や、コース長も含め、留学生のメンタルヘルスや生活上の相談を受ける体制が整っている。

(B) チューターの配置

日本人学生のチューターを新規渡日留学生に1名ずつ配置し、1年間にわたり教育・研究について個別の課外指導を行わせている。

(C) 大学院生向けメールリストへの英語での情報提供

講義・行事などの必要情報や助成・奨学金などの有益な情報を大学院生向けメールリストに発信する際、留学生にとって必要と思われる情報は随時日英併記で提供している。

(D) 留学生新年会

留学生による新年会をサポートしている。留学生相互の交流、および日本人学生との交流に貢献している。ただし、2020、2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止した。

(E) フィールドツアー

農学同窓会の支援により、留学生相互の交流と日本農業や北海道農業について深く学ぶことを目的としたフィールドツアー（日帰りバスツアー）を、30年間にわたって毎年開催している。ただし、2020、2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止した。

(3) 本プログラム独自の取り組み

本プログラム所属の各留学生が、本プログラムへの帰属意識を持ち、他の留学生との関係構築をスムーズに行えるよう、独自に以下の取り組みを行っている。ただし、2020、2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、基本的にはオンラインあるいは文書での開催となっている。なお、修了式に関しては対面で開催した。

(A) 新入生オリエンテーション（入学時期に合わせて10月と4月の年2回実施）

コース長が中心となって本プログラムを構成する研究室の紹介、新入生の自己紹介、履修ガイダンス、学生生活上注意すべき点の解説などを英語で行う。

(B) 新入生歓迎会（10月中旬）

新入生の歓迎と留学生間の相互親睦のため、本プログラムに所属する全留学生、関連教職員が参加して行われる。

(C) 修士課程修了式（9月下旬）

9月修了者に対する修士課程の修了式は大学全体として行わないため（博士の学位記授与式のみ行われる）、本プログラム独自に修士の学位記授与式を実施している。

(D) 英語特別コースディレクトリの配布（2月）

本プログラムに所属する全留学生、教員、事務職員を所属研究室・部署ごとにまとめ

たディレクトリ（印刷体、顔写真付き）を毎年作成し、配布している。

(E) 送別会（8月中旬）

卒業後の交流を保つことなどを目的に、9月修了者に対する送別会を学位論文発表会の後に開催している。

(F) 学生委員会の設置

本プログラムの博士後期課程の学生としての自覚を持たせ、留学生間の人間関係を深めることを目的として、博士後期課程1年の学生に学生委員会を組織させ、上記行事の運営を補助させている。このような取組みによって、学生の一体感・本プログラムへの帰属意識が醸成され、留学生が本プログラムを修了した後も、本学とのネットワーク維持に大きく役立っている。

4. 自己評価／点検評価

(1) 入試

本プログラムでは、優秀な国費留学生の獲得のために、修了生や海外共同研究のカウンターパート等との人的ネットワークを活用している。後述するように、多くの修了者がアジア諸国において母国の大学教官等として活躍しているため、幅広い候補者の中から本プログラムに合った優秀な学生の推薦に繋がっている。このようなネットワークは有効に機能しており、今後もこの方法を継続することが適切と考えるが、さらなるネットワークの充実が必要である（方策等については後述）。

このような国費留学生の選考過程は、確実に優秀な留学生を獲得できる一方で、関係者間のネットワークには限界があるため、入試広報という観点での改善も必要である。また、本プログラムを発展させるためには、国費枠外（大使館推薦等）留学生・私費留学生の獲得も不可欠である。そのため、2015年度に専用のウェブサイトを開設し、本プログラムに関する情報発信（募集要項の配布なども含む）を積極的に行うことを始めた。また、リーフレットを作成して積極的に広報を行った。これらの活動は、本プログラムの知名度を上げ、候補者のすそ野を広げるのに役立った。さらには、本学の短期留学プログラム（HUSTEP、学部生対象）や日本学生支援機構による留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット、SS/SV）を利用して来学した留学生を農学部・農学院で受け入れ、本プログラムの講義等を活用して英語による授業と実験実習を行なった。短期留学した学生本人が本プログラムに出願することはもちろん、出身大学等で本プログラムを宣伝することにより、多くの優秀な留学生が本プログラムに集まることも期待できる。実際に2021年度には、HUSTEPで来学した学生が本プログラムに入学した。

(2) 教育

農学研究院全体の71%に相当する44研究室が参加し、ほぼ農学全体をカバーする研究領域（食料生産、環境保全、食品化学、生命科学）に関する教育を行い、留学生による広範囲の研究成果に結びついた。それは、受入れ研究室での個別の教育・指導はもちろんのこと、英語による講義・演習の賜物である。農学院における英語による教育の進展は、25年にわたる英語特別コースの特筆すべき成果であるといえる。本プログラムでは、教員と留学生を対象とした英語講義・演習に関するアンケートを実施し、英語講義の重要性についての認識を高めるとともに、講義の改善につながった。英語講義には、留学生だけでなく多くの日本人学生も参加しており、留学生との英語によるディスカッションなど、日本人学生の国際性の涵養につながった。なお、完全英語対応の講義は、留学生のみならず日本人学生にとっても貴重な体験として好評を博している。

2016年度には、博士後期課程留学生の短縮修了（2年半）を初めて認めた。これを契機に短縮修了の要件を整備し、優秀な学生のモチベーションを上げることに貢献できると考えている。

(3) 生活面

全学的取り組み、農学院での独自の取り組み、本プログラム独自の取り組みを合わせると、留学生は生活面での多様なサポートを受けることが可能である。特に本プログラムでは、留学生同士の間での親睦の場を設けるため、全員参加を基本とした多くのイベントを企画している。これらのイベントは、博士後期課程1年生の留学生がメンバーとなる「学生委員会」が主体的に企画・運営を行っており、留学生同士の同期の絆が大いに深められている。また、第一期当初から「英語特別コースディレクター」を継続して作成しており、留学生間や教員と留学生の間の交流に役立っている。現在は、農学院の全体経費の中から印刷経費が約20万円措置されている。

II-3 成果

1. 入学者数・在籍者数・国別内訳

入学者については資料編（図1および図2(p.137)）の通りである。2018年度から2021年度までの4年間でみると、各年度の修士課程への入学者数（図1）は5～19名で変動しており、総数は49名（平均12.3名/年）であった。一方、博士後期課程（図2）の入学者数は8～22名の範囲にあり、総数は62名（15.5名/年）となった。いずれも新型コロナウイルス感染症拡大のために2020年度の入学者数が最低を示した。本プログラム優先配置枠による国費留学生の総入学者数は、修士課程および博士後期課程でそれぞれ12名および11名、それ以外（純粋な私費、政府派遣、および大使館推薦）を私費留学生としたときの入学者数は、修士課程および博士後期課程でそれぞれ37名および51名であり、私費留学生数が国費留学生数のそれぞれ3.08倍および4.64倍に達した。本プログラムでは、国費留学生と同数程度の私費留学生を獲得することを目標としたが、目標数を大きく超える私費留学生が入学したことになる。さらに、日本人学生が2018～2020年度に各1名、2021年度に2名の計5名が参加し、目標（2名/年）に近づいた。

英語特別コースへの入学者数は徐々に増加してきた。一期、二期、三期、四期、五期（本プログラム）での年平均入学者数は、修士課程で6.0、6.0、7.6、11.0、13.0名、博士後期課程で5.2、7.2、8.2、12.0、15.3名となり、四期に比べて五期では、修士課程で1.2倍、博士後期課程では1.3倍の増加となった。この増加は、私費留学生の増加によるものであるが、本プログラムへの参加研究室が大きく増加したことで、留学希望者の様々なニーズに対応できるようになったことが私費留学生の増加に繋がったと考えられる。

2018年度から2021年度に入学した留学生（90名）の国別内訳を図3（p.138）に示す。なお、修士課程のみの学生や、さらに博士後期課程へ進学する学生などがあるため、上述の修士課程入学者と博士後期課程入学者の和とは整合していない。最も人数が多いのは中国（37名、41.1%）で、インドネシア（12名、13.3%）、韓国（5名、5.6%）、タイ（4名、4.4%）、バングラデシュおよびカンボジア（それぞれ3名、3.3%）が続き、その他のアジア諸国は12名（13.3%）であった。中国からの留学生の割合が多いのは、純粋な私費あるいは中国政府派遣（高水平）による留学生が増加したことによる。本プログラムにおける主な対象国であるASEAN諸国からの入学者は23名となり、全体の25.6%を占めた。また、90名のうちで国費留学生は23名（25.6%）であり、このうちASEAN諸国からの入学者は14名（60.9%）であった。

2018～2021年度の在籍者数は70人台を推移しており、国費留学生の割合は17.1～27.8%の範囲にあった（図4（p.138））。国別に見るとやはり中国が最も多く、26.4～35.5%の範囲にあり（平均31.5%）、次いでタイ（同12.6%）、インドネシア（同8.4%）、韓国（同5.1%）、バングラデシュ（同4.4%）であった（図5（p.139））。

2. 学業

2018～2021年度に入学した留学生の学位取得状況を資料編（表1(p.140)）に示す。国費留学生については、文部科学省より修業年限内での修了が求められていることから、出願時より留年を原則認めない旨周知し、教員・学生に強い使命感・緊張感を付与している。そのため、留年や退学をする学生はきわめて少ないが、2018年度以降では、2018年度に博士後期課程の学生2名が疾病のため留年後、うち1名が退学した。また、2020年度に博士後期課程入学の日本人学生1名が留年、修士課程の学生1名が健康上ならびに経済的理由のため退学した。なお、これらの留学生は国費優先配置枠以外の学生である。年度別の修士論文・博士論文の著者および題目は、資料編（資料6(p.92)）の通りである。

学業成績についても、2021年度現在で既設プログラム修了者のうち、修了時学業成績係数が2.7以上の者の割合は87.7%であり、農学院所属のその他の留学生における割合（72.6%）と

比べて優秀であることがわかる。

3. 研究

博士後期課程修了要件として、第一期特別プログラム開始時より学術論文1本以上の出版を課してきた。現プログラムでは修士課程および博士後期課程を5年間継続する学生には可能な限り2本以上を求めており、公開審査時に達成状況の報告も義務づけている（学術論文の他、国内外の学会発表、受賞等）。このことにより修了生の出口における質保証を行っている。

2018年1月から2022年9月までの、年ごとの論文数、学会発表数、受賞件数等を資料編（表2(p. 140)）に示した。原著論文数は増加傾向にあるものの、学会発表とりわけ国際学会発表の数は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により伸び悩んだ。そのような状況で、奨励賞およびポスター賞等の受賞は19件あり、留学生の研究活動が十分評価されていると言える。

4. 進路

修士課程修了者については、そのほとんどが博士後期課程に進学し、各自の研究をさらに深化させている。

博士後期課程修了者（2018年4月～2022年3月）の進路は資料編（表3(p. 140)）に示した。25名中、母国などの日本国外で大学教員になった者が4名（16%）、国立研究所等の研究員になった者が3名（12%）、民間企業の社員になった者が5名（20%）であった。一方、日本国内では大学・研究機関等の研究員が5名（20%）、民間企業の社員が5名（20%）であった。

なお、過去の英語特別コースの博士後期課程修了者（4期21年の118名）では、母国などの大学教員が36%と高い割合を占めており、今後の英語特別コースにおける志望者のリクルーティングに非常に有効である。

5. 人的ネットワーク形成

大学全体の取組みとして、正規課程を卒業・修了した学生に対しては、同窓会へ入会するよう推奨するほか、大学固有ドメインのメールアドレスを付与することにより、卒業・修了後も本学とのネットワークを維持するよう努めている。また、北海道大学が展開する海外拠点（海外オフィスやリエゾンオフィス）を通じた交流の強化も図っている。

農学院においても、教員は自ら指導した本プログラム修了者と定期的に連絡をとり、進路の状況を把握するよう努めているほか、修了者の依頼に応じて、日本学術振興会外国人特別研究員等種々の応募や受賞に必要な推薦状や紹介状、評価書等を積極的に作成している。さらには、当該学生が母国へ帰国後も、修了者と指導教員の間で共同研究が行われ、海外研究機関・大学と研究交流に発展することもある。また、修了者からの情報により、母国にて本プログラムに相応しい優秀な候補学生を事前にスクリーニングするケースもしばしばある。さらに、プログラムの広告塔を務めていただくとともに志願者リクルートの任にあたってもらうため、母国で教員や研究者として活躍している修了生をプログラムフェローに任命した。

また、2017年11月に英語特別コース20周年記念誌を発行し、ウェブサイトで公開するとともに、冊子体を海外拠点で配布している。記念誌には32名の卒業生から寄稿があり、ネットワークの強化に貢献できたと確信している。

6. 修了者による評価

本自己点検評価報告書の作成にあたり、2022年末に本プログラム修了生（前プログラム修了者を含む）へのアンケート調査を実施し、87名から回答を得た。集計結果を資料編（資料7(p. 98)）に示す。質問項目は「北海道大学の評価」、「本プログラムの評価」、「就職」および「北海道大学への希望」に関する内容であった。大学の評価（印象、教育や生活に対する満足度など）につ

いては、ほぼ90%以上の回答者より「満足」との評価が得られた。また、入学時に期待していたこととして、多くの回答者が質の高い教育・研究や国際交流をあげており、ほとんどすべての回答者がそれらの期待をかなえられたと答えた。一方、人的ネットワークの形成および維持については、それぞれ24%および40%の修了生が「できていない」と回答しており、今後の課題が浮き彫りになった。本プログラムのコンセプトについては、90%近くの回答者が良い印象を持ち、80%の回答者が入学にメリットがあったと答えた。入学したことのデメリットとしては、日常生活に必要な日本語を学ぶ機会が少ないという回答が複数あげられた。一方、就職に関しては、89%の修了生が「北海道大学で研究したことが現在の職業で生かしている」と回答しており、本プログラムのコンセプトや内容が留学生のニーズに合致していると考えられる。また、北海道大学での教育に期待することについては、「高度な専門知識」が26%、「語学力」および「国際感覚」がそれぞれ22%および24%であった。さらに、本プログラムへの候補者として適当な学生・研究者を探すこと等、母国において本プログラムの発展に協力することについて興味があると答えた修了生は90%以上であった。これらのアンケート結果は、今年度から始まった新しいプログラムに反映していく予定である。

7. 自己評価／点検評価

(1) 入学者数・在籍者数・国別内訳

国費優先配置枠（国費留学生）以外の留学生（私費留学生）の入学者数は、修士課程および博士後期課程において国費留学生数のそれぞれ3.08倍および4.63倍であった。これは、当初の目標（国費留学生と同数）を大きく上回る結果であり、参加研究室が増加したことが大きな要因であると考えられる。また、入学した国費留学生のうちでASEAN諸国からの入学者は60.9%を占め、当初の目標である50%を達成した。さらに、日本人学生が2018～2020年度に各1名、2021年度に2名の計5名が参加し、目標（2名/年）に近づいた。なお、限られた数の日本人学生が本プログラムに参加する制度は発展的に解消したいと考えている。以上より、本プログラムへの入学者数と出身国については、十分に目標を達成できたといえる。

(2) 学業

優先配置学生は修業年限を超えて在籍できないため、留年は許されていないが、このことは新入生オリエンテーションなどで厳しく申し渡している。本プログラムでは、上述のように修士課程と博士後期課程で1名ずつの中退者が発生した。彼らは純粋な私費留学生であり、優先配置学生ではない。また、疾病を理由とした留年もあった。いずれにしても、退学者や留年者が出ないことが望ましいので、今後は出願前の慎重な人物調査や、丁寧な研究指導、運営上の注意などが必要である。

(3) 研究

博士後期課程の修了要件として学術論文出版1報以上を課しているが、受入教員の徹底した指導や、公開審査時に業績リスト公表を義務づけていることなどで、厳格に達成されている。また、国際誌での原著論文の数が増加するとともに、奨励賞やポスター賞などの受賞数も大幅に増加し、帰国後にも高く評価される実績があがっている。これらは何よりも留学生の資質が十分でなければ達成できないが、本プログラムでの人的ネットワークを活用した採用方法が有効に働いていることを示すものでもある。

(4) 進路、(5) 人的ネットワーク形成

進路および人的ネットワークについては、本プログラムの趣旨に合致した極めて満足できる実績が上がっているが、在校生も巻き込んだ修了生の人的ネットワークを強化する必要がある。

(6) 修了者による評価

本プログラムが開始される以前の修了生も含めてアンケート調査の依頼を行い、87名から回答が得られた。大学の印象、教育や生活に対する満足度、本プログラムのコンセプトや入学のメリット、期待の達成度などについて、多くの好意的な回答が寄せられ、本プログラムの有効性を示す結果であると評価できる。また、ほとんどの修了生が母国において本プログラムの発展に協力することに興味があると答えたことは、本プログラムにおける「留学→帰国→学生送出→留学→」という優秀な人材確保・育成の循環システムが構築されつつあると評価したい。一方、人的ネットワークの形成および維持については、必ずしも十分ではないという回答が得られており、本年度から始まった新しいプログラムの中で十分に反映させる予定である。

Ⅲ 今後の課題

本特別プログラムは2017年度に1年間採択されなかった時期を除き継続して運用されている。2021年度には「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」として採択された。プログラム名は「包括的先進農業フロンティア育成のための国際教育プログラム(21002)」であり、2022年10月から修士課程4名、博士後期課程4名の優先配置枠が与えられることになった。

新プログラムの目指す「包括的先進農学フロンティア育成」とは、北海道大学農学分野のミッション(2014年4月文部科学省裁定)である「食料生産基地北海道を実現した開拓ならびに生産性向上研究、広大なフィールドを活かした生態環境保全研究、食品利用・食と健康の科学、それらの基盤となる基礎生物科学などに関する高い教育・研究実績を生かし、生物圏に立脚した人類生存基盤の確立に寄与する国際的人材を育成する」を具現化することである。新プログラムはこのミッションを通じて、主にASEAN地域の途上・中進国の持続性のある発展を支援することを目的とし、その中心的担い手となるフロンティア(時代を先導する開拓者精神溢れる人材)を育成するとともに、拠点となる帰国修了生との連携による優秀な人材確保・育成の循環システムの構築を目標とする。

新プログラムでは、本プログラムの実績を踏まえ、以下の改善を進めていく予定である(一部は、すでに実施中)。

1) 優秀な留学生獲得体制の強化

従来のネットワークの拡充と強化に加え、北大海外オフィス(韓国、中国、ASEAN(ベトナム・ハノイ))および北大リエゾンオフィス(タイ・カセサート大学、インドネシア・ボゴール農業大学、フィリピン大学、中国科学院大学)を拠点とし、本学教員の人的ネットワークを通じて推薦を依頼する。これらの拠点からさらに周辺関連機関への拡張リクルート活動を展開する。また、留学生交流支援制度、HUSTEP(協定大学からの学部レベル留学生受入プログラム)等の留学プログラムによる本学への来学生に本申請プログラムをアピールする。さらに、新たにオンラインによる大学院紹介コンテンツの発信等を行い、ポストコロナ期における優秀な留学生獲得の戦略に加える。入学者の選考にあたり、英語能力の評価基準をさらに厳格化し、公募開始時から2年以内を取得した検定試験において基準点以上のスコア(CEFR B2相当以上)を有していることの証明書の提出を求める。

2) 修学研究指導体制の強化

学生指導体制を強化するために2019年4月にメンター制を導入し、主指導教員1名の他に副指導教員を3名以上置いている。副指導教員には専門以外の教員も含めて広い視点からの教育を行い、「専門的でありながらも総合的視野を育む」ための学力・研究力の維持・向上を図る体制としている。

3) キャリア教育と修了後のフォローアップ体制の強化

キャリア教育強化策として「農学フロンティア総論」、「実践農学総論」、「リーダーシップ学総論」等の必修科目をすべて英語授業として開設している。また、北大フロンティアプログラムおよび国際人材育成プログラムI-HOPによって、日本企業との交流機会の提供、海外の研究者との交流機会の提供、日本のビジネスマナー等のセミナー、日本語習得支援(JLPTオンラインハーフ模試提供、BJTビジネス日本語能力テスト受験料支援)、奨学金支給型インターシップの提供等を実施する。さらに、各界で活躍する修了生を招聘してのAlumni国際セミナーを企画開催し、在学中の留学生に対するキャリアパス機能に加え、教員・全学生との人的ネットワーク強化と一般市民への大学事業の理解促進につなげる。

4) プログラムの評価体制の強化

本プログラムの運営は、プログラム長1名（全体を統括）、副プログラム長5名（4重点研究教育領域から各1名、国際連携担当教員1名）、アドバイザー教員1名、および事務職員2名（農学院教務担当）からなる運営会議（常置組織）が行なっている。運営会議内に新たに評価委員会を設置し、全教員からの評価アンケートおよび学生授業アンケートの結果に基づき、留学生受入れ、授業、研究指導、フォローアップ等の評価と改善を毎年実施する。プログラム終了年度の翌年度には、2019年に策定した農学院のアセスメントポリシーに基づいて自己点検評価および外部評価を実施する。なお、今後の外部評価については、学内および他大学で実施されている特別プログラムに携わる教員ならびに既設プログラムのOB教員等、本プログラムの趣旨に精通した人材を外部評価委員とし、3年に1回実施することにより、PDCAサイクルの実効性をさらに高める。

資料編目次

資料1. 会議議事録（2018年4月～2022年3月）	18
資料2. 2023年度募集要項（英文）	49
資料3. 2023年度募集要項（和文）	76
資料4. 出願・入学スケジュール	87
資料5. 2021年度実行教育過程表	88
資料6. 修了者論文題目一覧	92
資料7. 修了者および在学生に対するアンケート調査結果	98
資料8. 2018年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」 審査結果	136
図1 英語特別プログラム入学者数の推移（修士課程・経費別）	137
図2 英語特別プログラム入学者数の推移（博士後期課程・経費別）	137
図3 英語特別プログラム入学者数（出身地域別）	138
図4 英語特別プログラム在籍者数の推移（経費別）	138
図5 英語特別プログラム在籍者数の推移（出身地域別）	139
表1 英語特別プログラム修了状況（2018～2021年度入学者）	140
表2 英語特別プログラム留学生の研究業績数（2018年4月～2022年9月） ..	140
表3 英語特別プログラム修了者の進路（2018～2021年度入学者）	140
英語特別プログラム留学生の研究業績一覧（2018年4月～2022年9月）	141

英語特別コース会議事録

平成30年5月15日

日時：平成30年5月10日(木) 15:00~15:25

場所：総合研究棟多目的室 (W109)

出席者：平野、秋元、貴島、高牟禮、中原、尾之内、木村、橋床、渡部、波多野、松浦、森、佐分利、和田、加藤(英)、齋藤(秀)、幸田、中村、山田(孝)、笠井、庄井、重富、高橋(昌)、上田、玖村、井上、山本、鮫島、川村、合崎、マリア、曾根、内田、加藤(知)、高須賀、北川、加藤(創)、福士、宮谷内、工藤、五十嵐
欠席者：荒木、吉澤、小出、増田、伴戸、浅野、佐藤、山下、奥山、田上、橋本、崎浜、丸山、中原(治)、倉持、高橋(公)、横田、吹谷、原、石塚、比良、園山、澁谷、浦木、桂、柿澤、川原、唄、小林、小池(聡)、鈴木、谷、岡田、山田(浩)、石黒、柏木、野口、岡本、小関、岩淵、清水、近藤、石井、江澤、齋藤(陽)、大原、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、片野(以上敬称略)

議題：

- 10月入学者の出願予定について(資料1, 2)
新規博士後期課程6名(国費定員枠外・私費)、M→D持ち上がり6名(国費定員枠外・私費)、新規修士課程5名(国費定員枠外・私費)
新規入学申請者について、受入予定教員(または代理)より説明がなされた。
修士課程から持ち上がりの学生については、6月特別コース会議の議題となる可否判定の際に指導教員から説明を行う。私費出願者のうち3名が修士課程においては、国費特別枠で在籍している学生であることがコース長より補足説明された。
出願書類ならびにメールアドレス等の報告書について、期限までに提出するよう周知された。
入学願書提出期限：5月31日(木)
- 年間行事予定(資料3)
出願スケジュールとコース会議等の予定が記載されているため、確認すること。
国費特別枠に関連する議題、提出期限等の内容については、次期プログラムの採択結果によるため、現時点では未定である旨補足された。
- H30年度学位授与式までのスケジュール(資料4)
公開審査は、博士後期課程は8月2日(木)、修士課程は8月3日(金)、学位論文審査のためのコース会議は8月10日(金) 15:00から開催。

修士学位授与式は、9月25日(火)農学部大会議室で11:30から開催する。大学全体で開催される博士学位授与式の終了を待って開催するため、博士後期課程修了者も出欠を確認する。

口頭試問や学位授与審議委員会が公開審査後に行われるため、学生や審査委員はそのまま会場に残るよう注意喚起がなされた。口頭試問のグループ分けや開始時刻については、7月中旬頃に教務・学生担当より連絡。加藤英介講師が指導する国費特別枠の学生については、出産のため8月2日に行われる公開審査に参加することが難しいとの申し出があり、運営側で判断した結果、公開審査と学位授与審議委員会のみ別日程にて行うとしたことが情報共有された。提出書類の期限については9月修了生と同様とする。

4. その他
特になし。

報告事項：

- H29年度3月修了者の学位論文審議の結果について(資料9)
審査対象の6名の学位論文審議の結果について「可」と判定されたとの報告。未投票は当日欠席。

平成 30 年 6 月 18 日

日時：平成 30 年 6 月 13 日 (水) 15:00～16:30

場所：総合研究棟多目的室 (W109)

出席者：平野、荒木、佐藤、尾之内、木村、奥山、田上、橋本、渡部、倉持、松浦、高橋、森、佐分利、横田、和田、吹谷、原、比良、加藤 (英)、小池 (孝)、浦木、山田 (孝)、高橋 (昌)、小林、井上、鮫島、石黒、柏木、岩淵、合崎、曾根、高須賀、大原、菊池、加藤 (創)、福士、宮谷内、工藤、金橋、五十嵐

欠席者：秋元、吉澤、貴島、高牟禮、小出、増田、中原 (健)、伴戸、浅野、山下、橋本、崎浜、丸山、波多野、中原 (治)、石塚、園山、澁谷、齋藤 (秀)、幸田、中村、森本、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、小池 (聡)、鈴木、政村、谷、山本、岡田、山田 (浩)、野口、岡本、川村、小関、清水、近藤、石井、江澤、マリア、内田、加藤 (知)、齋藤 (陽)、田村、湯本、鎌形、森田、北川、片野 (以上敬称略)

議題：

1. 合否判定 (国費定員枠外・私費) (資料 1) (別紙)

新規 DC 6 名 (国費・大使館推薦 2 名、私費 4 名)、新規 MC 6 名 (私費 6 名) につき、受入教員または代理により、研究内容や審査過程の説明がなされた後、合格とした。

国費 SG 枠について、24 ヶ月枠 1 名の配分があり、運営側で検討の結果荒木教授受入学生 (中国) を推薦することとした。

また、JICA イノベーターシップ・アジア事業については、重点分野での受入が可能であった波多野教授受入学生 (タイ) を推薦することがコース長より報告された。

中国人学生の氏名フリガナについて、漢字表記の音読みとするのではなく中国語の発音での表記としたほうがよいとの意見があり、特別コースにおける会議資料については、中国語の発音に近いフリガナとするにととした。

学籍の登録や学位記への記載にあたっては、留学生本人の希望を確認していることが教務・学生担当より補足説明された。

2. 合否判定 (MC→DC) (資料 2) (別紙)

修士→博士 (国費・大使館推薦 1 名、私費 5 名) につき、指導教員または代理により、これまでの研究内容および面談結果等の説明がなされた後、合格とした。

3. 学位論文の受理について (資料 3、4)

博士後期課程修了予定者 10 名中 9 名が第一著者として論文を投稿・受理されており、学位論文提出の要件を満たしている。

投稿中の 1 名については、公開審査前日の 17 時までに受理されること、が学位論文提出の要件となる旨、コース長より説明がなされた。

この学生に関して、主査の浦木教授より、学生の基礎的学力や英語力、研究能力に関連し学位を授与するに値するかを判断する場についての質問がなされ、コース長より主査及び副査が判断するものであるとの回答があった。

4. 公開審査のプログラム (案) (資料 5)

8 月 2 日 (木) に DC 9 名、8 月 3 日 (金) に MC 9 名を予定している。時間の変更等がある場合は 6 月 20 日 (水) までに教務・学生担当に連絡すること。また、DC 1 名については前回会議で承認されたとおり、別途公開審査を行う。

5. その他

今年度の国費優先配置プログラム不採択により、現在修士課程に在籍している国費留学生は、博士後期課程進学後に奨学金を受給できない。これに関して、浦木教授・石黒教授より学生の授業料負担について支援策の検討が要請された。

教務・学生担当から、部長意見交換会において、大学全体での対応措置を申し入れたが、検討の結果難しいという回答であった旨を教授会等ですでに報告しているとの説明がなされたが、農学院としての対応を検討してほしいという意見があった。

農学院としての対応については、再度、コース長及び教務・学生担当から研究院長に確認する。

報告事項：

1. 募集要項について

例年 6 月コース会議にて募集要項 (案) を諮っているが、今年度も国費優先配置プログラムを申請予定であり、農学院の改組も予定されているため、8 月コース会議に諮る予定であることが報告された。

2. 英語で実施される科目について

英語で実施される科目を受講した学生から、日本語で行われている部分があるとの意見が寄せられた旨報告がなされた。すでに、該当科目の責任担当教員には情報共有されており、コース長からは staff-kyoin メールでも情報を共有している。次年度からカリキュラムが変わる予定であるものの、コース長からは善処が呼びかけられた。

情報共有：

国費留学生優先配置プログラムについて

国費留学生優先配置プログラムについて、次期公募に関連するヒアリングが文科省で行われ、当初5月公募開始予定であったが、遅れている旨情報共有がなされた。
申請枠数が判明次第、副コース長を中心に各領域での調整を行う予定である。

英語特別コミュニケーション会議事録

平成30年8月15日

日時：平成30年8月10日（水）15：00～16：10

場所：総合研究棟多目的室（W109）

出席者：平野、荒木、秋元、貴島、高牟禮、中原（健）、浅野、尾之内、山下、木村、奥山、橋本、崎浜、渡部、丸山、松浦、高橋（公）、森、佐分利、和田、吹谷、原、比良、園山、加藤（英）、浦木、幸田、桂、庄子、重富、高橋（昌）、小林、小池（聡）、玖村、岡田、柏木、野口、川村、小関、岩淵、石井、江澤、マリア、加藤（知）、大原、田村、北川、菊池、福士、宮谷内、工藤、金橋、五十嵐

欠席者：吉澤、小出、増田、伴戸、佐藤、田上、波多野、中原（治）、倉持、曾根、横田、石塚、小池（孝）、澁谷、齋藤（秀）、中村、森本、山田（孝）、笠井、柿澤、川原、唄、上田、鈴木、井上、谷、山本、鮫島、山田（浩）、石黒、岡本、清水、近藤、合崎、内田、齋藤（陽）、高須賀、湯本、鎌形、森田、加藤（創）、片野（以上敬称略）

議題：

1. 学位論文の審査について（資料1、2）

博士後期課程修了予定者(9名)

Luo Weifeng (高橋講師)

Patcharapa Klahan (木村教授)

Md. Abdus Shabur Talkder (高橋教授)

Albertus Eka Yudistira Sarwono (重富講師)

Lucy Lahrita (加藤講師)

Wong Guan Xhuan (平野教授)

Frankie Kiew (平野教授)

Waraporn Auwiriyanukul (森教授)

Ospina Alarcon Ricardo (野口教授)

主査あるいは副査が、審査結果について報告後、委任状を含む出席者の投票により9名全員「可」と決定した。

2. 募集要項について（資料3）

主な変更点とスケジュールの説明がなされた。改組のため、教員一覧を更新し、食資源に移行する教員については一覽から削除となる。また、研究室の再編に伴い、新研究室「林産製造学

研究室」は一次的に不参加を希望したため、募集要項より削除とする。

コース会議後に募集要項（案）が教務・学生担当から送信されるため、所属教員は期間内に確認をすること。例年、入試委員会等にて質問や修正の指摘があるため、所属教員は前もって期間内に確認するよう依頼がなされた。

講座主任会議後、募集要項は次年度4月入学出願にあわせ、ウェブサイトに掲載。申請プログラムの採択結果及び国費特別枠の配置数が確定次第、更新版をウェブサイトに掲載予定であることが周知された。

報告事項：

1. JICA 留学生受入可能数調査について（資料4）

JICAが計画しているプログラム「途上国農林水産分野人材育成計画」について、JICAより受入可能数調査の依頼があった旨コース長より説明があり、各領域の受入可能数のとりまとめが副コース長へ依頼された。

2. 国費優先配置特別プログラム申請について（資料5）

公募要領が公開され、運営側にて申請書を作成中である。採択結果は11月上旬通知予定。

3. 平成30年10月入学者の辞退について（資料6）

6月コース会議で合格となった10月入学予定者1名について、家庭の事情により入学が辞退となった旨受入予定教員より報告がなされた。

その他：

1. 学位申請手続き時の注意点等について（資料7）

学位論文における引用文献リストについて、領域ごとにフォーマットが用意されているため、主査及び副査は改めてフォーマットを確認し、指導するよう注意喚起がなされた。

また、1) 著者が多数に及ぶ場合についての統一した表記法は示さないが、各学位論文内では統一して表記する、2) 日本語の引用文献がある場合には英語で記載する等、学位論文作成にあたり、体裁を整えるようコース長より指示があった。あわせて、学位授与審議委員会については、領域ごとに各研究室の長及び講座の教員が委員となることとなっており、参加は主査から周知するよう指示があった。

その他、6月コース会議時点で学位申請予定であった浦木教授が主査の学生については、予備公開審査を行い、審査の結果「否」となったため、また、期日までに投稿論文が受理されなかったため今回の学位申請は行わないこととした旨情報共有がなされた。

*博士課程進学时に国費奨学金が受給できない学生への対応について
6月コース会議において質問があった、「プログラム継続申請の結果が不採択であったことにより、国費奨学金が受給できなくなる学生への対応」について、農学院としての検討結果が報告された。

・独自の経済支援については難しく、コース所属の全研究室からの一律負担についても今回のみの事例となることが考えられることから難しい。

・同窓会については、会費を支払っている同窓生のほとんどが日本人であることを考慮すると、支援を依頼することは難しい。

その他、プログラムの継続申請が不採択であった場合には、奨学金の受給が不可となることを出願時にあらかじめ伝えている状況であることから、農学院としての経済的支援は難しいという結論に至った旨、コース長から説明がなされた。
その上で、授業料免除申請については、半額免除等となる可能性が高いため必ず申請するよう情報共有された。

平成30年11月16日

日時：平成30年11月14日（水）15:00～15:40

場所：総合研究棟多目的室（W109）

出席者：平野、秋元、貴島、高牟禮、小出、増田、尾之内、山下、木村、橋床、橋本、渡部、波多野、高橋（公）、森、佐分利、吹谷、原、比良、加藤（英）、小池（孝）、幸田、森本、山田（孝）、笠井、高橋（昌）、唄、上田、小林、小池（聡）、鈴木、野口、川村、岩瀬、清水、台崎、江澤、加藤（知）、高須賀、大原、北川、福士、宮谷内、工藤、五十嵐、金橋

欠席者：荒木、吉澤、中原（健）、伴戸、浅野、佐藤、奥山、田上、崎浜、丸山、中原（治）、倉持、松浦、横田、和田、石塚、園山、澁谷、齋藤（秀）、浦木、中村、桂、柿澤、庄子、重富、川原、井上、谷、山本、岡田、山田（浩）、石黒、柏木、岡本、小関、近藤、石井、マリア、曾根、内田、齋藤（陽）、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、加藤（創）、片野（以上敬称略）

議題に先立ち、9月コース会議資料について、コース長より内容補足があった。議題1.平成30年度3月修了者DC7名：国費（アメリカ・大使館推薦1）、私費（中国・高水平1、ナイジェリア・政府奨学生2、ベトナム・政府奨学生1）、スリランカ・純粋私費1、中国・純粋私費1）について説明があり、合格とした。

議題：

1. 合否判定（国費定員枠外・私費）（資料1）（別紙）

次年度4月入学予定者DC7名：国費（アメリカ・大使館推薦1）、私費（中国・高水平1、ナイジェリア・政府奨学生2、ベトナム・政府奨学生1）、スリランカ・純粋私費1、中国・純粋私費1）について説明があり、合格とした。

2. 次年度の国費採用予定（資料2）

次期プログラム申請後の状況について、11月中旬にプログラム採択結果が判明し、11月下旬に特別枠の募集が通知される予定。最大配分枠（修士・博士各4枠）が獲得できるかについては未定であるが、各4枠とした場合の調整状況が共有された。採択結果が判明した後、12月10日（月）までに各領域の副コース長間で調整を行う。

3. 日本人学生の英語特別コース参加について（資料3）（別紙）

平成30年度英語特別コースへ参加申込書を提出した日本人学生について、指導教員より経歴や研究内容について説明があり、参加について承認された。また、当該学生は平成30年4月に遡り、英語特別コースに在籍したものとす。

4. アドバイザーの選出

現アドバイザーである森教授の任期が今年度3月までとなるため、次期アドバイザーの選出が必要となる。コース長より波多野教授からアドバイザー就任の内諾を得た旨紹介があり、承認された。

5. 副コース長の選出（資料4）

副コース長の任期が2年であるため、環境保全領域と食品科学領域については、次期副コース長の選出が必要となる。副コース長については、コース所属歴や役職は問わず、農学院専任教員より選出の旨補足説明がなされた。

選出については、教務・学生担当から依頼メールが送信されるので、現副コース長は領域内で調整をし、11月30日（金）までに決定のうえ連絡すること。

6. 平成30年度3月修了者（DC）のスケジュール（資料5）

平成31年2月4日（月）開催予定の2月コース会議で学位論文の審査を行う。入試や卒論発表会などの行事が重なっているため、時間の調整をしたらうえで、コース会議には可能な限り出席するようコース長より補足があった。

7. 短縮修了希望学生の予備審査結果について（資料6）

短縮修了を希望する学生について、予備審査が行われ、その結果が予備審査部会長である森教授から報告された。報告の結果、当該学生については平成32年3月修了から平成31年3月修了への短縮修了としての業績が十分であることが承認された。

報告事項：

1. 歓迎会計報告（資料7）

10月12日開催の特別コース歓迎会（参加者47名）の会計報告がなされた。今年度も所属全研究室から費用負担の協力があり、黒字となった。また、学生委員会の司会と協力によりスムーズに進行が行われ、盛会であった。

最後に、コース長より、自己点検評価報告書にかかる業績・アンケート等
とりまとめのため、各領域より1名ずつ選出し、副コース長とともにご協力い
ただけるよう依頼があった。選出については、教務・学生担当から依頼メール
が送信されるので、現副コース長は領域内で調整をし、11月20日(火)までに
決定のうえ連絡することになった。

英語特別コース会議事録

平成30年12月21日

日時：平成30年12月19日(水) 15:00~16:00

場所：総合研究棟多目的室(W109)

出席者：平野、秋元、貴島、小出、増田、伴戸、尾之内、木村、橋本、渡部、丸山、
波多野、松浦、高橋(公)、森、佐分利、和田、吹谷、石塚、加藤(英)、幸田、
山田(孝)、桂、柿澤、高橋(昌)、小池(聡)、鈴木、政村、谷、鯨島、野口、
川村、小関、近藤、合崎、江澤、マリア、高須賀、大原、福士、宮谷内、工藤、
金橋

欠席者：荒木、吉澤、高卒禮、中原(健)、浅野、佐藤、山下、奥山、田上、橋床、崎浜、
中原(治)、倉持、横田、原、比良、園山、小池(孝)、澁谷、齋藤(秀)、
浦木、中村、森本、笠井、庄子、重富、川原、唄、上田、小林、井上、山本、
岡田、山田(浩)、石黒、柏木、岡本、岩淵、清水、石井、曾根、内田、加藤(知)、
齋藤(陽)、田村、湯本、鎌形、森田、北川、菊池、加藤(創)、片野
(以上敬称略)

議題：

1. 学位論文の受理について(資料1, 2)

コース参加日本人学生1名を含む、博士修了予定者4名について、学位論文の進捗
状況報告が主査からなされた。4名全員がファーストオプターとして受理された原
著論文が1報以上あり、学位論文受理の条件を満たしていることが説明された。

2. 2019年度9月修了予定者の論文進捗状況報告(資料3)

修了予定者

Ali Md Momotaz (浦木教授)
Nousheen Parven (秋元教授)
Laksana Anugerah Adhi (福士准教授)
Gao Yu (森教授)
Nguyen Thi Thuy Hang (近藤巧教授)
Nguyen Thanh Tam (貴島教授)
Lee Dong Geun (石塚准教授)
Atunnisa Rifa (江澤准教授)
Iweka Patricia Nneka (川村特任教授)
Wang Hao (野口教授)
Kim Yong Rae (山田孝教授)

博士修了予定者11名の学位論文公表の進捗状況報告が、指導教員または代理者から
なされた。
accept 済1名。投稿中2名。準備中7名。準備中等該当なし1名。

準備中等該当のない1名については、出産と育児により1年間の留年後、4月に研究室を移り、指導教員変更を予定している旨の報告がなされた。

3. **2019年度国費(DC4名、MC4名)出願状況について(資料4)**
各候補者と指導予定教員の対応状況について説明がなされた。候補者から指導教員への書類提出期限は12月31日。指導教員から教務・学生担当への書類提出期限は1月25日。
特別枠で推薦ができなかった学生がいる場合には、一般枠で推薦することが可能であるが、採用はかなり厳しくなっていることがあわせて周知された。

4. **次年度副コース長の選出について(資料5)**
環境保全領域と食品科学領域は副コース長の任期満了に伴い、それぞれ石黒教授、木村教授が次期副コース長に選出された旨、紹介された。また、次年度アドバイザ一については、11月コース会議で紹介があったとおり、波多野教授に務めていただく。

5. **その他**
松浦教授から、現在国費で修士課程に在籍し、次年度私費として博士後期課程へ進学する学生に対し、本コースの総意として何らかの経済的支援の可能性がないか要望があった。コース長からは、コース全体として対応するのは難しく、授業料免除申請等で各自対応いただきたい旨、説明がなされた。
また、最近、標準修業年限内に課程を修了できない学生が散見されるため、入学候補者の選考をより慎重に進めるようコース長から要請があった。

報告事項：
1. **2018年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」の選定結果について**
コース長から、農学院のプログラムが採択されたことに関し、関係各位への謝意が示された。

2. **特別コース自己点検評価報告書について**
富士副コース長より、自己点検評価報告書作成にかかる進捗状況の報告があり、取りまとめに対する協力が感謝の意が表された。本報告書は3月中旬に発行予定。

最後にコース長より、次年度より食資源専任になる教員について、新しく留学生を受け入れる場合には従前の方法に従うこと、また、学位審査や会議の取り扱いについては、来年3月の教授会決定に準じるということが説明された。

日時：平成31年2月4日(月)15:00~16:10
場所：総合研究棟多目的室(W109)

出席者：平野、秋元、吉澤、貴島、高牟禮、小出、増田、浅野、尾之内、山下、木村、奥山、橋本、橋本、崎浜、渡部、丸山、波多野、松浦、森、佐分利、曾根、横田、和田、吹谷、石塚、比良、加藤(英)、小池(孝)、齋藤(秀)、浦木、幸田、森本、山田(孝)、笠井、桂、重富、高橋(昌)、小林、小池(聡)、鈴木、玖村、井上、谷、山本、鮫島、石黒、野口、岡本、川村、小関、岩淵、合崎、江澤、内田、加藤(知)、高須賀、大原、北川、福士、宮谷内、工藤、金橋
欠席者：荒木、中原(健)、伴戸、佐藤、田上、中原(治)、倉持、高橋(公)、原、園山、澁谷、中村、柿澤、庄子、川原、唄、上田、岡田、山田(浩)、柏木、清水、近藤、石井、マリア、齋藤(陽)、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、加藤(創)、片野(以上敬称略)

議題：

1. **学位論文の審査について(資料1, 2)**

DC 修了予定者

Cambaza Edgar Manuel (小関准教授)

Jian Chen (小関准教授)

Kento Koyama (小関准教授)

Zetryana Puteri Tachrim (橋本准教授)

論文審査要旨についての説明後、委任状を含む出席者の投票により4名も「合」と決定した。

2. **合否判定(H31年10月入学国費特別枠(資料3、別紙))**

10月入学国費特別枠DC4名・MC4名について、受け入れ予定教員(あるいは代理)による説明がなされ、全員「合」と承認された。

3月4日の学院教授会にて承認された後、合格通知を発送する。

今回より新たに追加された文科省の語学能力の要件として、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)B2相当以上のスコアが必要となり、スコアを有していない者は、受入予定教員による英語能力証明を行い、CEFR B2相当以上の英語能力を有していると受入大学において判断することになった。今後学生を選定する際には、英語のスコアにも留意するようコース長より説明があった。

2019年5月15日

3. **今後の出願予定 (H31年10月入学の国費定員枠外・私費) (資料4)**
DCに純粋私費2名(中国1、ブラジル1)、MCに国費・大使館推薦3名(インド2、タイ1)、純粋私費3名(中国3)計6名が出願予定。受入予定教員による出願予定者の説明がなされた。
今後、出願予定者が出た場合は、教務・学生担当まで連絡すること、また、出願期間については、教務・学生担当から4月初旬にメールで案内がある旨周知された。出願書類の提出期限は、5月末日。

4. **2019年度9月の学位記授与式までのスケジュール (資料5)**
次年度の公開審査については、修了予定者がDC10名、MC14名となるため、2日に分けて行うことに決定した。DCの公開審査日は8月1日(木)、MCは8月2日(金)。また、8月コース会議を8月9日(金)に行う。
9月修了予定者 全24名
DC:修了予定者(10名) Ali Md Momotaz, Laksana Anugerah Adhi, Gao Yu, Nguyen Thi Thuy Hang, Nguyen Thanh Tam, Lee Dong Geun, Atunnisa Rifa, Iweka Patricia Nneka, Wang Hao, Kim Yong Rae
MC:修了予定者(14名) Teranart Udomsopagit, Guo Zhen, Cao Yue, Rana Bunga, Masimbula Vidanalage Rishni Samindika Masimbula, Kodi thuwakku Arachchilage Heshan Taraka Kodi thuwakku, Oraegbunam Chidozie Johnson, Suzumura Alyssa Lee, Soluttanavong Vambkham, Li Ailin, Nang Naunge Ying, Abea Cambronero Andres Alejiandro, Ruangaram Wijittrapha, Zhang Chaoqun,

5. **その他**
なし。

報告事項:
なし。

日時: 2019年5月9日(木) 15:00~15:55

場所: 総合研究棟多目的室 (W109)

出席者: 平野、荒木、秋元、吉澤、大原、高牟禮、尾之内、山下、木村、田上、橋床、渡部、丸山、渡多野、森、佐分利、和田、比良、園山、加藤(英)、齋藤(秀)、浦木、重富、中村、山田(孝)、庄子、高橋(昌) 上田、呉、小池(聡)、政村、鮫島、岡本、小山、清水、近藤、江澤、マリア、北川、加藤(創)、福士、工藤、金橋

欠席者: 貴島、小出、増田、中原(健)、伴戸、浅野、佐藤、奥山、橋本、崎浜、信濃、中原(治)、倉持、松浦、横田、吹谷、石塚、澁谷、宮本、森本、笠井、桂、柿澤、川原、唄、小林、鈴木、谷、山本、岡田、山田(浩)、石黒、野口、小関、岩淵、合崎、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、山田、片野(以上敬称略)

議題:

1. **10月入学者の出願予定について(資料1, 2)**

新規博士後期課程6名: 私費3名(中国政府派遣)、純粋私費3名(中国2、ブラジル1)、M→D持ち上がり6名(国費・大使館推薦1、SG枠申請中1、私費4)
新規修士課程11名: 国費・大使館推薦3名(インド2、タイ1) 一般枠1名(ナイジェリア)、純粋私費7名(すべて中国)
新規入学申請者について、受入予定教員(または代理)より説明がなされた。

修士課程から持ち上がりの学生については、6月英語特別コース会議の議題となる可否判定の際に指導教員から説明を行う。私費出願者の4名は修士課程においては、国費特別枠で在籍している学生であることがコース長より補足説明された。
出願書類ならびにメールアドレス等々の報告書について、期限までに提出するよう周知された。
入学願書提出期限: 5月31日(金)

2. **次年度の国費採用予定の調整(資料3, 4)**

各領域に修士1名、博士後期課程1名の2枠を配分し、副コース長を中心に領域内で選考する。次回のコース会議で進捗状況を報告する。選考の際の注意点は以下の通り。

- 1) 東南アジア(ASEAN)からの受け入れを優先する。
- 2) 英語能力の要件が追加されたため、CEFR B2相当以上のスコアを有しているか、または教育課程を英語で修了しているか等の確認を行う。

2019年7月11日

- 3) 次年度修士課程に入学する国費留学生については、現時点で博士後期課程進学時に奨学金が保障されていないことを必ず説明する。

3. 年間行事予定(資料5)

出願スケジュールとコース会議等の予定が記載されているため、確認すること。

4. 令和元年度学位授与式までのスケジュール(資料6)

公開審査は、博士後期課程は8月1日(木)、修士課程は8月2日(金)、学位論文審査のためのコース会議は8月9日(金)15:00から開催。口頭試問や学位授与審査委員会が公開審査後に行われるため、学生や審査委員はそのまま会場に残るよう注意喚起がなされた。口頭試問のグループ分けや開始時刻については、7月中旬頃に教務・学生担当より連絡。修士学位記授与式は、9月25日(水)11:00から農学部大会議室で開催予定。大学全体で開催される修士学位記授与式の終了を待って開催するため、博士後期課程修了者にも出欠を確認する。

5. その他

特になし

報告事項:

1. H30年度3月修了者の学位論文審議の結果について(資料7)
審査対象の4名の学位論文審議の結果について「可」と判定されたとの報告。未投票は当日欠席。
2. 自己点検評価報告書について
3月末に完成し、各研究室に1部ずつ配付済み。なお、英語特別コースのWEBサイトにPDF版を掲載。
3. その他
 - 1) 改元に関連し、英語コースの会議資料等の年号は、西暦で統一してはどうかという提案がなされた。公文書との関係もあるので、教務・学生担当から問題がないか確認する。
 - 2) 大学院の入学者の総数が定員を超えている問題が議論されている状況であるため、英語特別コースの合格者数の制限などの検討が必要になるのではないかという意見がなされた。今後の課題として、情報収集を進める。

なお、次回は、6月13日(木)15:00より開催予定。

日時：2019年6月13日(木)15:00～16:40

場所：総合研究棟多目的室(W109)

出席者：平野、荒木、大原、吉澤、小出、増田、伴戸、尾之内、山下、木村、奥山、田上、橋床、信濃、渡部、波多野、松浦、森、佐分利、横田、和田、吹谷、石塚、園山、宮本、浦木、山田(孝)、桂、柿澤、高橋(昌)、唄、上田、小林、小池、鈴木、山本、鮫島、野口、小山、岩淵、清水、近藤、合崎、マリア、北川、内田、福士、山田、片野、工藤、金橋

欠席者：秋元、貴島、中原(健)、浅野、佐藤、橋本、崎浜、丸山、中原(治)、倉持、比良、加藤(英)、澁谷、齋藤(秀)、重富、中村、森本、笠井、庄子、川原、呉、玖村、谷、岡田、山田(浩)、石黒、岡本、小関、江澤、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、加藤(創)(以上敬称略)

会議に先立ち、前回提案された英語特別コースの会議資料は西暦表記とすることについて、事務的に問題ないことが確認された旨の報告があり、今後は西暦表記とすることが了承された。

議題:

1. 可否判定(国費定員枠外・私費)(資料1)(別紙)
新規DC6名(中国政府派遣)、純粋私費3名(中国2、ブラジル1)、新規MC11名(国費・大使館推薦3名(インド2、タイ1)一般枠1名(ナイジェリア)、純粋私費7名(すべて中国)につき、審査過程の説明後、合格とした。
2. 可否判定(MC→DC)(資料2)(別紙)
MC→DC6名(国費・大使館推薦1、SG枠申請中1、私費4)につき、指導教員または代理により、これまでの研究内容および面談結果等の説明がなされた後、合格とした。
3. 学位論文の受理について(資料3、4)
博士後期課程修了予定者10名中5名が第一著者として論文を投稿・受理されており、学位論文提出の要件を満たしている。
投稿中の2名については、公開審査日前日の17時までに受理されることが学位論文提出の要件となる旨、コース長より説明がなされた。
4名の指導教員から単位取得退学や留年の意向が表明された。これらの発言に対し、元コース長の横田教授が本コースを継続するため、これま

でどれほど多くの努力を重ねて指導学生を3年間の期限内に学位を取得させてきたかについて語られた。さらに、教員各自は危機感と義務感をもって学生を指導するよう力説された。残された期間内に10名全員が学位取得できるよう検討することとなった。また、入学者の選抜過程での不正防止や語学力を含めた学力を見極めるため、直接面接や映像付のスカイプによる面接の義務付け等の提案がなされた。

4. 公開審査のプログラム(案) (資料5)

8月1日(木)にDC10名、8月2日(金)にMC14名を予定している。時間の変更等がある場合は6月20日(木)までに教務・学生担当に連絡すること。DC公開審査終了後に学位授与審議委員会を開催するため、主査や構成員は当日予定を入れられないようにと再度注意喚起がなされた。

5. 次年度の国費採用予定の調整(資料6)

各4領域の調整状況について、副コース長もしくはコース長より代理で報告がなされた。

食料生産領域は、MCは循環農業システム工学研究室と植物ゲノム科学研究室にて調整中、DCは未定。環境保全領域は、MCは生態環境物理学研究室(インドネシア)、DCは未定。食品科学領域は、MCは微生物生理学研究室にて調整中であるが未定、DCは未定。生命科学領域は、MCは動物生態学研究室(ナイジェリア)、DCは昆虫体系学研究室(フィリピン)。選考にあたっては、ASEAN地域を優先するよう再度確認があった。

6. 募集要項(案)について(資料7)

今後のスケジュールの説明がなされた。コース会議後に募集要項(案)が教務・学生担当から送信されるため、所属教員は期間内に確認をすること。例年、入試委員会等にて質問や修正の指摘があるため、所属教員は前もって期間内に確認するよう依頼がなされた。ユニット長会議後、募集要項は次年度4月入学出願にあわせ、9月上旬にウェブサイトに掲載予定。

報告事項:

コース長より、留学生1名が家族の病気で帰国のため9月まで休学中であること、日本人学生の英語コース参加について、9月末まで募集集中であること、新規研究室の参加について、6月14日(金)を締切として募集しているが、現在1研究室より参加の希望があり、8月コース会議に諮る予定であることが報告された。

なお、次回は、8月9日(金)15:00より開催予定。

英語特別コース会議議事録

2019年8月26日

日時: 2019年8月9日(金)15:00~16:10

場所: 総合研究棟多目的室(WI09)

出席者: 平野、大原、貴島、増田、浅野、尾之内、山下、木村、奥山、田上、崎浜、信濃、渡部、丸山、波多野、森、佐分利、横田、和田、吹谷、石塚、比良、園山、加藤(英)、宮本、浦木、重富、山田(孝)、笠井、上田、呉、小林、小池、鈴木、山本、鮫島、岡田、石黒、野口、小関、小山、合崎、江澤、マリア、福土
欠席者: 荒木、秋元、吉澤、小出、中原(健)、伴戸、佐藤、橋床、橋本、中原(治)、倉持、松浦、澁谷、齋藤(秀)、中村、森本、桂、柿澤、庄子、川原、唄、玖村、谷、山田(浩)、岡本、岩淵、清水、近藤、田村、湯本、鎌形、森田、北川、菊池、加藤(創)
陪席: 愛甲、山田、片野、工藤、金橋(以上敬称略)

議題:

1. 学位論文の審査について(資料1、2)

博士後期課程修了予定者(7名)

Gao Yu (森教授)

Nguyen Thi Thuy Hang (近藤教授)

Dong Geun Lee (石塚教授)

Rifa Atunnisa (江澤准教授)

Iweka Patricia Nneka (小関准教授)

Hao Wang (野口教授)

Md. Momotaz Ali (浦木教授)

主査あるいは副査が、審査結果について報告後、委任状を含む出席者の投票により7名全員「可」と決定した。

なお、公開審査前に学位審査手続きを行わないことになった3名の学生について、主査の教員から経緯について説明がなされた。

2. 研究室の新規参加について

花井・緑地計画学研究室のコース参加および「環境保全」領域への加入が承認された。

報告事項:

1. 2020年度JICA研修員受入プログラムに係る受入意向調査アンケートについて(資料3)

2019年9月13日

JICAによるミャンマー国「農業セクター中核人材育成（フェーズ2）」2020年度受入の意向調査について、農学院は「受入の可能性あり」と回答しているため、JICAより個別に受入打診があった場合は対応願いたい旨説明があった。受入期間は修士課程（2年間）と、必要であれば研究生（原則6ヶ月）も加算できる。知り合いに希望者がいれば、本プログラムを紹介することは構わない。

2. 10月DC入学者の辞退について（資料4）

2月コース会議で合格となった10月DC入学予定者1名について、家族の病気のため入学が辞退となり、国際交流課を通して、文科省に国費特別枠辞退届を提出した旨報告がなされた。

3. 募集要項について

昨年度「特徴」から削除された、標準修業年限内での修了が要件という箇所を復活させたが、ユニット長会議での指摘を受け「修士後課程を3年（修士課程を2年）で修了することが求められる。」

Students are required to complete this program for Doctoral degree within three years. (for Master's degree within two years) という文言に修正のうえ追記した旨報告があった。表現は変わったものの、引き続き標準修業年限内での学位取得を目指すことが再度確認された。

また、国費留学生の出願について「対象外」となる者を追記し、文科省が定める英語要件について具体的なスコアを記載した旨報告がなされた。今回新規に参加が認められた花井・緑地計画学研究室の紹介も加えウェブ上での公開は9月上旬を予定。

なお、次回の英語コース会議は、9月12日（木）15:00～開催予定。

日時：2019年9月12日（木）15:00～15:30

場所：総合研究棟多目的室（W109）

出席者：平野、愛甲、松島、荒木、秋元、小出、増田、中原（健）、伴戸、尾之内、崎浜、渡部、丸山、倉持、吹谷、比良、園山、加藤（英）、浦木、桂、唄、小林、小池、鈴木、玖村、山本、鮫島、石黒、小関、小山、清水、近藤、合崎、江澤、マリア、福士

欠席者：近藤（哲）、大原、吉澤、貴島、浅野、佐藤、山下、木村、奥山、田上、橋本、橋本、信濃、波多野、中原（治）、松浦、森、佐分利、横田、和田、石塚、澁谷、齋藤（秀）、宮本、重富、中村、森本、山田（孝）、笠井、柿澤、庄子、川原、上田、呉、谷、岡田、山田（浩）、野口、岡本、岩淵、田村、湯本、鎌形、森田、北川、菊池、加藤（創）

陪席：高橋、曾根、加藤（知）、山田、工藤、金橋（以上敬称略）

議題：

1. 2020年3月修了予定者の論文進捗状況報告（資料1-1）

主査（または代理）より修士後課程修了予定者（コース参加日本人学生を含む）の論文進捗状況報告がなされ、4名中2名が受理済、2名が準備中であった。学位論文受理の条件について、3月修了においては、12月コース会議付議時点で第一著者として論文が公表されていること、また、12月コース会議付議時点で第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示(minor/major revision等)を受けており、ユニット長会議3日前の17:00までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合であることが確認された。

2020年9月修了予定者の論文進捗状況報告（資料1-2）

修士後課程修了予定者10名について論文進捗状況一覧を示した。

なお、1名はMC修了からDC入学まで1年半帰国し、その間に投稿・公開された論文があるが、その論文を有効とするかどうか諮られ、承認された。

2021年3月修了予定者の論文進捗状況報告（資料1-3）

修士後課程修了予定者5名（うちコース参加日本人学生1名）の論文進捗状況一覧を示した。

2. 4月入学者の出願予定について（資料2）

現在のところ、新規修士後課程1名（私費・M-JEED）、修士課程2名（私費・うち1名はAgri-Net）出願予定。今後受け入れ予定がある場合、教務・学生担当に連絡すること。出願書類提出期限は10月31日（木）。

3. 修士学位記授与式 (9/25) について (資料 3)

修士課程修了予定者 14 名。修士学位記授与式は 9 月 25 日 (水) 11 時から農学部会議室で開催。アカデミックガウンは人数分不足しているため、式にふさわしい服装で参加するよう注意喚起がなされた。博士後期課程修了予定者は、大生全体での授与式 (10 時～学術交流会館) 終了後、農学部大会議室へすみやかに移動すること。

授与式について、指導教員及びその他の教員の参加も呼びかけられた。

4. オリエンテーション (9/27) と歓迎会 (10/11) について (資料 4)

オリエンテーションについては、10 月入学 DC8 名・MC15 名を対象。新入生及び指導教員は必ず出席するよう周知された。指導教員が出席できない場合には、代理の教員が出席すること。渡り時期の都合から、新入生が欠席の場合には、指導教員が参加することが望まれる。

歓迎会については、10 月 11 日 (金) 18 時 30 分からエンレンソウで開催する。会費の負担については例年通りの内訳だが、昨年度までの変更点として、新入生のいる研究室については、会費 6,000 円で教員 1 名、新入生 1 名までを無料とし、2 人目以降は 1 名につき 2,500 円負担いただきたい旨コース長より各研究室へ依頼があり、承認された。

5. 次年度の国費採用予定の調整 (資料 5)

次年度の採用予定について、副コース長 (または代理) から各領域での採用調整に関する状況報告があった。食料生産領域は MC が植物ゲノム科学 (インドネシア)、DC は調整中、環境保全領域は MC が生態環境物理学 (インドネシア)、DC は生態環境物理学 (調整中)、食品科学領域は MC が微生物生理学 (インドネシア)、DC は調整中、生命科学領域は MC が動物生態学 (ナイジェリア)、DC は昆虫体系学 (フィリピン)。候補者が確定していない領域については、引き続き調整を進め、10 月末日には最終決定の研究室を教務・学生担当に連絡すること。

6. その他

コース長から、9 月博士後期課程修了予定者の学位論文受理の条件として、現在「会議付議時点で、第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示 (minor/major revision) 等を受けており、公開審査前日の 17:00 までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合」としているところを「学位論文審査のコース会議前日の 17:00 まで」と期限を延長してはどうかとの提案があり、今後検討することになった。

報告事項：

1. 2019 年 9 月修了者の学位論文審議の結果について (資料 6)

7 名全員が「可」となった。なお、7 名全員に「否」が 1 票あり、論文内容とは無関係と思われる。審議の運営等に意見があれば個別に対応するのでお知らせいただきたい旨、コース長より言及があった。

2. 10 月入学予定の国費一般枠のナイジェリアの学生については、妊娠出産のため、渡日が 12 月下旬になる見込み。標準修業年限内での修了を目指す。

なお、次回のコース会議は、11 月 13 日 (水) 15 時～開催予定。

2019年11月18日

日時：2019年11月13日(水) 15:00～16:20

場所：総合研究棟多目的室 (W109)

出席者：平野、松島、秋元、大原、貴島、増田、中原(健)、伴戸、浅野、尾之内、山下、橋本、崎浜、信濃、波多野、松浦、森、横田、和田、吹谷、石塚、加藤(英)、齋藤(秀)、笠井、柿澤、唄、呉、小池、鈴木、谷、山本、鮫島、石黒、岩淵、清水、近藤、合崎、マリア、北川

欠席者：近藤、愛甲、荒木、吉澤、小出、佐藤、木村、奥山、田上、橋床、渡部、丸山、中原(治)、倉持、佐分利、比良、園山、澁谷、宮本、浦木、重富、中村、森本、山田(孝)、桂、庄子、川原、上田、小林、玖村、岡田、山田(浩)、野口、岡本、小関、小山、江澤、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、加藤(創)、福土

陪席：曾根、加藤(知)、高須賀、山田、片野、工藤、金橋 (以上敬称略)

議題：

1. 学位論文の審査について (資料1、2)

学位授与予定者

Nguyen Thanh Tam (貴島教授)

主査による学位論文審査結果についての説明後、委任状を含む出席者の投票により「可」と決定した。

2. 可否判定(国費定員枠外・私費) (資料3) (別紙)

次年度4月入学予定者DC 2名：国費・中国赴(中国)、JICA支援(モンゴル)各1、MC2名：JICA支援(カンボジア)、純粋私費(中国)各1につき、審査過程の説明後、合格とした。

3. 次年度の国費採用予定(資料4)

MC候補者4名(インドネシア3、ナイジェリア1)、DC候補者4名(インドネシア2、ハンガリー1、フィリピン1)について説明がなされ、候補者として最終決定した。

候補者及び候補者の推薦者とも密に連絡をとり、辞退等が発生しないよう注意喚起がなされた。

4. 日本人学生の英語特別コース参加について (資料5) (別紙)

2019年度英語特別コースへ参加申込書を提出した日本人学生について、指導教員に代わってコース長より経歴や研究内容について説明があり、参加について承認された。また、当該学生は2019年4月に遡り、英語特別コースに在籍したものとす。

5. コース長・副コース長の選出 (資料6、7)

現コース長である平野教授の任期が今年度3月までとなるため、次期コース長の選出が必要となる。候補者については、これまでH25.4の前プログラム開始時より参加の研究室の農学院専任かつ主担の教授のみを対象としていたが、候補者が少なくなってきたため、今後はコース所属歴にかかわらず、農学院専任かつ主担の教授を候補者とすることが運営側より提案され、了承された。

選出方法に則り立候補を募ったが立候補者がいなかったため、領域ごとのローテーションとなり、次期コース長は食品科学領域から選出する。コース長の選出については、運営側に一任された。

副コース長の任期も2年であるため、食料生産領域と生命科学領域については、次期副コース長の選出が必要となる。副コース長については、コース所属歴や役職は問わず、農学院専任教員より選出の旨補足説明がなされた。

副コース長の選出については、教務・学生担当から依頼メールが送信されるので、現副コース長は領域内で調整をし、11月29日(金)までに決定のうえ教務・学生担当に連絡することとなった。

6. 2020年3月修了者(DC)のスケジュール (資料8)

2020年2月3日(月)開催予定の2月コース会議で学位論文の審査を行う。入試や卒論発表会などの行事が重なっているため、時間の調整をしながら、コース会議には可能な限り出席するようコース長より補足があった。

7. 9月修了予定者の学位論文受理の条件について

前回コース会議で今後検討することとしていた、9月博士後期課程修了予定者の学位論文受理の条件として、現行の「会議付議時点、第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示(minor/major revision)等を受けており、公開審査前日の17:00までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合」としているところを「学位論文審査のコース会議前日の17:00まで」とすることにについてコース長より提案があり、承認された。

8. その他

学位論文(主論文)の書き方について、末尾にGeneral discussionを述べる必要性について意見があり、英語コース全体で統一したフォーマットを作成すること等について、今後検討していくこととなった。

オプザバーとなった食資源専任教員は、英語特別コース入試の審査を担当することができないのに、コース会議において自身が受入れ予定の学生のことを説明するのはおかしいのではないかという意見があったが、審査については入試の制度上、農学院専任教員が担当しなくてはならないこと、またオプザバーであっても、出願、可否判定、論文審査等で、自身が受入れ予定、また指導する学生が対象となる場合は、これまで通り会議に出席し、説明をすることが確認された。

また、次年度の国費採用予定の調整において、食品科学領域のDC枠が埋まらなかったことについて、オプザバーとなった食資源専任教員から、割り当て枠を有効に活用するよう領域内で確実に候補者を見つけてほしい旨要望があった。

報告事項：

1. 歓迎会会計報告(資料9)

10月11日開催の英語特別コース歓迎会(参加者64名)の会計報告がなされた。新入生の大幅増により、今年度から新入生2人目以降の出席には費用を負担いただくこととした。例年通り各研究室から費用負担の協力があり、持ち出しを最小限とすることができた。また、学生委員会の司会と協力によりスムーズに進行が行われ、盛会であった。コース長より、在学生、特に学生委員会のメンバーには、指導教員から参加を呼びかけるよう依頼があった。

2. 2020年度JICA Agri-Net プログラムについて(資料10)

JICAによる2020年度Agri-Net プログラム受入の意向調査について、農学院は「受入の可能性あり」と回答しているため、JICAより個別に受入打診があった場合は対応願いたい旨説明があった。受入に際しては、英語コース出願資格を確認すること、また標準修業年限内に修了する見込みを厳格に判断することが補足説明された。

最後に、コース長より、今回のプログラム申請書においては、各界で活躍する修了生によるAlumni 国際セミナー(キャリアパス講演会)の開催を企画していることから、英語コース修了生が来学の折には、在学生にセミナーを行う場を設けることができないか検討・協力していただくよう依頼があった。

なお、次回のコース会議は、12月18日(水)15時～開催予定。

日時：2019年12月18日(水)15:00～15:43

場所：総合研究棟多目的室(W109)

出席者：平野、松島、秋元、大原、小出、中原(健)、木村、田上、橋本、渡部、丸山、波多野、松浦、森、佐分利、横田、和田、吹谷、比良、園山、加藤(英)、浦本、重富、森本、山田(孝)、唄、小池、政村、鯨島、石黒、小関、岩淵、近藤(巧)、合崎、江澤、マリア、湯本

欠席者：近藤(哲)、愛甲、荒木、吉澤、貴島、増田、伴戸、浅野、佐藤、尾之内、山下、奥山、崎浜、信濃、中原(治)、倉持、石塚、澁谷、齋藤(秀)、宮本、中村、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、上田、呉、小林、鈴木、谷、山本、岡田、山田(浩)、野口、岡本、小山、清水、田村、鎌形、森田、北川、菊池、加藤(創)、福士

陪席：高橋、内田、加藤(知)、高須賀、山田、工藤、金橋(以上敬称略)

議題：

1. 学位論文の受理について(資料1, 2)

コース参加日本人学生2名を含む、博士修了予定者5名について、学術論文の進捗状況報告が主査または代理者からなされた。

4名がフアーストオプサーとして受理された原著論文が1報以上あり、1名については、1報が投稿中でmajor revisionの対応中であり、1月24日(金)開催のユニット長会議の3日前17:00までに公表が決定する見込みがあるという学位論文受理の条件を満たしていることが説明された。

2. 2020年度9月修了予定者の論文進捗状況報告(資料3)

修了予定者

Nousheen Parven (秋元教授)
Pinyo Jukkrapong (比良講師)
Mendbayer Dolgormaa (岩淵教授)
Nur Wakhid (平野教授)
PrajanKet Pradabrat (曾根教授)
Nguyen Tinh Thanh (野口教授)
Quaiyum Samia (加藤創一郎准教授)
Wang Linping (浦木教授)
Auldry Chaddy Anak Petrus Rudut (波多野教授)

博士修了予定者9名の学術論文公表の進捗状況報告が、指導教員または代理者からなされた。

accept 済4名。投稿中1名。準備中4名。

3. 2020年度国費（DC4名、MC4名）出願状況について（資料4）

各候補者と指導予定教員の対応状況について説明がなされた。候補者から指導教員への書類提出期限は12月31日（火）。指導教員から教務・学生担当への書類提出期限は1月24日（金）。

メールインタビューについては、受入教員を含む3名の農学院専任教員がそれぞれ3回以上、計9回以上行い、そのうち1回はカメラ付き Skype 等で本人確認をしながらインタビューを行うよう注意喚起がなされた。

また、文科省からの通知により、学業成績係数の算出方法が、これまでの直近2年間から、社会人は最終学歴の学業成績、在学生は現在在籍する課程の学業成績へと変わったことが周知された。

語学能力要件については、資格・検定試験のスコアは、公認開始時から2年以内に取得したものが有効になること、日本の大学院修士課程又は博士後期課程への入学資格を満たす教育課程を、英語を主要言語として修了した者は、英語能力要件を満たしていることが再確認された。

特別枠で推薦ができなかった学生がいる場合には、一般枠で推薦することが可能であるが、採用はかなり厳しくなっていることがあわせて周知された。

4. 次年度コース長・副コース長の選出について（資料5, 6）

立候補者がいない場合の選出方法に基づき、ローテーションによって食品科学領域の園山教授が次期コース長に選出された。

食料生産領域と生命科学領域は副コース長の任期満了に伴い、それぞれ近藤教授、浅野准教授が次期副コース長に選出された。

5. その他

特になし。

報告事項：

1. 2019年度12月学位授与者の学位論文審議の結果について（資料7）

申請者1名について「可」となった。

最後に、コース長より、次回コース会議は2020年2月3日（月）15時より開催されるが、論文審査があるため可能な限りご出席いただくよう依頼があった。また、英語コース全体で統一した学位論文（主論文）のフォーマットを作成することについては、今後、コース長と現副コース長で検討していくこととなった。

日時：2020年2月3日（月）15：00～16：31

場所：総合研究棟多目的室（W109）

出席者：平野、松島、荒木、秋元、大原、貴島、小出、増田、伴戸、山下、

木村、奥山、田上、崎浜、信濃、渡部、丸山、波多野、松浦、森、

佐分利、横田、和田、吹谷、比良、園山、加藤（英）、齋藤（秀）、

浦木、重富、山田（孝）、笠井、桂、呉、小池、鈴木、谷、山本、

鮫島、山田（浩）、石黒、岡本、小関、岩淵、合崎、マリア、湯本、

森田、加藤（創）、福士

欠席者：近藤（哲）、愛甲、吉澤、中原（健）、浅野、佐藤、尾之内、橋本、

中原（治）、倉持、石塚、澁谷、宮本、中村、森本、柿澤、庄子、

川原、唄、上田、小林、玖村、岡田、野口、小山、清水、近藤（巧）、

江澤、田村、鎌形、北川、菊池

陪席：高橋、柏木、曾根、内田、加藤（知）、高須賀、山田、工藤、金橋

（以上敬称略）

議題：

1. 学位論文の審査について（資料1, 2）

DC 修了・学位授与予定者

Muhammad Akhid Syib'li （曾根教授）

Jianye Li （高橋教授）

Tu Zhihao （湯本客員教授）

Namiki Kikuchi （大原教授）

Toru Hamamoto （内田准教授）

Yongrae Kim （山田教授）

論文審査要旨についての説明後、委任状を含む出席者の投票により6名とも「可」と決定した。なお8月の論文審査同様、6名全員に「否」が1票ずつあり、論文内容とは無関係と思われる。審議の運営等に意見があれば個別に対応するので申し出ていただきたい旨、コース長より再度言及があった。

2. 可否判定（2020年10月入学期特別枠）（資料3, 別紙）

10月入学期特別枠DC4名・MC4名について、受け入れ予定教員による説明がなされ、全員「合」と承認された。

3月4日の学院教授会にて承認された後、合格通知を発送する。

構成員より、今回の出願で文科省の語学要件であるCEFR B2相当以上のスコアを有していない学生には、受け入れ予定教員による英語能力証明が提出されたこと、また、現在英語コースに入学するための英語能力の要件として、最低スコア等は特段定められていないことに対し、一般コースのスコアの基

準が TOEIC L&R 600 点、TOEFL iBT 62 点であることを踏まえると、そのような対応は甘いのではないかという意見が挙がった。教務・学生担当からは、受け入れ予定教員による英語能力証明は、CEFR B2 相当以上のスコアを有していない者に対し、昨年度より文科省で認められている条件であること、ただしこの条件がいつまで有効とされるかは不確定のため、今後出願予定の学生は、有効期間内（公募開始時より2年以内）の CEFR B2 相当以上のスコアを取得していることが望ましいことが説明された。英語コースのスコアの基準については、今後検討していくこととなった。

3. **今後の出願予定（2020年10月入学の国費定員枠外・私費）（資料4）**
MC に純粋私費2名（インドネシア、バングラデシュ各1名）が出願予定。
今後、出願予定者が出た場合は、教務・学生担当まで連絡すること、また、出願期間については、教務・学生担当から4月初旬にメールで案内がある旨周知された。出願書類の提出期限は、5月末日。

4. **2020年9月修了予定者の論文進捗状況報告（資料5-1）**
2021年3月修了予定者の論文進捗状況報告（資料5-2）
2021年9月修了予定者の論文進捗状況報告（資料5-3）
（資料5-1）に基づき、2020年9月修了予定者のうち、投稿論文が accept に至っていない学生のみ、学術論文公表の進捗状況が指導教員から報告された。

5. **2020年9月の学位記授与式までのスケジュール（資料6）**
次年度の公開審査については、修了予定者が DC 9名、MC 6名となるため、2日に分けて行うことに決定した。DCの公開審査日は7月30日（木）、MCは7月31日（金）。また、学位論文審査の8月コース会議を8月11日（火）に行う。なお、今回より9月修了予定者の学位論文受理の条件は、「学位論文審査のコース会議前日の17時まで」となることが確認された。

9月修了予定者 全15名
DC: 修了予定者 (9名) Nousheen Parven, Pinyo Jukkrapong, Mendbayar Dorgormaa, Nur Wakhid, Prajanket Pradabrat, Nguyen Tinh Thanh, Quaiyum Samia, Wang Linping, Auldry Chaddy Anak Petrus Rudut
MC: 修了予定者 (6名) Zhang Ziyang, Xie Ruoyun, Li Zongfei, Su Xin, Sukdanont Pongsathorn, Song Tianhao

6. **General Discussion について（資料7）**
学位論文提出についての学生への通知文に、英語特別コース学生向けに、博士論文には、研究内容を総合的に考察する“General discussion”の章を加えることを推奨する旨、追記することが承認された。

7. **その他**
なし。

報告事項：

1. **Alumni 国際セミナー（キャリアパス講演会）について**
ハニー・ウイジヤ教授（ポゴール農業大学・北大アンバサダー・インドネシア北大リエゾンオフィス長）による講演会を以下の日程で行う予定である旨、周知された。

日時：2020年4月20日（月）14時～15時
場所：農学部大講堂

今後も修了生が北大に来る機会があれば、Alumni 国際セミナーとして在学生在に講演の場を設けるようご検討・ご協力願いたい旨、コース長より再度依頼があった。

2. プログラムフェローの任命について

英語コースの広報と優秀な学生の推薦を積極的に行っていただくために、英語コース修了生および農学研究院と関係の深い海外の大学教員から候補者を30名程度選定し、2月中に案内を送付する予定である旨周知された。この件で問い合わせ等があれば、ご対応いただくよう協力を仰いだ。

2020年6月22日

日時：2020年6月11日（木）

方式：メール審議

議題：

1. **合否判定（国費定員枠外・私費）（資料1）（別紙）**
 新規DC3名：純粋私費（中国3）、新規MC6名：国費・SG枠1名（バン
 グラデシユ）、純粋私費5名（中国4、インドネシア1）につき、受入教
 員より文書により審査過程の説明があり、メール審議の結果、合格と承
 認された。
2. **合否判定（MC→DC）（資料2）（別紙）**
 MC→DC1名（純粋私費）につき、指導教員より、文書にてこれまでの研
 究内容および面談結果等の説明があり、メール審議の結果、合格と承認
 された。
3. **学位論文の受理について（資料3、4）**
 博士後期課程修了予定者10名中5名が第一著者として論文を投稿・受理
 されており、学位論文提出の要件を満たしている。
 投稿中の3名については、学位論文審査のコース会議前日（8月10日）の
 17時までに受理されることが学位論文提出の要件となる旨、補足された。
 コース長より、学位論文受理にあたっては「会議付議時点、第一著者
 等）を投稿しており、投稿誌より何らかの指示（minor/major revision
 等）を受けていること」を条件としているが、今回に限り、投稿を済ませ
 ていれば投稿誌より指示を受けていることまでは求めないという条件緩
 和について提案があり、メール審議の結果、承認された。
 また、2名については転専攻や家族の病気による一時帰国のため、9月に
 修了しない旨、あわせて報告された。
4. **公開審査のプログラム（案）（資料5）**
 7月30日（木）にDC8名、7月31日（金）にMC6名を予定している。
 時間の変更等がある場合は、6月18日（木）までに教務・学生担当に連
 絡することとされ、メール審議の結果、原案どおり承認された。
5. **2021年3月修了予定者の論文進捗状況（資料6）**
 （資料6）に基づき、2021年3月修了予定者の学術論文公表の進捗状況
 が確認された。

6. **次年度の国費採用予定の調整（資料7）**

現時点での各4領域の調整状況について、（資料7）のとおり示された。
 食料生産領域は、MCが植物育種学（インドネシア）、DCがMCからの持
 ち上がりで植物育種学（ミャンマー）、環境保全領域はMCが調整中、DC
 がMCからの持ち上がりで生態環境物理学（タイ）、食品科学領域は、MC
 が応用食品科学研究室で調整中、DCが未定、生命科学領域は、MCが調整
 中、DCがMCからの持ち上がりで根圏制御学（インドネシア）。
 修士課程からの持ち上がりについては、辞退があった食品科学領域内で
 7月末までに副コース長を中心に候補者の調整を行い、領域内に候補者
 がない場合は、コース全体に候補者を募ることになる。

7. **募集要項（案）について（資料8）**

昨年度からの主な変更点と、今後のスケジュールについて示された。
 学業成績の算出期間は、国費留学生に準じ、社会人は最終学歴、在学生
 は現在在籍する課程とする。また、中国の大学出身者については、中国
 政府教育部の直轄機関が発行する証明書の提出を追加した。
 募集要項（案）も同時に配信され、所属教員は入試委員会やユニット長
 会議に先立って確認をするよう依頼がなされ、メール審議後、原案どお
 り承認された。ユニット長会議で承認後、募集要項は次年度4月入学出
 願にあわせ、9月上旬にウェブサイトに掲載予定。

英語特別コース会議事録

2020年8月19日

日時：2020年8月11日（火）15：00～16：09

場所：農学部大講堂

出席者：園山、松島、大原、貴島、小出、増田、中原（健）、伴戸、浅野、山下、木村、奥山、田上、橋本、崎浜、信濃、渡部、波多野、倉持、松浦、北岡、森、佐分利、吹谷、比良、加藤（英）、重富、笠井、上田、呉、鈴木、政村、谷、山本、平野、岡田、石黒、野口、岡本、小山、岩渕、清水、近藤（巧）、合崎、マリア、加藤（創）、福土
欠席者：愛甲、荒木、秋元、吉澤、佐藤、尾之内、丸山、中原（治）、横田、石塚、澁谷、齋藤（秀）、宮本、浦木、中村、森本、山田（孝）、桂、柿澤、庄子、川原、唄、小林、小池、鮫島、山田（浩）、小関、江澤、田村、湯本、森田、鎌形、北川、菊池
陪 席：高橋、曾根、山田、片野、片岡、金橋（以上敬称略）

議題：

1. 学位論文の審査について（資料1、2）

議題1に先立ち、今年度から9月修了予定者の学位論文受理の条件については、以下のとおりであることが確認された。

1. 会議付議時点で、第一著者として論文が既に公表されている場合
2. 会議付議時点で、第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示(minor/major revision等)を受けており、学位論文審査のコー ス会議前日の17時までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合 また、6月コース会議（メール審議）においては「投稿をすませなければ 条件緩和の提案があり、条件2については「投稿をすませなければ 投稿誌より指示を受けていることまでは求めない」ことが承認され ており、8名全員に学位論文審査の資格があることが確認された。

博士後期課程修了予定者(8名)

Jukkrapong Pinyo (比良准教授)

Nur Wakhid (平野教授)

Nguyen Thanh Tinh (野口教授)

PrajanKet Pradabrat (曾根教授)

Samia Quaiyum (加藤客員准教授)

Linping Wang (松浦教授)

Auldry Chaddy Anak Petrus Rudut (波多野特任教授)

Laksana Anugerah Adhi (福土准教授)

主査あるいは副査が、審査結果について報告後、委任状を含む出席者の投票により8名全員「可」と決定した。

報告事項：

1. 入学時期の変更について（資料3）

4月入学予定であったカンボジアからの私費留学生（JICA経費）が新型コロナウイルスの感染拡大により渡日できず、10月に入学時期を変更した旨報告があった。ただし、今後の状況によっては、さらに入学期が変更になる可能性もある。

また、国費外国人留学生について、2020年10月から2021年4月に入学時期を延期することを認める文科省からの通知があり、現在指導教員を通じて学生の希望を確認中である旨補足された。

2. Farewell Partyの中止について

新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、今年度は開催しないこととし、修了生には寄せ書きと記念品（金のしおり）が贈られる予定である旨コース長より報告された。

なお、今回の英語コース会議は、9月15日（火）15:00～開催予定。

2020年9月18日

日時：2020年9月15日(火) 15:00～15:30

場所：総合研究棟多目的室(W109)

出席者：園山、松島、秋元、大原、小出、増田、浅野、尾之内、木村、田上、橋本、信濃、渡部、波多野、松浦、森、佐分利、加藤(英)、齋藤、重富、政村、谷、山本、平野、鮫島、小関、近藤、合崎、江澤、マリア、福土

欠席者：愛甲、荒木、吉澤、貴島、中原(健)、伴戸、佐藤、山下、奥山、崎浜、丸山、中原(治)、倉持、北岡、横田、吹谷、石塚、比良、澁谷、宮本、浦木、中村、森本、山田(孝)、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、呉、小林、小池、鈴木、岡田、山田(浩)、石黒、野口、岡本、小山、岩淵、清水、田村、湯本、鎌形、森田、北川、菊池、加藤(創)

陪席：加藤(知)、山田、片野、片岡、金橋(以上敬称略)

議題：

1. 2021年3月修了予定者の論文進捗状況報告(資料1-1)

指導教員(またはコース長)より博士後期課程修了予定者(コース参加日本人学生を含む)の論文進捗状況報告がなされ、6名中3名が受理済、2名が投稿中、1名が準備中であった。準備中の1名については体調不良のため、10月より休学予定であることが報告された。

学位論文受理の条件について、3月修了においては、12月コース会議付議時点で第一著者として論文が公表されていること、また、12月コース会議付議時点で第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示(minor/major revision等)を受けており、ユニット長会議3日前の17:00までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合であることが確認された。

2021年9月修了予定者の論文進捗状況報告(資料1-2)

博士後期課程修了予定者13名について論文進捗状況一覧を示した。

2021年3月修了予定者の論文進捗状況報告(資料1-3)

博士後期課程修了予定者8名(うちコース参加日本人学生1名)の論文進捗状況一覧を示した。

なお、今回より、半年おおよび1年前の修了予定者については、指導教員作成による進捗状況の詳細や投稿論文の情報を追加資料として、議事録送付時に配布する。

2. 4月入学者の出願予定について(資料2)

現在のところ、新規修士課程1名(私費)出願予定。今後受け入れ予定がある場合、教務・学生担当に連絡すること。出願書類提出期限は10月31日(土)。

3. 学位記授与式(9/25)について(資料3)

博士後期課程修了予定者8名、修士課程修了予定者6名。例年英語特別コースとしては、MC学生にのみ学位記授与式を行っていたが、今年は大学全体の学位記授与式が各学院総代1名のみの出席となったため、DC、MC合同で9月25日(金)11時から農学部大講堂で開催することとなった。式にふさわしい服装で参加するよう注意喚起がなされた。新型コロナウイルス感染症拡大の状況を踏まえ、今年にはアカデミックカウンを着用しての写真撮影は行わない。授与式には、密にならない程度で、指導教員及びその他教員、家族や研究室生の出席も可能であることが補足された。

4. 次年度の国費採用予定の調整(資料4)

次年度の採用予定について、副コース長(またはコース長)から各領域での採用調整に関する状況報告があった。食料生産領域はMCが植物育種学(インドネシア)、DCはMCからの持ち上がりで植物育種学(インドネシア)、環境保全領域はMCが調整中、DCは農業土木学(カンボジア)、食品科学領域はMCが食品加工工学(インドネシア)、DCは分子醸造学(韓国)、生命科学領域はMCが調整中、DCはMCからの持ち上がりで根圏制御学(インドネシア)。候補者が確定していない領域については、引き続き調整を進め、9月末日には最終決定の研究室を教務・学生担当に連絡すること。期限までに候補者が見つからない場合、コース全体に候補者を募ることとなる旨、コース長より補足された。

5. その他

特になし

報告事項：

1. 2020年9月修了者の学位論文審議の結果について(資料5)

8名全員が「可」となった。

2. 2021年度秋入学JICA研修員受入プログラムについて(資料6)

JICAによるミャンマー国「農業セクター中核人材育成(フェーズ2)」2021年度受入の意向調査について、農学院は、昨年同様「受入の可能性あり」と回答しているため、JICAより個別に受入打診があった場合は対応願いたい旨説明があった。

なお、次回のコース会議は、11月11日(水)15時～開催予定。

2020年12月9日

日時：2020年11月11日（水）15:00～15:45
場所：農学部大講堂

出席者：園山、松島、秋元、大原、貴島、中原（健）、浅野、尾之内、木村、橋本、崎浜、信濃、波多野、倉持、松浦、森、佐分利、吹谷、石塚、加藤（英）、重富、笠井、庄子、泉、小林、小池、鈴木、玖村、谷、山本、平野、鮫島、石黒、野口、小山、岩淵、近藤（巧）、合崎、江澤、マリア、北川、福土
欠席者：愛甲、荒木、吉澤、小出、増田、伴戸、佐藤、山下、奥山、田上、渡部、丸山、中原（治）、北岡、横田、比良、澁谷、齋藤（秀）、宮本、浦木、中村、森本、山田（孝）、桂、柿澤、川原、唄、上田、岡田、山田（浩）、岡本、小関、清水、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、加藤（創）
陪席：加藤（知）、山田、片野、片岡、金橋（以上敬称略）

議題：

1. 合否判定（私費）（資料1）（別紙）

次年度4月入学予定者MC3名：すべて純粋私費（中国）につき、審査過程の説明後、合格とした。

2. 次年度の国費採用予定（資料2）

MC候補者4名（インドネシア2、ネパール、中国各1）、DC候補者4名（ミャンマー、インドネシア各1はMCからの持ち上がり、カンボジア、韓国各1）について、受入予定教員またはその代理より説明がなされ、候補者として最終決定した。候補者及び候補者の推薦者とも密に連絡をとり、辞退等が発生しないよう注意喚起がなされた。

3. 日本人学生の英語特別コース参加について（資料3）（別紙）

2020年度英語特別コースへ参加申込書を提出した日本人学生について、指導教員に代わってコース長より経歴や研究内容について説明があり、参加について承認された。また、当該学生は2020年4月に遡り、英語特別コースに在籍したものとす。

4. アドバイザーの選出

現アドバイザーである波多野特任教授の任期が今年度3月までとなるため、次期アドバイザーの選出が必要となる。コース長より岩淵教授からアドバイザー一就任の内諾を得た旨紹介があり、承認された。

5. 副コース長の選出（資料4）

副コース長の任期が2年であるため、環境保全領域と食品科学領域については次期副コース長の選出が必要となる。副コース長については、コース所属歴や役職は問わず、農学院専任教員より選出の旨補足説明がなされた。

選出については、教務・学生担当から依頼メールが送信されるので、現副コース長は領域内で調整をし、11月27日（金）までに決定のうえ連絡することとなった。結果については、12月コース会議で紹介する。

6. 2021年3月修了者（DC）のスケジュール（資料5）

3月修了者については、英語コース全体で公開審査等を開催しないため、通知等は指導教員からアグリメイトで行うよう案内があった。2021年2月3日（水）開催の2月コース会議で学位論文の審査を行う。入試や卒業発表会などの行事が重なっているが、時間の調整をたうえで、コース会議には可能な限り出席するようコース長より補足があった。

7. 修了時期の延期について

2021年3月修了予定のバンングラデシユ政府奨学金留学生について、指導教員から、2021年9月に修了時期を延長したい旨申し出があり、経緯の説明後、承認された。

8. その他

コース長より、新規で留学生を受け入れる際の手続きについて、教員側と事務側で行う業務について一覧にし、次回コース会議で提示する予定である旨言及があった。

報告事項：

1. 入学時期の変更について（資料6）

新型コロナウイルス感染拡大のため、国費留学生9名のうち7名、私費留学生9名のうち3名が、入学時期を2020年10月から2021年4月に延期した旨コース長より報告があった。11月24日（火）開催のユニット長会議でも報告される。

最後にコース長より、10月入学の留学生在が予定通り渡日できず、また新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、今年は新入生歓迎会を開催できなかったことへの報告があった。また、コロナ禍のために心身に不調をきたす学生も見受けられることから、留学生には特に注意を払って指導願いたい旨依頼があった。

なお、次回のコース会議は、12月16日（水）15時～開催予定。

2021年1月27日

日時：2020年12月16日(水) 15:00～15:43

場所：農学部大講堂

出席者：園山、松島、秋元、貴島、小出、浅野、山下、田上、橋本、信濃、渡部、波多野、倉持、北岡、森、佐分利、吹谷、比良、加藤(英)、齋藤(秀)、重富、森本、山田(孝)、上田、小林、小池、鈴木、玖村、谷、山本、鮫島、石黒、野口、小関、小山、清水、合崎、江澤、マリア、北川、福土

欠席者：愛甲、荒木、大原、吉澤、増田、中原(健)、伴戸、佐藤、尾之内、木村、奥山、崎浜、丸山、中原(治)、松浦、石塚、瀧谷、宮本、浦木、中村、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、呉、平野、岡田、山田(浩)、岡本、岩淵、近藤(巧)、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、加藤(創)

陪席：曾根、内田、山田、片野、片岡、金橋(以上敬称略)

議題：

1. 学位論文の受理について(資料1、2)

コース参加日本人学生1名を含む、博士修了予定者4名について、学位論文の進捗状況報告が主査または代理者からなされた。

3名がフアーストオプターとして受理された原著論文が1報以上あり、学位論文受理の条件を満たしている。1名については、1報が投稿中であり、1月22日(金)開催のユニット長会議(のちに1月27日に開催日変更)の3日前17:00までに公表が決定するという条件のもと、学位論文の受理が認められた。

2. 2021年度9月修了予定者の論文進捗状況報告(資料3)

修了予定者

Nousheen Parveen (秋元教授)

Tong Xin (秋元教授)

Cao Tianzhi (岡本准教授)

Mendbayar Dolgormaa (岩淵教授)

Madegwa Yvonne Musavi (内田准教授)

Balagalla Ra Japaksha Mudiyanse Lage Goni goda Walauwe Dineesha Nipuni Balagalla (曾根教授)

Phyo Han Thwin (曾根教授)

Kwon Joon (中原講師)

Helena de Fatima Silva Lopes (湯本教授)

Traakooncharoenvit Apichat (比良准教授)

Nur 'Azimatul Quddsviah Haji Maidin (比良准教授)

Kamapat Udompant (野口教授)

Pakkang Nutthira (浦木教授)

Peng ShiLei (波多野教授)

博士修了予定者14名の学位論文公表の進捗状況報告が、指導教員または代理者からなされた。

accept 済5名、Revise 中 (minor) 1名、投稿中2名、準備中5名。

3. 2021年度国費(DC2名、M04名)出願状況について(資料4)

各候補者と指導予定教員の対応状況について説明がなされた。候補者から指導教員への書類提出期限は12月31日(木)。指導教員から教務・学生担当への書類提出期限は1月22日(金)。

メールインタビューについては、受入教員を含む3名の農学院専任教員がそれぞれ3回以上、計9回以上行い、そのうち1回はカメラ付きSkype等で本人確認をしながらインタビューを行うよう注意喚起がなされた。

特別枠で推薦ができなかった学生がいる場合には、一般枠で推薦することが可能であるが、採用はかき厳しくなっていることがあわせて周知された。

4. 次年度副コース長の選出について(資料5)

環境保全領域と食品科学領域は副コース長の任期満了に伴い、それぞれ齋藤講師、玖村教授が次期副コース長に選出された。

5. 留学生受入に係る手続きについて(資料6)

留学生受入に係る手続きについて、教員・事務それぞれで行う手続きを一度整理したきたい、という教員の求めにより、新規に留学生を受け入れる際の教員・事務側で行う業務一覧が提示された。そのなかには、今まで教員に依頼していたものの、教員からの要望や、海外にいる留学生の利便性を考慮し、今年度より事務で担当するものがあることが補足説明された。留学生とのやりとりは、まったくの事務的なもので、何度もきめ細かくやりとりをすするようなものについては、従前通り教員が対応する。新規渡日留学生の増加に伴い、事務作業量の負担が増え、その対応にも限界があるため、引き続き指導予定教員の理解と協力が強く求められた。

6. その他

特になし。

最後に、コース長より、次回コース会議は2021年2月3日(水)15時より開催されるが、論文審査があるため可能な限りご出席いただくよう依頼があった。

2021年3月16日

日時：2021年2月3日（月）15：00～16：30

場所：農学部大講堂

出席者：園山、秋元、大原、貴島、小出、浅野、尾之内、山下、木村、奥山、田上、橋本、崎浜、信濃、渡部、丸山、波多野、倉持、松浦、北岡、森、佐分利、吹谷、比良、加藤（英）、浦木、重富、森本、小池、鈴木、玖村、谷、山本、鮫島、石黒、野口、岡本、小関、小山、岩淵、清水、近藤（巧）、合崎、江澤、マリア、加藤（創）、福士
欠席者：愛甲、松島、荒木、吉澤、増田、中原（健）、伴戸、佐藤、中原（治）、石塚、齋谷、齋藤（秀）、宮本、中村、山田（孝）、笠井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、呉、小林、平野、岡田、山田（浩）、田村、湯本、鎌形、森田、北川、菊池

陪席：曾根、内田、加藤（知）、山田、片野、片岡、金橋（以上敬称略）

議題：

1. 学位論文の審査について（資料1, 2）

DC 修了・学位授与予定者
Kyeongmin Lee（小関教授）
Lin Jin-Feng（内田准教授）
Jan Seonghan（菊池客員教授）
Yodai Taguchi（佐分利准教授）
学位論文審査要旨について、主査または副査からの説明後、委任状を含む出席者の投票により4名とも「可」と決定した。なお、1名が論文受理期限より一日遅れて accept の連絡がきたことについて、運営側で協議し認めることとした旨コース長より説明があり、了承が得られた。構成員より、英文の審査要旨について主語の取扱い、また、日本語で書かれた審査要旨について、英語語者を含む審査委員全員に確認されているか指摘があり、指摘のあった2名については修正・確認のうえ再度提出することとなった。

2. 合否判定（2021年10月入学国費特別枠）（資料3, 別紙）

10月入学国費特別枠DC2名・MC4名について、受け入れ予定教員による説明がなされ、全員「合」と承認された。
3月5日の学院教授会にて承認された後、合格通知を発送する。
構成員より、国費留学生には CEFR B2 相当以上という英語能力要件があるが、私費も同じという質問があり、現在のところ英語コースには、国費留学生を除き、英語試験スコアの基準はないことが説明された。それに対し、農学院の一般コースでもスコアの基準を設けていることを考慮すると、私費留学生についても英語能力の基準を設けるべきではないかとの意見が寄せられた。英語能力要件の基準を設けるかどうかについては、今後検討していくこととなった。

3. 今後の出願予定（2021年10月入学の国費定員枠外・私費）（資料4）

MC に私費（インドネシア教育基金（LPDP）奨学金）1名、純粋私費3名（中国2、台湾1）が出願予定。今後、出願予定者が出た場合は、教務・学生担当まで連絡すること、また、出願期間については、教務・学生担当から4月初旬にメールで案内がある旨周知された。出願書類の提出期限は、5月末日。

4. 2021年9月修了予定者の論文進捗状況報告（資料5-1）

2022年3月修了予定者の論文進捗状況報告（資料5-2）

2022年9月修了予定者の論文進捗状況報告（資料5-3）

（資料5-1）に基づき、2021年9月修了予定者のうち、投稿論文が accept に至っていない学生のみ、学術論文公表の進捗状況が指導教員から報告された。構成員より、休学中は標準修業年限の3年に含まれるのか質問があり、運営側より、休学期間は標準修業年限の3年には含まれないこと、現在は新型コロナウイルス感染症拡大のために留学生が渡日できない、また研究活動が予定通り進められない等制限があるので、このような時期には、臨機応変に柔軟に対応することが必要であるとの回答があった。

5. 2021年9月の学位記授与式までのスケジュール（資料6）

次年度の公開審査については、修了予定者がDC 14名、MC 15名となるため、2日に分けて行うことに決定した。DC の公開審査日は7月29日（木）、MC は7月30日（金）。また、学位論文審査の8月コース会議を8月5日（木）に行う。なお、昨年度より9月修了予定者の学位論文受理の条件は、「学位論文審査のコース会議前日の17時まで」とされていることが確認された。

9月修了予定者 全29名

DC: 修了予定者（14名） Nousheen Parveen, Tong Xin, Cao Tianzhi, Mendbayar Dorgormaa, Madegwa Yvonne Musavi, Balagalla Rajapaksha Mudiyanseelage Gonigoda Walauwe Dineesha Nipuni Balagalla, Pyo Han Thwin, Kwon Joon, Helena de Fátima Silva Lopes, Trakoontharoenvit Apichat, Nur 'Azimatul Qudsyiah Haji Maidin, Kannapat Udompant, Pakkang Nutthira, Peng Shilei
MC: 修了予定者（15名） Saha Sristi, Chen Siyao, Myint Zin Mar, Li Xiaojue, Wang Shasha, Wen Yuchong, Umezinwa Kenechi Celestina, Cahyaningtyas Anjar, Chintagavongse Napaporn, Putcha Jyothis Priya, Makkhaphawee Naruphon, Tanatarakeree Kitpanuwat, Zhou Zhiduo, Li Jing, Li Rubin

6. その他

なし。

報告事項：

1. 2021年度大学推薦による国費外国人留学生（スーパーグローバル大学創成支援事業枠）4月採用枠の学内選考結果について

2021年4月採用枠について、新型コロナウイルスによる特例として英語プログラム実施部局に現在在籍する学生も対象として募集が行われ、農学院から推薦したMC進学予定の2名（研究生として在籍中）について、学内選考の結果、2名ともが大学より推薦されることになった旨、コース長より報告があった。

2021年5月27日

日時：2021年5月13日（木）15:00～16:12

場所：農学部大講堂

出席者：園山、柏木、中島、秋元、小出、増田、中原（健）、浅野、尾之内、奥山、田上、橋本、崎浜、渡部、当真、倉持、松浦、森、佐分利、前田、比良、加藤（英）、逢坂、斎藤（秀）、宮本、中村、山田（孝）、笠井、庄子、呉、小林、小池、玖村、山本、鮫島、石黒、オスビナ、小関、岩瀬、清水、近藤（巧）、合崎、江澤、マリア、北川、福士

欠席者：愛甲、松島、荒木、大原、吉澤、貴島、佐藤、山下、木村、信濃、丸山、中原（治）、北岡、吹谷、石塚、澁谷、浦木、重富、森本、桂、柿澤、川原、唄、上田、鈴木、平野、岡田、山田（浩）、野口、岡本、小山、田村、湯本、鎌形、森田、菊池、加藤（創）

陪席：山田、片野、片岡、金橋（以上敬称略）

議題：

1. 10月入学者の出願予定について（資料1、2）

新規博士後期課程1名：国費（中国赴）、M→D持ち上がり8名（国費・特別枠2、大使館推薦3、純粋私費3）
 新規修士課程5名：国費・SG枠申請中1名（インドネシア）、私費（LPDP）1名（インドネシア）、純粋私費3名（中国2、台湾1）
 新規入学申請者について、受入予定教員（または代理）より説明がなされた。修士課程から持ち上りの学生については、6月英語特別コース会議の議題となる可否判定の際に指導教員から説明を行う。

出願書類ならびにメールインタビュー等の審査結果報告書について、期限までに提出するよう周知された。
 入学願書提出期限：5月31日（月）

2. 年間行事予定（資料3）

出願スケジュールとコース会議等の予定が記載されているため、確認願う。特に、中国政府派遣（高水平・CSC）については、3月時点で大学から正規課程の合格通知書を発行することが必要となったため、国費（特別枠）と同じ出願スケジュールとなる。中国政府派遣で留学を希望する学生よりコンタクトがあった場合は、同スケジュールで出願を進めるよう注意喚起がなされた。

3. 2021年度学位記授与式までのスケジュール（資料4）

公開審査は、博士後期課程は7月29日（木）、修士課程は7月30日（金）、学位論文審査のためのコース会議は8月5日（木）15:00から開催。

口頭試問や学位授与審議委員会が公開審査後に行われるため、学生や審査委員はそのまま会場に残るよう注意喚起がなされた。口頭試問のグループ分けや開始時刻については、7月中旬頃に教務・学生担当より連絡する。

修士学位記授与式は、9月24日（金）11:00から農学部大講堂で開催予定。大講堂で開催される博士学位記授与式の終了を待って開催するため、博士後期課程修了者にも出欠を確認する。

4. 英語能力要件について（資料5）

英語能力要件の基準を設けるかどうかについて、各領域で取りまとめられた意見に基づき議論が行われた。事前の調査により、なんらかの英語能力基準を設けるべきという意見が多数を占めたため、運営側から、国費留学生に準じ2年以内に取得されたヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）B2相当以上のスコアという基準を設けること、基準を設けるにあたり国費留学生と私費留学生に区別はつけないこと、基準を満たすスコアを有していない場合でも最終的な判断は受入教員が行うこと、現行の出身大学の英語教員による英語能力証明は今後認めないことが提案された。

それに対し構成員より、基準を満たしていないのに受け入れると判断した場合受入教員は会議の場で理由等説明をする必要があるのではないか、最低限でも農学院の基準を満たしていないと日本人学生に示しがつかかないのではないかと、会議の際には必ず英語スコアを報告することとし、基準を満たしている学生とそうでない学生について入学後の追跡調査としてはどうかといった意見が挙がった。

また、国費留学生の選定をCEFR B2の基準だけにした場合、選定が困難になるという見方について質問が挙がり、実際のところ国費特別枠8名のうち、例年2～4名が基準を満たすスコアを有しておらず、受入教員の英語能力証明をもって要件を満たしているとしていることが教務・学生担当より補足された。運営側より、農学院を例に1～2年経てば英語の平均点は上がっていくと予想されるので、受入教員による判断を認めるという要件には暫定期間を設け、今後様子を見ていくことが提案され、了承された。

公的英語試験を実施していない国については、試験の主権団体が公表していないため一覧として把握することはできないが、申し出があった場合にはインターネット等で検索し確認に努めることとする。

なお、文科省が国費留学生の英語能力要件として従来認めている「大学院へ入学する教育課程を、英語を主要言語として修了した者」についても、英語コースとして同様に認めることが了承された。今回決定された英語能力基準については、次の募集要項に反映させる。また、早い段階でウェブサイトで周知することとする。

5. その他

国費SG枠のように農学院に枠の配分があるものについては、現行のように候補者を最初から1名に絞るのではなく、複数の候補者を募りその中から最優秀な学生を選定できるようなシステムを構築できないかという提案がなされた。今後の検討課題とする。

- 報告事項：
1. 2020年度3月修了者の学位論文審議の結果について(資料6)
審査対象の4名の学位論文審議の結果について「可」と判定されたとの報告。
未投票は当日欠席。

2021年6月22日

日時：2021年6月10日（木）
方式：メール審議

2. 学生の異動について

3月末に退学した2名について、指導教員より経緯の説明があった。

最後に、コース長より、今年が国費優先配置を行う特別プログラムの申請時期となること、素案の作成は運営側で行うが、申請にあたり全構成員に協力願いたい旨依頼があった。今後のスケジュールが共有され、8月下旬に北大からの推薦が決定した場合、短期間で各領域から候補者の選定を必要があることが確認された。

なお、次回は、6月10日（木）15:00より開催予定。

議題：

1. 可否判定（国費定員枠外・私費）（資料1）（別紙）

新規DC1名：国費・中国赴、新規MC5名：国費・SG枠1名（インドネシア）、私費（LPPP）1名（インドネシア）、純粋私費3名（中国2、台湾1）につき、受入教員より文書により審査過程の説明があり、メール審議の結果、合格と承認された。

2. 可否判定（MC→DC）（資料2）（別紙）

MC→DC：国費・特別枠2名、国費・大使館推薦3名、純粋私費3名につき、指導教員より、文書にてこれまでの研究内容および面談結果等の説明があり、メール審議の結果、合格と承認された。

3. 学位論文の受理について（資料3、4）

博士後期課程修了予定者13名中8名が第一著者として論文を投稿・受理されており、学位論文提出の要件を満たしている。
投稿中の3名については、学位論文審査のコース会議前日（8月4日）の17時までに受理されることが学位論文提出の要件となる旨、補足された。コース長より、学位論文受理にあたっては「会議付議時点で、第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示(minor/major revision等)を受けていること」を条件としているが、今回に限り、投稿を済ませたいれば投稿誌より指示を受けていることまでは求めないという条件緩和について提案があり、メール審議の結果、承認された。
また、2名については一時帰国中に新型コロナウイルスの影響でビザが発給されず再入国できないことや疾病のため、9月には修了できない旨あわせて報告された。

4. 公開審査のプログラム（案）（資料5）

7月29日（木）にDC11名、7月30日（金）にMC15名を予定している。時間の変更等がある場合は、6月17日（木）までに教務・学生担当に連絡することとされ、メール審議の結果、原案どおり承認された。

5. 2022年3月修了予定者の論文進捗状況（資料6）

（資料6）に基づき、2022年3月修了予定者の学術論文公表の進捗状況が確認された。

6. 募集要項（案）について（資料7）

昨年度からの主な変更点と、今後のスケジュールについて示された。英語能力要件については、国費留学生に準じ、①CEFR B2相当以上の英語スコアを有していること、②入学資格を満たす教育課程を英語を主要言語として修了したこと、③本プログラムにおいて修学及び研究を行う英語能力を有していることと受入教員が判断できることとした。従来の出身大学の英語教員による英語能力証明書は認めないこととし、募集要項から様式を削除した。また、中国政府派遣留学生（GSC）については、これまで条件付き入学許可内諾書が認められなくなったことから、出願時期を国費特別枠と同時期にした。

募集要項（案）も同時に配信され、所属教員は入試委員会やユニット長会議に先立って確認をするよう依頼がなされ、メール審議後、原案どおり承認された。ユニット長会議で承認後、募集要項は次年度4月入学出願にあわせ、9月上旬にウェブサイトに掲載予定。

英語特別コース会議事録

2021年8月13日

日時：2021年8月5日（木）15：00～16：45

場所：農学部大講堂

出席者：園山、秋元、大原、貴島、小出、増田、中原（健）、浅野、木村、奥山、田上、崎浜、渡部、当真、倉持、松浦、北岡、森、佐分利、吹谷、比良、逢坂、齋藤（秀）、浦木、重富、山田（孝）、笠井、小池、玖村、山本、平野、鮫島、野口、岡本、オスビナ、岩淵、清水、近藤（巧）、合崎、江澤、湯本、森田、菊池、福士

欠席者：柏木、中島、愛甲、松島、荒木、吉澤、佐藤、尾之内、山下、橋本、信濃、丸山、中原（治）、前田、石塚、加藤（英）、澁谷、宮本、中村、森本、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、呉、小林、鈴木、岡田、山田（浩）、石黒、小関、小山、マリア、田村、鎌形、北川、加藤（創）

陪席：曾根、内田、幸田、山田、片野、片岡、金橋（以上敬称略）

議題：

1. 学位論文の審査について（資料1、2）

議題1に先立ち、9月修了予定者の学位論文受理の条件が確認され、6月コース会議（メール審議）において、コース長より「投稿を済ませていれば投稿誌より指示を受けていることまでは求めない」という今限りでの条件緩和の提案があり承認されたこと、その時点で3名の投稿論文が accept に至っていないことが、期限である論文審査のコース会議前日17時までに、全員の論文が accept されたことが報告された。その結果、11名全員に学位論文審査の資格があることが確認された。

博士後期課程修了予定者(11名)

Nousheen Parven (秋元教授)

Xin Tong (秋元教授)

Yvonne Musavi Madegwa (内田准教授)

Balagalle Rajapaksha Mudiyanseelage Gonigoda Walauwe

Dineesha Nipuni Balagalla (曾根教授)

Phyo Han Thwin (曾根教授)

Joon Kwon (増田教授)

Helena de Fátima Silva Lopes (湯本客員教授)

Aphichat Trakooncharoenvit (比良准教授)

Kannapat Udompant (野口教授)

Nutthira Pakkang (浦木教授)

Shilei Peng (当真教授)

主査あるいは副査が審査結果について報告後、委任状を含む出席者の投票により11名全員「可」と決定した。

学位論文の審査報告については、800字程度の内容を5分を目安に口頭で報告することになっているが、5分を越える例が散見されたため、報告者は事前に内容を800字程度にまとめ、会議に臨むよう構成員より提案があった。また、コース長より学位論文審査の要旨（記入例8）について、主語の取扱い等についてルールを明文化することが提案され、次回以降の議題とすることになった。

さらに、学位論文の目次を含めたページの振り方に統一性がないことについて構成員より指摘があり、今後英語コースで統一した方式を検討していくことがコース長より提案された。

コース長より、公開審査と口頭試問、学位授与審議委員会の出席状況について、広く参加願いたい旨言及があった。これに関して、異なる研究分野の学位論文に対して適切な審査は難しいため、領域の再編を含め、領域ごとの公開審査、学位授与審議委員会としてはどうかという意見が出され、公開審査のあり方については今後検討していくこととなった。

2. 研究室の新規参加について

林産製造学研究室のコース参加および「環境保全」領域への加入が承認された。

報告事項：

1. JICA人材育成奨学計画(JDS)修士課程に係る受入要望調査への回答について（資料3、4）

例年JICAから照会がある人材育成奨学計画(JDS)について、英語コースの出願書類やスケジュールでの審査を行えないこと、また基礎学力水準が不十分な学生を受け入れる可能性があることから、今年度も「受入希望なし」と回答する旨コース長より報告があった。参考として、昨年は生命科学学院、理学院、環境科学院、一昨年は工学院、環境科学院、経済学院のそれぞれ3部局が受入希望としたもののいずれも採択されなかった旨補足された。

2. Farewell Partyの中止について

例年公開審査後に開催している学生委員会主催の送別会について、新型コロナウイルス感染症拡大の状況に鑑み、昨年度に引き続き今年度も開催しないこととなった旨コース長より報告された。学生委員会より修了生には寄せ書きと小さな記念品を贈りたいとの希望があり、英語コース所属教員には一口500円のカンパをお願いしている。

最後にコース長より、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムについて、申請書作成の最終段階であること、それに伴い帰国修了生との共同研究数ならびに帰国修了生が母国でリクルーターティングに参加して入学した留学生数についてアンケートへの協力依頼があった。また、対象となる指導教員へ、優秀なDC1日本人学生の英語コースへの参加を再度検討いただくよう依頼がなされた。

なお、次回の英語コース会議は、9月15日（水）15:00～開催予定。

2021年9月22日

日時：2021年9月15日（水）

方式：メール審議

議題：

1. 2022年3月修了予定者の論文進捗状況報告（資料1-1）

指導教員より博士後期課程修了予定者（コース参加日本人学生を含む）の論文進捗状況報告が文書によりなされ、8名中6名が受理済、1名が投稿中、1名が準備中であった。準備中の1名については当月中に投稿予定であることが補足された。

学位論文受理の条件について、3月修了においては、12月コース会議付議時点（第一著者として論文が公表されていること、また、12月コース会議付議時点で第一著者として投稿しており、投稿誌より何らかの指示（minor/major revision等）を受けており、ユニット長会議（2022年1月21日）3日前の17:00までに投稿論文の公表が決定する見込みがある場合であることが確認された。

2022年9月修了予定者の論文進捗状況報告（資料1-2）

博士後期課程修了予定者16名について論文進捗状況一覧が示された。

2023年3月修了予定者の論文進捗状況報告（資料1-3）

博士後期課程修了予定者3名（うちコース参加日本人学生1名）の論文進捗状況一覧が示された。

2. 4月入学者の出願予定について（資料2）

現時点で、新規博士後期課程1名（純粋私費）が出願予定であることが示された。今後受け入れ予定がある場合、教務・学生担当に連絡すること。出願書類提出期限は10月29日（金）。

3. 学位記授与式（9/24）について（資料3）

博士後期課程修了予定者11名、修士課程修了予定者15名。昨年同様DC、MC合同で9月24日（金）11時から農学部大講堂で開催されるので、式にふさわしい服装で参加するよう案内された。新型コロナウイルス感染拡大の状況を踏まえ、今年にはアカデミックガウンを着用しての写真撮影は行わない。授与式には、指導教員及びその他教員、家族や研究室学生の出席も可能であることが補足された。また、修了生に記念品を贈るためのカンパへの協力について謝意が示され、学生委員会が品物を検討していることが補足された。

4. 次年度の国費採用予定の調整（資料4、5）

プログラム採択結果通知が12月上旬となるため、プログラムが採択されたという前提で、暫定的に各領域に修士1名、博士後期課程1名の2枠を配分し、副コース長を中心に領域内で選考を開始するよう依頼された。東南アジア（ASEAN）を受入地域と選択しているため、該当国からの採用を優先するよう補足された。候補者の情報について10月末までに教務・学生担当に連絡し、次回のコース会議で副コース長からの報告をもって、最終決定とする。

報告事項：

1. 2021年9月修了者の学位論文審議の結果について（資料6）

11名全員が「可」となった。

2. 新入生オリエンテーションと歓迎会の中止について

例年10月に開催している新入生オリエンテーションと歓迎会について、新型コロナウイルス感染拡大の現状に鑑み、昨年度に引き続き、今年度も開催しないことが報告された。

4. 日本人学生の英語特別コース参加について (資料4) (別紙)

2021年度英語特別コースへ参加申込書を提出した日本人学生2名について、指導教員より経歴や研究内容について説明があり、参加について承認された。当該学生は2021年4月に遡り、英語特別コースに在籍したものとす。なお日本人学生に対しても英語能力の基準を設けるかどうかについては、今後の日本人学生の英語特別コースへの参加のあり方とあわせて検討していくこととなった。

2021年12月9日

日時：2021年11月11日(木) 15:00～15:51

場所：農学部大講堂

出席者：園山、中島、松島、秋元、大原、中原(健)、浅野、佐藤、尾之内、木村、橋本、崎浜、信濃、当真、松浦、森、佐分利、吹谷、前田、加藤(英)、浦本、重富、幸田、中村、森本、山田(孝)、笠井、呉、小池、鈴木、玖村、山本、平野、鮫島、石黒、岩淵、近藤(巧)、江澤、福士
 欠席者：柏木(純)、愛甲、荒木、吉澤、貴島、小出、増田、山下、奥山、田上、渡部、丸山、中原(治)、倉持、北岡、石塚、比良、逢坂、渋谷、宮本、齋藤(秀)、玉井、桂、柿澤、庄子、川原、唄、上田、三谷、小林、岡田、山田(浩)、野口、岡本、オスビナ、小関、小山、清水、合崎、マリア、田村、湯本、鎌形、森田、北川、菊池、加藤(創)
 陪席：高橋、加藤(知)、山田、対馬、片岡、金橋(以上敬称略)

議題：

1. 合否判定(私費)(資料1)(別紙)

次年度4月入学予定者DC1名：純粋私費(中国)につき、審査過程の説明後、合格とした。

2. 合否判定(MC→DC)(資料2)(別紙)

MC→DC1名(純粋私費)につき、指導教員により、これまでの研究内容および面談結果等の説明がなされた後、合格とした。

3. 次年度の国費採用予定(資料3)

次期プログラムについては、12月上旬にプログラム採択結果が判明し、12月中に特別枠の募集が通知される予定。最大配分枠(修士・博士各4枠)が獲得できるかについては未定であるが、各4枠とした場合の調整状況について各副コース長より報告され、情報共有がなされた。採択結果が判明した後、各領域の副コース長間で調整を行うことになる。現時点では、候補者にはあくまでも「プログラムが採択された場合」と念押しするとともに、密に連絡をとり辞退等が発生しないよう注意喚起がなされた。なお、プログラムが採択された場合の出願書類到着期限は12月31日(金)、教員による審査も同期限であることが補足説明された。

5. コース長の選出・副コース長の選出(資料5, 6)

現コース長である園山教授の任期が今年度3月までとなるため、次期コース長の選出が必要となる。候補者については、コース所属歴にかかわらず、農学院専任かつ主担の教授を候補者とする。信濃教授から立候補の申し出があった旨コース長より紹介があり、承認された。立候補者がいなかった場合、領域ごとのローテーションとしており、本来であれば生命科学領域の順番であったため次回立候補者がいない場合はローテーションを生命科学領域に戻し、その後は今回立候補された信濃教授所属の食料生産領域はスキップして、環境保全領域とすることがあわせて承認された。

副コース長の任期も2年であるため、食料生産領域と生命科学領域については次期副コース長の選出が必要となる。副コース長については、コース所属歴や役職は問わず、農学院専任教員より選出する旨補足説明がなされた。

選出については、教務・学生担当から依頼メールが送信されるので、現副コース長は領域内で調整をし、11月30日(火)までに決定のうえ教務・学生担当に連絡することとなった。結果については、12月コース会議で紹介する。

6. 2022年3月修了者(DC)のスケジュール(資料7)

3月修了者については、英語コース全体で公開審査等を開催しないため、通知等は指導教員からアグリメイトで行うよう案内があった。2022年2月3日(木)開催の2月コース会議で学位論文の審査を行う。入試や卒論発表会などの行事が重なっているが、時間の調整をたうえで、コース会議には可能な限り出席するようコース長より補足があった。

7. 学位論文審査の要旨(記入例8)について(資料8)

コース長より、英語特別コースで統一した学位論文審査の要旨(記入例8)の記述方法について提案があり、了承された。今後の参考としていただく。

8. その他

特になし

2022年1月6日

報告事項：

1. 2022年度秋入学 JICA 研修員受入プログラムについて（資料9）

JICA によるミャンマー国「農業セクター中核人材育成（フェーズ2）」と Agri-Net プログラム受入の意向調査について、農学院は「受入の可能性あり」と回答しているため、JICA より個別に受入打診があった場合は対応願いたい旨説明があった。受入に際しては、英語コース出願資格を確認すること、また標準修業年限内に修了する見込みを厳格に判断することが補足説明された。

2. 学生の休学について

4月入学MC（中国）より、コロナ禍で渡日の目的が立たないため今学期休学したい旨の申し出があったこと、また、10月入学MC（インドネシア）についてインドネシア教育基金（LPDP）を受給予定であったものの、突然の英語能力基準の変更に伴い、奨学金を受給できないこととなったため、11月より休学して基準を満たす英語スコアを取得するか、別の奨学金を探すことになった旨、コース長より報告があった。本件については、11月22日（月）開催のユニット長会議で報告予定。

なお、次回のコース会議は、12月16日（木）15時～開催予定。

日時：2021年12月16日（木）15：00～16：00

場所：農学部大講堂

出席者：園山、中島、秋元、大原、増田、佐藤、山下、奥山、橋本、崎浜、渡部、松浦、森、吹谷、石塚、加藤（英）、浦木、重富、幸田、中村、森本、笠井、柿澤、上田、呉、小池、玖村、山本、鮫島、石黒、岡本、オスビナ、小山、岩淵、清水、近藤（巧）、合崎、江澤、菊池、福士

欠席者：柏木（純）、愛甲、松島、荒木、吉澤、貴島、小出、中原（健）、浅野、尾之内、木村、田上、信濃、丸山、当真、中原（治）、倉持、北岡、佐分利、前田、比良、逢坂、渋谷、齋藤（秀）、宮本、玉井、山田（孝）、桂、庄子、川原、唄、三谷、小林、鈴木、平野、岡田、山田（浩）、野口、小関、マリア、田村、湯本、鎌形、森田、北川、加藤（創）

陪席：高橋、加藤（知）、山田、片岡、金橋（以上敬称略）

議題：

1. 学位論文の受理について（資料1、2）

コース参加日本人学生1名を含む、博士修了予定者8名について、学位論文の進捗状況報告が主査または副査からなされた。

筆頭著者としてアクセプトされた1報以上の原著論文を8名全員が有し、学位論文受理の条件を満たしていることから、8名全員の学位論文の受理が承認された。

2. 2022年度9月修了予定者の論文進捗状況報告（資料3）

修了予定者

Cao Tianzhi（岡本准教授）

Nur 'Azimatul Qudisyiah Haji Maidin（比良准教授）

Islam MD, Mahmudul（石黒教授）

Oraegbunam Chidozie Johnson（内田准教授）

Udomsopagit Teranart（園山教授）

Kodithuwakku Arachchilage Heshan Taraka Kodithuwakku（小池准教授）

Fan Weihong（高橋教授）

Huang Yan（加藤創一朗准教授）

Masimbula Vidanalage Rishni Samindika Masimbula（松浦教授）

Ruangaram Wijitrapha（加藤英介准教授）

Suzumura Alyssa Lee（大原教授）

Cheng Zixin（吉澤准教授）

Furukawa Flavio（森本准教授）

Hossain MD, Imam（石黒教授）

Laneng Lauretta Andrew（中村教授）

Lyu Yan（浦木教授）

博士修了予定者16名の学術論文公表の進捗状況報告が、指導教員または代理人からなされた。

アクセプト済12名、準備中3名、準備中等該当なし1名。
準備中1名については、体調不良のため2022年9月の修了が困難なこと、また準備中等該当なし1名については、一時帰国中コロナ禍のためにビザが発給されず、先月末に再入国できたばかりでこれから研究を再開すること、2022年9月には単位修得退学をし、その後1年以内の学位論文提出を目指すことが報告された。

3. 2022年度国費（DC4名、MC4名）出願状況について（資料4）

各候補者と指導予定教員の対応状況について説明がなされた。候補者から指導教員への書類提出期限は12月31日（金）。指導教員から教務・学生担当への書類提出期限は1月21日（金）。

メールインタビューについては、受入教員を含む3名の農学院専任教員がそれぞれ3回以上、計9回以上行い、そのうち1回はカメラ付きSkypeやZoom等で本人確認をしながらインタビューを行うよう注意喚起がなされた。

4. 次年度副コース長の選出について（資料5）

食料生産領域と生命科学領域は副コース長の任期満了に伴い、それぞれ上田教授、浦木教授が次期副コース長に選出された。

5. その他

特になし。

報告事項：

1. 2021年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」の選定結果について（資料6）

コース長から、農学院のプログラムが採択されたことに関し、関係各位への謝意が示された。

次回コース会議は2022年2月3日（木）15時より開催されるが、論文審査があるため可能な限りご出席願う。

日時：2022年2月3日（木）15：00～16：27

場所：農学部大講堂

出席者：園山、中島、愛甲、松島、秋元、大原、吉澤、貴島、中原（健）、浅野、佐藤、木村、橋本、渡部、丸山、当真、松浦、北岡、森、佐分利、吹谷、前田、比良、加藤（英）、逢坂、宮本、浦木、玉井、幸田、中村、森本、山田（孝）、笠井、唄、三谷、呉、小林、小池、鈴木、政村、山本、平野、鮫島、石黒、オスピナ、小関、小山、岩淵、清水、近藤（巧）、合崎、江澤、森田、菊池、福士

欠席者：柏木（純）、荒木、小出、増田、尾之内、山下、奥山、田上、信濃、中原（治）、倉持、石塚、渋谷、齋藤（秀）、重富、桂、柿澤、庄子、川原、上田、岡田、山田（浩）、野口、岡本、マリア、田村、湯本、鎌形、北川、加藤（創）

陪席：高橋、山田、片岡、金橋（以上敬称略）

議題：

1. 学位論文の審査について（資料1, 2）

DC修了・学位授与予定者
Aliyu Mohammed（岩淵教授）
Zhang Chengming（渡部准教授）
Disanayakage Surakshi Wimalingika Rajapaksha（清水准教授）
Mohammed, Ibrahim Shaba（清水准教授）
Isaiyah Youhak Song（吹谷准教授）
Ho Khoi Thieu（小林泰男教授）
Cui Rui（平野教授）
Hiroki Abe（小関教授）

学位論文審査要旨について、主査または副査からの説明後、委任状を含む出席者の投票により8名とも「可」と決定した。また、学位論文審査の要旨（様式8）については、審査員に外国人が含まれている場合を除き、英語コースとしては日本語で記述することがコース長より提案され、了承された。

2. 合否判定（2022年10月入学国費特別枠）（資料3, 別紙）

議題に先立ち、候補者の交代があった旨コース長より報告があり、元の受入予定教員より経緯について説明がなされた。
10月入学国費特別枠DC4名・MC4名について、受け入れ予定教員による説明がなされ、全員「合」と承認された。

3月4日の学院教授会にて承認された後、合格通知を発送する。

3. 今後の出願予定（2022年10月入学の国費定員枠外・私費）（資料4）

DCに大使館推薦（ガーナ）、私費（中国政府派遣）各1名、純粋私費2名（パングラデシュ、中国）、MCに大使館推薦（ミャンマー）1名が出願予定。今後、

出願予定者が出た場合は、教務・学生担当まで連絡すること、また、出願期間については、教務・学生担当から4月初旬にメールで案内がある旨周知された。出願書類の提出期限は、5月末日予定。

なお、中国政府派遣については、条件付き受入内諾書が再度認められることとなったため、他の私費留学生と同じ出願期間で対応が可能となったこと、対象課程が博士後期課程のみとなったことが情報共有された。

4. 2022年9月修了予定者の論文進捗状況報告 (資料 5-1)

2023年3月修了予定者の論文進捗状況報告 (資料 5-2)

2023年9月修了予定者の論文進捗状況報告 (資料 5-3)

(資料 5-1) に基づき、2022年9月修了予定者のうち、投稿論文が accept に至っていない学生のみ、学術論文公表の進捗状況が指導教員から報告された。

5. 2022年9月の学位記授与式までのスケジュール (資料 6)

英語コースの公開審査および学位授与審議委員会について、全体で開催すると研究分野が専門外で審査が難しいため、領域ごとの開催にしてはどうかと意見があったことについて、コース長より本プログラムの特長として多彩な研究領域で成り立っており、そこに所属する教員に研究分野を横断して審査いただくことに意義があるため、従来通り全体で開催することが提案された。それに対し構成員より、領域ごとに分割した方が負担や無駄がないこと、当該専門分野の中で審査した方が、充実したものになるのではないかとの意見がなされた。

次年度の公開審査をどのような形で開催するかについては、次回コース会議以降も引き続き議論していくこととするが、まずは開催日程のみ決定することとした。

DCの公開審査日は7月28日(木)、MCは7月29日(金)。また、学位論文審査の8月コース会議を8月10日(水)に行う。なお、9月修了予定者の学位論文受理の条件は、「学位論文審査のコース会議前日の17時まで」とされていることが確認された。

9月修了予定者 全18名

DC:修了予定者 (14名) Islam Md. Mahmudul, Oraegbunam Chidozie Johnson, Udomsopagit Teranart, Kodithuwakku Arachchilage Heshan Taraka

Kodithuwakku, Fan Weihong, Huang Yan, Masimbula Vidanalage Rishni

Samindika Masimbula, Ruangaram Wijitrappa, Suzumura Alyssa Lee, Cheng Zixin, Furukawa Flavio, Hossa Md. Imam, Laneng Lauretta Andrew, Lyu Yan

MC:修了予定者 (4名) Zhou Shuaiyu, Anarki Gempur, Farjana Nowshin, Zhao Shuangshuang

6. その他

なし。

報告事項:

なし。

最後にコース長より退任の挨拶として謝意が述べられた。

PREFACE

Hokkaido University was founded in 1876 as Sapporo Agricultural College, the first higher educational institution for agricultural sciences in Japan. The university consists of twelve undergraduate faculties, twenty-two graduate schools, and twenty-five research institutes and centers, with 4,000 faculty members, and administrative and technical members, 11,500 undergraduate students, 6,600 graduate students as well as 2,000 international students from 99 countries (all approximate numbers for personnel and students).

Of all the Faculties and Graduate Schools, the School of Agriculture is the oldest in the university's history of more than 140 years. It was first established to meet the needs to open the island of Hokkaido as a new frontier. Since then, it has been the leading university in agricultural sciences and has produced many eminent persons.

Today, the School of Agriculture at Hokkaido University is one of the most prestigious Agricultural Faculties among the National University Corporations* in Japan, attracting more than 70% of its students from areas other than Hokkaido. The same applies to the Graduate School of Agriculture that is staffed with highly qualified professors and staffs. In 2000, it has transformed itself into a “Graduate Research University” that places greater emphasis than ever upon graduate education and research activities, and that aims to maintain the highest standards as one of the top universities in Japan in the twenty-first century.

The Global Education Program for AgriScience Frontiers started in April 2018 as an evolved form of the previous Special Postgraduate Program in Special Postgraduate Program in Biosphere Sustainability Science. This program provides a unique combination of such study fields as food, health and environment to meet urgent needs in research and development of preservation and sustainable utilization of our limited resources on earth to ensure our quality of life in the future. Due to the nature of the program, the language to be used in all educational and research activities will be English. We invite you to take advantages of this opportunity.

September 1, 2022

NISHIMURA Takanori, Ph. D.
Dean and Professor
Graduate School of Agriculture

SHINANO Takuro, Ph. D.
Head and Professor
The Global Education Program
for AgriScience Frontiers

*All the national universities in Japan have been reorganized under the system of National University Corporation since April 2004.

GUIDELINES FOR APPLICATION (Doctoral Course)

Feature of the Doctoral Course

- (1) All the lectures, research work, and thesis work will be conducted in English. Students will be expected to learn Japanese language gradually during their stay.
- (2) Students will be expected to write a thesis in English based on research conducted during the course and submit this thesis to examiners in the Global Education Program for AgriScience Frontiers, Graduate School of Agriculture, Hokkaido University for evaluation. A student will be awarded a Ph. D., if he/she has completed the course with satisfactory academic performance. A thesis has to be submitted to the examiners with their approval and an oral defense is also required.
- (3) Students are required to complete this program for Doctoral degree within three years.

I. Study Areas and Number of International Students for Admission

1-1. Study area

- (1) Applicants for any field related to the subjects for the program (refer to p. 13-21) will be accepted.
- (2) Applicants must consult with the expected academic advisors before submitting your application. The application will not be considered, if the application is not approved by the expected academic advisor.

1-2. Number of students to be admitted

Several students will be selected for admission. This program will recommend 4 students as candidates for the Scholarship by the Japanese Government (MONBUKAGAKUSHO) – hereinafter “Scholarship”.

Apart from the above 4 Scholarship students, students supported by other Japanese Government Scholarship (Embassy Recommendation etc.) will be selected – hereinafter “Embassy Recommendation Scholarship”.

Additional students will be selected from those who are on other sort of financial supports – hereinafter “Personal Funds”.

2. Qualification Requirements

2-1. Nationality:

For “Scholarship” applicants: Non-Japanese citizen residing outside of Japan of countries to which the Scholarship by MONBUKAGAKUSHO are offered, are entitled to apply. Students studying in the Master’s Course of the Global Education Program for AgriScience Frontiers are included.

For “Embassy Recommendation Scholarship” applicants: The same as “Scholarship” applicants.

For “Personal funds” applicants: Any nationality except Japanese is entitled to apply.

2-2. Age Limit:

For “Scholarship” applicants: Under 35 years old on April 1, 2023, i.e., those who were born after April 2, 1988.

For “Embassy Recommendation Scholarship” applicants: The same as “Scholarship” applicants.

For “Personal Funds” applicants: No restriction.

2-3. Academic Background:

For “Scholarship” applicants :

- (1) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a master’s degree or professional degree in September 2023.

- (2) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or a professional degree from a foreign university by September 2023.
- (3) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or professional degree by taking correspondence courses in Japan offered by a foreign school by September 2023.
- (4) Individuals who have completed a foreign university's graduate school coursework at an educational institution in Japan and have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or professional degree by September 2023. The institution needs to be positioned within the school education system of that foreign country as an educational body with a graduate school course and is required to be designated by the Japanese Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology.
- (5) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree by September 2023 from a United Nations University as prescribed in Article 1(2) of the Act on Special Measures Incidental of Enforcement of the Agreement between the United Nations and Japan regarding the Headquarters of the United Nations University (Act No.72 of 1976), which was established under the December 11, 1972 resolution of the General assembly of the United Nations.
- (6) Individuals who have completed their formal education by taking a correspondence course through a non-Japanese university, an educational institution which received the designation by (5), or the United Nations University, who have passed an examination or a screening equivalent to the regulations by Article 16.2 in Standards for the Establishment of Graduate Schools, and who are recognized to have an academic ability equivalent to Master's degree holders by the Graduate School, or who will obtain it by September 2023.
(hereinafter referred to as "individuals from a foreign university who have been passed a Qualifying Examination").
- (7) Individuals designated by the minister of education, culture, sports, science and technology (1989 Notice No. 118, Ministry of Education, Science and Culture; 2001 Notice No. 55, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology).
 - (a) Those who have graduated from a university, have worked for two years or longer at a university or research institution, and have earned a master's degree or are recognized by the Hokkaido University Graduate School of Agriculture as possessing equivalent or greater academic capabilities based on its research findings.
 - (b) Those who have completed 16 years of school education in a foreign country or 16 years of school education of a foreign country by taking a correspondence course in Japan offered by a school of that foreign country, have worked for two years or longer at a university or research institution, and have earned a master's degree or are recognized by the Hokkaido University Graduate School of Agriculture as possessing equivalent or greater academic capabilities based on its research findings
- (8) Individuals who are recognized by this graduate school as possessing the equivalent or greater academic skills as that of a person who has a master's degree or professional degree based on an individual admission qualification screening and who will be 24 years of age as of September 30, 2023*.

* This qualification applies to those who do not possess the qualifications of a university graduate, such as graduates of a national college of technology, junior college, specialized training college, or other types of schools, as well as graduates of Japanese branch schools of foreign universities or foreign schools.

For "Embassy Recommendation Scholarship" and "Personal Funds" applicants:

April Entrant

- (1) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a master's degree or professional degree in March 2023.

- (2) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or a professional degree from a foreign university by March 2023.
- (3) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or professional degree by taking correspondence courses in Japan offered by a foreign school by March 2023.
- (4) Individuals who have completed a foreign university's graduate school coursework at an educational institution in Japan and have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree or professional degree by March 2023. The institution needs to be positioned within the school education system of that foreign country as an educational body with a graduate school course and is required to be designated by the Japanese Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology.
- (5) Individuals who have been awarded or expect to be awarded a degree equivalent to a master's degree by March 2023 from a United Nations University as prescribed in Article 1(2) of the Act on Special Measures Incidental of Enforcement of the Agreement between the United Nations and Japan regarding the Headquarters of the United Nations University (Act No.72 of 1976), which was established under the December 11, 1972 resolution of the General assembly of the United Nations.
- (6) Individuals who have completed their formal education by taking a correspondence course through a non-Japanese university, an educational institution which received the designation by (5), or the United Nations University, who have passed an examination or a screening equivalent to the regulations by Article 16.2 in Standards for the Establishment of Graduate Schools, and who are recognized to have an academic ability equivalent to Master's degree holders by the Graduate School, or who will obtain it by March 2023.
(hereinafter referred to as "individuals from a foreign university who have been passed a Qualifying Examination").
- (7) Individuals designated by the minister of education, culture, sports, science and technology (1989 Notice No. 118, Ministry of Education, Science and Culture; 2001 Notice No. 55, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology).
 - (a) Those who have graduated from a university, have worked for two years or longer at a university or research institution, and have earned a master's degree or are recognized by the Hokkaido University Graduate School of Agriculture as possessing equivalent or greater academic capabilities based on its research findings.
 - (b) Those who have completed 16 years of school education in a foreign country or 16 years of school education of a foreign country by taking a correspondence course in Japan offered by a school of that foreign country, have worked for two years or longer at a university or research institution, and have earned a master's degree or are recognized by the Hokkaido University Graduate School of Agriculture as possessing equivalent or greater academic capabilities based on its research findings
- (8) Individuals who are recognized by this graduate school as possessing the equivalent or greater academic skills as that of a person who has a master's degree or professional degree based on an individual admission qualification screening and who will be 24 years of age as of March 31, 2023*.

* This qualification applies to those who do not possess the qualifications of a university graduate, such as graduates of a national college of technology, junior college, specialized training college, or other types of schools, as well as graduates of Japanese branch schools of foreign universities or foreign schools.

October Entrant: the same as "April Entrant" applicants except that March 31, 2023 should read September 30, 2023.

2-4. Grades: Applicants are required to have obtained a GPA of 2.30 (3.00 as full score) during the applicant's most recently graduated/expected to graduate program. Applicants are requested to follow advice from your expected academic advisors.

2-5. Health: Those who are certified as both physically and mentally healthy by a qualified and recognized physician.

2-6. Language level/ability: Applicants must be fluent in English. Those who satisfy at least one of the following conditions of English proficiency.

- (1) Those who acquire B2 or higher level of CEFR or the equivalent grade/score on language test of the same level taken within 2 years.
- (2) Those who have completed course of study, mainly in English, to fulfil the curriculum required to be admitted to universities in Japan.

2-7. Remarks:

- (1) Military personnel and civilian employees of armed forces are not eligible for this course if they remain on active duty.
- (2) Individuals applying based on qualification (6) or (7) or (8) are required to submit other necessary documents, so be sure to contact at least 3 months before the listed deadlines.

2-8. Inquiry

If you have any questions about this program, please contact the Administrative Office of Agriculture and Global Food Science by email (kyomu@agr.hokudai.ac.jp). In your email please include the name of your expected academic advisors and your desired research field.

3. Privacy Policy

Names, addresses, and other personal information provided to the university on application documents will be used solely for enrollee selection, the announcement of exam results, and admission procedures. The personal information of those who are accepted for admission shall also be used for administrative purposes after enrollment (student registration, academic counseling, etc.), student support services (health management, scholarship applications, etc.), and administrative tasks related to tuition, etc.

Only the names and addresses of applicants will be used to facilitate communications from the Hokkaido University Frontier Foundation and an organization associated with the university: the Hokkaido University Athletic Union.

4. Application: for “Scholarship” students

4-1. Important notice for application

- (1) Applicants should contact and discuss well with your expected academic advisor in advance. Applications without such pre-discussion are not accepted.
- (2) The following documents must be submitted to the expected academic advisor, before the deadline of December 31, 2022 (all of these documents MUST ARRIVE by this deadline).
- (3) After the application, any cancellation is NOT permitted.
- (4) The procedure is illustrated in p.12.
- (5) Those who are recipients of Scholarship or fellowship from any other sources are not eligible for Scholarship.
- (6) The payment of Scholarship to an enrolled student may be terminated if any of the information supplied with an application is later found to be false. Admission can be canceled any time after enrollment.

- (7) Non-eligibility: Those who meet any one of the following conditions are ineligible. If identified ineligible after being selected as a scholarship student, he/she must withdraw from the scholarship.
- ① Those who are military personnel or military civilian employees at the time of their arrival in Japan or during the period of the payment of the scholarship.
 - ② Those who cannot arrive in Japan by the date of the period specified by MEXT or the accepting university.
 - ③ Those who are previous grantees of Japanese Government (MEXT) scholarship programs (including those who withdraw from the scholarship program after the arrival in Japan). This does not apply to: those who have educational or work experience exceeding more than three years from the following month of the period of the previous scholarship to the estimated first month of the payment of this scholarship; and the past grantees of Japanese Studies Students program who have graduated or are going to graduate from universities in their home countries, Japan-Korea Joint Government Scholarship Program for the Students in Science and Engineering Departments and Young Leaders' Program. The MEXT Honors Scholarship is not included in the Japanese Government (MEXT) Scholarship Programs.
 - ④ Those who are currently also applying to another program under the Japanese Government (MEXT) Scholarship system.
 - ⑤ Those who are already enrolled in a Japanese university or other institution with a residence status of "Student," or who are going to be enrolled, or plan to enroll, in a Japanese university or other institution as a privately-financed international student from the time of application to the MEXT scholarship program in the applicant's country until the commencement of the period for payment of the MEXT scholarship. However, this stipulation does not apply to privately-financed international students who, even though they are enrolled, or are planning to enroll, in a Japanese university or other institution, verifiably complete their studies before the start of the scholarship payment period, return to their home country at the time of the scholarship application, and newly acquire the "Student" residence status and come to Japan.
 - ⑥ Those who are planning to receive scholarship money from an organization other than MEXT (including a government organization of the applicant's country) on top of the scholarship money provided by MEXT after the start of the scholarship payment period.
 - ⑦ Those who are expected to graduate at the time of application and cannot satisfy the condition of academic background by the deadline given.
 - ⑧ Holders of dual nationality at the time of application who cannot verify that they will give up Japanese nationality by the time of the arrival in Japan.
 - ⑨ Those who plan to, from the time of application for the MEXT scholarship program, engage in long-term research (such as fieldwork or internship) outside Japan or plan to take a long-term leave of absence from the university.
 - ⑩ Those who have completed a doctoral course and have no intention to obtain a degree.

4-2. Evaluation of Applicants

The applicants will be evaluated based on his/her application documents and the e-mail interview (or interview).

4-3. What to submit

All of the following documents must be sent by registered airmail.

- (1) A completed application form for the Global Education Program for AgriScience Frontiers (use the attached format, print on both sides, paste your photograph as specified.) You have to be instructed how to write the study plan section (6. i & ii) from your expected academic advisor.
- (2) A completed application form for the Japanese Government Scholarship (use the format provided by MONBUKAGAKUSHO, print on both sides, paste your photograph as specified.) The e-mail interviews (nine times or more) will be scheduled by your expected academic advisor.

- (3) Medical certificate issued by a public hospital within the last six months (use the attached format.)
- (4) Photocopies of certificate of Bachelor's degree and Master's degree or certificates of graduation. (If the applicant has not yet graduated the Master's Course, a certified letter from your university stating the expected finishing date of the Master's Course.)
- (5) Official academic transcript of all undergraduate course work and Master's Course work from the university
 *Note: Applicants are required to have obtained a GPA of 2.30 (3.00 as full score) during the applicant's most recently graduated/expected to graduate program. Official academic transcripts should include the information about when you acquired the credits (at least year/semester).
- (6) A document describing the score of GPA or equivalent (place of the candidate in the course, classification by A/B/C etc.) at the recent degree program to show that the candidate is excellent.
- (7) A certificate of English proficiency: Submit an objective evidence of eligibility of language proficiency described "2-6 Language level/ability" (incl. TOEFL/IELTS certificates).
- (8) A certificate of citizenship or proof of residence in the applicant's home country. A photocopy of your passport is preferable.
- (9) A letter of recommendation to the President of Hokkaido University, Prof. Dr. HOUKIN Kiyohiro by the Dean or Head of the applicant's most recently graduated/expected to graduate program
- (10) Summary of Bachelor's thesis and Master's thesis (each one page of A4 or letter size format)
- (11) Entrance examination fee: exempted

REMARKS:

- (1) The above documents should be type-written in English (use word processing software as far as you can), prepared in uniform size based on the A4 or letter size format, and printed on both sides.
- (2) Applications will not be accepted if any of the above documents are incomplete, incorrect or lacking supporting evidence. They will not be considered if they arrive after the deadline.
- (3) All documents once submitted will not be returned.
- (4) Applicants who are not awarded a master's degree by the application deadline must submit a photocopy of the certificate of the degree once they receive it.

4-4. Notification of the results of selection

The successful applicants will be approved as the candidates at the professor meeting of this program and the final decision for admission will be made at the faculty meeting of the Graduate School of Agriculture, Hokkaido University. The final results for granting the Scholarship made from MONBUKAGAKUSHO will be notified to the applicants around the beginning of August 2023. Successful applicants will be enrolled as full-time graduate students.

4-5. Supplementary explanation for the Scholarship

- (1) Time of arrival: A successful applicant must arrive in Japan by the end of September.
- (2) Fees: Admission fee and tuition fee are exempted.
- (3) Scholarship payments: Scholarship will not be paid if a student is long absent from the Graduate School of Agriculture or if his/her studies are not satisfactory.
- (4) Transportation to Japan: MONBUKAGAKUSHO shall provide an economy class air ticket from the international airport nearest to your residence in the country you have nationality to the designated international airport in Japan. [Note: Recipient should bare the cost of domestic travels to the nearest international airport at home and from

the arriving international airport to Hokkaido University. Recipient should also bare the cost of airport tax and connecting local flights in Japan and travel insurance for his/her travels to Japan.]

- (5) Personal accident insurance for students pursuing education and research: This insurance compensates for physical casualties from which students suffer in their intra-curricular activities, both on and off campus, and extra-curricular activities on campus. All the students must be insured before starting research activities. The premium is 3,620 Yen for three years (the premium may be changed without prior notification).

5. Application: for “Research Students” of the Research Faculty of Agriculture in the category of “Embassy Recommendation Scholarship” etc.

5-1. What to submit

All of the following documents must be submitted to the Administrative Office of Agriculture and Global Food Science. The documents (1) should be type-written in English (use word processing software as far as you can), prepared in uniform size based on the A4 or letter size format, and printed on both sides.

- (1) A completed application form for the Global Education Program for AgriScience Frontiers (use the attached format, print on both sides, paste your photograph as specified). You have to be instructed how to write the study plan section (6. i & ii) from your expected academic advisor. Interview (three times or more) about your research theme and plan will be conducted.
- (2) Medical certificate issued by a public hospital within the last six months (use the attached format.)
- (3) Entrance examination fee: exempted

5-2. Remarks:

Please refer to Table 1 in p.11 for the important dates (deadline of application, notification time of the results of selection, arrival time to Japan). The process for the evaluation of the applicant (see 4-2), fees (4-5 (2)) and the personal accident insurance (see 4-5 (5)) are the same as for the “Scholarship” applicants.

6. Application: for “Personal Funds” students

6-1. Important notice for application

- (1) Applicants should contact, and discuss well with your expected academic advisor, in advance. Applications without such pre-discussion are not accepted.
- (2) The following documents must be submitted to the expected academic advisor, before the deadline listed in Table 1 (all of these documents MUST ARRIVE by this deadline).
- (3) The procedure is illustrated in p.12.
- (4) Admission can be canceled any time after enrollment if any of the information supplied with an application is later found to be false.

6-2. Evaluation of Applicants

The process for the evaluation of the applicant is the same as for the “Scholarship” applicants (see 4-2).

6-3. What to submit

All of the following documents must be sent by registered airmail.

- (1) A completed application form for the Global Education Program for AgriScience Frontiers (use the attached format, print on both sides, paste your photograph as specified). You have to be instructed how to write the study plan section (6. i & ii) from your expected academic advisor. The e-mail interviews (six times or more) will be scheduled by your

expected academic advisor. If possible, the e-mail interviews can be replaced with interviews of three times. In case of a research student interviews (three times or more) will be conducted.

- (2) Medical certificate issued by a public hospital within the last six months (use the attached format.)
- (3) Photocopies of certificate of Bachelor's degree and Master's degree or certificates of graduation (If the applicant has not yet graduated the Master's Course, a certified letter from your university stating the expected finishing date of the Master's Course).
*Note: Those who graduated or will graduate from a university in China must submit the following documents in addition to a Certificate of (Expected) Graduation.
Graduates:
 - a. Online Verification Report of Higher Education Qualification Certificate (教育部学历证书电子注册备案表)
 - b. Graduation Diploma (毕业证书) and Degree Diploma (学位证书)Expected Graduates:
 - a. Online Verification Report of Student Record (教育部学籍在线验证报告)Obtain documents "a" above by requesting it at "中国高等教育学历证书查询":
<http://www.chsi.com.cn/xlzx/bgys.jsp>.
Also be sure that there are 15 or more days left until the expiration date of the online verification at the time of its submission.
- (4) Official academic transcript of all undergraduate course work and Master's Course work from the university
*Note: Applicants are required to have obtained a GPA of 2.30 (3.00 as full score) during the applicant's most recently graduated/ expected to graduate program. Official academic transcripts should include the information about when you acquired the credits (at least year/semester).
- (5) A certificate of English proficiency: Submit an objective evidence of eligibility of language proficiency described "2-6 Language level/ability" (incl. TOEFL/IELTS certificates).
- (6) A certificate of citizenship or proof of residence in the applicant's home country: A photocopy of your passport is preferable.
- (7) A letter of recommendation to the President of Hokkaido University, Prof. Dr. HOUKIN Kiyohiro by the Dean or Head of the applicant's most recently graduated/expected to graduate program
- (8) Summary of Bachelor's thesis and Master's thesis (each one page of A4 or letter size format)
- (9) Entrance examination fee of 30,000 Japanese Yen* (The method of payment should be discussed with your expected academic advisor.)
*Once application materials have been accepted, the examination fee will not be refunded for any reason.
*Those who will enter into Doctoral Course from Master's Course of Hokkaido University are not required to pay the entrance examination fee.
*China Scholarship Council (CSC) supported students, Hokkaido University President's Fellowship international students, and Hokkaido University Special Grant Program international students are exempt from the examination fee.

REMARKS:

- (1) The above documents should be type-written in English (use word processing software as far as you can), prepared in uniform size based on the A4 or letter size format, and printed on both sides.

- (2) Applications will not be accepted if any of the above documents are incomplete, incorrect or lacking supporting evidence. They will not be considered if they arrive after the deadline.
- (3) All documents once submitted will not be returned.
- (4) Applicants who are not awarded a bachelor's degree by the application deadline must submit a photocopy of the certificate of the degree once they receive it.

6-4. Notification of results of selection

The final decision for admission will be made at the faculty meeting of the Graduate School of Agriculture, Hokkaido University. Applicants will be notified of the results of selection on the dates indicated in the Table 1. Successful applicants will be enrolled as full-time graduate students.

6-5. Supplementary explanations for the Personal Funds students

- (1) Time of Arrival: Applicants may choose one entrance date, out of April or October, 2023. According to the entrance date, deadline date for the application is separately fixed. Applicants must refer to Table 1 for those important dates of application.
- (2) Admission fee: 282,000 Japanese Yen* (as of the year 2022).
- (3) Tuition fee: 267,900 Japanese Yen for each semester (annually 535,800 Japanese Yen)* (as of the year 2022) Tuition fee may be revised while a student is attending the Graduate School.
 *Those who will enter Doctoral Course from Master's Course of Hokkaido University are not required to pay the admission fee.
 *China Scholarship Council (CSC) supported students, Hokkaido University President's Fellowship international students, and Hokkaido University Special Grant Program international students are exempt from the admission fee and the tuition fee.
- (4) Personal accident insurance for students pursuing education and research: This insurance compensates for physical casualties from which students suffer in their intra-curricular activities, both on and off campus, and extra-curricular activities on campus. All the students must be insured before starting research activities. The premium is 3,620 Yen for three years. (The premium may be changed without prior notification.)

7. Application: for Master's Course students of the Graduate School of Agriculture, Hokkaido University

7-1. What to submit

All of the following documents must be submitted to the Administrative Office of Agriculture and Global Food Science. The documents (1) should be type-written in English (use word processing software as far as you can), prepared in uniform size based on the A4 or letter size format, and printed on both sides.

- (1) A completed application form for the Global Education Program for AgriScience Frontiers (use the attached format, print on both sides, paste your photograph as specified). You have to be instructed how to write the study plan section (6. i & ii) from your expected academic advisor. However, sections 6-i) and 6-ii) for the "Background of your study" and "Study plan in Japan in detail", respectively, of the application form can be replaced with the "Study plan or Progress of your study" in the document submitted to MONBUKAGAKUSHO for the extension of your Scholarship (except "Personal Funds" students) Interviews (three times or more) will be conducted.
- (2) Medical certificate issued by the Health Care Center of Hokkaido University. Applicants must take an annual health check of Hokkaido University in April.
- (3) Entrance examination fee: exempted

7-2. Remarks:

See Table 1 for deadlines of application and notification time of the results of selection. This Section 7 includes “Scholarship” students, “Embassy Recommendation Scholarship” students (April or October entrant), “Personal Funds” students (April or October entrant).

7-3. Supplementary explanations for Master’s Course students of the Graduate School of Agriculture Hokkaido University

- (1) Admission fee: exempted
- (2) Tuition fee: 267,900 Japanese Yen for each semester (annually 535,800 Japanese Yen)
*(as of the year 2022) Tuition fee may be revised while a student is attending the Graduate School.
*“Scholarship” students, “Embassy Recommendation Scholarship” students, China Scholarship Council (CSC) supported students, Hokkaido University President’s Fellowship international students, and Hokkaido University Special Grant Program international students are exempt from the tuition fee.
- (3) Personal accident insurance for students pursuing education and research: This insurance compensates for physical casualties from which students suffer in their intra-curricular activities, both on and off campus, and extra-curricular activities on campus. All the students must be insured before starting research activities. The premium is 3,620 Yen for three years. (The premium may be changed without prior notification.)

Table 1. Important dates in the application procedure for “Embassy Recommendation Scholarship”, “Personal Funds” and “Master’s Course students of this Program” categories.

	April Entrant	October Entrant
Submission of application requirements	Late October, 2022	Late May, 2023
Notification of results of selection	Early December, 2022	Middle of July, 2023
Time of arrival	Late March, 2023	Late September, 2023

FLOW CHART FOR THE APPLICATION PROCEDURE

Applicant must have communications with his/her expected academic advisor (p.13-21) at Hokkaido University.

Please visit the Program's website <https://www.agr.hokudai.ac.jp/spgp/lab/> for the contact information.

You can also refer the research field of the Faculty members of the Research Faculty of Agriculture at the website below.

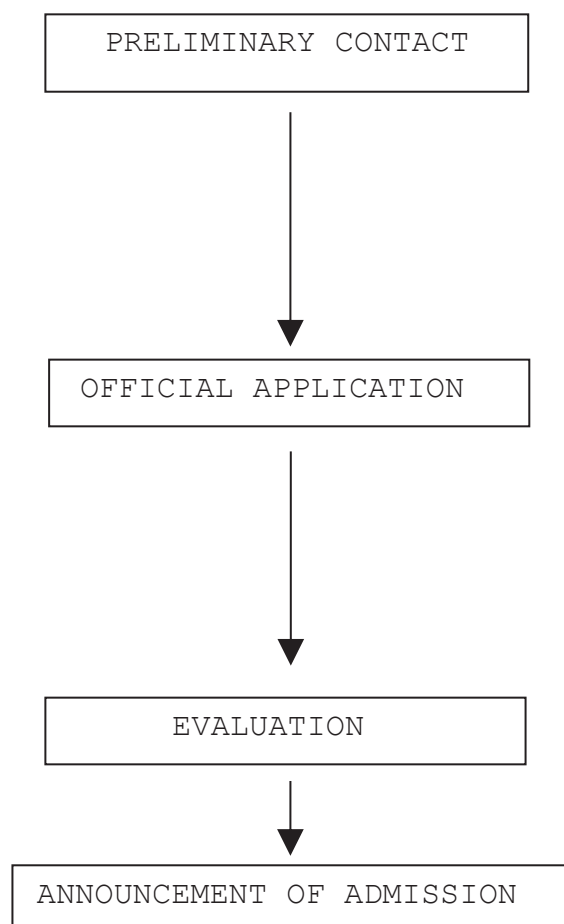
<https://www.agr.hokudai.ac.jp/en>

Applicant sends the official application form and required documents to the expected academic advisor at Hokkaido University.

Applicants must consult with the expected academic advisors before submitting his/her application. The application will not be considered for screening, if it is not endorsed by the expected academic advisor.

Applicant is evaluated based on his/her application documents and the e-mail interview (or interview).

Applicant is informed of the result of selection by Hokkaido University.



**THE GLOBAL EDUCATION PROGRAM
FOR AGRISCIENCE FRONTIERS
DIVISIONS, COURSES, RESEARCH FIELDS, STAFFS AND SUBJECTS**

Division of Agriculture, Frontiers in Production Sciences

(As of September 1, 2022)

◎PATHOGEN-PLANT INTERACTIONS

MASUTA Chikara, Ph. D., Agr., Professor
NAKAHARA Kenji, Ph. D., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Molecular biology of plant viruses
- 2) Mechanism of the innate immunity against viruses in plants
- 3) Plant biotechnology using viruses

◎PLANT BREEDING

KISHIMA Yuji, Dr., Agr., Professor
KOIDE Yohei, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Rice genetics underlying genome dynamism and phenotypic change
- 2) Developmental genetic study in rice
- 3) Genetic control of plant transposable elements
- 4) Genetics of rice speciation/evolution

◎PLANT NUTRITION

SHINANO Takuro, Ph. D., Agr., Professor
WATANABE Toshihiro, Ph. D., Agr., Associate Professor
MARUYAMA Hayato, Ph.D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Plant adaptation to adverse soil conditions: deficiencies and toxicities of mineral elements
- 2) Plant-soil interaction in the rhizosphere
- 3) Ionomics in plant and soil

◎VEHICLE ROBOTICS

NOGUCHI Noboru, Ph. D., Agr., Professor
OKAMOTO Hiroshi, Ph. D., Agr., Associate Professor
OSPINA Alarcon Ricardo, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Agricultural robot
- 2) ICT for agriculture
- 3) Utilization of aerial and surface vehicles for agriculture
- 4) Biomass energy

◎AGRICULTURAL AND FOOD PROCESS ENGINEERING

KOSEKI Shigenobu, Ph. D., Agr., Professor

KOYAMA Kento, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Non-thermal food processing
- 2) Predictive modeling of microbial growth and/or inactivation
- 3) Development of novel technologies for shelf life extension of foods

◎AGRICULTURAL BIO-SYSTEM ENGINEERING

IWABUCHI Kazunori, Dr., Agr., Professor

SHIMIZU Naoto, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Bioresource engineering
- 2) Carbonization
- 3) Composting
- 4) Biorefinery

◎AGRICULTURAL AND RURAL DEVELOPMENT

KONDO Takumi, Ph. D., Agr., Professor

AIZAKI Hideo, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Research on theories of economic development and agricultural development
- 2) Economic analysis of agricultural technology development and adoption of agricultural innovations
- 3) Research on population and food problem, and overseas development aid

◎APPLIED PLANT GENOMICS

Maria Stefanie Dwiyantri, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Genetic analysis of vitamin E content in soybean and wild soybean
- 2) Exploration of genetic variation in wild soybean
- 3) Genome analysis of fern *Stenochlaena palustris*

◎CROP SCIENCE

KASHIWAGI Junich, Ph. D., Agr., Lecturer

NAKASHIMA Taiken, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Drought tolerance improvements in tetraploid and hexaploid wheat
- 2) Further yield improvements on Hokkaido rice varieties developed in high latitude and cool environments
- 3) Yield improvement of maize under multiple abiotic stresses in Hokkaido

Division of Agriculture, Frontiers in Biosciences

◎APPLIED MOLECULAR ENTOMOLOGY

ASANO Shin-ichiro, Ph. D., Agr., Professor

SATO Masanao, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Analysis of interaction between insect pathogenic microbes and host insects
- 2) Genetic engineering of insect viruses, virus vectors, and insect cells
- 3) Systems biological approaches in insect microbiology research

◎MOLECULAR BIOLOGY

ONOUCHI Hitoshi, Ph. D., Sci., Professor

YAMASHITA Yui, Ph. D., Life Science, Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Regulatory mechanisms of translation and mRNA stability in plants
- 2) Molecular mechanisms of responses to environmental stresses and nutritional deficiencies in plants

◎MOLECULAR ENZYMOLOGY

OKUYAMA Masayuki, Ph. D., Agr., Professor

TAGAMI Takayoshi, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Reaction mechanism, structure and function of carbohydrate-active enzymes
- 2) Modification and design of enzyme by protein engineering
- 3) Enzymatic production of functional polysaccharides, megalosaccharides, oligosaccharides, and glycoconjugates
- 4) Physiological role of carbohydrate-active enzyme

◎MOLECULAR AND ECOLOGICAL CHEMISTRY

HASHIMOTO Makoto, Ph. D., Pharm., Professor

SAKIHAMA Yasuko, Dr., Sci., Lecturer

Current research activities:

- 1) Organic synthesis and developments of chemical tools for chemical biology studies
- 2) Synthesis and application of stable isotope labeled biologically active compounds (drugs, pesticides, etc.)
- 3) Chemical and physiological function analysis of plant pigments in animal and plant cells
- 4) Research on host recognition mechanisms of plants and microorganisms

◎NATURAL PRODUCT CHEMISTRY

MATSUURA Hideyuki, Ph. D., Agr., Professor

KITAOKA Naoki, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Research on biological active compounds regulating the life cycles of plants
- 2) Research on biological active compounds from ethonobotanical medicinal plants

- 3) Research on new plant growth regulators
- 4) Research on phloem borne signals to trigger systemic acquired resistance in plants

◎BIOCHEMISTRY

MORI Haruhide, Ph. D., Agr., Professor

SABURI Wataru, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Bio-engineering of carbohydrates and related compounds, including α -glucans, β -mannosides, and others, for production of functional foods and biomaterials
- 2) Exploring novel enzymatic activities and engineering of the enzymes
- 3) Carbohydrate metabolic pathways and relevant enzymes in living organisms

◎MICROBIAL PHYSIOLOGY

FUKIYA Satoru, Ph. D., Agr., Professor

MAEDA Tomoya, Ph. D., Eng., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Functional analysis of bifidobacterial genes involved in the intestinal fitness
- 2) Metabolism of bile acids by intestinal bacteria
- 3) Regulatory mechanism of gut microbiota composition
- 4) Analysis of metabolic regulation in industrially important bacteria
- 5) Analysis of the evolutionary dynamics of bacterial antibiotic resistance

◎NUTRITIONAL BIOCHEMISTRY

ISHIZUKA Satoshi, Ph. D., Agr., Professor

HIRA Tohru, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Studies on pre-symptomatic conditions in noncommunicable diseases
- 2) Dietary intervention to prevent and ameliorate symptoms in noncommunicable diseases
- 3) Nutrient sensing in enteroendocrine systems
- 4) Physiological functions of dietary factors

◎FOOD BIOCHEMISTRY

SONOYAMA Kei, Ph. D., Agr., Professor

KATO Eisuke, Ph. D., Sci., Associate Professor

OHSAKA Fumina, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Structural and chemical studies on digestive enzyme inhibitors in plants
- 2) Structure and molecular mechanism of antiobesity and antidiabetic substances in plants
- 3) Search for various physiologically active compounds from natural sources
- 4) Physiological studies on the relationship between food, gut microbiota and host

◎ANIMAL GENETICS & REPRODUCTION

KAWAHARA Manabu, Ph. D., Agr., Associate Professor

BAI Hanako, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Reproductive physiology of domestic animals
- 2) Molecular and cellular mechanisms of mammalian embryo development and differentiation
- 3) Maternal and fetal recognition of pregnancy in cattle

◎ANIMAL PRODUCTION SYSTEM

UEDA Koichiro, Ph. D., Agr., Professor

MITANI Tomohiro, Ph. D., Agr., Associate Professor

OH Seongjin, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Energy and nitrogen flow in animal production system
- 2) Sustainable animal production system based on ecosystem
- 3) Newly applied system of animal production

◎ANIMAL FUNCTION & NUTRITION

KOIKE Satoshi, Ph. D., Agr., Professor

SUZUKI Yutaka, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Digestive mechanisms in herbivorous animals
- 2) Exploration and evaluation of new feed and additive candidates
- 3) Functional analysis of gut microbiota and its application within and beyond animal industry
- 4) Physiology in development and function of gastrointestinal tissue

◎APPLIED FOOD SCIENCE

KUMURA Haruto, Ph. D., Agr., Professor

Current research activities:

Dairy application of enzymes and metabolites from edible microorganism

◎RHIZOSPHERE CONTROL

EZAWA Tatsuhiro, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Molecular mechanism of nutrient acquisition in plant-fungal symbiotic associations
- 2) Role of symbiotic microorganisms in the establishment of pioneer plants in stressed soil
- 3) Ecology of plant symbiotic microorganisms in agricultural and disturbed ecosystems

◎ECO-CHEMICAL ANALYSIS

FUKUSHI Yukiharu, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Survey of functional substances in unused biomass and bioconversion of agricultural waste to valuable substances
- 2) Development of novel analysis method for the remote place asymmetry discrimination of organic compounds

◎MOLECULAR ENVIRONMENTAL MICROBIOLOGY

TAMURA Tomohiro, Ph. D., Med., Professor

KAMAGATA Yoichi, Ph. D., Agr., Professor

YUMOTO Isao, Ph. D., Sci., Professor

MORITA Naoki, Ph. D., Sci., Associate Professor

KITAGAWA Wataru, Ph. D., Sci., Associate Professor

KIKUCHI Yoshitomo, Ph. D., Sci., Associate Professor

KATO Souichiro, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Searching for useful genomic resources for bioprocessing applications
- 2) Development of a microbial biofactory that can be used for multiple purposes
- 3) Cultivation of uncultured microbes and functional analysis of microbial communities
- 4) Elucidation of adaptation mechanisms in extremophiles and their industrial applications
- 5) Construction of high-level expression system in microorganisms using genomic information
- 6) Development of microbial production system of functional lipids using genetic engineering
- 7) Elucidation of microbial "Dormant—Resuscitation cycle" mechanism and function
- 8) Elucidation of molecular mechanisms underpinning insect-microbe gut symbioses
- 9) Investigation of microbial anaerobic energy metabolisms and their industrial applications

Division of Agriculture, Frontiers in Environmental Sciences

◎ORNAMENTAL PLANTS AND LANDSCAPE ARCHITECTURE

AIKOH Tetsuya, Ph. D., Agr., Associate Professor

MATSUSHIMA Hajime, Ph. D., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Landscape planning & management in urban and rural areas
- 2) Monitoring and management of recreational visitors in protected areas
- 3) Landscape ecology and green infrastructure in urban and coastal areas

◎ANIMAL ECOLOGY

ARAKI Hitoshi, Dr., Sci., Professor

SAKATA Masayuki, Ph. D, Sci., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Understanding biodiversity in natural ecosystems
- 2) Environmental DNA (eDNA) approaches for monitoring fish and other organisms
- 3) Rapid genetic adaptation of living organisms to environmental changes
- 4) Influence of anthropogenic changes onto animal species in the wild

◎SYSTEMATIC ENTOMOLOGY

ÔHARA Masahiro, Dr., Agr., Professor

YOSHIZAWA Kazunori, Dr., Sci., Associate Professor

MATSUMURA Yoko, Dr., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Phylogenetic systematics of insects based on morphological and molecular data
- 2) Functional morphology and biomechanics
- 3) Descriptive taxonomy and Museum collection
- 4) Bio-informatics and database

◎SOIL SCIENCE

TOMA Yo, Ph. D., Agr., Professor

NAKAHARA Osamu, Dr., Agr., Associate Professor

KURAMOCHI Kanta, Dr., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Biogeochemical nutrient cycling in agro-ecosystems
- 2) Quantitative land evaluation for trade-off relations between crop productivity and environmental capacity
- 3) Greenhouse gas emissions in soil ecosystems

◎SILVICULTURE AND FOREST ECOLOGY

MIYAMOTO Toshizumi, Ph. D., Agr., Lecturer

SAITO Hideyuki, Dr., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Ecology of forest dynamics and its application to silvicultural practice
- 2) Functional genomics and physiological ecology of forest trees for conservation and improvement of ecosystem function
- 3) Taxonomy and ecology of fungi involved in nutrient cycling and disease in the forest ecosystem
- 4) Forest restoration and rehabilitation in degraded lands

◎WOOD CHEMISTRY

URAKI Yasumitsu, Ph. D., Sci., Professor
 SHIGETOMI Kengo, Ph. D., Agr., Lecturer
 SUZUKI Shiori, Ph. D., Eng., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Elucidation of biosynthesis and biodegradation pathways of woody components
- 2) Biorefinery of woody biomass
- 3) Functionalization of Lignin
- 4) Isolation and functionalization of bioactive wood extractives

◎ECOSYSTEM MANAGEMENT

NAKAMURA Futoshi, Ph. D., Agr., Professor
 MORIMOTO Junko, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Assessing the effects of natural and human disturbances on biodiversity
- 2) Investigation on land abandonment and following recovery of ecosystems
- 3) Evaluation of biodiversity and ecosystem services at regional scale
- 4) Restoration of stream, wetland and forest ecosystems

◎EARTH SURFACE PROCESSES AND LAND MANAGEMENT

YAMADA Takashi, Dr., Agr., Professor
 KASAI Mio, Ph. D., Environmental Sciences, Associate Professor
 KATSURA Shin'ya, Ph. D., Agr., Assistant Professor

Current research activities:

- 1) Landslide susceptibility
- 2) Hillslope hydrology
- 3) Geomorphic connectivity and catchment-scale sediment delivery
- 4) Disaster mitigation against debris flows, volcanic mud flows and pyroclastic flows
- 5) Self-defense technology in the areas prone to landslide disasters

◎FOREST POLICY

KAKIZAWA Hiroaki, Dr., Agr., Professor ※
 SHOJI Yasushi, Dr., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Collaborative forest governance
- 2) Comparative study of institutional framework of forest policy
- 3) Valuing environmental goods and services derived from the forests

◎LAND AND WATER MANAGEMENT

YAMAMOTO Tadao, Dr., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Utilisation, management, and conservation of rural resources
- 2) Detection and evaluation of agricultural activity by using remote sensing technique
- 3) Assessment of catchment land use and water environment
- 4) Operation and management of irrigation and drainage facilities
- 5) Peatland management and conservation

◎ECOLOGICAL AND ENVIRONMENTAL PHYSICS

HIRANO Takashi, Ph. D., Agr., Professor

SAMESHIMA Ryoji, Dr., Agr., Professor

OKADA Keiji, Dr., Agr., Lecturer

YAMADA Hiroyuki, Ph. D., Agr., Lecturer

Current research activities:

- 1) Heat, water and mass transfer and their balances in various land surfaces and terrains
- 2) Response of crop growth and yield to meteorological condition
- 3) Evaluation and utilization of climatic resources on agriculture for cold region
- 4) Monitoring and assessment of terrestrial ecosystem functions and disturbance effects on the functions
- 5) Ecological and hydrological assessment for wetland conservation

◎SOIL CONSERVATION

ISHIGURO Munehide, Ph. D., Agr., Professor ※

Current research activities:

- 1) Solute transport and adsorption in soils; nutrients and contaminants such as surfactants, phosphate, ions etc.
- 2) Influence of soil electric phenomena on soil structures and environment
- 3) Influence of inter-tillage weeding on nutrient dynamics in paddy field without fertilizer and agricultural chemicals

◎FOREST BIORESOURCE TECHNOLOGY

TAMAI Yutaka, Dr., Agr., Professor

KODA Keiichi, Ph. D., Agr., Associate Professor

Current research activities:

- 1) Development of novel materials/useful substances from unused agroforest biomass resources
- 2) Clarification of the significance of the occurrence of lignin in higher plants
- 3) Cultivation, breeding, and molecular phylogenetic analysis of basidiomycetes
- 4) Elucidation of symbiotic mechanism between forest plants and fungi for restoration of forest vegetation
- 5) Clarification of ecological characteristics of forest microorganisms for exploration of their function

Those with ※ will be resigned (retired) as of March 31, 2023.

APPLICATION FORM FOR THE GLOBAL EDUCATION
PROGRAM FOR AGRISCIENCE FRONTIERS,
GRADUATE SCHOOL OF AGRICULTURE,
HOKKAIDO UNIVERSITY
北海道大学大学院農学院
先進農学フロンティア特別コース入学申請書
Academic Year 2023
2023 年度
Doctoral Course (博士後期課程)

Paste your photograph
taken within the past 6
months. Write your name
and nationality in block
letters on the back of the
photo.

(photo 4.5×3.5cm)

INSTRUCTIONS (記入上の注意)

- A. Application should be typewritten or written in Roman block letters.
(記入は楷書又はローマ字活字体を用いること)
- B. Numbers should be in Arabic figures. (数字は算用数字を用いること)
- C. Year should be written in the Anno Domini system. (年号はすべて西暦とすること)
- D. Proper nouns should be written in full, and not abbreviated. (固有名詞はすべて正式な名称とし、一切省略しないこと)
- E. Application should be printed on both sides. (両面印刷とすること)

Financial support (Check one box) 経費支弁者 (いずれかをチェックすること)

- ▼Monbukagakusho scholarship 国費・国費定員枠外 ▼Personal Funds 私費
- Special program recommendation 国費 (特別コース枠) Supported by myself/ my family 自費
- Embassy recommendation 国費定員枠外 (大使館推薦) Sponsored by my home government 政府奨学金
- Others 国費定員枠外 (一般枠・国内採用等) Other funds その他奨学金
- *Please state the name of scholarship/ sponsorship. (Personal Funds only) 奨学金団体名を記入すること。

1. Name in full ; in native language (姓名 (本国語)) (Sex)
- _____, _____, _____
(Family name) (First name) (Middle name) Male (男)
- In Roman block capitals (ローマ大文字活字体) Female (女)
- _____, _____, _____
(Family name) (First name) (Middle name) Single (未婚)
- Married (既婚)

2. Nationality (国籍) _____

3. Date of birth (生年月日)
- | | | | | |
|----------|-----------|---------|------|-----------------------|
| 19 | | | Age | (As of April 1, 2023) |
| Year (年) | Month (月) | Day (日) | (年齢) | (2023年4月1日現在) |

4. Present status (name of the university attended, or the employer)
(現職 (在学大学名又は勤務先名まで記入すること。))

5. Present address, telephone number, facsimile number and E-mail address.

(現住所及び電話番号、ファックス番号または電子メールアドレス)

現住所 (Present Address): _____

電話番号/FAX 番号 (Telephone/Facsimile number): _____

E-mail address: _____

6. Proposed study plan in Japan; State, in more than 600 words, the background of your study and study plan. This item will be used as one of the most important references for selection. Statement must be typewritten in block letters. Additional sheets of paper may be attached, when necessary.

日本での研究計画（この研究計画は、選考の重要な参考となるので、研究の背景、研究計画を 600 語以上で詳細に記入すること。記入は、タイプ又は楷書によるものとし、必要な場合は別紙を追加してもよい。）

i) Background of your study（研究の背景）

ii) Study plan in Japan in detail（研究計画; 詳細に記入すること。）

iii) Name of the desired supervisor（指導を希望する主指導教員名を必ず記入すること。）

7. Educational background: (学歴)

	Name and address of school (学校名及び所在地)	Year and month of entrance and completion (入学及び卒業年月)	Period of schooling you have attended (修業年数)	Diploma or Degree awarded, major subject (学位・資格, 専攻科目)
Elementary Education (初等教育) Elementary School (小学校)	Name (学校名) Location (所在地)	From (入学) to (卒業)	y(年) m(月) y(年) m(月)	yrs (年) mons (月)
Secondary Education (中等教育) Lower Secondary School (中学)	Name (学校名) Location (所在地)	From (入学) to (卒業)	y(年) m(月) y(年) m(月)	yrs (年) mons (月)
Secondary Education (中等教育) Upper Secondary School (高校)	Name (学校名) Location (所在地)	From (入学) to (卒業)	y(年) m(月) y(年) m(月)	yrs (年) mons (月) *
Higher Education (高等教育) Undergraduate Level (大学)	Name (学校名) Location (所在地)	From (入学) to (卒業)	y(年) m(月) y(年) m(月)	yrs (年) mons (月)
Graduate Level (大学院)	Name (学校名) Location (所在地)	From (入学) to (卒業)	y(年) m(月) y(年) m(月)	yrs (年) mons (月)
Total of the years of schooling mentioned above (以上を通算した全学校教育修学年数)				yrs (年) mons (月)
I agree to handle personal data in countries outside EEA. (私は EEA 域外の国で個人情報を取り扱うことに同意します。)				<input type="checkbox"/>

Note: In the case that the applicant has passed the qualifying examination for admission to a university, indicate so in the blank marked*. (「大学入学資格試験」に合格している場合には、その旨*欄に記入すること。)

If the blank spaces above are not sufficient for information required, please attach a separate sheet.
(上欄に書ききれない場合には、適当な別紙に記入して添付すること。)

8. Employment record; Begin with the most recent employment, if applicable. (職歴)

Name and address of organization (勤務先及び所在地)	Period of employment (勤務期間)	Position (役職名)	Type of work (職務内容)
	From To		
	From To		
	From To		

9. Person to be notified in applicant's home country, in case of emergency:

(緊急の際の母国の連絡先)

i) Name in full:

(氏名)

ii) Address; with telephone number, facsimile number or E-mail address:

(住所：電話番号及びファクシミリ番号又は電子メールアドレス)

現住所(Present Address):

電話番号/FAX 番号 (Telephone/Facsimile number):

E-mail address:

iii) Occupation:

(職業)

iv) Relationship:

(本人との関係)

10. Pledge (Read the following sentences well. If you agree with it, sign below.)

誓約 (以下を良く読み、承諾する場合は署名)

Here I apply for the Global Education Program for AgriScience Frontiers, Graduate School of Agriculture, Hokkaido University with required documents. I will never cancel the application after this moment.

(私はここに必要な書類と共に北海道大学大学院農学院先進農学フロンティア特別コースに申請致します。今後この申請の取り消しはいたしません。)

Date of application:

(申請年月日)

Applicant's signature:

(申請者署名)

Applicant's name in

Roman block capitals:

(申請者氏名)

健康診断書 (医師に記入してもらってください)
 CERTIFICATE OF HEALTH (this page to be completed by examining physician)

日本語又は英語により明瞭に記載すること。

Please fill out (PRINT/TYPE) in Japanese or English.

氏名 男 Male 生年月日 年齢
 Name: _____ 女 Female Date of Birth: Age:
 Family name, First name, Middle Name

1. 身体検査
 Physical Examinations

(1) 身長 体重
 Height _____ cm Weight _____ kg

(2) 血圧 _____ ~ _____ 脈拍数 _____ /分 整 regular
 Blood pressure Pulse rate /min 不整 irregular

(3) 視力
 Eyesight: (R) _____ (L) _____ (R) _____ (L) _____
 裸眼 without glasses 矯正 with glasses or contact lenses
 色覚異常の有無
 color blindness (+) (±) (-)

(4) 聴力 正常 normal 言語 正常 normal
 Hearing: 低下 impaired Speech: 異常 impaired

2. 申請者の胸部について、聴診と X 線検査の結果を記入してください。X 線検査の日付も記入すること (6 ヶ月以上前の検査は無効)。

Please describe the results of physical and X - ray examinations of applicant's chest, also note the exact date of X - ray (X - ray taken more than 6 months prior to the certification is NOT valid) .

Lung: 正常 normal Date Cardiomegaly: 正常 normal
 異常 impaired 異常 impaired

 Film No



3. 既往症

Past history: Please indicate with + or - and fill in the date of recovery

Tuberculosis..... (. .) Malaria..... (. .) Other communicable disease..... (. .)
 Epilepsy..... (. .) Renal Disease..... (. .) Cardiac Diseases..... (. .)
 Diabetes..... (. .) Drug Allergy..... (. .) Psychosis..... (. .)
 Functional disorder in extremities..... (. .) Others (Name of Diseases:)..... (. .)

4. 検査

Laboratory tests

検尿 Urinalysis: glucose (), protein (), occult blood ()

赤沈 ESR: ____ mm/Hr, WBC count: ____ cmm, Hemoglobin: ____ gm/dl, GPT: _____

5. 診断医の印象を述べて下さい。

Please describe your impression.

6. 志願者の既往症、診察・検査の結果から判断して、現在の健康の状況は十分に日本での就学に耐えうるものと思われますか？

In view of the applicant's history and the above findings, is it your observation that his/her health status is adequate to pursue studies in Japan ?

yes

no

日付

Date: _____

署名

Signature: _____

医師氏名

Physician's Name in Print: _____

検査施設名

Office/Institution: _____

所在地

Address: _____

はじめに

北海道大学は1876年に札幌農学校として創立された日本で最初の高等農業科学教育研究施設であり、我が国初めての学士授与教育機関である。

本学は12の学部・22の大学院研究科(院)・25の研究所および研究センターなどからなり、4,000名の教職員・11,500名の学部学生及び6,600名の大学院学生から成り立ち、その中には99ヶ国・2,000名の外国人留学生が含まれている。(人数は概数)

北海道大学の全ての学部・研究科において、農学部は140年以上の長い歴史を持つ最古の学部であり、北海道の開拓という目的の為に創設されて以来、農学分野では常に先端を歩む大学であり多くの著名人を輩出した。

今日、北海道大学農学部は日本の国立大学法人*の中で最も権威のある学部の1つであり、入学者のうち北海道以外の出身者が7割以上を占めている。大学院農学研究院もまた同様であり、併せて質の高い教授及び職員が在籍している。西暦2000年には大学院教育に重点を置いた「大学院重点化大学」へと移行し、21世紀に於いて日本の最も優秀な大学の1つとして、最高のレベルを維持しようとしている。

「包括的先進農業フロンティア育成のための国際教育プログラム」(以下、先進農学フロンティア特別コース)は、それまでの「生存基盤科学特別コース」を基盤として、新たに2018年4月に設立された。本プログラムは、地球上の限られた資源の保全と持続的活用によって未来における人類の生存基盤を確立する為に必要な、食物、健康科学、環境に係る教育研究の独創的なプログラムを提供する。

なお、プログラムの性格上、教育・研究に使われる言語は英語であり、我々はこのチャンスをぜひ有効に活用していただきたいと思っている。

2022年9月1日

農学院院长

教授 西 邑 隆 徳

先進農学フロンティア特別コース長

教授 信 濃 卓 郎

*2004年4月1日より日本の国立大学は、全て国立大学法人へと移行した。

募集要項（博士後期課程）

博士後期課程の特徴について

- (1) すべての講義・研究・論文指導は英語で行われるが、在籍中に日本語を習得することが望ましい。
- (2) 課程在籍中に行った研究の成果に基づき学位論文を英語で執筆し、先進農学フロンティア特別コースの学位授与審議委員会の審査及び口頭諮問を受けなければならない。学術的に十分な成果が得られた場合には博士（農学）の学位が授与される。
- (3) 博士後期課程を3年で修了することが求められる。

1. 研究分野と募集人員について

1-1 研究分野

- (1) 先進農学フロンティア特別コースに属する研究室の研究テーマに関連した研究分野（13-21ページ参照）であること。
- (2) 指導予定教員の許可がなければ、出願することができない。出願する前には指導予定教員と、受入れ手続きと研究内容について十分に打ち合わせをしておかなければならない。

1-2 募集人員

若干名の学生が選抜される。先進農学フロンティア特別コースは4名の学生を日本政府（文部科学省）による国費外国人留学生候補者（以下「**国費外国人留学生**」）として推薦する。

これとは別にその他の国費留学生（大使館推薦等）も選抜されることがある。これを国費の定員枠外留学生と呼ぶ。定員枠外とは、上記4名以外の国費枠留学生を表す（以下「**国費定員枠外留学生**」）。

また、数名の他の経済的支援からなる学生（以下「**私費外国人留学生**」）を選抜する。

2. 出願資格

2-1 国籍

「国費外国人留学生」：日本政府が定めた対象国に居住し、日本国以外の国籍を持つ者。

先進農学フロンティア特別コースの修士課程修了予定者も含む。

「国費定員枠外留学生」：それぞれの国費留学生採用枠における条件を満たす者。

「私費外国人留学生」：日本国以外の国籍を持つ者。

2-2 年齢

「国費外国人留学生」：2023年4月1日において35歳未満の者。

（1988年4月2日以降に出生した者）

「国費定員枠外留学生」：それぞれの国費留学生採用枠における条件を満たす者。

「私費外国人留学生」：年齢制限はない。

2-3 学歴

「国費外国人留学生」

- (1) 修士の学位又は専門職学位を有する者及び2023年9月までに授与見込みの者

- (2) 外国の大学において修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2023年9月までに授与見込みの者
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2023年9月までに授与見込みの者
- (4) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2023年9月までに授与見込みの者
- (5) 国際連合大学本部に関する国際連合と日本国との間の協定の実施に伴う特別措置法（昭和51年法律第72号）第1条第2項に規定する1972年12月11日の国際連合総会決議に基づき設立された国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び2023年9月までに授与見込みの者
- (6) 外国の学校、(5)の指定を受けた教育施設又は国際連合大学の教育課程を履修し、大学院設置基準第16条の2に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者及び2023年9月までに認められる見込みの者（以下「外国の大学において基礎力審査に相当するものに合格した者」という。）
- (7) 文部科学大臣の指定した者（平成元年文部省告示第118号）
 - ① 大学を卒業し、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学院において当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
 - ② 外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学院において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
- (8) 本学院において、個別の出願資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、2023年9月30日までに24歳に達する者*

*高等専門学校・短期大学の卒業生、専修学校・各種学校の卒業生、外国大学日本分校・外国人学校の卒業生など大学卒業資格を有していない者

「国費定員枠外留学生」および「私費外国人留学生」

4月入学者

- (1) 修士の学位又は専門職学位を有する者及び2023年3月までに授与見込みの者
- (2) 外国の大学において修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2023年3月までに授与見込みの者
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2023年3月までに授与

見込みの者

- (4) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び2023年3月までに授与見込みの者
- (5) 国際連合大学本部に関する国際連合と日本国との間の協定の実施に伴う特別措置法（昭和51年法律第72号）第1条第2項に規定する1972年12月11日の国際連合総会決議に基づき設立された国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び2023年3月までに授与見込みの者
- (6) 外国の学校、(5)の指定を受けた教育施設又は国際連合大学の教育課程を履修し、大学院設置基準第16条の2に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者及び2023年3月までに認められる見込みの者（以下「外国の大学において基礎力審査に相当するものに合格した者」という。）
- (7) 文部科学大臣の指定した者（平成元年文部省告示第118号）
 - ① 大学を卒業し、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学院において当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
 - ② 外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学院において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
- (8) 本学院において、個別の出願資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、2023年3月31日までに24歳に達する者*
 - *高等専門学校・短期大学の卒業者、専修学校・各種学校の卒業者、外国大学日本分校・外国人学校の卒業者など大学卒業資格を有していない者

10月入学者

4月入学者と同じであるが、2023年3月31日を2023年9月30日に読み替える。

- 2-4 成績：社会人は最終学歴の学業成績、在学生は現在在籍する課程の学業成績係数（3点満点）が2.30以上の者を対象とする。詳細は指導予定教員の指示に従うこと。
- 2-5 健康状態：医師によって心身共に健康であると証明された者。
- 2-6 語学能力：英語が堪能である者。英語の能力を有する者として、以下のいずれかの条件を満たす者。
 - (1) 募集開始から2年以内に取得した英語におけるヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のB2相当以上の資格・検定試験のスコアを有している者。
 - (2) 日本の大学院修士課程又は博士後期課程への入学資格を満たす教育課程を、英語を主要言語として修了した者。

2-7 注意事項

- (1) 現役軍人または軍属の資格の者は出願することができない。
- (2) 出願資格(6)(7)(8)によって出願する者は、別途必要な書類があるので少なくとも出願提出期限の3ヶ月前までに問い合わせること。

2-8 問合せ先

本プログラムに関する質問等は、農学・食資源学事務部農学院教務担当まで E-mail (kyomu@agr.hokudai.ac.jp) で連絡のこと。なお E-mail には希望する研究分野と指導予定教員名を含めること。

3. 個人情報の取扱いについて

- ・本学では、出願書類に記載されている氏名、住所その他の個人情報は、入学者選抜及び合格発表並びに入学手続きを行うために利用する。また、同個人情報は、合格者のみ入学後の教務関係(学籍、修学指導等)、学生支援関係(健康管理、奨学金申請等)、授業料等に関する業務を行うために利用する。
- ・個人情報のうち、氏名、住所に限って、北大フロンティア基金及び本学関連団体である北海道大学体育会からの連絡を行うために利用する場合がある。

4. 国費外国人留学生の出願について

4-1 出願に係る注意事項

- (1) 事前に指導予定教員と連絡を取り、打ち合わせを行わなければならない。事前打ち合わせが無い出願は受け付けない。
- (2) 以下に表記している出願書類の原本を、2022年12月31日までに指導予定教員宛に提出しなければならない。(これらの出願書類は出願期間内に必着であること)。
- (3) 出願後の辞退は一切受け付けない。
- (4) 出願方法については32ページに図示している。
- (5) 他の奨学金を受給している者は国費留学生として採用されない。
- (6) 出願時提出された書類に虚偽が発見された場合には、奨学金の支給は停止され合格が取り消される。
- (7) 対象外

次に掲げる事項に一つでも該当する者については対象外とする。採用以降に判明した場合には辞退すること。

- ① 渡日時及び奨学金支給期間において、現役軍人又は軍属の資格の者。
- ② 文部科学省又は受入大学の指定する期日までに渡日できない者。
- ③ 過去に日本政府(文部科学省)奨学金留学生であった者(渡日後辞退者を含む)。ただし研究留学生については、奨学金支給最終月の翌月から奨学金支給開始月までに3年以上の学業又は職務経歴がある者、又は最後に受給した日本政府(文部科学省)奨学金が日本語・日本文化研修留学生(帰国後に在籍大学を卒業した又は卒業見込みの者に限る。)、日韓共同理工系学部留学生、ヤング・リーダーズ・プログラム留学生のいずれかであった者はこの限りではない。なお、文部科学省学習奨励費(MEXT Honors

Scholarship) は日本政府 (文部科学省) 奨学金留学生にあたらなため、過去に受給歴があっても応募可能。

- ④ 日本政府 (文部科学省) 奨学金制度による他の2023年度奨学金支給開始のプログラムとの重複申請をしている者。
- ⑤ 申請時に既に在留資格「留学」で日本の大学等に在籍している者及び申請時から奨学金支給期間開始前に私費外国人留学生として日本の大学等に在籍、又は在籍予定の者。ただし、現在、日本の大学等に在籍又は在籍予定の私費外国人留学生であっても、奨学金支給期間開始前に修了し帰国することが申請時において確実で、新たに在留資格「留学」を取得し渡日する者はこの限りではない。
- ⑥ 奨学金支給開始後に日本政府 (文部科学省) 以外の機関 (自国政府機関を含む) から奨学金を受給することを予定している者。
- ⑦ 「卒業見込みの者」であって、所定の期日までに学歴の資格及び条件が満たされない者。
- ⑧ 申請時に二重国籍者で、渡日時までに日本国籍を離脱したことを証明できない者。
- ⑨ 申請時から日本以外での研究活動 (インターンシップ、フィールドワーク等) や休学等を長期間予定している者。
- ⑩ 博士課程修了者については、学位取得を目的としない者。

4-2 入学者選抜方法

申請書類及びメールインタビューもしくは面談によって審査される。

4-3 出願書類

以下にあるすべての書類を、航空郵便書留で送付すること。

- (1) 入学願書 (本要項の用紙により、両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付)
※入学申請書の 6. i) 研究の背景, ii) 研究計画は、事前協議に基づいて作成すること。
- (2) 国費外国人留学生 (文部科学省) 申請用紙 (交付の用紙により、両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付)。指導予定教員とその他の教員による計9回以上のメールインタビューが実施される。
- (3) 健康診断書 (過去6ヶ月以内に発行されたもの。本要項交付の用紙によること)
- (4) 卒業証書および修士学位記のコピー、もしくは卒業および修了証明書 (修士課程を修了見込みの者は修了期日が明記された修了見込証明書)。
- (5) 成績証明書 (学士・修士課程のもの)
※注: 社会人は最終学歴の学業成績、在学学生は現在在籍する課程の学業成績係数 (3点満点) が2.30以上の者を対象とする。成績証明書には、単位取得時期 (少なくとも年/学期) が明記されていること。
- (6) GPAやA/B/Cなどの記載がされており、最終出身大学において優秀であることを証明する書類。
- (7) 英語能力証明書
「2-6 語学能力」のいずれかの要件を満たす根拠となる書類 (例: TOEFL, IELTS等の証明書)
- (8) 市民権を証明する書類 (母国の住民であることを証明できるもの)。パスポートのコピーが

望ましい。

- (9) 推薦書：1通（最終出身学校の学部等の長から北海道大学総長寶金清博教授宛て）
- (10) 卒業論文および修士論文の要旨（A4またはレターサイズ判，各1枚）
- (11) 検定料 免除する。

その他

- (1) 書類は，可能な限り文書作成ソフト等を用いて，全てA4またはレターサイズ判両面印刷に統一して作成すること。
- (2) 書類に不備がある場合もしくは不正であると判明した場合は一切受け付けない。出願期間を超過し願書等が到着した場合も受け付けない。
- (3) 提出された書類は返還しない。
- (4) 見込証明書を提出している者は，正式な修了証明書等が発行され次第提出すること。

4-4 合格者発表

審査に合格した者は，先進農学フロンティア特別コース教授会にて合格判定後，入学候補者として承認される。最終的には，北海道大学大学院農学院教授会によって合格者が決定される。国費奨学金支給決定については，2023年8月上旬頃に文部科学省からの奨学金支給決定と試験結果が通知され，合格者は本学院学生として入学が許可される。

4-5 国費外国人留学生に係る補足説明

(1) 渡日時期

採用された者は9月末までに渡日すること。

(2) 入学料及び授業料

入学料及び授業料は免除される。

(3) 奨学金

標準修業年限を超える奨学金の延長は認められない。大学を長期に亘り不在とした場合，または，学業の進捗状況が悪い場合，奨学金は支給されない。

(4) 渡日旅費

文部科学省は採用決定者の国籍国の居住地に最も近い国際空港から，日本国内で最初に到着する国際空港までのエコノミークラス航空券を支給する。（注意：採用決定者は自国内での空港までの旅費，日本国内の旅費，空港税，旅行傷害保険料等を負担しなければならない。）

(5) 学生教育災害傷害保険

研究を開始する前に学生教育研究災害傷害保険に加入しなければならない。保険料は3年間で3,620円である（変更となる場合もある）。

5. 研究生（国費定員枠外留学生（大使館推薦等））からの出願について

5-1 出願書類

以下にあるすべての書類を，農学・食資源学事務部農学院教務担当窓口まで提出すること。書類は，可能な限り文書作成ソフト等を用いて全てA4またはレターサイズ判両面印刷に統一して作成すること。

- (1) 入学願書（本要項の用紙により，両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付）

※入学申請書の 6. i) 研究の背景, ii) 研究計画は, 事前協議に基づいて作成すること。

なお, 3名の教員により計3回以上, 研究のテーマや研究計画について面談が実施される。

(2) 健康診断書(過去6ヶ月以内に発行されたもの。本要項の用紙によること)

(3) 検定料 免除する。

5-2 諸事項

各日程については32ページの第1表を参照すること。入学者選抜方法(4-2), 入学金及び授業料(4-5(2)), 傷害保険(4-5(5))については国費外国人留学生と同じである。

6. 私費外国人留学生の出願について

6-1 出願に係る注意事項

(1) 事前に受入れ予定教員と連絡を取り, 打ち合わせを行わなければならない。事前打ち合わせが無い出願は受け付けない。

(2) 以下に表記している出願書類を, 第1表に示す期日までに受入れ予定教員宛に提出しなければならない。(これらの出願書類は出願期間内に必着であること)。

(3) 出願方法については32ページに図示している。

(4) 出願時に提出された書類に虚偽が発見された場合には合格が取り消される。

6-2 入学者選抜方法

申請書類及びメールインタビューによって審査される。

6-3 出願書類

以下にあるすべての書類を, 航空郵便書留で送付すること。

(1) 入学願書(本要項の用紙により, 両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付)

※入学申請書の 6. i) 研究の背景, ii) 研究計画は, 事前協議に基づいて作成すること。

3名の教員により, 計6回以上のメールインタビューが実施される。直接面談可能な場合はメールインタビューを面談に代えることがある。この場合は, 3名の教員により計3回以上の面談が実施される。

すでに研究生として在籍している場合は, 3名の教員により計3回以上の面談が実施される。

(2) 健康診断書(過去6ヶ月以内に発行されたもの。本要項の用紙によること)

(3) 卒業証書および修士学位記のコピー, もしくは卒業および修了証明書(修士課程を修了見込みの者は修了期日が明記された修了見込証明書)。修士の学位を有しないが博士論文研究基礎力審査に合格した者は, 修士学位記(修了証明書)に代えて当該審査に合格した証明書。

◎中国の大学を卒業, または卒業見込みの者は, 卒業(見込)証明書に加えて, 以下の書類を提出してください。

既 卒 者…a 学歴証書電子登録票(教育部学历证书电子注册备案表)

b 卒業証書(毕业证书)及び学位証書(学位证书)

卒業見込者…a オンライン在籍認証レポート(教育部学籍在线验证报告)

上記のうち, 書類 a は中国教育部認証システム(中国高等教育学历证书查询

<http://www.chsi.com.cn/xlzx/bgys.jsp>) より取得してください。

また、提出時点で Web 認証の有効期限が15日以上残っていることを確認してください。

(4) 成績証明書 (学士・修士課程のもの)

※注：社会人は最終学歴の学業成績，在學生は現在在籍する課程の学業成績係数（3点満点）が2.30以上の者を対象とする。成績証明書には，単位取得時期（少なくとも年/学期）が明記されていること。

(5) 英語能力証明書

「2-6 語学能力」のいずれかの要件を満たす根拠となる書類（例：TOEFL, IELTS等の証明書）

(6) 市民権を証明する書類（母国の住民であることを証明できるもの）パスポートのコピーが望ましい。

(7) 推薦書：1通（最終出身学校の学部等の長から北海道大学総長寶金清博教授宛て）

(8) 卒業論文および修士論文の要旨（A4またはレターサイズ判，各1枚）

(9) 検定料30,000円（支払い方法は指導予定教員と相談すること）

※中国政府派遣留学生，総長奨励金留学生，私費外国人留学生特待プログラム留学生，及び本学大学院修士課程修了見込みの者は，検定料の振込を要しない。

※出願書類を受理した後は，いかなる理由があっても払込済の検定料は返還しない。

その他

(1) 書類は，可能な限り文書作成ソフト等を用いて，全てA4またはレターサイズ判両面印刷に統一して作成すること。

(2) 書類に不備がある場合，もしくは不正であると判明した場合は一切受け付けない。出願期間を経過し願書等が到着した場合も受け付けない。

(3) 提出された書類は返還されない。

(4) 見込証明書を提出している者は，正式な修了証明書等が発行され次第提出すること。

6-4 合格者発表

出願者には第1表に定められた期日に試験結果が通知され，合格者は本学院学生として入学が許可される。

6-5 私費外国人留学生に係る補足説明

(1) 渡日時期

2023年4月もしくは10月のいずれかの入学時期を選択することができる。また，入学時期に伴い出願期間が定められている。応募者は第1表を参照し，入学時期等を考慮して出願すること。

(2) 入学金：282,000円（2022年度実績）

(3) 授業料：267,900円（年間535,800円・2022年度実績）

※入学金及び授業料は改定される場合がある。

※本学大学院修士課程から引き続き博士後期課程に進学する者は入学金の振込を要しない。

※中国政府派遣留学生，総長奨励金留学生及び私費外国人留学生特待プログラム留学生は，入学金及び授業料の振込を要しない。

(4) 学生教育研究災害傷害保険

研究を開始する前に学生教育研究災害傷害保険に加入しなければならない。保険料は3年間で3,620円である(変更となる場合もある)。

7. 本学農学院修士課程から博士後期課程への進学者について

7-1 出願書類

以下にあるすべての書類を、農学・食資源学事務部農学院教務担当窓口まで提出すること。書類は、可能な限り文書作成ソフト等を用いて全てA4またはレターサイズ判両面印刷に統一して作成すること。

(1) 入学願書(本要項の用紙により、両面印刷とすること。所定の欄に写真貼付)

※入学申請書の6.i)研究の背景, ii)研究計画は、事前協議に基づいて作成すること。なお、奨学金支給期間延長申請書の「研究計画又は研究状況」のコピーを提出するものは入学申請書の6. i)研究の背景, ii)研究計画を省略することができる。(私費留学生を除く。)

3名の教員により計3回以上の面談が実施される。

(2) 健康診断書(北海道大学保健センター発行のもの。進学予定者は4月の定期健康診断を必ず受診すること。)

(3) 検定料 免除する。

7-2 諸事項

願書提出期限、合格発表の日程については第1表を参照すること。本項目7は、国費外国人留学生、国費定員枠外留学生(4月あるいは10月入学)、私費外国人留学生(4月あるいは10月入学)を含む。

7-3 本学農学院修士課程から博士後期課程への進学者に係る補足事項

(1) 入学科 免除する。

(2) 授業料:267,900円(年間535,800円・2022年実績)

※国費外国人留学生、国費定員枠外留学生、中国政府派遣留学生、総長奨励金留学生及び私費外国人留学生特待プログラム留学生は、授業料の振込を要しない。

(3) 学生教育研究災害傷害保険

研究を開始する前に学生教育研究災害傷害保険に加入しなければならない。保険料は3年間で3,620円である(変更となる場合もある)。

第1表 国費定員枠外留学生、私費外国人留学生及び内部進学者に係る日程について

	4月入学者	10月入学者
願書提出期限	2022年10月下旬	2023年5月下旬
合格発表	2022年12月初旬	2023年7月中旬
渡日時期	2023年3月下旬	2023年9月下旬

出願の流れ図

出願者は p13-21 に示した指導予定教員と連絡をとる。
教員の連絡先は本コースのウェブサイト参照のこと。

<https://www.agr.hokudai.ac.jp/spgp/lab/>

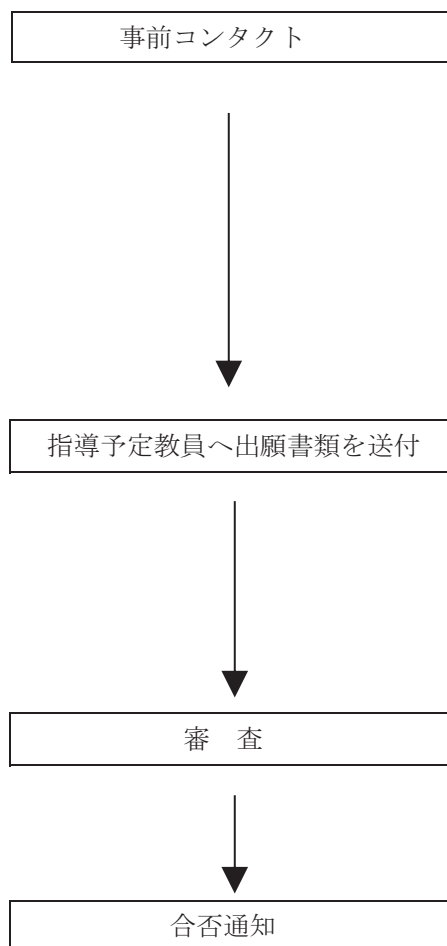
農学研究院の教員の研究分野は以下の農学研究院・農学院
ウェブサイトでも閲覧可能。

<https://www.agr.hokudai.ac.jp/>

指導予定教員に出願書類を郵送する。
指導予定教員の許可がなければ、出願することができない。
出願する前には指導予定教員と、
研究内容について十分に打ち合わせを行うこと。

出願書類及びメールインタビュー
もしくは面談によって審査される。

合否が通知される。



資料4 出願・入学スケジュール

	国費留学生	国費（大使館推薦）・私費留学生	
	10月入学者のみ	4月入学者	10月入学者
受入教員への照会	(候補者選考段階で決定)	10月中旬まで	5月中旬まで
願書提出	12月末	10月末	5月末
書類選考	1月～2月	11月	6月
合否通知	(英語特別コース) 3月	12月初旬	7月中旬
	(文部科学省奨学金) 6～7月		
渡日	9月末	3月末	9月末
入学	10月	4月	10月

※大使館推薦の場合は、渡日後半年の研究生期間を経た後の入学を原則とする。

実行教育課程表 (Curriculum) 2021

修士課程 (Master's Course)

	授業科目 (Subject)	単位 (Credit)	開講期 (Semester)					言語 (Language)		
			I	II	III	IV	1~2年 次通年			
必修科目 (Compulsory Subjects)	人口・食料・環境学総論 Economics and Ecology in Population, Food, and the Environment	1	●					E		
	温暖化影響学総論 Mitigation of Global Warming Effect	1	●					E		
	実践農学総論 Applied Agricultural Science	1	●					E		
	農学フロンティア総論 Advanced Review of Agriculture Frontiers	1	●					E		
	科学研究・科学技術と倫理 Research, Technology and Ethics	1	●					E&J		
	リーダーシップ学総論 Leadership Studies	1	●					E&J		
	農学演習 I Seminar on Agricultural Science I	4					●			
	農学研究 I Study on Agricultural Science I	12					●			
	選択科目 (Elective Subjects)	生産系 (Group of Production Sciences)	植物育種科学特論 Advanced General Plant Breeding	1		●	●			E
			植物育種科学特論演習 Advanced Seminar on Plant Breeding	1		●	●			E
植物分子育種科学特論 Advanced Plant Molecular Breeding			1			●	●			
植物分子育種科学特論演習 Advanced Seminar on Plant Molecular Breeding			1			●	●			
作物生産生物学特論 Advanced Botany and Agronomy			1		●				E	
作物生産生物学特論演習 Advanced Seminar on Botany and Agronomy			1		●				E	
園芸科学特論 Advanced Horticultural Science			1			●				
園芸科学特論演習 Advanced Seminar on Horticultural Science			1			●				
北海道農業生産基盤学特論 Current Advances in Regional Agricultural Bioscience			2		●					
農業環境政策学特論 Advanced Agricultural and Environmental Policy			1		●					
農業経営学特論 Advanced Farm Business Management			1	●						
開発経済学特論 Advanced Agricultural and Rural Development			1		●				E	
協同組学特論 Advanced Cooperative			1		●					
食料農業市場学特論 Advanced Food and Agricultural Marketing			1			●				
食品・循環農業システム工学特論 Advanced Food and Bioproduction Engineering			1	●					E	
スマート農業特論 Advanced Smart Agriculture			1			●			E	
食品加工工学特論 Advanced Food Process Engineering and Technology			1	●						
生物生産工学特論 Advanced Agricultural Production Engineering			1			●				
有機資源循環学特論 Advanced Organic Material Cycles			1		●					
データの計測と処理演習 I Seminar on Measurement and Data Processing I			1			●				
データの計測と処理演習 II Seminar on Measurement and Data Processing II			1				●			

授業科目 (Subject)		単位 (Credit)	開講期(Semester)					言語 (Language)		
			I	II	III	IV	1~2年 次通年			
選択科目 (Elective Subjects)	生命系 (Group of Biosciences)	畜産科学特論 Advanced Animal Science	1	●					E	
		畜産科学特論演習 Advanced Seminar on Animal Science	1	●					E	
		家畜生態学特論 Advanced Livestock Ecology	1			●				
		バイオテクノロジー学特論 Advanced Biotechnology	1			●			E	
		バイオテクノロジー学特論演習 Advanced Seminar on Biotechnology	1			●			E	
		応用分子生物学特論 Advanced Lecture on Applied Molecular Biology	1		●				E	
		応用分子生物学特論演習 Advanced Seminar on Applied Molecular Biology	1		●				E	
		天然物化学特論 Advanced Natural Product Chemistry	1			●				
		生体分子解析学特論 Advanced Analytical Biochemistry	1	●					E	
		食品安全・機能性開発学特論 Advanced Safety and Function of Food	1	●					E	
		食品安全・機能性開発学特論演習 Advanced Seminar on Safety and Function of Food	1	●					E	
		胃腸内圏微生物学特論 Advanced Gastrointestinal Microbiology	1		●				E	
		微生物生態学特論 Advanced Microbial Ecology	1		●				E	
		応用微生物学特論 Advanced Molecular Microbiology	1		●				E	
		食品科学特論 Advanced Review of Food Science	1	●					E	
		食品科学特論演習 Advanced Seminar on Food Science	1	●					E	
		環境系 (Group of Environmental Sciences)	生物生態・体系学特論 I Advanced Ecology and Systematics I	1				●		
			生物生態・体系学特論 II Advanced Ecology and Systematics II	1			●			
			生物生態・体系学特論 III Advanced Ecology and Systematics III	1			●			
			生態進化学特論 Ecology and Evolution	1			●	●		E
	動物生態学特論演習 Advanced Seminar on Animal Ecology		1		●	●				
	昆虫系統進化学特論 Advanced Systematics and Evolutionary Biology of Insects		1		●	●				
	地域環境学特論 I Advanced Regional Environment I		1	●					E	
	地域環境学特論 II Advanced Regional Environment II		1				●		E	
	森林資源科学特論 Advanced Forest Resources Science		1	●						
	森林資源科学特論演習 Advanced Seminar on Forest Resources Science		1	●						
	林産学特論 I Advanced Forest Products Science I		1		●					
	林産学特論演習 I Advanced Seminar on Forest Products I		1		●					
	林産学特論 II Advanced Forest Products Science II		1			●				
	林産学特論演習 II Advanced Seminar on Forest Products II		1			●				
	木質構造学特論 Advanced Timber Engineering	1	●							
	森林緑地管理学特論 Advanced Integrated Landscape Management	1	●							
	森林緑地調査解析学特論 I Advanced Field Research and Data Analysis on Forest-landscape Management I	1			●					
	森林緑地調査解析学特論 II Advanced Field Research and Data Analysis on Forest-landscape Management II	1	●							

	授業科目 (Subject)	単位 (Credit)	開講期(Semester)					言語 (Language)	
			I	II	III	IV	1~2年 次通年		
選択科目 (Elective Subjects)	国際交流系及び臨時開講科目 (Group of International Exchange)	国際農学特論 I Advanced International Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)					E
		国際農学特論 II Advanced International Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)					E
		国際農学研究 I Study on International Agricultural Science I	2	不定期 (Irregular)					E
		国際農学研究 II Study on International Agricultural Science II	2	不定期 (Irregular)					E
		国際農学研究 III Study on International Agricultural Science III	2	不定期 (Irregular)					E
		国際農学研究 IV Study on International Agricultural Science IV	2	不定期 (Irregular)					E
		農学研究特別講義 I Special Lecture on Advanced Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)					
		農学研究特別講義 II Special Lecture on Advanced Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)					
		農学研究特別講義 III Special Lecture on Advanced Agricultural Science III	[3]	不定期 (Irregular)					
		農学研究特別講義 IV Special Lecture on Advanced Agricultural Science IV	[4]	不定期 (Irregular)					
		農学研究特別演習 I Special Seminar on Advanced Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)					
		農学研究特別演習 II Special Seminar on Advanced Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)					
		農学研究特別演習 III Special Seminar on Advanced Agricultural Science III	[3]	不定期 (Irregular)					
		農学研究特別演習 IV Special Seminar on Advanced Agricultural Science IV	[4]	不定期 (Irregular)					

備考 Note :

1. 修士課程修了に要する修得単位は、必修科目を22単位、選択科目から8単位以上修得し、合計30単位以上とする。
A total of at least 30 credits are required to complete a Master's Course (22 credits from Compulsory Subjects).
2. 指導教員が必要と認めるときは、他研究科及び他学院（大学院共通授業科目を含む）からも修得できる。
但し、大学院共通授業科目のうち、農学院専門科目に同一名称の科目がある場合には、農学院専門科目を履修すること。
なお、これらの科目は、選択科目の修了要件単位数に含めることができる。
Students may only acquire credits from other divisions, research faculties or graduate schools (including Inter-Graduate School Classes) in cases in which their supervisors provide permission to do so.
3. 指導教員が必要と認めるときは、本学部、他学部及び専門横断科目（学部科目）からも修得できる。
但し、修了要件として認定する場合は4単位以内とする。
なお、これらの科目は、選択科目の修了要件単位数に含めることができる。
Students may only acquire credits from the School of Agriculture or other faculties (undergraduate) in cases in which their supervisors provide permission to do so. However, only 4 credits will be permitted to complete the requirements (30 credits).
4. 「E」と付記された科目の講義は英語で実施される。
The lecture of the subjects marked with "E" will be given in English.
5. 単位欄中の数字に [] のつけてある授業科目は、複数の講義題目により行われ、それぞれ一の授業科目として履修することができる。

博士後期課程 (Doctoral Course)

授業科目 (Subject)		単位 (Credit)	開講期 (Semester)					言語 (Language)
			I	II	III	IV	1~3年 次通年	
必修科目 (Compulsory Subjects)	農学演習Ⅱ Seminar on Agricultural Science II	2					●	E
	農学研究Ⅱ Study on Agricultural Science II	10					●	E
国際交流系及び臨時開講科目 (Group of International Exchange Subjects)	国際農学特論Ⅰ Advanced International Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)					E
	国際農学特論Ⅱ Advanced International Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)					E
	国際農学特別研究Ⅰ Advanced Study on International Agricultural Science I	2	不定期 (Irregular)					E
	国際農学特別研究Ⅱ Advanced Study on International Agricultural Science II	2	不定期 (Irregular)					E
	国際農学特別研究Ⅲ Advanced Study on International Agricultural Science III	2	不定期 (Irregular)					E
	国際農学特別研究Ⅳ Advanced Study on International Agricultural Science IV	2	不定期 (Irregular)					E
	国際農学特別研究Ⅴ Advanced Study on International Agricultural Science V	2	不定期 (Irregular)					E
	農学研究特別講義Ⅰ Special Lecture on Advanced Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)					
	農学研究特別講義Ⅱ Special Lecture on Advanced Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)					
	農学研究特別講義Ⅲ Special Lecture on Advanced Agricultural Science III	[3]	不定期 (Irregular)					
	農学研究特別講義Ⅳ Special Lecture on Advanced Agricultural Science IV	[4]	不定期 (Irregular)					
	農学研究特別演習Ⅰ Special Seminar on Advanced Agricultural Science I	[1]	不定期 (Irregular)					
	農学研究特別演習Ⅱ Special Seminar on Advanced Agricultural Science II	[2]	不定期 (Irregular)					
	農学研究特別演習Ⅲ Special Seminar on Advanced Agricultural Science III	[3]	不定期 (Irregular)					
	農学研究特別演習Ⅳ Special Seminar on Advanced Agricultural Science IV	[4]	不定期 (Irregular)					

備考 Note :

1. 博士後期課程修了に要する修得単位は、必修科目12単位以上とする。
A total of at least 12 credits are required to complete a Doctoral Course (12 credits from Compulsory Subjects).
2. 「E」と付記された科目の講義は英語で実施される。
The lecture of the subjects marked with "E" will be given in English.
3. 単位欄中の数字に [] のつけてある授業科目は、複数の講義題目により行われ、それぞれ一の授業科目として履修することができる。

資料6 修了者論文題目一覧

修士課程

氏名	国名	専攻	分野	入学	修了	定員枠	修士論文題目
Haji Maidin Nur 'Azimatul Quddsyiah	ブルネイ	応用生物科学	食品栄養学	2016年10月	2018年9月	大使館推薦	Mechanisms underlying reduced plasma GLP-1 concentration by glucose in rats
Aphichat Trakooncharoenvit	タイ	応用生物科学	食品栄養学	2016年10月	2018年9月	国費	Water-soluble dietary fibers enhance bioavailability of quercetin glycosides in rats
Duan Jie	中国	応用生物科学	生態化学	2016年10月	2018年9月	国費	Simple isolation of pure betanin from red beetroots for an effective imine-exchange reaction to obtain several betalamic acid-aldimine derivatives
Pakkang Nutthira	タイ	環境資源学	森林化学	2016年10月	2018年9月	国費	Preparation of electrode for electric double layer capacitor from lignin -Suitable electrode for ionic liquid as an electrolyte-
Udompant Kannapat	タイ	環境資源学	ビークルロボティクス	2016年10月	2018年9月	私費	Development of uncut crop edge detection system for an auto-guided combine
Phyo Han Thwin	ミャンマー	共生基盤学	応用分子微生物学	2016年10月	2018年9月	国費	Identification of parasexual recombination in the field isolates of rice blast fungus using microsatellite markers
Jeeraprapa Siriwasee	タイ	共生基盤学	機能性食品変換学	2016年10月	2018年9月	国費	Characteristics of transglucosylation of salivary glands α -glucosidase from <i>Culex quinquefasciatus</i>
Tong Xin	中国	共生基盤学	昆虫体系学	2016年10月	2018年9月	私費	Study on sex allocation and dimorphism in brood sex composition in a gall-forming aphid, <i>Tetraneura sorini</i>
Wang Yannan	中国	環境資源学	造林学	2016年10月	2018年9月	国費	Ecophysiological study on the effect of elevated O ₃ and salinity stress on the growth and photosynthesis of three larch species
Vera Fitriya Ersalena	インドネシア	応用生物科学	生物有機化学	2017年4月	2019年3月	私費	Isolation and Structural Elucidation of Antioxidant Compounds from Immature Berries of <i>Ampelopsis grandulosa</i> .
Duan Yu	中国	応用生物科学	根圏制御学	2017年4月	2019年3月	私費	Responses of mycoviruses to soil acidity in an arbuscular mycorrhizal fungus <i>Rhizophagus clarus</i>
Li Tingting	中国	応用生物科学	根圏制御学	2017年4月	2019年3月	私費	Exploration of acid-tolerant genes in arbuscular mycorrhizal fungi by comparative transcriptomics
Wijitrappa Ruangaram	タイ	応用生物科学	食品機能化学	2017年10月	2019年9月	国費	Evaluation on anti-obesogenic potential of Thai medicinal plants with in vitro methods
Teranart Udomsopagit	タイ	応用生物科学	食品機能化学	2017年10月	2019年9月	国費	Study on the gut microbiota and host gene expression in mice following microbial transplantation
Suzumura Alyssa Lee	アメリカ	環境資源学	昆虫体系学	2017年10月	2019年9月	大使館推薦	Revision of the beach-dwelling <i>Cercyon</i> Leach (Coleoptera: Hydrophilidae) species of the West Coast of North America
Abea Cambroneró Andres Alejandro	コスタリカ	環境資源学	循環農業システム工学	2017年10月	2019年9月	大使館推薦	Characterization of the levan hydrolysates using compressed hot water fluids
Masimbula Vidanalage Rishni Samindika Masimbula	スリランカ	共生基盤学	生物有機化学	2017年10月	2019年9月	国費	Biological effect of airborne methyl jasmonate upon pathogenic fungi <i>Gibberella fujikuroi</i> and <i>Fusarium commune</i> , and investigation of metabolism of airborne methyl salicylate in plants
Chaoqun Zhang	中国	共生基盤学	作物栄養学	2017年10月	2019年9月	私費	Different nutritional characteristics between ferns and angiosperms
Oraegbunam Chidozie Johnson	ナイジェリア	共生基盤学	植物栄養生態学	2017年10月	2019年9月	国費	Effect of different application methods of biochar on soil respiration and its impact on soil nutrient
Kodithuwakku Arachchilage Heshan Taraka Kodithuwakku	スリランカ	生物資源科学	動物機能栄養学	2017年10月	2019年9月	大使館推薦	Effect of early roughage feeding on growth and hindgut environment of pre-weaned calves
Vanhkham Soluttanavong	ラオス	環境資源学	土壌保全学	2017年10月	2019年9月	国費	Influence of many times inter-tillage weeding on rice growth and nutrient dynamics in paddy field without fertilizer and agricultural chemical: First year result
Li Ailin	中国	環境資源学	土壌保全学	2017年10月	2019年9月	私費	Influence of water flux on anionic surfactant (Sodium dodecylbenzenesulfonate) transport in highly humic soil
Guo Zhen	中国	共生基盤学	微生物生理学	2017年10月	2019年9月	私費	Redirection of metabolic flow for enhanced precursor supply in lysine-producing mutants of <i>Corynebacterium glutamicum</i>

Nang Naunge Ying	ミャンマー	共生基盤学	木材化学	2017年10月	2019年9月	国費	Effect of lignin derivatives on the activity of plant biomass-degrading enzymes prepared from the insect-associated <i>Streptomyces</i> sp. SirexAA-E
Cao Yue	中国	共生基盤学	機能性食品変換学	2017年10月	2019年9月	私費	Analysis of substrate binding mode of <i>Bacillus</i> sp. AAH-31 α -amylase and β - α loop 8 deletion mutant
Bunga Rana	インドネシア	共生基盤学	機能性食品変換学	2017年10月	2019年9月	私費	Substrate specificity of mannose 2-epimerases from <i>Emticicia oligotrophica</i> , <i>Spirosoma linguale</i> , and <i>Sediminispirochaeta smaragdinae</i>
Meilania Nugraheni	インドネシア	環境資源学	土壌学	2018年4月	2020年3月	私費	Effect of disturbances on greenhouse gas emissions of Indonesian and Malaysian peat soils
Chey Vanna	カンボジア	環境資源学	農業土木学	2018年4月	2020年3月	私費	Evaluation of the Balance of Water Supply and Demands in the Sangker River Basin
Zhou Peiyang	中国	環境資源学	土壌保全学	2018年4月	2020年3月	私費	Influence of many times inter-tillage weeding on rice growth and nitrogen dynamics in the paddy field without fertilizers and agricultural chemicals in 2018 and 2019
Lyu Suxing	中国	環境資源学	ビークルロボティクス	2018年4月	2020年3月	私費	Monitor of the change in number of panicles of paddy rice from low altitude UAV imagery
Xie Ruoyun	中国	応用生物科学	基礎環境微生物学	2018年10月	2020年9月	私費	Investigation of molecular mechanisms of rare earth utilization by methane-oxidizing bacteria
Zongfei Li	中国	応用生物科学	応用食品科学	2018年10月	2020年9月	私費	Effects of culture conditions on the production of <i>Monascus</i> secondary metabolites under rice starch submerged fermentation
Song Tianhao	中国	環境資源学	生態環境物理学	2018年10月	2020年9月	私費	Study on impact of climate change on crop yields in high latitudes using empirical orthogonal function: a case study in Heilongjiang Province, China
Su Xin	中国	環境資源学	動物生態学	2018年10月	2020年9月	国費	Effects of mitochondrial introgression and temperature on Dolly Varden (<i>Salvelinus malma</i>)'s growth
Pongsathorn Sukdaont	タイ	環境資源学	土壌学	2018年10月	2020年9月	私費	Evaluation of CH ₄ emission in two paddy field areas, Khonkaen and Ayutthaya, in Thailand.
Zhang Ziyang	中国	共生基盤学	微生物生理学	2018年10月	2020年9月	私費	Evaluation of preference between cholic acid and 7-oxo-deoxycholic acid as a substrate for deoxycholic acid production by <i>Clostridium scindens</i> G10
Kitpanuwat Tanatakereree	タイ	環境フロンティア	生態環境物理学	2019年10月	2021年9月	国費	Solar-Induced Chlorophyll Fluorescence and Its Link to Ecosystem-Level Photosynthesis Measured by Ground-Based High-Resolution Spectroscopy in Wetland
Li Jing	中国	環境フロンティア	生態系管理学	2019年10月	2021年9月	私費	The 30 Years' Impact of Windthrow and Post-managements on the Structure of Hemi-boreal Forests: Findings from Remote sensing and Field survey
Li Rubin	中国	環境フロンティア	土壌学	2019年10月	2021年9月	私費	Effect of fertilization management on greenhouse gas emissions in upland field in Tokachi, Hokkaido.
Zhou Zhiduo	中国	環境フロンティア	土壌保全学	2019年10月	2021年9月	私費	Influence of many times inter-tillage weeding on rice growth and nutrient dynamics in the paddy field without fertilizers and agricultural chemicals: From 2018 to 2020
Li Xiaojue	中国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2019年10月	2021年9月	私費	Effects of lipase addition and hydrothermal pretreatment on anaerobic biodegradation of food waste co-digestion with crude glycerol
Myint Zin Mar	ミャンマー	生産フロンティア	植物育種学	2019年10月	2021年9月	国費	Molecular genetic studies on hybrid sterility induced by <i>S2</i> and <i>S13</i> in interspecific crosses between Asian and African rice species
Wang Shasha	中国	生産フロンティア	植物育種学	2019年10月	2021年9月	私費	Genetic study on the behavior of the <i>New Stabiliser</i> gene counteracting Tam3 transposition in <i>Antirrhinum</i>
Sristi Saha	インド	生産フロンティア	ビークルロボティクス	2019年10月	2021年9月	大使館推薦	A vision-based road detection system for the navigation of an autonomous tractor
Chen Siyao	中国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2019年10月	2021年9月	私費	Investigation of initiating temperature for spontaneous self-heating of woody biomass under elevated pressure and physicochemical properties of the produced biochar
Napaporn Chintagavongse	タイ	生命フロンティア	応用食品科学	2019年10月	2021年9月	大使館推薦	Investigation of rancid inducible lipases involved in koji from <i>Aspergillus</i> sp. supplied for cheese flavor enrichment
Putcha Jyothi Priya	インド	生命フロンティア	基礎環境微生物学	2019年10月	2021年9月	大使館推薦	Microbial community analysis of plastic-degrading bacteria

Wen Yuchong	中国	生命フロンティア	生物化学	2019年10月	2021年9月	私費	Functional analysis of amino acid residues involved in the formation of subsite +1 of maltose phosphorylase MalE from <i>Bacillus</i> sp. AHU2001
Anjar Cahyaningtyas	インドネシア	生命フロンティア	根圏制御学	2019年10月	2021年9月	国費	Disturbance-tolerant traits of arbuscular mycorrhizal fungi that inhabit a frequently disturbed ecosystem
Naruphon Makkhaphawee	タイ	生命フロンティア	分子酵素学	2019年10月	2021年9月	国費	Effect of additive on transglucosylation of α -glucosidase
Umezina Kenechi Celestina	ナイジェリア	生命フロンティア	動物機能栄養学	2019年10月	2021年9月	国費	Effect of lablab bean husk supplementation on the expression of glycosyl hydrolase genes in <i>Fibrobacter succinogenes</i> S85
Shin Yunsik	韓国	生産フロンティア	循環農業システム工学	2020年4月	2022年3月	私費	Low-temperature biochars are more effective to reduce ammonia emission during manure composting through different mechanisms
Zhao Shuangshuang	中国	環境フロンティア	土壌学	2020年10月	2022年9月	私費	Effects of inter-tillage weeding on the nutrient cycling of paddy fields without application of chemical fertilizers and pesticides in Hokkaido.
Zhou Shuaiyu	中国	生産フロンティア	植物育種学	2020年10月	2022年9月	私費	Evolutionary elucidation of the origin of BED-zinc finger motif in the Tam3 transposase and prediction of the interacting host factor in <i>Antirrhinum</i>
Nowshin Farjana	バングラデシュ	生命フロンティア	基礎環境微生物学	2020年10月	2022年9月	国費	Impact of pre-treatment in indigo fermentation

博士後期課程

氏名	国名	専攻	分野	入学	修了	定員枠	博士論文題目
Luo Weifeng	中国	共生基盤学	生物有機化学	2014年10月	2018年9月	私費	Proteomic analysis of <i>Physcomitrella patens</i> protonemata treated with 12-oxo-phytodienoic acid
Lucy Lahrita	インドネシア	応用生物科学	食品機能化学	2015年10月	2018年9月	国費	Anti-obesity Study of Indonesian Medicinal Plants: An in vitro Study in Adipocytes
Auiewiryanukul Waraporn	タイ	応用生物科学	生物化学	2015年10月	2018年9月	国費	Structure-function relationship of GH13_31 α -glucosidase from <i>Bacillus</i> sp. AH12216
Albertus Eka Yudistira Sarwono	インドネシア	応用生物科学	木質生命科学	2015年10月	2018年9月	国費	Purine nucleotide biosynthesis pathway as a drug target: Identification of novel IMPDH and GMPR from <i>Trypanosoma congolense</i> , and an inhibitor screening study of <i>Cryptosporidium parvum</i> and human type II IMPDH
Kiew Frankie	マレーシア	環境資源学	生態環境物理学	2015年10月	2018年9月	国費	Effect of forest conversion to oil palm plantations on carbon dioxide balance in tropical peatlands
Wong Guan Xhuan	マレーシア	環境資源学	生態環境物理学	2015年10月	2018年9月	国費	Methane balance of tropical peat ecosystems in Sarawak, Malaysia
Nousheen Parven	バングラデシュ	環境資源学	昆虫体系学	2015年10月	2021年9月	私費	Effects of high temperature stress on aphid growth and reproduction: responses of clones with diverse genetic backgrounds and aphid symbionts to heat stress
Md. Momotaz Ali	バングラデシュ	環境資源学	木材化学	2015年10月	2019年9月	私費	Surface modification of synthetic polymer sheet by direct electrospinning of cellulose acetate Surface modification of synthetic polymer sheet by direct electrospinning of cellulose acetate
Ospina Alarcon Ricardo	コロンビア	環境資源学	ビークルロボティクス	2015年10月	2018年9月	私費	Smart agricultural vehicle by integrating motion model with machine vision data
Talukder Md Abdus Shabur	バングラデシュ	生物資源科学	遺伝繁殖学	2015年10月	2018年9月	私費	Pregnancy specific regulation of lysosomal cathepsins in bovine blood leukocytes
Klahan Patcharapa	タイ	生物資源科学	分子酵素学	2015年10月	2018年9月	国費	Structure and function of dextran-related enzymes from <i>Streptococcus mutans</i>
Muhammad Akhid Syib'li	インドネシア	応用生物科学	応用分子微生物学	2016年4月	2020年3月	私費	Mitochondrial visualization in rice blast fungus and its application to 3D observation, quantification, and distribution analysis
Tachrim Zetryana Puteri	インドネシア	応用生物科学	生態化学	2016年4月	2019年3月	私費	Comprehensive studies of organic synthesis by utilizing chemical features of natural products
菊地 波輝	日本	環境資源学	昆虫体系学	2016年4月	2020年3月		A systematic study of the tribe Platylabini (Hymenoptera: Ichneumonidae: Ichneumoninae) from Japan
Edgar Manuel Cambaza	モザンビーク	共生基盤学	食品加工工学	2016年4月	2019年3月	大使館推薦	The use of color as alternative to size measurements in <i>Fusarium graminearum</i> growth studies and prediction of deoxynivalenol synthesis
Jian Chen	中国	共生基盤学	食品加工工学	2016年4月	2019年3月	政府	Antibacterial activity of D-Tryptophan against food-borne pathogenic bacteria: Application to food processing and investigation of the mechanism
Donggeun Lee	韓国	応用生物科学	食品栄養学	2016年10月	2019年9月	私費	Prevention of fatty liver by dietary intervention via regulation of 12 α -hydroxylated bile acid metabolism: Studies on oligosaccharide and dairy products in rats
Rifa' atunnisa	インドネシア	応用生物科学	根圏制御学	2016年10月	2019年9月	国費	Characterization of arbuscular mycorrhizal fungal communities with respect to soil disturbance in a volcanic ecosystem
Iweka Patricia Nneka	ナイジェリア	環境資源学	食品加工工学	2016年10月	2019年9月	国費	Development of Near-Infrared Spectroscopic Sensing System for Online Real-Time Monitoring of Milk Quality during Milking
Hao Wang	中国	環境資源学	ビークルロボティクス	2016年10月	2019年9月	国費	Development of robot vehicles adaptable to changing ground conditions and their work management system
Yongrae Kim	韓国	環境資源学	流域砂防学	2016年10月	2019年9月(単退) 2020年3月	国費	Study on physical measures against subsequent sediment flow following debris flow deposition in high population density area
Laksana Anugerah Adhi	インドネシア	共生基盤学	生物情報分子解析学	2016年10月	2019年9月(単退) 2020年3月	国費	Cyclic amins from aldehydes and "roofed" mono-N-sulfonyl cis-diamines
Nguyen Thi Thuy Hang	ベトナム	共生基盤学	開発経済学	2016年10月	2019年9月	私費	Linkage between farm and non-farm sectors and its impact on agricultural production: Evidence from Vietnam

Gao Yu	中国	共生基盤学	機能性食品変換学	2016年10月	2019年9月	私費	Functional analysis of maltose phosphorylase MalE from <i>Bacillus</i> sp. AHU2001 and synthesis of oligosaccharides and sugar phosphates with the enzyme
Nguyen Tam Thanh	ベトナム	生物資源科学	植物育種学	2016年10月	2019年9月 (単退) 2019年12月	私費	The genome constitution of rice resources in the Mekong Delta and their association with salinity stress
Tu Zhihao	中国	応用生物科学	基礎環境微生物学	2017年4月	2020年3月	私費	Analysis of the changes in microbiota associated with indigo reduction in natural indigo fermentation
小山 健斗	日本	共生基盤学	食品加工工学	2017年4月	2019年3月		Approaches for a probabilistic evaluation in predictive microbiology: Interpretation of stochastic bacterial inactivation process in a population and single cell level
濱本 亨	日本	共生基盤学	環境生命地球化学	2017年4月	2020年3月		Effect of organic amendment on soil carbon dynamics in agricultural ecosystems
Jianye Li	中国	生物資源科学	遺伝繁殖学	2017年4月	2020年3月	私費	The complex roles of autophagy and lysosome-cathepsin on the oocyte maturation and preimplantation embryo development in cattle
Jukrapong Pinyo	タイ	応用生物科学	食品栄養学	2017年10月	2020年9月	国費	Adaptive changes in postprandial glucagon-like peptide-1 response and its role during the progression of diet-induced obesity and diabetic state in rats
Samia Quaiyum	バングラデシュ	応用生物科学	基礎環境微生物学	2017年10月	2020年9月	私費	Investigation of bacteria that degrade bacterial cells
Nur Wakhid	インドネシア	環境資源学	生態環境物理学	2017年10月	2020年9月	私費	Soil CO ₂ emissions and net primary production in agricultural plantations on tropical peat
Auldry Chaddy Anak Perus Rudut	マレーシア	環境資源学	土壌学	2017年10月	2020年9月	国費	Effects of long-term nitrogen fertilization on soil CO ₂ and N ₂ O fluxes in a tropical peatland.
Nguyen Thanh Tinh	ベトナム	環境資源学	ビークルロボティクス	2017年10月	2020年9月	私費	Development of a smart sprayer system for rice fields in the Vietnamese Mekong Delta
Wang Linping	中国	環境資源学	木材化学	2017年10月	2020年9月	国費	Analysis of solution structure of isolated lignins and their related compounds with size-exclusion chromatography equipped with a multi-angle light scatterin
Prajanket Pradabrat	タイ	共生基盤学	応用分子微生物学	2017年10月	2020年9月	私費	Function of regulatory gene <i>PoLAE2</i> on appressorium formation in rice blast fungus <i>Pyricularia oryzae</i>
Jang Seonghan	韓国	応用生物科学	基礎環境微生物学	2018年4月	2021年3月	私費	Elucidation of molecular bases underpinning insect-bacteria gut symbiosis
田口 陽大	日本	応用生物科学	生物化学	2018年4月	2021年3月		Functions, structures, and applications of enzymes acting on trehalose and its derivatives
Kyeongmin Lee	韓国	共生基盤学	食品加工工学	2018年4月	2021年3月	私費	Survival strategy of foodborne pathogenic bacteria under low water activity environment: Contribution of glass transition phenomenon of bacterial cells
Lin Jin-Feng	台湾	共生基盤学	環境生命地球化学	2018年4月	2021年3月	私費	The microbial dynamics in natural farming rice paddy
Aphichat Trakooncharoenvit	タイ	応用生物科学	食品栄養学	2018年10月	2021年9月	私費	Studies on bioavailability of quercetin by combined feeding of α -glycosyl-isouercitrin and soybean fiber, and the protective role against glucose intolerance in rats
Helena de Fátima Silva Lopes	ポルトガル	応用生物科学	基礎環境微生物学	2018年10月	2021年9月	大使館推薦	Bacterial profile of different indigo fluids and the effect of the addition of <i>Indigofera tinctoria</i> leaf powder on sukumo preparations
Shilei Peng	中国	環境資源学	土壌学	2018年10月	2021年9月	私費	Modelling hydrological processes and ¹³⁷ Cs load responses to climate and land use changes in Hiso River watershed, Fukushima, Japan.
Udompant Kannapat	タイ	環境資源学	ビークルロボティクス	2018年10月	2021年9月	私費	Development of positioning systems for an automatic combine harvester
Pakkang Nutthira	タイ	環境資源学	木材化学	2018年10月	2021年9月	私費	Conversion of isolated lignins to electrode and separator of electric double layer capacitor suitable for ionic liquid electrolyte
Phyo Han Thwin	ミャンマー	共生基盤学	応用分子微生物学	2018年10月	2021年9月	私費	Studies on DNA rearrangements in rice blast fungus
Ballagalle Rajapaksha Mudiyansele Gonigoda Waluwe Dineesha Nipuni Balagalla	スリランカ	共生基盤学	応用分子微生物学	2018年10月	2021年9月	私費	Study on the dynamics and inheritance of mitochondria during conidiation in <i>Pyricularia oryzae</i>
Tong Xin	中国	共生基盤学	昆虫体系学	2018年10月	2021年9月	私費	Evolutionary ecology in gall-forming aphids: extreme polyphenism and biased sex ratios

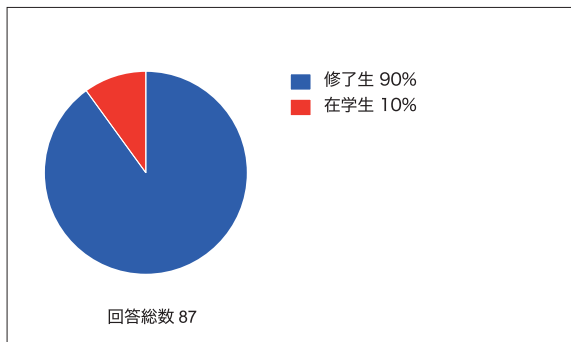
Madegwa Yvonne Musavi	ケニア	共生基盤学	環境生命地球化学	2018年10月	2021年9月	大使館推薦	The use of digestate from animal wastes and its impacts on the soil microbiome and nutrient dynamics in agricultural soils
Kwon Joon	韓国	生物資源科学	植物病原学	2018年10月	2021年9月	私費	Roles of RNA silencing-related genes in tomato tolerance to viral infection
Rui Cui	中国	環境フロンティア	生態環境物理学	2019年4月	2022年3月	私費	Partitioning root respiration into the growth and maintenance components of fine roots in a young larch forest
Aliyu Mohammed	ナイジェリア	生産フロンティア	循環農業システム工学	2019年4月	2022年3月	私費	Production of sustainable solid biofuel from waste and lignocellulosic biomass by hydrothermal carbonization
Mohammed Ibrahim Shaba	ナイジェリア	生産フロンティア	循環農業システム工学	2019年4月	2022年3月	私費	Development of sustainable bioenergy system by integrating hydrothermal carbonization and anaerobic digestion processes
Disanayakage Surakshi Wimangika Rajapaksha	スリランカ	生産フロンティア	循環農業システム工学	2019年4月	2022年3月	私費	Integrated approach for valorisation of polyphenols in spent black tea: extraction, microencapsulation, and development of functional packaging film
Isaiah Song	アメリカ合衆国	生命フロンティア	微生物生理学	2019年4月	2022年3月	大使館推薦	Physiological and genomic characteristics of <i>Eubacterium</i> sp. c-25 and their implications on the diversity of deoxycholic acid producers in the human gut
安部 大樹	日本	生産フロンティア	食品加工工学	2019年4月	2022年3月		Advances in predictive modeling for bacterial behaviors from food processing to human consumption: application to quantitative microbial risk assessment
Zhang Chengming	中国	生産フロンティア	作物栄養学	2019年4月	2022年3月	政府	Genetic basis of ionic variations in rice and its implication for the sulfate transporter gene contributing to the sulfur accumulation
Ho Khoi Thieu	ベトナム	生命フロンティア	遺伝繁殖学	2019年4月	2022年3月	私費	Study on the effect of <i>Asparagus officinalis</i> stem extract on the induction of molecular chaperone and cellular function of bovine granulosa cells
Wijitrappa Ruangaram	タイ	応用生物科学	食品機能化学	2019年10月	2022年9月	私費	Mechanistic analysis of Thai medicinal plants on anti-obesogenic activity
Teranart Udomsopagit	タイ	応用生物科学	食品機能化学	2019年10月	2022年9月	私費	Studies on the role of gut microbiota in the regulation of RegIIIβ and RegIIIγ in murine intestine
Lauretta Andrew Laneng	マレーシア	環境フロンティア	生態系管理学	2019年10月	2022年9月	国費	Wildlife responses to naturally altered and human-modified landscapes in Malaysia and Japan
Furukawa Flavio	ブラジル	環境フロンティア	生態系管理学	2019年10月	2022年9月	私費	Application of remote sensing for characterization of windthrow and landslides at multiple scales in forest landscape
Suzumura Alyssa Lee	アメリカ合衆国	環境資源学	昆虫体系学	2019年10月	2022年9月	大使館推薦	Taxonomic studies on Hydrophilidae and other coleoptera residing in temporally limited heterotrophic systems
Kodithuwakku Arachchilage Heshan Taraka Kodithuwakku	スリランカ	生物資源科学	動物機能栄養学	2019年10月	2022年9月	私費	Study on the effects of early fibrous diet feeding via oral administration on gastrointestinal environment in pre-weaned calves
Chen Zixin	中国	環境フロンティア	昆虫体系学	2019年10月	2022年9月	私費	Comprehensive understanding of the origin and function of the "female penis" in cave insects
Md. Imam Hossain	バングラデシュ	環境フロンティア	土壌保全学	2019年10月	2022年9月	国費	Influence of Dissolved Organic Matter on the analysis of a solution of anionic surfactant, Dodecylbenzenesulfonate
Lyu Yan	中国	環境フロンティア	木材化学	2019年10月	2022年9月	政府	Functions of wood cell wall polysaccharides on lignification in vitro
Oraegbunam Chidozie Johnson	ナイジェリア	生産フロンティア	作物栄養学	2019年10月	2022年9月	私費	Understanding the dynamics of soil microbial communities and gas emissions under different soil amendment
Islam Md Mahmudul	バングラデシュ	生産フロンティア	循環農業システム工学	2019年10月	2022年9月	国費	Synthesis of biochar-based slow-release fertilizer from nutrient-rich organic waste
Masimbula Vidanalage Rishni Samindika Masimbula	スリランカ	生命フロンティア	生物有機化学	2019年10月	2022年9月	私費	Isolation, structure determination, and chemical synthesis of acyl glucoses from <i>Solanum pennellii</i> and investigation of their biological activities
Fan Weihong	中国	生命フロンティア	遺伝繁殖学	2019年10月	2022年9月	私費	Study on the role of <i>zona pellucida</i> in pre- and post-implantation development of mouse embryos
Huang Yan	中国	生命フロンティア	基礎環境微生物学	2019年10月	2022年9月	私費	Novel syntrophy driven by methylotrophic methanogens

資料7 修了者および在學生に対するアンケート調査結果

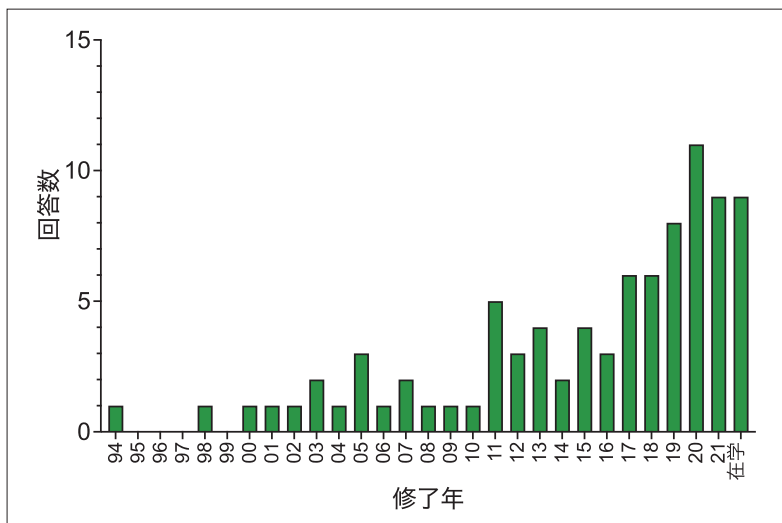
A. あなたの基本情報を教えてください。

1. 氏名（省略）

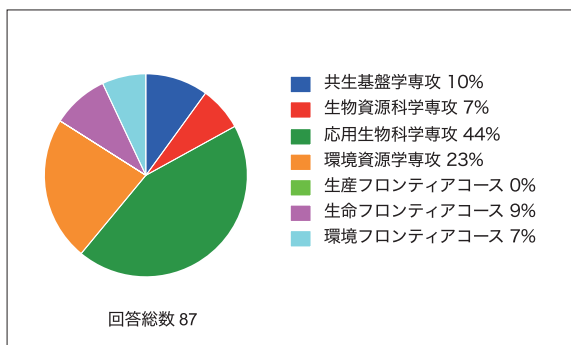
2. 修了生か在學生か



3. 修了年（在學生の場合は入学年）



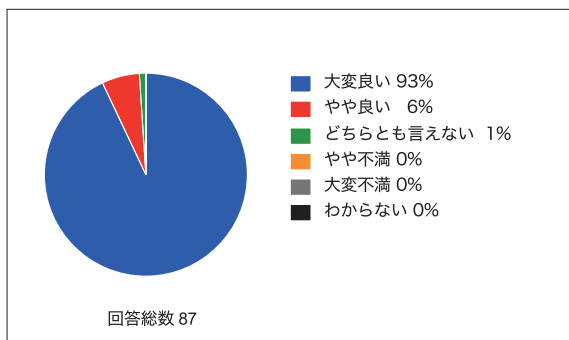
4. 専攻名



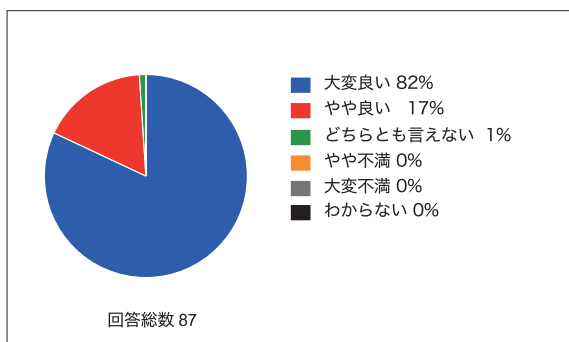
5. 指導教員名（省略）

B. 北海道大学の評価についてお聞かせください。

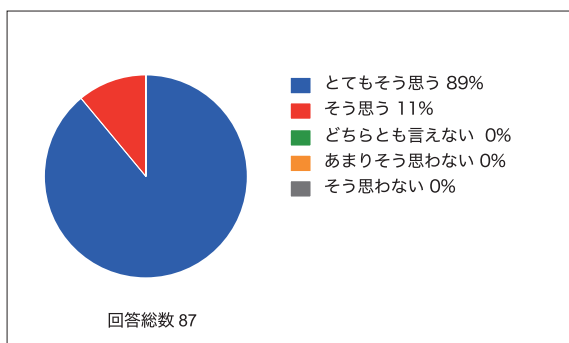
1. 現在の立場から、北海道大学（以下 北大）に対して持っている印象



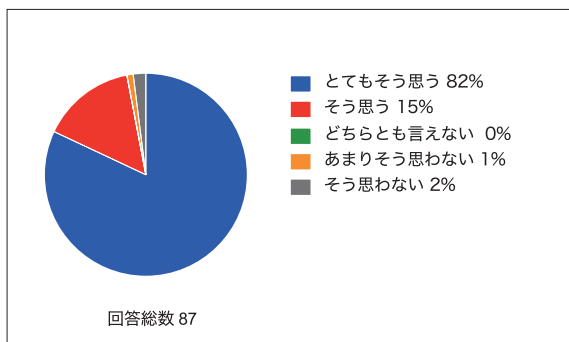
2. 現在の立場から、あなたの専攻に対して持っている印象



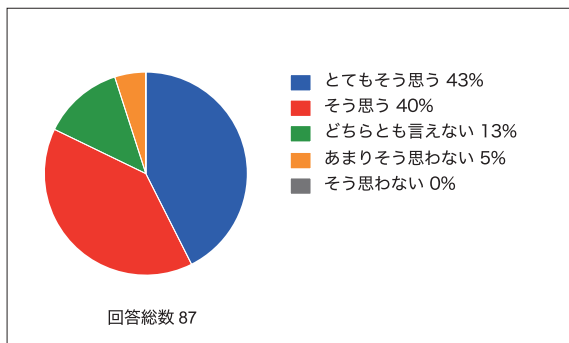
3. 指導教員の研究・論文指導は熱心だった。



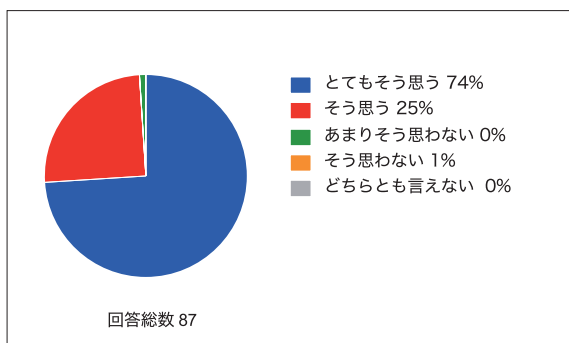
4. 大学生活における指導教員のサポートは十分だった。



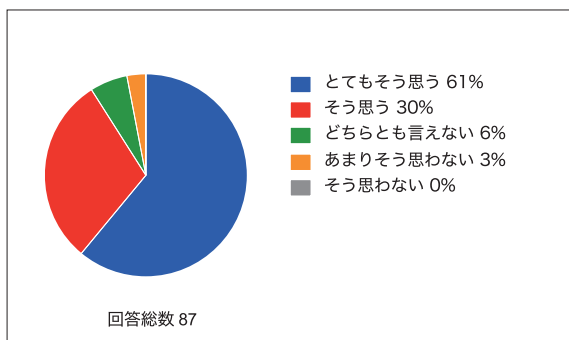
5. 大学院の授業内容は良かった。



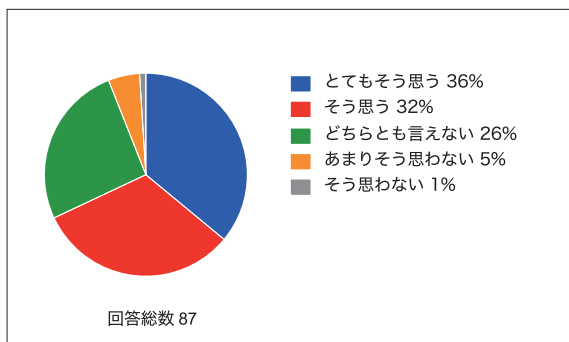
6. 実験・研究設備は良かった。



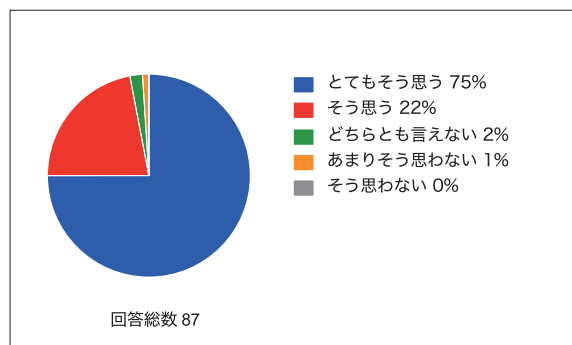
7. 生活面でのサポート（奨学金・宿舎等）は十分だった。



8. 日本語教育は十分だった。



9. 事務職員のサポートは良かった。



10. 入学時に期待していたことは何ですか。

- ・ I expected to publish three papers to compose my final thesis.
最終論文をまとめるために、3本の論文を発表することを想定していた。
- ・ The new experience.
新しい経験。
- ・ Quality education and nurturing study environment.
質の高い教育、充実した学習環境。
- ・ Study more advanced techniques and publish many papers.
より高度な技術を学び、多くの論文を発表する。
- ・ Collaboration after graduation and research funding.
卒業後の共同研究、研究費。
- ・ Good education, research, and sufficient daily life.
良い教育、研究、十分な日常生活。
- ・ Japanese language skills, the network of Lab to Lab, and a higher level of education.
日本語能力、研究室間のネットワーク、より高度な教育。
- ・ Not just learning Nutritional biochemistry, I could learn Japanese culture and language.
栄養生化学を学ぶだけでなく、日本の文化や言語も学ぶことができた。
- ・ The learning process and critical thinking during study M.Sc. to Ph.D. as well as guidance from advisor to achieve the degree.
修士から博士になるまでの学習過程や批判的思考、また学位取得のための指導を受けたこと。
- ・ Research knowledge and expertise.
研究の知識・ノウハウ。
- ・ Experience from experiment and expert.
実験や専門家としての経験。
- ・ 充実した研究生生活を過ごすこと。
- ・ Got a permanent job.
定職に就くこと。
- ・ Learning new skills and knowledge.
新しい技術や知識の習得。
- ・ For studying.
勉強のため。
- ・ Research skills.
研究の技術。
- ・ Sufficient lab life and vivid Japanese-style campus life.
十分な研究生生活と生き生きとした日本的キャンパスライフ。
- ・ The study experience and language learning.
研究体験と語学学習。
- ・ To get the ability to think enough for proceeding study.
研究を進める上で必要な思考力を身につける。
- ・ Expertise and science communication skills.
専門知識と科学的コミュニケーション能力。
- ・ Active information about scholarships and guidance, and great living conditions.
奨学金制度やガイダンスなどの情報提供、充実した生活環境。
- ・ Active research activities.
活発な研究活動。
- ・ Excellent research and international experiences.
優れた研究活動や国際的な経験。
- ・ I expected both a good academic and non-academic environment.
学問および学問以外に優れた環境を期待した。

- ・ To learn experimental skills, write scientific papers, and acquire logical thinking/problem-solving skills.
実験技術の習得, 科学論文の執筆, 論理的思考力・問題解決能力の習得。
- ・ Apprenticeship education.
見習い教育。
- ・ Academic training and international vision.
アカデミックな研修と国際的な視野。
- ・ Full English course for all subjects during the master's degree.
修士課程での全科目を英語で履修できること。
- ・ 1) To gain knowledge and research experience in Food Biochemistry (in vivo lab). 2) To learn and gain experience in academic writing. 3) To gain life experience of living in Japan (make friends, get to know the language, culture, and people).
1) 食品生化学 (in vivo 実験室) の知識と研究経験を得る。2) アカデミックライティングを学び, 経験を積む。3) 日本での生活経験を積む (友達を作る, 言葉, 文化, 人を知る)。
- ・ Gain knowledge and research training in my field of interest.
自分の興味のある分野の知識を得ること, 研究トレーニングを受けること。
- ・ Good facilities and support from advisors and staff.
指導教官やスタッフによる充実した施設とサポート。
- ・ My expectations were to get not only knowledge but also practical knowledge that helped me to be a teacher.
私が期待したのは, 単に知識を得るだけでなく, 教師として役立つ実践的な知識を得ることでした。
- ・ To work hard on something in the research field, make Japanese friends, improve my Japanese, and have a colorful campus life abroad.
研究分野で何かに一生懸命になること, 日本人の友人を作ること, 日本語を上達させること, 海外で多彩なキャンパスライフを送ること。
- ・ To improve insight and level of skill.
洞察力と技術のレベルアップ。
- ・ Learn knowledge and culture in a foreign country.
外国で知識や文化を学ぶ。
- ・ To get theoretical and practical knowledge.
理論的, 実践的な知識を得ること。
- ・ Happy studying and living.
楽しい勉強と生活。
- ・ I can study and learn more and also focus on good research.
もっと勉強したいし, 研究にも力を入れたい。
- ・ I expect to get a new experience and learn more skills here.
新しい経験やスキルの習得を期待した。
- ・ Good education and new methods of work.
良い教育, 新しい研究の方法。
- ・ I expected to be able to better understand my soil scientific field and know the culture of Japanese life.
自分の専門分野である土壌学についてより深く理解でき, 日本の生活文化も知ることができると期待した。
- ・ Networking and exposure to different cultures.
人脈作りや異文化に触れること。
- ・ Experience from research.
研究での経験。
- ・ Learning and collaborating in advanced research, getting more experience in research, life, and culture.
研究, 生活, 文化においてより多くの経験を得ること。
- ・ Acquire knowledge, learn techniques, and develop skills in my field.
自分の専門分野での知識の習得, 技術の習得, スキルの開発。
- ・ I wanted to conduct my research using cutting-edge technology under the supervision of the experienced supervisor.
経験豊富な指導教官のもとで, 最先端の技術を使って研究を行いたかった。
- ・ Enhance my research skill.
自分の研究能力を高める。
- ・ Learn how to do research and enjoy daily life.
研究の進め方を学び, 日常生活を楽しむこと。
- ・ Having advanced knowledge and skills in Microbiology.
微生物学に関する高度な知識・技術を身につけること。
- ・ I would like to gain a deeper understanding of academic knowledge.
学問的な知識をより深く理解したい。
- ・ To experience the Japanese academic community and learn how to be a researcher.
日本のアカデミックコミュニティを体験し, 研究者としてのあり方を学ぶこと。
- ・ Having a good collaboration work with Hokkaido University after I graduate and working again in Indonesia.
卒業後, 北海道大学との共同研究, そしてインドネシアでの再就職を考えている。
- ・ World class university.
世界トップクラスの大学。

- ・ Learning advanced studies at a good research facility.
良い研究施設で高度な研究をすること。
- ・ Get a Ph.D. degree within 3 years.
3年以内に博士号を取得すること。
- ・ To improve my research and scientific skills, especially climate change issues.
特に気候変動問題についての研究および科学的スキルの向上。
- ・ Some Social Activities at the University level for foreign students.
大学での留学生のための社会活動。
- ・ New insight into the plant protection field.
植物保護分野における新たな洞察。
- ・ I expected to learn new skills for working and enjoying life.
仕事と人生を楽しむための新しいスキルを学ぶことを期待した。
- ・ I expect to learn new things and change my approach into a systematic one like how my advisor approaches the problems.
新しいことを学び、指導教官の問題への取り組み方のように、私のアプローチを体系的なものに変えることを期待した。
- ・ I would like to be a professional researcher after I finish and obtain my Ph.D. degree.
博士号を取得した後は、プロの研究者になりたいと考えている。
- ・ Excellence experience in lab work and a broad network.
研究の優れた経験と幅広いネットワーク。
- ・ Advice for research projects and curriculum.
研究プロジェクトやカリキュラムに関するアドバイス。
- ・ Best infrastructure facilities like lab and instruments.
研究室や機器などのインフラ設備が充実していること。
- ・ Friendly work environment, international standard curriculum, dedicated team and lab, advanced equipment, scholastic & cooperative supervisor.
フレンドリーな職場環境、国際的な標準カリキュラム、献身的なチームと研究室、先進的な設備、学問的かつ協力的な指導者。
- ・ I expected to learn about probiotic bacteria and start my career as a researcher in Microbiology.
プロバイオティクス細菌について学び、微生物学の研究者としてキャリアをスタートさせることを期待した。
- ・ Good Research topic, good supervisor, sufficient scholarship.
良い研究テーマ、良い指導者、十分な奨学金。
- ・ New science and technology, and new research directions. Frontier research methods and means.
新しい科学技術、新しい研究の方向性。先端的な研究方法と手段。
- ・ To learn professional knowledge systematically and to broaden my horizon.
専門的な知識を体系的に学び、視野を広げること。
- ・ I expected to master the thinking, technique, and writing skills to do scientific research and to gain knowledge of the Japanese social environment.
科学的な研究を行うための思考力、技術力、文章力を身につけ、日本の社会環境についての知識を得ることを期待した。
- ・ I expected to learn more in my academic pursuit, acquire more experimental skills, and meet and interact with more people.
学問を追求し、より多くの実験技術を身につけ、より多くの人と出会い、交流することを期待した。
- ・ Advanced research, advanced education, broadened horizons.
高度な研究、高度な教育、視野の拡大。
- ・ Learn more about research and Japanese culture.
研究や日本文化についてもっと学ぶこと。

11. その期待はかなえられましたか？

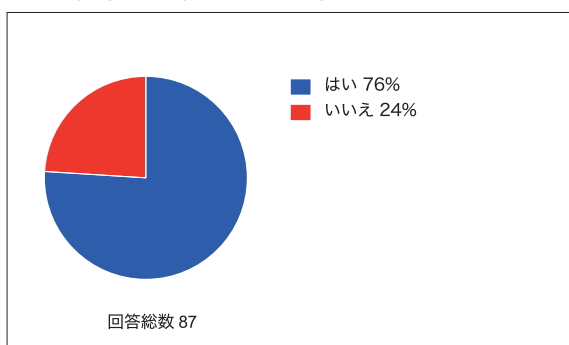
- ・ Yes.
はい。
- ・ Sure, more than expected.
はい、予想以上のことが得られました。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Not yet but smoothly in progress.
まだだが、スムーズに進行している。
- ・ No, they weren't.
いいえ、そうではありませんでした。
- ・ Yes, but not for all.
はい、しかし、すべてではありません。
- ・ Almost.
ほとんどのことが得られました。
- ・ Definitely!
間違いなく！

- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Achieved.
達成した。
- ・ 希望通りに、先生の指導によって研究を充実しました。その上に学校でさまざまな体験も行いました。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Partially.
部分的に。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Now still on the way.
現在進行中。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Partially achieved.
一部達成。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Fairly, a few of the lectures still used non-English during class.
かなり達成したが、いくつかの講義では英語が使われていない。
- ・ Yes, the lab facilities and members are very good. The advisor and professors were very helpful and experts in the field. The tutor was assigned to give guidance and support during the study. All lab members were very helpful and friendly. I got to learn so many things about animal experiments, and I still use such knowledge in my current work. I am currently a lecturer at the Institute of Nutrition, Mahidol University. I teach classes related to animal experiments, and I also perform animal experiments. See more detail in my CV link below. I am also a member of the Institutional Animal Care and Use Committee (IACUC) at my workplace. I used my experience and knowledge gained from my Master's and Doctor studies at Hokkaido University too.
研究室の設備やメンバーはとても良い。研究室の設備やメンバーがとても良い。チューターが付き、勉強の指導やサポートをしてくれた。研究室のメンバーは皆、とても親切でフレンドリーでした。動物実験について多くのことを学ぶことができ、その知識は現在の仕事にも生かされています。私は現在、マヒドン大学栄養学研究所の講師を務めています。動物実験に関連する授業を担当し、動物実験も行っています。詳しくは下記の履歴書をご覧ください。また、職場の Institutional Animal Care and Use Committee (IACUC) のメンバーでもあります。北海道大学での修士・博士課程で得た経験や知識も活かしています。
https://inmu2.mahidol.ac.th/th/wp-content/uploads/2022/07/CV_Yuraporn_31072022.pdf
- ・ About 80%.
約 80%。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Mostly.
ほとんど達成した。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。

- ・ Yes
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes, they did.
はい。
- ・ Of course.
もちろん。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes, they were achieved.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes, in some part.
はい, 部分的に。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Not so much. However, it is because so many unpredictable things happened beyond Hokkaido University and my capability to fix or change it.
あまりない。しかし, それは多くの予測不可能なことが起こり, 北海道大学や私の能力では修正・変更できないからです。
- ・ Some.
部分的に。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Generally yes.
概ねそうである。
- ・ Only at the Laboratory.
研究室でのみ達成。
- ・ Yes.
はい。
- ・ I achieved more than I expected, which made me prouder of myself.
予想以上の成果を上げることができたので, 自分自身に誇りを持つことができた。
- ・ Yes, more than I ever expected. all people in the lab and my advisors teach me how to work systematically and able to change the way I see problems, even though I can't finish the study due to my mental health has been declining in the recent pandemic, I really grateful to have all the support everyone gave me in the university.
研究室のみんなや指導教官から, 体系的な仕事の進め方や問題の捉え方を変える方法を教わりました。最近のパンデミックで, 私の精神状態が低下していたため, 研究を終えることができませんでしたが, 大学でみんなが支えてくれたことに本当に感謝しています。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes, absolutely.
はい, もちろん。
- ・ Yes.
はい。

- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes. After my Master's at Hokudai, I did a Ph.D. in Microbiology and, currently, I'm doing research on the microbiota and its effects on health and diseases.
はい。北大の修士課程の後、微生物学の博士課程に進み、現在は、微生物叢とその健康や病気への影響について研究しています。
- ・ Yes.
はい。
- ・ 1. The research direction has been clarified. 2. The scientific research paradigm has been clarified.
1. 研究の方向性が明確になった。2. 科学研究のパラダイムが明確になった。
- ・ Yes.
はい。
- ・ Yes, they did.
はい。
- ・ I achieved most of my expectations, although the Covid19 period put a lot of strain on some.
Covid19の時期で一部に負担がかかったが、ほぼ期待通り達成できた。
- ・ Partially achieved.
部分的に達成した。
- ・ Yes.
はい。

12. 在学中に教員や他の学生とのネットワークはできましたか？



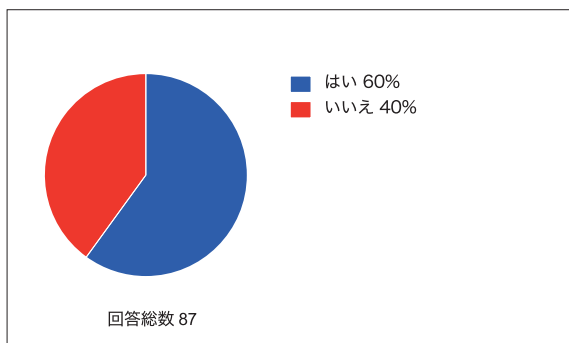
13. (12で「はい」と回答した場合) どのようなネットワークですか？

- ・ I still have close contact with my advisor.
指導教官とは今でも密に連絡を取り合っています。
- ・ The Laboratory networks.
研究室のネットワーク。
- ・ Flux research network and knowledge sharing within the flux research community.
継続的な研究ネットワークおよび研究コミュニティ内の知識共有。
- ・ Friend.
友人。
- ・ Research and education cooperation in the future.
今後の研究・教育協力。
- ・ I became to have many Japanese lab members and foreign students.
多くの日本人研究員や留学生。
- ・ International students' community and among lab members.
留学生コミュニティ、研究室メンバー間。
- ・ Respect and friendship between instructor and student.
講師と学生の尊敬と友情。
- ・ 学科内の先生達とやりとりすることがあります。
- ・ I ever asked sensei about some research-related matters at work after graduation and he answered kindly.
卒業後、職場で研究に関連したことを先生に相談したところ、親切に答えてくれた。
- ・ I made friends with many international students and we helped each other.
多くの留学生と友達になり、お互いに助け合うことができた。
- ・ Research network.
研究ネットワーク。
- ・ Slack, email.
Slack, メール。
- ・ meeting or private conversation per 1/2 week(s), or by e-mail.
半週に1回程度、個人面談またはメールでの面談。

- ・ network with teachers in/out of the university, students, and alumni.
大学内外の先生方、学生、OBとのネットワーク。
- ・ I was involved in Hokkaido University International Student Association and worked part-time at HU to help international students to settle in Japan.
北海道大学留学生会に所属し、北大でアルバイトをしながら、留学生の日本での定住を支援していました。
- ・ Publication.
論文を出すこと。
- ・ My supervisor gave me a positive review for my Postdoc position, and he wrote some recommendation letters for my job applications.
私の指導教官は、ポストドク職に対して肯定的な評価を与えてくれましたし、私の就職活動のために推薦状をいくつか書いてくれました。
- ・ Apprenticeship.
実習。
- ・ Research supervisor and student.
研究指導者と学生。
- ・ I learned so much from my advisor, professors, tutor, and my friends (lab members). Until now, I also keep contact with them. For example, I asked them about academic opinions and comments and talked to them about available Nutrition conferences in Japan.
私は、指導教官、教授、チューター、そして友人（研究室のメンバー）から多くのことを学びました。現在も彼らと連絡を取り合っています。例えば、学術的な意見やコメントについて尋ねたり、日本で開催される栄養学会について話したりしています。
- ・ I was part of the JSPS grant in Indonesia, and we conducted meetings and field visits together with Profs from HU and Indonesia, I was also involved in Indonesian Association in Hokkaido.
日本学術振興会の助成でインドネシアに派遣され、本学とインドネシアの教授陣と会議や現地視察を行ったほか、北海道のインドネシア協会にも参加しています。
- ・ Research network.
研究ネットワーク。
- ・ Gave a recommendation to my student to enter HU.
私の学生を北大に推薦してくれた。
- ・ There are some networking: Haze Project with CIFOR and Kyoto University, JST/JICA Project, GCOE Project, Gambut Kita - ACIAR Project, etc.
CIFOR、京都大学とのHazeプロジェクト、JST/JICAプロジェクト、GCOEプロジェクト、Gambut Kita - ACIARプロジェクトなど。
- ・ Cooperation or Collaboration.
協力・連携。
- ・ Collaboration work.
共同研究。
- ・ Research in peatland.
泥炭地研究。
- ・ Communication with Professor, Instructor, Researcher, and Alumni when needed, in a group or in person.
教授、講師、研究者、同窓生と必要な時にグループや個人でコミュニケーションをとる。
- ・ Network as research colleagues and friends.
研究仲間、友人としてのネットワーク。
- ・ Research network.
研究ネットワーク。
- ・ Research networks.
研究ネットワーク。
- ・ Mainly about communication networks. I can easily gain helps or useful information from my supervisor and lab mates.
主にコミュニケーション・ネットワークについて。指導教官や研究室の仲間から助けや有益な情報を容易に得ることができる。
- ・ Academic networking.
学術的なネットワーク。
- ・ Students and professors in my lab.
研究室の学生や教授。
- ・ Research networks.
研究ネットワーク。
- ・ We were able to improve the relationship between students and students or between students and teachers by holding regular events such as jogging, skiing, and traveling.
ジョギング、スキー、旅行などのイベントを定期的に行い、学生と学生、学生と先生の間を改善できた。
- ・ Research.
研究。
- ・ Research Collaborations.
研究協力。

- ・ Network of researchers inside and outside of Japan.
国内外研究者ネットワーク。
- ・ My professor still helps me with everything he can even though he probably did more than enough such as still trying to keep up with what happened in life for the alumnus.
教授は、卒業生に何が起きたかについていこうとするなど、おそらく十分すぎるほどのことをしてくれたにもかかわらず、今でも私にできる限りのことを助けてくれています。
- ・ Academic network and social network.
学術的なネットワークと社会的なネットワーク。
- ・ Discussion partner in the research topic.
研究テーマで議論する相手。
- ・ Lab network... something.
研究室のネットワークなど。
- ・ We have been doing research together since studying continuously until graduation.
卒業まで継続して勉強しているときから、一緒に研究しています。
- ・ Inter lab Research, Intra Lab Research, Social and Cultural networks with Japanese as well as other citizens
研究室間の研究、研究室内の研究、日本人や他の市民との社会的・文化的ネットワーク。
- ・ unite international students and work with other lab members well.
留学生を束ね、他の研究室のメンバーともうまく連携しています。
- ・ 1. I worked together with Japanese Students on the same topic, and this topic is the main mission of the supervisor. Therefore, I could discuss this with the Japanese students. 2. I went and asked the advisor directly. 3. I had my own community from my motherland country.
1. 日本人学生と同じテーマで研究し、そのテーマが指導教官の主な任務であったため、日本人学生と議論することができた。2. 指導教員に直接聞きに行った。3. 母国でのコミュニティがあったこと。
- ・ Mainly the relationship builds in peers.
主に同級生との関係構築。
- ・ Serious but comfortable networks.
真面目だが心地よいネットワーク。
- ・ Research related between students.
学生間の研究における関係。

14. 在学中に形成したネットワークを現在も活用していますか？



15. (14で「はい」と回答した場合) 現在はどのような交流がありますか？

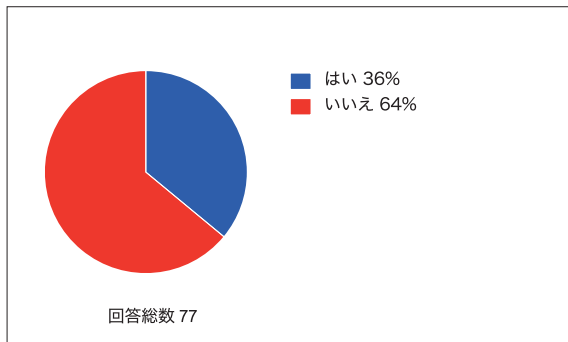
- ・ We are working on a project together.
私たちは一緒にプロジェクトに取り組んでいます。
- ・ Japanese Friend.
日本の友人。
- ・ Advisor.
アドバイザー。
- ・ Friendship.
友人関係。
- ・ Advice and possible cooperation or fellowship.
アドバイスや共同研究。
- ・ Hokkaido Alumni Indonesian Association.
北海道同窓会インドネシア協会。
- ・ Research collaboration in environmental science.
環境科学における研究協力。
- ・ Learning many things and communicating with them.
多くのことを学び、コミュニケーションをとることができる。
- ・ I am currently an HU partner, and my current institution has an MoU with the HU Research Faculty of Agriculture for teaching and research.

私は現在北大のパートナーであり、現在所属している大学は北大農学部と教育・研究に関して MoU を締結しています。

- I am trying to propose collaborative research between my company and Hokkaido University through 国立大学法人北海道大学 産学・地域協働推進機構。
国立大学法人北海道大学 産学・地域協働活動推進機構を通じて、私の会社と北海道大学との共同研究を提案しようとしている。
- Friendship.
友人関係。
- Collaborators.
共同研究者。
- Research collaborator and researcher.
共同研究者。
- After graduation, I attended and presented at the ACN 2015 in Yokohama, and I met my advisor and my friends. I also contact my advisor, professors, and my close friends occasionally, like sending New Year cards and small gifts from Thailand. I also took my Japanese friends to travel when they came to Thailand. We are still good friends and still keep in contact.
卒業後、横浜で開催された ACN2015 に参加・発表し、指導教官や友人と出会いました。また、指導教官や教授、親しい友人と時々連絡を取り、年賀状やちょっとしたプレゼントをタイから送ったりしています。また、日本人の友人がタイに来た時は、旅行に連れて行ってあげたりしています。私たちは今でも仲良しで、連絡を取り合っています。
- Unfortunately, during the COVID-19 pandemic, I decided not to go abroad yet. After the COVID-19 situation resolves, I would like to go to conferences in Japan/Hokkaido, and I would love to visit Hokkaido again.
残念ながら、COVID-19 の流行時には、私はまだ海外に行かないことにしました。COVID-19 の状況が落ち着いたら、日本や北海道の学会に行きたいですし、また北海道にも行きたいと思っています。
- I am still serving as an HU partner and member of Indonesia alumni.
現在も北大のパートナーとして、またインドネシア同窓会のメンバーとして奉仕しています。
- Teacher and student relationship.
先生と生徒の関係。
- Collaboration research.
共同研究。
- Friends.
友人関係。
- Partnerships of research collaboration, Student exchange, Staff exchange, etc.
研究協力、学生交流、職員交流などのパートナーシップ。
- Academic network.
学術ネットワーク。
- Collaboration.
共同研究。
- Friends.
友人。
- Mainly email communications.
主にメールでのコミュニケーション。
- Research-related discussions.
研究に関連する議論。
- Collaboration.
共同研究。
- Sometimes I get information from my young lab mates at HU.
北大の若い研究室の仲間から情報をもらうこともあります。
- e-mail correspondence.
メールでのやりとり。
- Friends, potential collaborators.
友人、共同研究者候補。
- Network among Indonesian students in Hokkaido. just exchanging news and information through social media.
北海道のインドネシア人学生とのネットワーク、ソーシャルメディアを通してのニュースや情報の交換。
- Exchanging advice with graduates.
卒業生とのアドバイス交換。
- I still work with some Japanese professors and students in Zambia. We published together after graduation.
今でもザンビアの日本人教授や学生たちと一緒に仕事をしています。卒業後、一緒に論文を出したこともあります。
- International Research Collaboration.
国際的な研究協力。
- Friend.
友人関係。
- Friendship, or should I say, all the people in the lab are pretty much family to me.
友情というべきか、研究室の人たちは皆、私にとってかなり家族的な存在です。
- I keep in touch with my Ph.D. supervisor and other professors.

- 博士課程の指導教官や他の教授たちとも連絡を取り合っています。
- Discussion partner in a research topic.
研究テーマで議論する相手。
- Korean student network.
韓国の学生ネットワーク。
- A student at my Institute was assisted in her higher-level studies in the Microbial Physiology Lab.
私の研究所の学生が微生物生理学研究室でさらに高いレベルの教育を受ける際にお世話になった。
- Mostly social, but I wish to have research collaboration as well.
社交的な付き合いが多いが、研究協力も希望。
- Mainly the network built-in work experience.
主に実務経験で築いたネットワーク。
- I keep in contact with my instructor by email every year after graduation.
卒業後も指導教官と毎年メールで連絡を取り合っています。
- Good relationship.
良い関係。
- Do cooperative work, such as preparing proposals and exchanges for students.
研究計画書の作成、学生との交流など、共同作業を行う。

16. 修了後に北大を訪ねたことがありますか？

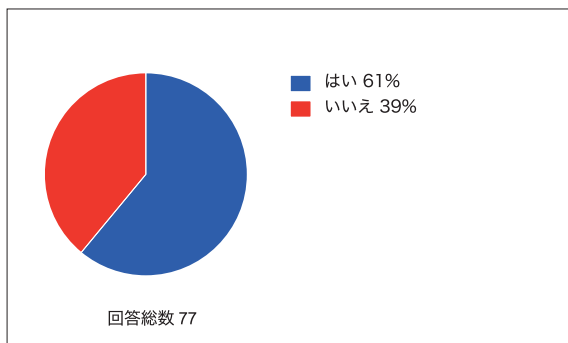


17. (16で「はい」と回答した場合) 何回訪ねたことがありますか、また、その目的はなんですか。

- 1 time.
1回。
- 2.
2回。
- Once.
1回。
- Two months.
2ヶ月。
- Many times when I was in Japan.
日本にいたころは何度も。
- Twice.
2回。
- 2-4 times/year.
2～4回/年。
- Two times.
2回。
- 3 times.
3回。
- 1 time.
1回。
- 1.
1回。
- 1.
1回。
- 2.
2回。
- 1 time (only for the student exchange program with the Osaka Institute of Technology - Japan)
1回 (大阪工業大学との交換留学プログラムのみ)。
- 2.
2回。

- ・ 1 time.
1 回。
- ・ 2.
2 回。
- ・ 0.
0 回。
- ・ I am working at HU.
北大で仕事をしている。
- ・ 2.
2 回。
- ・ 2018.
2018 年。
- ・ Personally, at least 5 times but My Professor Hatano at least 10 times.
個人的には 5 回以上ですが、波多野教授は 10 回以上です。
- ・ 1.
1 回。
- ・ Five.
5 回。
- ・ Once.
1 回。
- ・ I haven't visited HU yet, but I'm planning to visit a new research collaborator on June 2023.
まだ北大を訪問したことはないが、2023 年 6 月に新しい共同研究者を訪問予定。
- ・ Once.
1 回。
- ・ only once after I return to China.
中国に帰国後、1 回だけ。
- ・ Once.
1 回。
- ・ 5.
5 回。

18. 修了後に北大のホームページ以外で北大に関する情報に接したことはありますか？



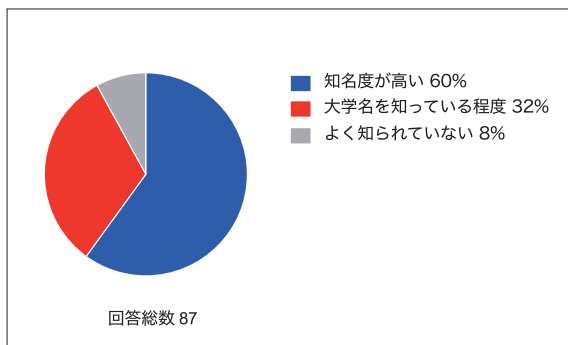
19. (18で「はい」と回答した場合) それはどのような場でしたか。

- ・ Via SNS.
ソーシャルネットワークサービス経由。
- ・ Instagram and Facebook.
インスタグラム、フェイスブック。
- ・ Via communication with people.
人とのコミュニケーション。
- ・ 卒業生登録システムからメールが届きました。
- ・ News about HU as the top university in Japan based on SDGs information and HU information from HU LO in Indonesia social network.
SDGs の情報をもとにした日本のトップ大学としての本学のニュースや、インドネシア SNS の北大リエゾンオフィスからの本学情報。
- ・ MATSURI and other academic info.
MATSURI とその他の学術情報。
- ・ By E-mail from my advisor.
指導教員からのメール。
- ・ When I fill out the form, I confirm my division name.
フォームに入力する際に、自分の所属する学部・学科名を確認します。

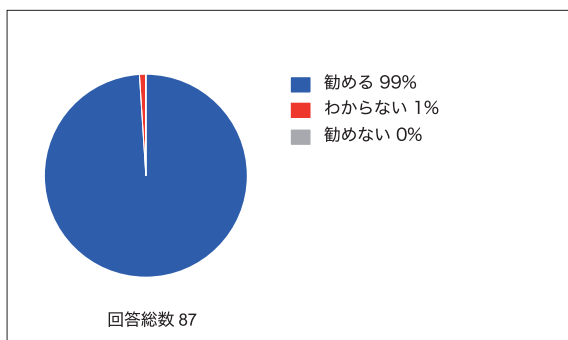
- ・ Facebook.
フェイスブック。
- ・ I am especially interested in the information related to possible collaboration and student exchange and actively requesting the information from my current contact at HU. Every year, HU representatives also share the latest information at HU Indonesia Alumni Meeting.
特に、共同研究や学生交流の可能性に関する情報に興味があり、現在担当している北大の担当者に積極的に情報を求めています。毎年、北大 Indonesia Alumni Meeting で、北大の代表者が最新情報を共有しています。
- ・ I followed the LinkedIn account of HU, and in Indonesia, we have an alumni association.
北大の LinkedIn アカウントをフォローし、インドネシアにも同窓会がある。
- ・ Assigned by my current company, I am partaking in the Career Link Meetup event organized by 北海道大学 大学院教育推進機構 先端人材育成センター (I-HoP) for recruitment of HU's Ph.D./Postdoc students.
現在の会社から依頼され、北海道大学教育推進機構先端人材育成センター (I-HoP) 主催の博士・ポストドク採用イベント「キャリアリンクミートアップ」に参加しています。
- ・ Lab events.
研究室イベント。
- ・ Some important advances in scientific findings and as well as some intentional collaboration news.
研究成果や共同研究など、重要なお知らせがあります。
- ・ Indonesia's Hokkaido University alumni meeting and social media.
インドネシアの北大同窓会とソーシャルメディア。
- ・ 1) Thai students at Hokkaido University have a closed Facebook group for Hokkaido students and alumni, so I see some activities the current students have, like a welcome party and so on. 2) Over the years, I got a few emails from Hokkaido University. 2.1) There was once I received mail that representatives from Hokkaido University were coming to Thailand and alumni will join the party. Unfortunately, the event was canceled because of COVID-19. 2.2) This time, I got mail from my advisor (Editor in Chief) for the Special English Program Self-Evaluation Report, I am glad to answer the questionnaire, and you can contact me if you want more comments on anything.
1) 北海道大学に在籍しているタイ人の学生には、北海道の学生と卒業生のためのクローズドグループ Facebook があり、歓迎会など在校生の活動を見ることができます。2) 北海道大学から数年にわたりメールが届きました。2.1) 北海道大学から代表者がタイに来るので、卒業生がパーティーに参加するというメールが来たことがありますが、残念ながら COVID-19 の影響でキャンセルになりました。2.2) 今回、指導教官（編集長）から、「特別英語プログラムの自己評価報告書」についてのメールが届きました。
- ・ As part of the HU partner, I have the privilege of receiving updates from HU.
北大パートナーの一員として、北大からの最新情報を受け取る権利を持っています。
- ・ Hokkaido University E-Newsletter.
北海道大学メールマガジン。
- ・ Scholarship, internship, etc.
奨学金、インターンシップ、その他。
- ・ We have HU alumni meeting every year in Indonesia.
毎年インドネシアで開催される HU 卒業生の集い。
- ・ News.
ニュース。
- ・ In Indonesia, we have alumni HU groups who usually share information about the campus and any useful activities. Almost every year, we hold alumni reunions.
インドネシアには北大の同窓会があり、キャンパスや活動に関連した情報を共有しています。ほぼ毎年、同窓会を開催しています。
- ・ Campus update.
キャンパスの最新情報。
- ・ From friend in HU.
北大の友人より。
- ・ Media social (i.e., Facebook), HU Alumni mail list, Indonesia Hokkaido Alumni Association
ソーシャルメディア (Facebook など)、北大同窓生メーリングリスト、インドネシア北海道同窓会。
- ・ International News Media (University rankings, awards, etc.), personal communications.
国際ニュースメディア (大学ランキング、受賞歴など)、個人的なコミュニケーション。
- ・ Social media.
ソーシャルメディア。
- ・ From Instagram and Twitter, I followed the HU account ^^
インスタグラム、ツイッターから、北大のアカウントをフォローしました ^^。
- ・ Establishment of the Hokkaido University Indonesia Alumni Association.
北海道大学インドネシア同窓会の設立。
- ・ Website.
ウェブサイト。
- ・ Some collaborative works between HU and alumni from Indonesia, the information broadcasted in the group chat.
北大とインドネシアの同窓生との共同研究、グループチャットで流した情報。
- ・ Power harassment.

- ・パワーハラメント。
- ・ Study in Japan fair organized by the Lusaka office.
ルサカ事務所主催の日本留学説明会。
- ・ Alumni Association.
同窓会。
- ・ SNS.
ソーシャルネットワークサービス。
- ・ Such Benjamin List was awarded the Nobel Prize in Chemistry in 2021.
2021年ノーベル化学賞を受賞したベンジャミン・リストなど。
- ・ In my country, there is a liaison office of Hokudai and also group of alumni of Hokudai quite big.
私の国には北大のリエゾンオフィスがあり、北大の卒業生のグループもかなり大きくなっています。
- ・ I always keep myself updated by browsing news about my lab.
自分の研究室に関するニュースを見て、常に最新の情報を得るようにしています。
- ・ I followed HU on Facebook and was contacted by Prof Yokota and Prof Fukiya when the Laboratory of Microbial Physiology completed 20 years.
Facebookで北大をフォローし、微生物生理学研究室が20周年を迎えた時に横田先生と吹谷先生から連絡を頂きました。
- ・ The oral defense of the next Marh graduate student is coming soon.
次の大学院生の学位論文発表会がもうすぐです。
- ・ 1. There were many professors who visited the university where I work at. 2. I invited Hatano Ryusuke to visit our university. 3. I met Prof. Hatano Ryusuke and other Japanese students at international events. 4. One prof from HU took a position at my university.
1. 私の勤める大学には多くの教授が訪れています。2. 波多野隆介先生を大学にお招きしました。3. 国際的なイベントで、波多野隆介先生や他の日本人学生に会いました。4. ハワイ大学から一人の教授が私の大学に着任した。
- ・ Chinese students of HU have alumni WeChat groups. In the groups, we may reminisce about stories from the past and learn the news of HU from the current students.
中国の大学生はWeChatの同窓会グループを持っています。その中で、昔話に花を咲かせたり、在校生から本学のニュースを聞いたりすることができます。
- ・ I follow HU on LinkedIn; hence I get information about new research and innovation as well as scholarships and weather.
私はLinkedInで北大をフォローしているので、新しい研究や技術革新、奨学金や天候に関する情報を得ることができます。
- ・ Friends from HU.
北大の友人。
- ・ International student networks.
留学生ネットワーク。

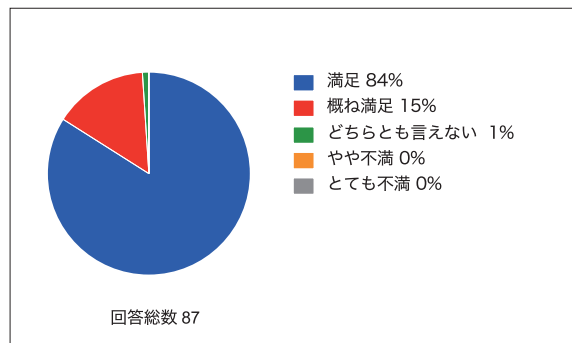
20. あなたの周囲で北大の知名度はどのようですか？



21. 北大への進学相談を受けた場合、あなたは北大を勧めますか？

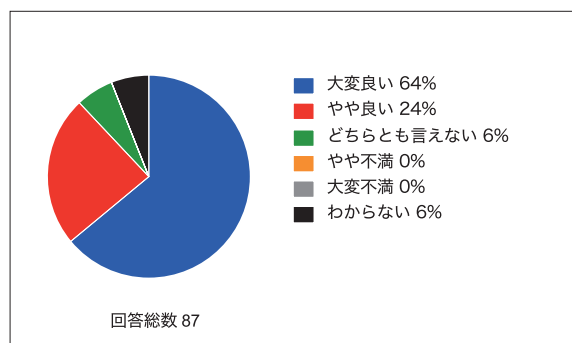


22. 大学生生活の満足度はどのくらいですか？



C. 「生物圏に立脚した生存基盤科学のための英語による特別プログラム / 包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム」 についての評価をお聞かせください。

1. 「生物圏に立脚した生存基盤科学のための英語による特別プログラム / 包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム」 のコンセプトに対してどのような印象をお持ちですか？



2. 1 に対する回答の理由を教えてください。

- For us foreigners, these special programs give us more chances to enroll in a foreign university.
私たち外国人にとって、これらの特別なプログラムは、海外の大学へ入学するチャンスを与えてくれます。
- This was the greatest experience of my life.
これは私の人生で最大の経験でした。
- Although the Japanese language is not compulsory for the program, there are a few disadvantages for those that are not competent in speaking Japanese. Direct knowledge transfer was somehow constrained due to the language barrier, especially during lectures and seminars.
日本語は必須ではありませんが、日本語を話す能力がない人にとっては、少し不利な点があります。特に講義やセミナーでは、言葉の壁があるため、直接的な知識の伝達が制限されることがありました。
- Provide communication chance for Japanese researchers and global researchers.
日本の研究者と世界の研究者の交流の場を提供している。
- The broadest level of biological organization, in my opinion, this program should specify the major part and minor education field.
このプログラムは、最も広範なレベルの生物学の組織であるため、主要部分と副教育分野を指定する必要があると私は考えています。
- Giving the opportunity of international students to conduct the study at Hokkaido University easily, even without Japanese language background.
日本語の知識がなくても、留学生が簡単に北海道大学で勉強できる機会を提供している。
- I was a part of the program, and I learned many things from the program as well as met friends from the different laboratories.
私はこのプログラムに参加し、多くのことを学びましたし、異なる研究室の友人と出会うことができました。
- The concept of this program is an awesome idea for foreign students. Because it gathers people all around the world and makes a link in communication, and provides new knowledge.
このプログラムのコンセプトは、外国人留学生にとって素晴らしいアイデアです。なぜなら、このプログラムは世界中の人々を集め、コミュニケーションのリンクを作り、新しい知識を提供するものだからです。
- 日本でも国際的な視点を持って、直接に英語で研究をするのは大変いいところだと思います。
- Having an English program in a Japanese school is quite rare, but this program provides one.
日本の学校で英語の授業があるのは珍しいと思います。
- The course provides good exploration to the students.
このコースは、学生に良い探求を提供する。

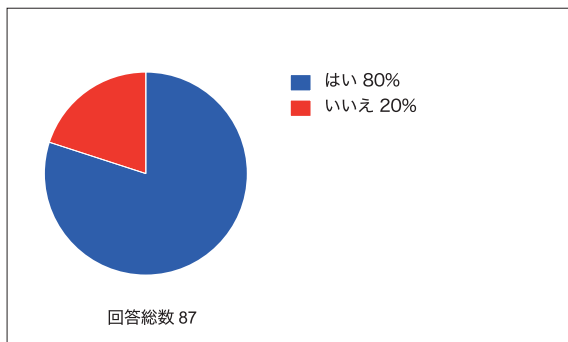
- Warm instructors & lab members, sufficient support for international students.
講師や研究室のメンバーが温かく、留学生へのサポートが充実している。
- Because we can get global perspectives.
グローバルな視点が得られるから。
- I do not notice the concept.
コンセプトがよくわからない。
- Though I believe learning Japanese is important for comfortable life and developing connection, the English program helps to have a peaceful research life. It would be much pressure if international students must first learn enough Japanese to be able to graduate since the pressure for graduation is already quite high.
日本語の習得は快適な生活や人脈作りに重要だと思いますが、英語プログラムは穏やかな研究生生活を送るのに役立っています。ただでさえ卒業のプレッシャーが高いのに、留学生が卒業できる程度の日本語を身につけなければならないとしたら、相当なプレッシャーになると思います。
- Special Post-Graduate (English) Program in Biosphere Sustainability Science accommodates the global need.
共生基盤学専攻の大学院（英語）特別コースは、グローバルなニーズに合ったものです。
- I enrolled in a different English program.
私は別の英語プログラムに入学しました。
- It contains professionalism and extensibility.
専門性と拡張性を備えている。
- Informed the candidate well of the English course program.
英語コースのプログラムについて、候補者に十分な情報を提供してくれた。
- This special program offered a great opportunity for me to have experience and connections to experts and friends in the field.
この特別プログラムは、私にその分野の専門家や友人との経験やつながりを持つための素晴らしい機会を提供しました。
- The names sound chic, I, however, do not know the detail, like what the word special refers to. A short/intensive/only foreigners?
名前はシックに聞こえますが、私は special という単語が何を指すか詳細を知りません。短い / 集中的 / 外国人だけ？
- This program gives opportunities to many students with very good facilities, supportive staff, etc.
このプログラムは、非常に良い施設、サポートするスタッフなど、多くの学生に機会を与えています。
- This program gives the opportunity for international students to get knowledge and practical skill in the field of Biosphere Sustainability Science.
このプログラムは、留学生に共生基盤学分野の知識と実践的なスキルを身につける機会を与えてくれます。
- They can bring their knowledge and experience to develop their country.
彼らは、自分の国の発展のために、その知識と経験をもたらすことができます。
- To attract people globally to make progress in agriscience frontiers.
農業科学のフロンティアの進歩のために、人々にグローバルな視点を提供しています。
- Because I don't know the concept of that program, actually, when I entered HU, the program is Special Postgraduate Program in Bio-systems Sustainability.
そのプログラムのコンセプトがわかりません。実際、私が北海道大学に入学した時のプログラムは、Special Postgraduate Program in Bio-systems Sustainability というものでした。
- It is very international.
非常に国際的なプログラムです。
- Through the program, I gain knowledge not only theoretically but practically as well.
このプログラムを通じて、私は理論的な知識だけでなく、実践的な知識も得ることができました。
- Promote scientific works and communications.
科学的な研究とコミュニケーションを推進している。
- This is a special program where the student can learn or study and focus on research, especially environments, agriculture, soil science, etc.
このプログラムは、特に環境、農業、土壌科学などの研究に焦点を当て、学ぶことができる特別なプログラムです。
- The program provides a great opportunity to study without the language barrier and time frame for graduation, which can save students the time spent studying.
このプログラムでは、言葉の壁がなく、卒業までの期間も短いので、勉強に費やす時間を短縮することができます。
- This special program makes it easy for international students to directly pursue educational and research activities because it is based in English. Many relationships between students or alumni can create good cooperation in the future of our work.
英語による授業なので、留学生が直接教育・研究活動に取り組むことも容易です。留学生や卒業生との交流は、将来の仕事にも良い影響を与えることでしょう。
- Global current issue.
グローバルな時事問題。
- Program in Biosphere Sustainability Science: the collaboration among various scientific fields in the research.
共生基盤学プログラム：研究における様々な科学分野間の協力。
- The special post-graduate program created wide opportunities for AgriScience to learn cutting-edge research and collaboration globally.
特別プログラムは、最先端の研究とグローバルなコラボレーションを学ぶ農学のための広い機会を提供しています。

- Students can learn and engage in research in the English language. That is the most important reason.
学生は英語で学習や研究に従事することができます。それが最も重要な理由です。
- The programs make it more accessible to education.
このプログラムによって、教育がより身近なものになりました。
- Open opportunity to more foreign students.
より多くの外国人留学生にチャンスを提供している。
- It gives so many chances to foreign students, especially students in southeast Asia, to follow their academic dreams.
This program let us know more about Hokkaido in Japan.
このプログラムは、留学生、特に東南アジアの学生に、学問の夢を追求するための多くの機会を与えています。このプログラムは、私たちに北海道や日本について、より多くのことを教えてくれました。
- Global aspect.
グローバルな側面。
- More study and keep in touch.
もっと勉強し、連絡を取り合う。
- Some more communication and networking opportunities with other foreign research students enrolled would have been helpful.
他の留学生とのコミュニケーションやネットワーキングの機会があれば、もっと良かったと思います。
- I was not in the program. I don't know. Is this a new program? I graduated more than a decade ago.
私はこのプログラムに参加していない。わからない。新しいプログラムなのか？10年以上前に卒業した。
- Some lecture I wanted to enroll in wasn't available in English.
受講したい講義が英語でなかったために受講できないことがあった。
- The program to support life in Japan was quite positive among international students.
日本での生活をサポートするプログラムは、留学生の間でかなり好評でした。
- It has a strong focus on sustainability, which is crucial for the world today.
今の世界にとって重要な持続可能性に強く焦点をあてています。
- Able to jumpstart and create opportunities for the less fortunate people in southeast Asia.
東南アジアの恵まれない人たちにチャンスを与えることができる。
- The English program at the Graduate School of Agriculture enriches my knowledge of my limited Japanese language ability.
農学研究科の英語プログラムは、私の限られた日本語能力の中で、私の知識を豊かにしてくれました。
- The program itself makes us strong and, in time, potential researchers.
このプログラムは私たちを強くし、研究者としての可能性を与えます。
- While life in the lab has been astoundingly incredible, I can't say the same for the lectures, especially the online classes. Offline classes have been a great experience for me but the online classes are kind of a mess. The ELMS are confusing, also the way you see the schedule is very confusing. Not to mention the lecture pages sometimes only show Japanese, and you can only depend on machine translation which can result in weird translations sometimes. I may understand the Japanese language to some extent, but it is still a little bit confusing for me since I was the only foreign student in the lab at the time.
研究室での生活は驚くほど素晴らしいものでしたが、講義、特にオンラインの講義についてはそうではありませんでした。オフラインの授業は私にとって素晴らしい経験でしたが、オンラインの授業は良くありませんでした。また、ELMSのシステムはスケジュールを見る方法が非常にわかりにくいです。講義のページは時々日本語しか表示されないし、機械翻訳に頼るしかないの、時々変な翻訳になることがありました。私は日本語をある程度理解できますが、当時研究室で唯一の留学生だった私は、混乱することがありました。
- There are a lot of very professional supervisors such as Pro. Yokota Atsushi, and a very good support staff team in Special Post-Graduate (English) Program.
横田篤先生など、プロフェッショナルの指導教官や非常に優れたサポートスタッフが揃っています。
- Special postgraduate has a special curriculum which is different from Japanese student admission. Using English for learning and teaching is very helpful for foreigners as a student.
特別プログラムでは、日本人学生とは異なる特別なカリキュラムが組まれています。英語での授業は、外国人の学生にとって非常に役に立ちます。
- Good experience if you want a post-graduate course and a good chance to learn about your research. HU's post-graduate program is well organized for foreign students.
大学院を希望する人には良い経験ですし、研究についても学ぶことができます。北大の特別プログラムは、留学生のためによく組織されています。
- It created ample opportunities to learn, share, and practice research.
研究を学び、共有し、実践するための十分な機会を提供してくれました。
- I like the concept of the Post-Graduate Program in English because it attracts international students like me, and stimulates Japanese students to speak English and interact with people from all over the world. Unfortunately, during the time I was enrolled (2006-2008), Japanese students didn't feel comfortable speaking in English (or my basic Japanese), and most of my interactions were with international students. However, I have heard that this has improved in the past years.
私のような留学生を惹きつけ、日本人学生の英語会話を促し、世界中の人々と交流することを刺激することから、私は英語による大学院プログラムのコンセプトが好きです。残念ながら、私が在籍していた期間（2006年～2008年）は、日本

人学生は英語（または私の基本的な日本語）で話すことに抵抗があり、留学生との交流がほとんどでした。しかし、この数年で改善されたと聞いています。

- 1. Easy to use English during my study because I can only speak a little Japanese. 2. Sufficient financial support in this program.
1. 日本語が少ししか話せないので、勉強中に英語を使うのが簡単。2. このプログラムでは十分な経済的サポートがあること。
- It's very specialized.
専門性が高い。
- 1. Most of us can not speak Japanese, but the English program gave us a chance to learn and stay in Japan. 2. English program lets us enter scientific research more quickly and integrate with international standards faster.
1. 日本語を話せない人が多い中、英語プログラムで学び、日本に滞在する機会を与えてくれた。2. 英語プログラムは、私たちがより迅速に科学的研究に参入し、より速く国際的な標準に統合することができます。
- Desirable lessons, perfect professors, and a beautiful university.
希望に満ちた授業、完璧な教授陣、美しい大学。
- First, we got patient guidance from knowledgeable instructors. Second, the special program saved us time in language learning. Third, full scholarships guaranteed that we could devote ourselves fully to our studies and research. Fourth, the activities organized by the program opened our eyes and made us feel warm.
第一に、知識豊富な講師陣から根気よく指導してもらえたこと。第二に、特別プログラムを利用することで、語学習得の時間を短縮することができました。第三に、全額奨学金によって、私たちは勉学と研究に専念することができました。第四に、このプログラムが主催する活動は、私たちの目を開かせ、温かい気持ちにさせてくれました。
- I really think the program is very good because I completed my studies and research without worrying about the language barrier.
言葉の壁を心配することなく、勉強と研究を終えることができたので、このプログラムは本当に良いと思います。
- Both biosphere sustainability and global education face the whole world human. It is great.
生物圏の持続可能性とグローバル教育の両方が、全世界の人間と向き合っていた。素晴らしいです。
- Have seen the introduction of the program.
プログラムの紹介を見ました。

3. 一般コースではなく特別コースに入学したメリットはありましたか？



4. (3で「はい」と回答した場合) どのようなメリットがありましたか？

- The professionalism of teachers in each field of study.
各分野の先生のプロ意識。
- Knowledge can easily gain and shared worldwide.
知識を容易に得ることができ、世界中で共有することができる。
- Able to study and graduate using English, especially for those who are not good at Japanese.
日本語が苦手な方でも、英語を使って勉強し、卒業することができる。
- No need to study the Japanese language before enrolling in the study.
入学前に日本語を勉強する必要がない。
- As a foreigner, you can learn both English and Japanese. For your future as a scientist, English is essential.
外国人として、英語と日本語の両方を学ぶことができる。科学者としての将来のために、英語は不可欠です。
- English was used as a medium language for this program.
このプログラムでは、英語を主要言語としています。
- Open opportunities for non-Japanese students to learn about Japanese graduate programs along with language and cultures.
外国人留学生が日本の大学院のプログラムを言語や文化とともに学ぶ機会の提供。
- 入試は英語で行うのは日本へ来たばかり留学生達にけっこう優しいです。
- Able to choose English courses, write a thesis in English, administration documents in English, having international friends enrolling in the same program.
英語での論文作成、英語での事務手続き、同じプログラムに在籍する外国人の友人がいること。
- Better research networking with the global researcher.

- グローバルな研究者とのより良い研究ネットワーク。
- Courses were conducted in English, which is easier for international students.
授業が英語で行われ、留学生にとってやりやすかった。
- Studying and communicating in English could help me to reinforce the language and research study.
英語で勉強し、英語でコミュニケーションすることで、語学や研究の強化につながった。
- That we can get global perspectives.
グローバルな視点が得られること。
- It's very friendly to whom don't speak Japanese as their native language. English is very often in academic communication as nearly all papers are written in English, and the master thesis could be easier to finish. The burden from language could be erased to some degree, so someone could devote themselves to the real thing with more effort.
日本語を母国語としない人にはとても親切だと思う。学術的なコミュニケーションでは、ほぼ全ての論文が英語で書かれているので、修士論文も簡単に仕上げることができる。言葉の負担がある程度なくなるので、その分、勉学に集中できる。
- For an international student, I suppose language is the advantage.
留学生の場合は、やはり言語が有利でしょう。
- Networking with students from other countries.
他の国の学生とのネットワークができる。
- Special program in English? Yes, I could study in the English language.
英語での特別プログラム？はい、英語で勉強できます。
- International networks/No language barrier in English.
国際的なネットワーク／英語での言葉の壁がない。
- None-Japanese speaking students to enter.
入学のために日本語を話す必要がない。
- This question is very hard to answer since I am in this Special program. I think this program that I experienced was good. However, I do not know what the differences are between the special and general programs.
この質問は非常に答えにくいのですが、私はこの特別プログラムに参加しているので、私が経験したこのプログラムはよかったですと思います。しかし、特別プログラムと一般プログラムの違いは何なのかわかりません。
- I could picture it being designed specifically to meet an urgent need, so this is the advantage.
緊急のニーズに応えるために特別にデザインされたプログラムであることは想像できます。
- More financial supporters for students in this program (not only MONBU KAGAKU SHO)
このプログラムに参加する学生への経済的支援をもっと充実させてほしい（文科省だけでなく）。
- My Japanese is not good. I can use English to be enrolled.
日本語が不自由ですが、英語を使って入学することができる。
- We can work using English for easy connection.
英語を使って仕事ができるので、つながりができる。
- Enhanced my skill and capability.
自分のスキルや能力を高めることができる。
- We can establish the connection between international students, don't so depressed about Japanese study obligations, and can focus on their main studies.
留学生同士のつながりができ、日本語の勉強の義務に追われることなく、本業に集中できる。
- Deep understanding of sustainability.
持続可能性への深い理解。
- Because 3 years is quite short, the focus is important, and it is conducted in English.
3年間という短い期間であるため、集中力や英語で行われることが重要です。
- Diverse students, educational backgrounds, and cultures.
多様な学生、教育背景、文化。
- It is unique for accomplishing the study within the stipulated duration. It is attractive to global students for the English language.
決められた期間内に勉強を終わらせることができるのが特徴。グローバルな学生にとって、英語を使うことは魅力的である。
- International students can take lectures in English.
留学生は英語での講義を受けることができる。
- Wider social and research networks (together with Japanese students and International students) could be established.
日本人学生、留学生を含めた幅広い社会的、研究的ネットワークが構築できる。
- Field is more specific.
分野がより具体的である。
- For me, I don't need to prepare for the Japanese language. This saves me lots of time.
私の場合、日本語を準備する必要がない。時間の節約になる。
- Japanese language.
日本語。
- I'm not sure how the special program is different from the general course for a Ph.D.
特別プログラムと博士課程の一般コースとの違いがよくわからない。
- Most of the sensei talk with me and deliver the course in English. They tried hard to give a good lecture. Even some of them still deliver the lecture in Japanese. but only a few of them.

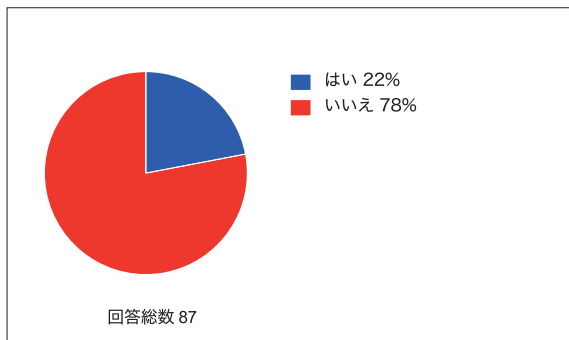
ほとんどの先生が英語で講義をしてくれます。彼らは一生懸命に講義をしてくれました。何人かの先生方は今でも日本語で講義をされている方もいらっしゃいますが、ごく一部の方のみです。

- We could use English during our study.
英語を使った勉強ができた。
- English program, good network with other international students.
英語プログラム、他の留学生とのネットワーク。
- Need not have to study the Japanese language and thus spend more time developing an understanding of the science or subject matter.
日本語を勉強する必要がないので、科学や研究テーマの理解に時間を割くことができる。
- Japan alumni are priorities in private companies in Indonesia.
日本の卒業生がインドネシアの民間企業で活躍している。
- We can communicate in English.
英語でのコミュニケーションができる。
- Network.
ネットワーク。
- I answered yes on the basis that there are some other foreign students in the same year or at least one that is still left in the lab because the scope of the network that you might form in the special program is international. I may say that this is one of the advantages of the special program as you might broaden your way of seeing the world. Different cultures, as well as Japanese culture, in one special program might help the students to see life from a different view.
研究室に同期前後の留学生がいるという理由で「はい」と答えました。特別コース生になると、国際的なネットワークが形成できるためです。これは特別コース生になるメリットの1つで、世界の見方が広がるかもしれません。日本の文化だけでなく、異なる文化を一つの特別コースで学ぶことは、人生の見方を変えることにつながりました。
- The training in the special program could benefit your future academic career.
特別プログラムの研修は、将来の学問的なキャリアに役立ちました。
- The English language is a major in the learning process.
教育プログラムにおいて英語が主体。
- Very good opportunity to learn Japanese research culture and curriculum.
日本の研究文化やカリキュラムを学ぶ絶好の機会です。
- Supporting foreign students able to study in Japan at full potential.
日本で勉強できる留学生をサポートする。
- Everything was in English language, so I didn't have any hard time learning the Japanese language.
すべて英語で行われるので、日本語の習得に苦労することはありませんでした。
- Although the Japanese course we attended once we moved to Sapporo was very good, the Japanese language is very different from my own language (Portuguese), and my skills were basic after I completed the course. Therefore, it was very good that I could attend lectures in English and talk to my supervisors in English; otherwise, my comprehension of the research topic/courses would be poor. On the other hand, I also had the chance to attend lab meetings and presentations in Japanese which helped me improve my understanding of the Japanese language.
札幌に移ってから受講した日本語講座はとても良かったのですが、日本語は私の母国語（ポルトガル語）とは大きく異なるため、講座修了後の私のスキルは基礎的なものでした。そのため、英語で講義を受け、英語で指導教員と話すことができたのは非常に良かったのですが、そうでなければ、研究テーマ・コースの理解度が低くなっていただでしょう。一方、研究室のミーティングやプレゼンテーションも日本語で受けることができたので、日本語の理解も深まりました。
- Good for publishing papers in English journals and presenting research at international academic conferences.
英文ジャーナルへの論文掲載や国際学会での研究発表に有利です。
- I cannot answer because I don't know the general course very well. But I feel so good about studying in the special program, so my answer is Yes.
一般的なコースをよく知らないなので、答えられません。しかし、特別コース制度で勉強するのはとても良いことだと思うので、答えは「はい」です。
- Students have a wide range of sources and more extensive exchanges.
学生の情報源は幅広く、交流も盛んです。
- The enrollment time, twice per year, is suitable for foreign students and matched graduation periods in different countries. Besides that, it is better for foreigners to adapt study or even life in Japan.
入学時期が年2回というのは、さまざまな国で学んだ留学生に適しています。また、外国人が日本で勉強したり、生活したりするのに適しています。
- The special program saved us time in language learning, full scholarships guaranteed that we could devote ourselves fully to our studies and research, and the activities organized by the program opened our eyes and made us feel warm.
特別プログラムは語学学習の時間を節約し、奨学金は勉強と研究に専念することを保証し、プログラムが企画する活動は私たちに開眼させ、暖かい気持ちにさせてくれました。
- Special programs give specific guidance to people enrolled in them.
特別プログラムは、入学者に具体的な指導を行うものです。
- Highly efficient and convenient.
効率的で便利です。
- English guidance is easier to accept for those who have no basic knowledge of Japanese.
日本語の基礎知識がない人には、英語の指導が受け入れられやすい。

- 1) English program is more international. I remember there has a welcome party, a meeting for this program, in which students can know each other and build connections. 2) the program has no Japanese requirements, so kindly save time to finish the course.

1) 英語プログラムは、より国際的です。歓迎会やミーティングがあり、学生同士が知り合え、つながりができたと思います。2) 日本語が不要なので、時間を有効に使える。

5. 特別コースに入学したデメリットはありましたか？



6. (5で「はい」と回答した場合) どのようなデメリットがありましたか？

- ・ COVID-19.
新型コロナウイルス感染。
- ・ It is broad field of study.
幅広い分野での学習。
- ・ The Japanese language of the student becomes weak, thus difficult for to conduct daily life outside the campus without studying the Japanese language.
日本語を学ばないとキャンパス外での日常生活が困難になる。
- ・ It may desolate the international students from Japanese peers.
留学生が日本人の仲間から孤立する可能性がある。
- ・ Relatively fewer opportunities to learn Japanese.
日本語を学ぶ機会が比較的少ない。
- ・ I answered yes because I am not familiar with the program, or the background of creating such a program. So, as long as all the requirement for a graduate student is met then I think it should be ok. For example, the program should not compromise the quality of education and research.
このような制度ができた背景をよく知らないで、「はい」と答えました。ですから、大学院生として必要な条件をすべて満たしている限り、問題ないと思います。例えば、教育や研究の質を落とすようなことがあってはならない。
- ・ I think more conferences or parties from this program are needed.
このプログラムによる会議やパーティーがもっと必要だと思う。
- ・ Limited in student numbers, activities, and lecturers.
学生数、活動、講師が限られている。
- ・ Still about language. My Japanese is still poor. But this may be my question.
まだ言語について。私の日本語はまだ下手です。でも、これは私の質問かもしれません。
- ・ I cannot speak Japanese. I really hope there was a session in a period of time before the program began that the program gave the opportunity to learn Japanese, not while taking the program.
私は日本語を話すことができません。プログラム受講中ではなく、プログラム開始前の一定期間に、日本語を学ぶ機会を与えてくれるセッションがあるといいなと思います。
- ・ There were no Japanese students in the program. I think having Japanese students as part of the special program can enhance the interaction between foreign and Japanese students.
プログラム内に日本人の学生がいなかった。特別プログラムに日本人が参加することで、留学生と日本人の交流が深まると思う。
- ・ Class.
クラス。
- ・ The only disadvantage I can say is that the language barrier is still a big problem.
デメリットを挙げるとすれば、やはり言葉の壁が大きな問題です。
- ・ As we didn't study the Japanese language, we had a difficult situation in day-to-day communication.
日本語を勉強していないため、日常的なコミュニケーションに支障がある。
- ・ less communication in Japanese.
日本語でのコミュニケーションが少ない。
- ・ Some students can't communicate with their tutors because they don't understand Japanese if their tutors have bad English.
チューターの英語が苦手だと日本語がわからず、コミュニケーションがとれない生徒がいる。
- ・ I think if there has some seminar for the program, that would be better to let students know more about this program

and be a benefit for cross-research and comparative research in HU and in the future.

このプログラムに関するセミナーがあれば、このプログラムについてもっと知ってもらえることができ、北大での共同研究に役立つと思います。

D. 就職についてお聞かせください。

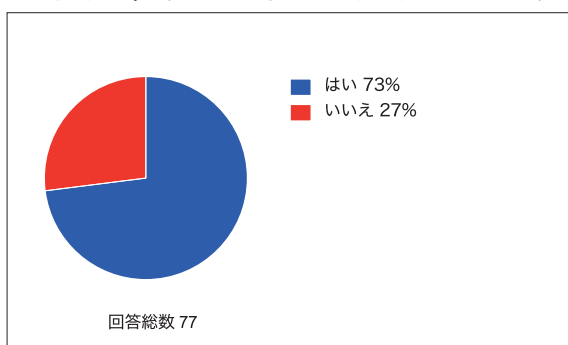
1. 現在の職業

- ・ Research assistant.
研究助手
- ・ Own business.
自営業
- ・ Research Officer.
研究員
- ・ Researcher.
研究員
- ・ Public staff.
公的機関職員
- ・ Research Professor.
研究教授
- ・ Postdoctoral Research Associate.
ポスドク研究員
- ・ Lecturer.
講師
- ・ Unemployment (stay home mom).
失業中（主婦）
- ・ Analytical services (Technical consultant).
分析業務（技術コンサルタント）
- ・ 半導体業界
- ・ Professor.
教授
- ・ None.
なし
- ・ Research Assistant at EXEINS.
EXEINS 研究員
- ・ Research Officer.
研究員
- ・ Technician.
技術職員
- ・ Postdoc.
ポスドク
- ・ Ph.D. student.
博士課程大学院生
- ・ advanced R&D engineer.
先端研究開発技術者
- ・ Company researcher.
企業研究員
- ・ Assistant Professor.
助教
- ・ University lecturer.
大学講師
- ・ Lecturer.
講師
- ・ Researcher (研究開発部) in a Japanese company.
日系企業研究員（研究開発部）
- ・ Academic staff - Professor (Assistant).
教員 - 助教
- ・ Principal investigator.
研究室主宰者
- ・ Researcher.
研究員
- ・ Lecturer, assistant professor in the Institute of Nutrition, Mahidol University. Here is the website of my current work place <https://inmu2.mahidol.ac.th/en/about-us/>

- マヒドン大学栄養学研究所の助教。現在の職場のホームページはこちらです <https://inmu2.mahidol.ac.th/en/about-us/>
- ・ Researcher/project scientist and Lab Manager.
研究者／プロジェクトサイエンティスト，ラボマネージャー
 - ・ University's Instructor.
大学講師
 - ・ Instructor.
講師
 - ・ Academic staff of Sanata Dharma University Yogyakarta Indonesia.
サナタダルマ大学（インドネシア）教員
 - ・ Officer (Senior Technical Specialist).
役員（上級技術専門員）
 - ・ Academic Researcher.
学術研究員
 - ・ Assistant Professor (Lecturer).
助教（講師）
 - ・ Scientist.
科学者
 - ・ Professional.
専門職
 - ・ Research Officer.
研究職
 - ・ Research Scientist.
研究職
 - ・ Ph.D. student.
博士課程学生
 - ・ Researcher.
研究員
 - ・ Faculty Member.
教員
 - ・ University academic (Lecturer).
大学教員（講師）
 - ・ Associate professor, University of Veterinary Science, Myanmar.
ミャンマー獣医学大学 准教授
 - ・ Researcher.
研究員
 - ・ A biology teacher in high school.
高校の生物学教師
 - ・ Post-doctor in China.
中国にてポスドク
 - ・ Researcher.
研究員
 - ・ Researcher.
研究員
 - ・ Postdoc researcher.
ポスドク研究員
 - ・ Researcher in Indonesian Governmental Institution.
インドネシア政府機関研究員
 - ・ Researcher.
研究員
 - ・ An assistant professor.
助教
 - ・ Lecturer.
講師
 - ・ Research and Development Manager at Research Institute.
研究機関の研究開発担当者
 - ・ Researcher.
研究員
 - ・ Researcher.
研究員
 - ・ Postdoc researcher.
ポスドク研究員
 - ・ Post-doctoral researcher.
ポスドク研究員

- ・ Researcher.
 研究員
- ・ Employee.
 従業員
- ・ Job hunting.
 就職活動中
- ・ Clinical translational scientist.
 臨床トランスレーショナルサイエンティスト
- ・ Lecturer.
 講師
- ・ Post-doc.
 ポスドク
- ・ Assistant Professor.
 助教
- ・ Faculty at a State-Owned University (Full Professor).
 国立大学教員（正教授）
- ・ Associate Senior Lecturer at Örebro University, Sweden.
 スウェーデン・エーレブロー大学准上級講師
- ・ A faculty member in the university.
 大学教員
- ・ From 12, DEC 2022. Postdoctoral at the Institute of Chemical Industry of Forest Products, Chinese Academy of Forestry (CAF).
 2022年12月12日より中国林業科学院林産化学工業研究所にて博士研究員。
- ・ Prof in Huazhong Agricultural University, Hubei Wuhan, PR China.
 中国華中農業大学教授、湖北省武漢市。
- ・ Venture capital investing.
 ベンチャーキャピタルの投資。
- ・ An associate professor in a university.
 大学准教授。
- ・ Still searching for job.
 求職中
- ・ Teacher in University.
 大学教員
- ・ Management of scientific research projects and foreign affairs.
 科学研究プロジェクトの管理、対外業務
- ・ Professor in Environmental Science at Northwest A&F University, China.
 中国西北 A & F 大学環境科学科教授

2. 修了後、ずっと現在の職場で働いていますか？

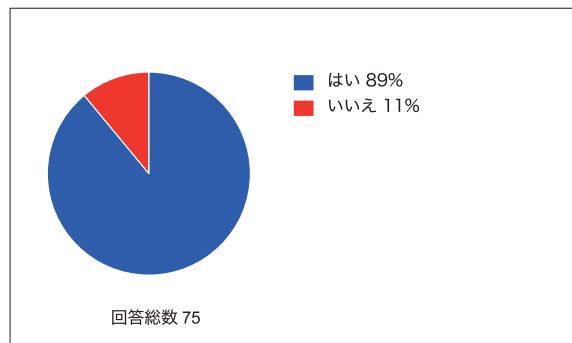


3. (2で「いいえ」と回答した場合) 修了以降に従事した職業を差し支えない範囲で教えてください。

- ・ Research planning, management, and execution.
 研究の企画・運営・実行
- ・ I wanted to broaden my perspective and experience a new field challenging in a new environment.
 新しい環境で視野を広げ、新しい分野に挑戦してみたいと思った。
- ・ Post-doctoral researcher at Ohio State University.
 オハイオ州立大学博士課程研究員
- ・ Academic Assistant - IPB University.
 アカデミックアシスタント - IPB 大学
- ・ Meiji Indonesia Apprentice Program.
 明治インドネシア実習生プログラム

- ・ Research Assistant - Eijkman Institute for Molecular Biology.
リサーチアシスタント - Eijkman Institute for Molecular Biology
- ・ Research Assistant - EXEINS Health Initiative.
リサーチアシスタント - EXEINS ヘルスイニシアティブ
- ・ I was also a university lecturer in my previous job but in a different institution.
前職でも大学講師をしていましたが、所属機関は異なります。
- ・ 1. Postdoc at HU 動物機能栄養学研究所 2. JSPS Postdoc at HU 動物機能栄養学研究所
1. 北大農学研究院動物機能栄養学研究室でのポストドク 2. 北大での JSPS ポストドク研究員 (動物機能栄養学研究室)
- ・ Lecture at one of the institutes in Bandung, Indonesia.
インドネシア・バンドンの研究所で講義を担当。
- ・ Researcher at the Ministry of Forestry, Indonesia; Assistant Prof. at Indonesia International Institute for Life Sciences.
インドネシア林業省研究員, インドネシア国際生命科学研究所助教
- ・ PIC for external collaboration research.
外部共同研究のための PIC
- ・ Soil conservation program.
土壌保全プログラム
- ・ Advisor for compost production and quality.
コンポストの製造と品質に関するアドバイザー
- ・ Developing slow-release fertilizer, Black soldier fly, vermicompost, and biochar.
緩効性肥料, アメリカミズアブ, ミミズ堆肥, バイオチャーの開発
- ・ Soil Survey for new satellite plantation.
新規サテライトプランテーションのための土壌調査
- ・ Life Cycle Assessment.
ライフサイクルアセスメント
- ・ Researcher.
研究員
- ・ Scientist in the institute.
研究所研究員
- ・ Soil Analyst, Research Assistant, Soil Consultant.
土壌分析家, 研究助手, 土壌コンサルタント
- ・ Since graduation (2016-2021), I have worked in BPPT Indonesia (Agency for the assessment and application of technology), and Now (2022), I am working as a researcher in the Lab of Modification Weather Technology, National Research and Innovation Agency.
卒業後 (2016-2021), BPPT Indonesia (技術の評価と応用のための機関) で働き, 現在 (2022) National Research and Innovation Agency, Lab of Modification Weather Technology で研究員として働いています。
- ・ Forest researcher.
森林研究員
- ・ Researcher (before the lecturer job).
研究員 (講師になる前)
- ・ Have worked as a post-doc research fellow under a JICA-funded project at Hokudai but implemented in Zambia.
北大の JICA プロジェクトでポストドク研究員として勤務 (ザンビアで実施)。
- ・ Postdoc researcher 6 months.
ポストドク研究員 6ヶ月
- ・ Worked at another university as a technical staff and postdoc.
他大学でテクニカルスタッフ, ポストドク
- ・ Postdoctoral training, senior research, specialist, lead researcher, clinical translational scientist.
ポストドク, 上級研究員, 専門家, 主任研究員, 臨床トランスレーショナルサイエンティスト
- ・ Senior Scientist at a National Research Institute.
国立研究所のシニアサイエンティスト
- ・ I completed my Master's at HU. After that, I did my Ph.D. at University College Cork (Ireland), before moving to Sweden and starting a postdoc at Örebro University.
私は北大で修士を取得しました。その後, コーク大学 (アイルランド) で博士を取得し, スウェーデンに移動してエーレブロー大学でポストドクを開始しました。
- ・ Postdoc in University of Guelph, ON, Canada.
ゲルフ大学 (カナダ, オンタリオ州) でポストドク
- ・ Firstly, I worked at PricewaterhouseCoopers as an auditor. After two years, I worked in a consulting firm for one year. Then, I transferred to a firm to do venture capital investing.
まず, PricewaterhouseCoopers で監査として働きました。2年後, コンサルティングファームで1年間働きました。その後, ベンチャーキャピタルの投資を行う会社に転職した。

4. 北大で研究したことは現在の職業に活かされていますか？



5. (4で「はい」と回答した場合) どのように活かされていますか？

- ・ It gave me the skills and knowledge to improve my current work.
現在の仕事を改善するためのスキルや知識を得ることができた。
- ・ It provides crucial knowledge in tropical peatlands' sustainable development in my country. Expert opinions in the field were also highly accessible.
私の国での熱帯泥炭地の持続可能な開発において、重要な知識を与えてくれた。この分野の専門家の意見も非常に参考になりました。
- ・ Quality of data analysis and effective planning of the experiment.
データ解析の質、実験の効果的な計画。
- ・ The research was in line with the scope of the current job.
現在の仕事の範囲に合致した研究であった。
- ・ HU's name value itself is great, and they thought that people who graduated with Ph.D. in Japan as a good scientist.
北大のネームバリュー自体が素晴らしく、日本で博士号を取得した人は優秀な科学者であると思われた。
- ・ Experimental skills, knowledge, etc., that I have learned while I was a student.
学生時代に身につけた実験技術・知識など。
- ・ It made me clearer on some topics which related to my study background.
自分の研究背景と関連するテーマをより明確にすることができました。
- ・ I worked and learned about recombinant protein at HU, and those experiences led me to my current work.
北大で組換えタンパク質について学び、その経験が現在の仕事につながっています。
- ・ A good foundation.
基礎ができた。
- ・ I benefited from the skills in research work I'd done in the master course.
修士課程で行った研究のスキルが役に立っています。
- ・ I can use the knowledge from my master's degree to continue.
修士課程で学んだことを活かして、現在も研究を続けています。
- ・ Help my scientific research work to have laid the foundation.
私の科学的研究活動の基礎作りに役立っています。
- ・ The basic knowledge of the expertise.
専門分野の基礎知識。
- ・ It gave me an excellent portfolio for my entrance, and currently, I am still using the connection I have in HU to have academic collaboration.
入学時に素晴らしいポートフォリオを提供してくれたし、現在も北大で得たコネクションを利用して学術的な共同研究を行っている。
- ・ I am continuing the research in my current work although not in the perfect way because of the limitation of instruments.
現在の仕事でも、装置の制約から完全な形ではありませんが、研究を続けています。
- ・ My postdoc research in hydrogen (H₂) gas production is related to my current research in my current company, so I can still use some of my knowledge and experimental skill in my current job.
ポストドクで行った水素 (H₂) ガス製造の研究は、現在の会社での研究に関連しているので、知識や実験技術の一部を現在の仕事に生かすことができる。
- ・ The previous research theme is explored to further research in my current job.
前職の研究テーマが現職の研究にも活かされている。
- ・ It established an important basis for my current research work.
現在の研究活動の重要な基礎となった。
- ・ Established the research paper after returning to my home country, started a collaboration with the previous supervisor, and received a research grant from Japan.
帰国後、前任の指導教官と共同研究を開始し、日本から研究助成を受け、研究論文を完成させた。
- ・ I learned basic knowledge and research experience in animal studies at Hokkaido University, in my current research. I do research on nutrient determination, bioactive compounds, and also animal studies. Therefore, I used my experience in

my Master's and Doctor studies in my current work. If there is an opportunity in the future, I also would like to go to Hokkaido University to gain more knowledge and skills in the lab, etc.

北海道大学で動物実験に関する基礎的な知識と研究経験を学びました。現在の研究では、栄養価の測定や生理活性物質の研究、また動物実験などを行っています。そのため、修士・博士課程での経験が現在の仕事に活かされています。将来、機会があれば北海道大学に行き、研究室などでより多くの知識と技術を身につけたいと考えています。

- My Ph.D. work was screening for PGPR for plant growth, and my current job involves screening yeasts for various purposes, so my knowledge of screening microbes is rooted in my Ph.D. study.
博士課程では植物の成長を促す PGPR のスクリーニング、現在の仕事では品種改良を目的とした酵母のスクリーニングを行っており、微生物のスクリーニングに関する知識は博士課程で学んだことが根底にあるのです。
- The effective research skills for doing my research and teaching my student.
自分の研究や学生への指導に有効な研究スキル。
- Can be used in my lecture.
講義で使える。
- Companies in Indonesia are starting to measure their carbon emissions due to carbon taxes. This is where my research on carbon emissions began to be implemented in the company where I work.
インドネシアでは、炭素税の導入により、企業が二酸化炭素排出量の計測を始めています。そこで、私が勤めている会社でも、炭素排出量に関する研究が実施されるようになったのです。
- It was an important study experience for me, improving my skills in scientific work.
これは私にとって重要な研究経験であり、科学的な仕事における私のスキルを向上させるものでした。
- Enhanced my skill and capability.
自分のスキルや能力を向上させた。
- Very.
すごく活かされています。
- Environmental issues related to global warming are still a hot topic of discussion.
地球温暖化に関する環境問題は、今なおホットな話題です。
- It has become my current research area.
現在の研究テーマになっている。
- Research experience when studying at HU has had many influences on my idea.
大学での研究経験は、私のアイデアに大きな影響を与えました。
- The skill and techniques I learned can be taught to my students and fellow young researchers.
私が学んだ技術や技能は、学生や同僚の若手研究者に教えることができます。
- I am gradually transferring the knowledge related to my research techniques to my students and colleagues.
私は、自分の研究技術に関連する知識を、学生や同僚に徐々に伝えているところです。
- My research at HU provides further research conducted in my job and teaching materials.
北大での研究は、私の仕事と教材にさらなる研究をもたらしてくれる。
- Able to apply new methods, which I learned during my study.
研究中に学んだ新しい方法を応用することができる。
- Every time I do my research, including doing experiments, reading papers, giving presentations, and writing reports, I will always remember Uraki sensei's instructions.
実験、論文、発表、レポート作成など、研究をするたびに浦木先生の指導を思い出しています。
- Supporting the daily activity as a researcher.
研究者としての日々の活動を支える。
- Understanding the details and politics of academic research.
学術研究の詳細と思想を理解する。
- I am making full use of the knowledge I have learned.
学んだ知識をフル活用しています。
- Instilling a scientific mindset.
サイエンティフィック・マインドを植え付ける。
- My work is still related to sustainable agriculture production, so I'm more informed on sustainability issues.
現在も持続可能な農業生産に関わる仕事をしているため、持続可能性の問題には詳しい。
- Jumpstart both in Tropical Peatland Research and also instrumental in the establishment of Tropical Peat Research Institute.
熱帯泥炭地の研究を開始し、熱帯泥炭研究所の設立に貢献した。
- I am working as an advisor in plant protection in an oil palm company, and one of my tasks is to ensure the use of biological control in oil palm practice, the same as my lab in HU was majoring in biological control in agriculture.
アブラヤシ会社で植物防疫のアドバイザーを務めています。アブラヤシ栽培における生物的防除を確実に行うことが私の仕事の一つです。
- The theme of my work right now is similar to my Ph.D. project, which is about electrode production.
今の仕事のテーマは、博士課程のプロジェクトと似ていて、電極の製造に関するものです。
- It has been helping me to see the problems from a different angle from before; while my current job probably has nothing to do with my research, the basic technique, as well as the knowledge I learned from my research, have been a great help for my current job.
今の仕事は研究とは関係ないかもしれませんが、研究で学んだ基本的な技術や知識は、今の仕事に大いに役立っています。

- ・ The academic training from HU has affected my scientific thinking and performance in all the jobs I have worked.
北大でのアカデミックなトレーニングは、私が働いてきたすべての仕事において、私の科学的思考とパフォーマンスに影響を与えています。
- ・ In my current workplace, foreign graduates are still rare.
現在の職場では、外国人新卒者はまだ珍しい。
- ・ I am still working on research on a metabolic disease that I learned about in HU post-graduate course.
現在も大学院で学んだ代謝性疾患の研究に携わっています。
- ・ I can translate my research into my daily research and scientific activities in my current profession. I can share my knowledge and skill with my students.
現在の職場で、自分の研究を日々の研究や科学活動に反映させることができる。自分の知識や技術を学生に伝えることができる。
- ・ My Master's degree from HU helped me get my Ph.D. position, and the fact that I have studied in Japan enriches my CV showing that I have international experience.
北大の修士号は、私が博士号を取得するのに役立ちましたし、日本で勉強したという事実は、私が国際的な経験を持っていることを示す、私の履歴書を豊かにしてくれました。
- ・ I am still working on related research in my current job.
現在の仕事でも、関連する研究に取り組んでいます。
- ・ Research thinking and skills.
研究の考え方やスキル。
- ・ 1. Studies at Hokkaido University are the starting point of my academic career for the researching now I am still carrying on is the same topic as in HU. 2. the research methods I used were learned from HU.
1. 北海道大学での研究は私の学問的キャリアの出発点であり、現在行っている研究は、北海道大学での研究と同じテーマで行っています。2. 研究方法は、北海道大学で学んだものです。
- ・ The attitude and lessons, experiment lessons, and communication skills, especially with people from different countries.
研究に対する姿勢や授業、実験、コミュニケーション能力など、特に異なる国の人たちとの交流が大切だと思います。
- ・ The thinking, technique, and writing skills obtained from HU helped me to be a scientific researcher.
北大で学んだ思考力、技術力、文章力は、科学的研究者としての私を助けてくれました。
- ・ Improving my research level.
自分の研究レベルの向上。
- ・ My job is mainly managing scientific research projects on post-harvested grain. The research experience in HU helps me better understand and manage projects.
私の仕事は、主に収穫後の穀物に関する科学的研究プロジェクトを管理することです。北大での研究経験は、プロジェクトの理解や管理に役立っています。
- ・ I continue the study field. What I have learned about the field at HU is what China needs in recent years.
私は研究を続けています。私が北大で学んだ分野は、近年の中国が必要としているものです。

6. 就職の観点から北大で有効だったと感じたものは何ですか？

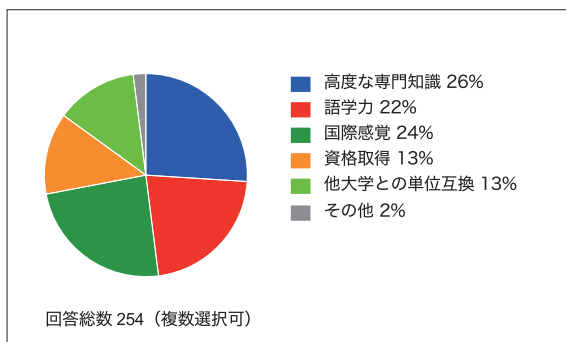
- ・ I think the most effective was society.
最も効果があったと思うのは、人間関係。
- ・ Research skills and knowledge.
研究スキルや知識。
- ・ Collaboration.
共同研究。
- ・ The environment and research life were good.
環境と研究生生活は良好であった。
- ・ During my Ph.D., I learned a lot from writing a basic protocol, designing experiments, and troubleshooting. Those skills are very crucial when you look for jobs. HU students are relatively well-trained.
博士課程では、基本的なプロトコルの書き方から、実験計画、トラブルシューティングまで、多くのことを学びました。それらのスキルは、就職活動をする際に非常に重要です。北大の学生は比較的よく訓練されています。
- ・ Facilities for supporting students.
学生をサポートする施設。
- ・ Research skills and lab management.
研究スキルやラボの管理。
- ・ I can give my colleagues and clients got a new image of HU.
同僚やクライアントに新しいイメージを持たせることができる。
- ・ 今の仕事と自分の研究はほぼ関係ないですが、学校で学びた考え方が役に立っています。新しい業界でも他者より多少早くに慣れます。
- ・ Supervisor and lecturing.
スーパーバイザーおよび講義。
- ・ Teaching and practice of scientific research activities.
科学研究活動の指導と実践。
- ・ Physical strength and vigor.
体力と活力。

- Excellent research facility and standard.
優れた研究設備と水準。
- collaboration techniques, and time management.
共同研究技術, 管理時間。
- Various experiences at HU (studying abroad, Networking, lab life).
北大での様々な経験 (留学, ネットワーキング, 研究室生活)。
- Open discussion for research.
研究に対するオープンな議論。
- Advisor, professors, research facilities, environment, everything is very ready and very good.
指導教官, 教授陣, 研究施設, 環境, すべてが整っており, 非常に良い。
- HU Ph.D. program focuses highly on research, which is beneficial for my current job; it aligns well.
北大の博士課程は研究に非常に重点を置いており, 私の現在の仕事にとって有益であり, うまく調和している。
- Modern knowledge, research facilities, international image, and an especially good teacher.
現代の知識, 研究施設, 国際的なイメージ, そして特に良い先生。
- Its program.
プログラム。
- Educational process (We can meet our supervisor almost every day, so it is easy to communicate and discuss research, senpai always helps kohai, etc.)
教育プロセス (ほぼ毎日指導教員に会えるので, コミュニケーションや研究についての議論がしやすい, 先輩がいつも後輩を助けてくれる, など)。
- Presentation, conference.
プレゼンテーション, 学会。
- Enhanced my skill and capability to clarify problems, especially for agriculture and soil concepts.
特に農学や土壌学の分野で, 問題を解明する能力とスキルが向上した。
- hard work and discipline taught to students.
努力と規律を学生に教えてくれた。
- The experiences that I achieved at HU helped me to do my current job, particularly in doing research.
北大で得た経験は, 現在の仕事, 特に研究に役立っています。
- Reception of individual, technical, and social skills through the pedagogic procedure of HU.
北大の教育方法を通じて, 個人的, 技術的, 社会的なスキルを身につけることができた。
- I could promote it after obtaining the degree at HU.
北大で学位を取得した後, 昇進することができた。
- Effective.
効果的。
- Seminar of paper sharing.
論文セミナー。
- Since my current job is still about academic research, the things I mentioned above were effective. In addition, the help and instructions I gained from other professors at HU were also impressive and effective. I really appreciate this program.
今の仕事も研究職なので, 上に書いたようなことが効果的でした。また, 他の先生方からの指導も印象的で効果的でした。このプログラムには本当に感謝しています。
- Applying advanced technology in the research.
先端技術の研究への応用。
- Knowledge.
知識。
- Teaching the expectations and rigors of research.
研究に対する期待や厳しさを教えてくれる。
- My former colleague from Indonesia and I got different research topics for our degree when I was studying at HU. I usually help my colleague do her research, and her topic is very useful for our current job. However, for my research topic, almost nothing is effective and useful. maybe a little bit about the fundamental theories that I learned from the research topic. but the research itself, not so much.
私が留学していた頃, インドネシア出身の元同僚と私は, 学位取得のためにそれぞれ異なる研究テーマを得ました。しかし, 私の研究テーマについては, ほとんど何も役に立ちませんでした。研究テーマから学んだ基本的な理論については多少あるかもしれませんが, 研究そのものについては, それほどでもありません。
- The working system, time management, and discipline I learned from HU school life.
学校生活で学んだ仕事の進め方, 時間管理, 規律など。
- Due to the experimental farm being well established, a deeper and more systematic study is possible.
実験農場が充実しているため, より深く, より体系的な研究が可能である。
- The teaching of independent work and problem-solving.
自主的な作業と問題解決のための教育。
- Research work mostly.
研究作業の大部分。
- The financial and human support in the research collaboration; also with the availability of scholarships.

- 研究協力における資金的・人的支援，奨学金制度があること。
- ・ I can start research without the need for Japanese language ability.
日本語能力がなくても研究を始めることができる。
 - ・ The effectiveness of this program is highly knowledgeable professors, teaching skills that exponentially increase students' understanding and competence, as well as abundant research resources.
このプログラムの有効性は、高い知識を持つ教授陣，学生の理解力と能力を飛躍的に高める指導力，そして豊富な研究資源にあります。
 - ・ The working ethics at HU are very effective, or should I say very effective.
北大の労働倫理は非常に効果的というべきでしょうか。
 - ・ Very good.
非常に良い。
 - ・ Broaden overview of academic experience.
学問的経験における概観を広げる。
 - ・ Very effective.
非常に効果的。
 - ・ I can translate my research into my daily research and scientific activities in my current profession. I can share my knowledge and skill with my students.
自分の研究を現在の職業における日々の研究・科学活動に反映させることができる。自分の知識や技術を学生と共有できる。
 - ・ I learned laboratory techniques that are relevant to my field and had the chance to work in a multicultural environment.
自分の専門分野に関連する実験技術を学び、多文化な環境で働く機会を得た。
 - ・ The attitude and learning method towards an unknown topic.
未知のテーマに対する姿勢と学習方法。
 - ・ Research, seminar, paper, et al.
研究，ゼミ，論文，その他。
 - ・ It is not easy to complete a research project in an unfamiliar environment. It was the studies and research at Hokkaido University which made it easier for us to go back to work in a familiar environment.
慣れない環境で研究プロジェクトを完成させるのは容易なことではありません。北海道大学での学びと研究があったからこそ、慣れ親しんだ環境に戻って仕事をすることができたのだと思います。
 - ・ Open-minded and curious.
オープンマインドと好奇心。
 - ・ The tireless guidance from instructors at HU ignited my love for science and education.
北大の先生方のたゆまぬ指導が、私の科学と教育への愛に火をつけました。
 - ・ Learn thinking.
思考することを学んだ。
 - ・ Scientific research attitude, Lab management methods, experimental methods, international environment, etc.
科学的な研究姿勢，ラボの運営方法，実験方法，国際的な環境等々。
 - ・ I learned how to think and how to solve the problem at HU. The great support from my supervisor let me know how to be an advisor and how to make the team work together.
北大で考え方や問題解決の方法を学びました。指導教官からの素晴らしいサポートにより、指導教官としてのあり方や、チームワークの作り方を学びました。

E. 北大に対して期待することについてお聞かせください。

1. 修了生あるいは在学生の立場から、これからの北大の教育に期待することは何ですか？



2. (1で「その他」と回答した場合) それは何ですか？

- ・ International networks and Cooperation.
国際的なネットワークと協力。
- ・ Physical strength and vigor.
体力・気力。

- In my experience, there were only a few lecture classes, and some of them were in Japanese, and it was difficult for foreign students to understand. In my opinion, there should be more lectures to equip us with more knowledge, and all of them (for foreign students) should be in English.
私の経験では、講義の数は少なく、日本語の講義もあり、留学生には理解しにくかったです。私見ですが、もっと知識を身につけるための講義を増やすべきで、(留学生には)すべて英語であるべきだと思います。
- Increased collaboration with Alumni.
同窓生との連携強化。
- As a professor in a university, I hope my student have better chances to study at HU.
大学の教授として、自分の学生が北大で教育を受ける機会がさらにあればと思います。

3. 北大(または大学院農学院)に対するご意見ご要望があればお聞かせください。

- This program was already good.
このプログラムはすでに良いものでした。
- HU is a great place to study and prepare students for academic and research sectors. More activities/programs should be planned to encourage and help foreign students to learn Japanese in a faster manner, other than the Japanese language classes currently provided by the university.
北大は、学術・研究分野で勉強し、学生を準備するための素晴らしい場所です。留学生がより早く日本語を習得できるよう、現在大学で行われている日本語の授業以外にも、もっと多くの活動やプログラムが計画されるべきです。
- HU should have funding for students who graduated from HU to collaborate with HU.
北大は、北大を卒業した学生に対して、北大と共同研究するための資金を提供する必要がある。
- Maintenance of good relationships and cooperation with alumna (graduate).
卒業生との良好な関係・協力関係を維持すること。
- I strongly recommend the HU graduate school for the agriculture program. You will learn from basic science to apply to a variety of animal food. It was my best time learning new things and became to grow up as a scientist.
私は、北大大学院の農学研究科を強くお勧めします。基礎科学から様々な動物の食への応用まで学ぶことができます。新しいことを学び、科学者としての自分を成長させる最高の時間でした。
- At that time, some lectures were given in Japanese (I expected to study in English because the instruction said that it was conducted using English).
当時は、日本語の講義もありました(英語での講義と書いてあったので、英語で勉強すると思っていました)。
- Wish there were more classes and research group meetings conducted in English for both non-international and international students together to share knowledge and language.
留学生と外国人留学生が一緒になって知識や言語を共有できるような、英語で行われる授業や研究会などがもっとあればいいと思います。
- HU should encourage open discussion in the English language.
北大は英語を使ったオープンなディスカッションを奨励すべき。
- I found the "koubai" on the -1 floor has a higher price than the normal supermarket by at least 20%. I wonder why, and I think the reason for such kind higher price should be clearly explained or let students know the situation well enough. For personal, I decreased my time to visit koubai after that I knew its price was higher than the normal level.
1階の購買は普通のスーパーより2割以上高い。なぜ、このような高い値段になるのか、その理由を明確に説明するか、学生に十分な情報を伝えるべきだと思います。個人的には、購買の値段が高いことを知ってから、購買に行く回数が減りました。
- Before graduate students in HU, I was an exchange student (HUSTEP). I think the international experience will help me well in adaptability to my next journey in international graduate school as well as further international experience.
大学院生になる前、私はHUSTEPの交換留学生でした。この国際的な経験は、次の国際的な大学院への旅や、さらなる国際的な経験への適応に大いに役立ったと思っています。
- In my current institution, Swiss German University in Indonesia, internship and/or student exchange are mandatory for all bachelor students to fulfill the graduation requirement. To conduct this we have international partners, including HU, and have been sending several students for short research visits under Eisuke Kato-sensei and Maria Stefanie Dwiyananti-sensei. I would like to give much appreciation to HU for hosting our students.
私が現在在籍しているインドネシアのスイス・ドイツ大学では、学士課程の学生が卒業要件を満たすために、インターンシップや学生交換が必須となっています。そのために、北大を含む国際的なパートナーを持ち、加藤英介先生やMaria Stefanie Dwiyananti先生のもとで、何人かの学生を短期研究訪問に送り出しています。学生を受け入れてくれた北大に感謝したいと思います。
- All of our curricula are delivered in English, and we have been welcoming exchange students from our German university partners, either for credit exchange or joint degrees. If such programs work for HU, too, we would be very grateful to be able to welcome your Japanese students to enrich your students' international experience.
本校のカリキュラムはすべて英語で行われ、ドイツの提携大学から単位交換や共同学位取得を目的とした交換留学生を受け入れています。もし北大でもそのようなプログラムがあるのなら、日本の学生を受け入れて、学生の国際経験を豊かにすることができたら、とてもありがたいと思います。
- I would like to know how to do collaboration so the relationship between alumni and HU can be established.
同窓会と北大の関係を構築するために、どのようなコラボレーションができるか知りたい。
- Establishing Homecoming day event (networking with the current students with alumni/and instructors).
ホームカミングデーの開催(在校生とOB・OG、講師とのネットワーキング)。

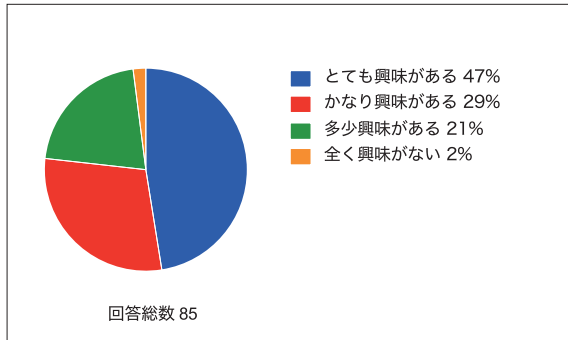
- Needs more open research-based collaboration with foreign countries.
海外ともっとオープンな研究協力が必要。
- It would be nice if there were postdocs, visiting professors, short-term exchange programs for students or lecturers, and researchers.
ポストドク、客員教授、学生や講師、研究者の短期交換プログラムなどがあると良い。
- Short-term research training program for foreign students or Instructors.
留学生や講師の短期研究研修制度があるとよい。
- Permission to be able to access the HU digital library for HU alumni.
北大卒業生の北大デジタルライブラリーへのアクセス許可
- Alumni meetings.
同窓会。
- Hopefully, HU can continue good collaboration with other universities around the world.
北大が世界の他大学と良好な協力関係を継続できることを期待する。
- Open collaboration between HU and companies that are easy to implement and effective.
北大と企業とのオープンなコラボレーションで、実行しやすく、効果的なもの。
- Graduate School of Agriculture: more international collaboration in research, exchange students with other universities in doing research.
農学研究科：国際的な研究協力、他大学との研究交流の強化。
- More emphasis on collaborative research and student exchange programs.
共同研究、学生交換プログラムにもっと重点を置く。
- Enhance opportunities to exchange with other universities in the world.
世界の他大学との交流の機会を充実させる。
- Seminar of paper sharing to be in English when foreign students attend it.
文献セミナーは、留学生が参加する場合は英語であるべき。
- HU is a beautiful school. I will visit it again when I have a chance.
北大はとても美しい学校です。機会があれば、また訪れたいと思います。
- I feel that the language barrier is by far the biggest obstacle to obtaining the best possible education at HU. Most events, research seminars, and announcements are in Japanese, so foreign students often lack exposure to important scientific advances and networking opportunities.
言葉の壁は、北大で最高の教育を受けるための最大の障害だと感じています。イベントや研究セミナー、発表のほとんどが日本語で行われるため、留学生は重要な科学的進歩やネットワーキングの機会に触れることができないことが多いのです。
- HU gave me wonderful experiences. One thing I regret the most is that I cannot speak Japanese. I wish I could give help to any Japanese that I meet in Indonesia as much as Japanese people had helped me while I lived in Japan, and it is difficult because of the language barrier.
北大は私に素晴らしい経験を与えてくれました。最も残念なことは、私は日本語を話すことができないことです。日本にいるときに日本人に助けられたように、インドネシアで出会った日本人に助けられるようにしたいのですが、言葉の壁があるので難しいです。
- Perfect.
完璧。
- I think it would be better to promote cooperation and information-sharing between foreign students. It may not be possible or ideal to force more English on the Japanese staff and students, so a scientific community communicating in English would be very helpful in that regard.
留学生同士の協力や情報交換をもっと促進したほうが良いと思います。日本人スタッフや学生にもっと英語を強制することは不可能かもしれませんが、理想的でもありません。英語でコミュニケーションする科学者コミュニティは、その点で非常に有用です。
- More accommodation for international students.
留学生向け宿舎を増設。
- HU will have an entrance test online.
北大はオンラインで入学試験を行うべきです。
- Thank you so much for giving me this great opportunity for me, and thank you to everybody who takes care of this program. Arigatogosaimasu.
このような素晴らしい機会を与えてくださったこと、そしてこのプログラムに携わってくださった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。
- Since it was the first year of accepting Japanese students to the English course, there were few interactions between other students from overseas and Japanese students in the English course. I wish I could have gotten more information and communicated with others.
英語コースに日本人を受け入れた初年度ということもあり、他の留学生と英語コースにいる日本人学生との交流が少なかったです。もっと情報を得たり、コミュニケーションをとったりできればよかったですと思います。
- In my case, mental health has been a great problem, especially during the pandemic season. For someone who came to HU alone and no other foreign students in the same year as me, it's been a little bit difficult to follow everything as everyone around me seems already to know what they are supposed to do. And probably the problem is in me that I can't seem to bring myself to ask for help.

私の場合、特にパンデミック期にはメンタルヘルスが大きな問題になりました。同学年の留学生がおらず、一人で留学してきた私にとって、周りはずでに何をすべきかを知っているようで、すべてについて行くのは少し困難でした。そして、おそらく問題は、助けを求めることができない自分にあるのだと思います。

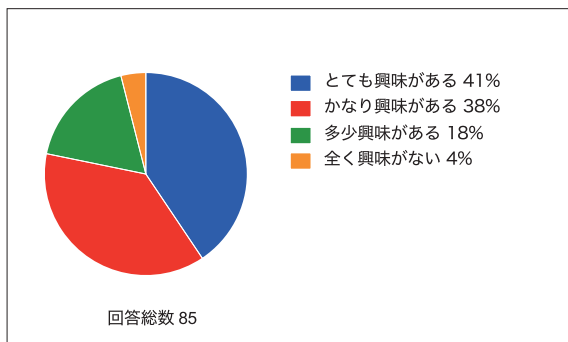
- ・ I just hope that HU can save someone in the future.
将来、北大が誰かを救えるようになることを願うばかりです。
- ・ None.
なし。
- ・ Virtual alumni gathering to update science information.
科学情報を更新するための仮想同窓会。
- ・ I am very satisfied with my experience during the HU post-graduate course.
北大大学院での経験にとっても満足しています。
- ・ Please maintain good collaborations with Alumni. An Alumnus is an ambassador of HU. They may open/create good international collaboration with HU in their country. In such cases, priority should be given to academicians/ scientists who are directly involved with research and policy-making. This sort of collaboration will definitely uphold the reputation of HU. Moreover, academician/scientist alumni may contribute to choosing a good candidate for higher study in HU because they know who can sustain and contribute to the HU environment.
OB・OGの方々と良い関係を保ってください。同窓生は北大のアンバサダーです。彼らは自国において、北大との良好な国際的協力関係を構築する可能性があります。その場合、研究や政策立案に直接携わっている学者や科学者が優先されるべきです。このようなコラボレーションは、間違いなく北大の評判を高めることになるでしょう。さらに、学者や科学者の同窓生は、誰が北大の環境を維持し、貢献できるかを知っているので、北大での高等教育のための良い候補者を選ぶことに貢献するかもしれません。
- ・ I want to establish collaboration between HU and my university and sign MOU, but I met some difficulties. Maybe because we do not have any co-research or project right now.
北大と私の大学の間で協力関係を築き、MOUを締結したいのです。しかし、私はいくつかの困難に直面しました。多分、今、共同研究やプロジェクトがないからでしょう。
- ・ 1. Send HU students to China or other countries. Most Japanese students didn't have an international view or international sensibility. 2. more financial support for exchange projects, students/professors/and others.
1. 北大の学生を中国や他の国へ留学生を派遣したほうが良い。日本の学生は国際的な視野、国際感覚を持ち合わせていない人が多い。2. 交流事業、学生、教授、その他に対する資金援助の充実。
- ・ Nothing else, thank you.
その他は特にありません、ありがとうございました。
- ・ In my eyes, HU and the Graduate School of Agriculture were perfect.
私の目には、北大と農学研究科は完璧に映りました。
- ・ I did all my MSc courses online because I did my program during the Covid19 period. However, I feel it's best that students have face-to-face classes because it can help students to interact more and build better relationships.
私はCovid19の期間にプログラムを行ったので、MScのコースはすべてオンラインで行いました。しかし、学生が直接顔を合わせて授業を受けることが、より多くの交流とより良い関係を築くのに役立つと私は感じています。
- ・ I think it would be necessary to establish a network for the English program. Collect the current information (job and email) from the Alumni and send them to us. It may be helpful to make a great link.
英語プログラムのネットワークを構築することが必要だと思います。同窓生から現在の情報（仕事、Eメール）を集めて送ってほしい。そうすれば、いいつながりができるかもしれません。

F. 以下の事項にどの程度興味を持てるか、お聞かせください。

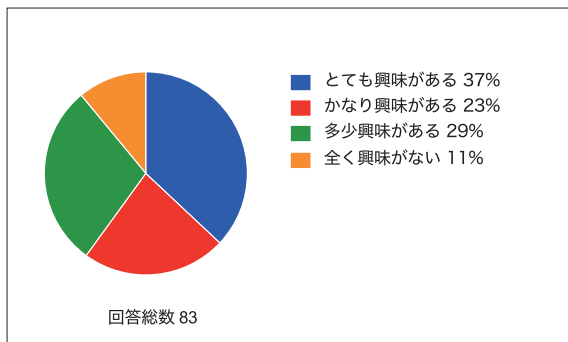
1. 本プログラムへの候補者として適当な学生・研究者を探すこと。



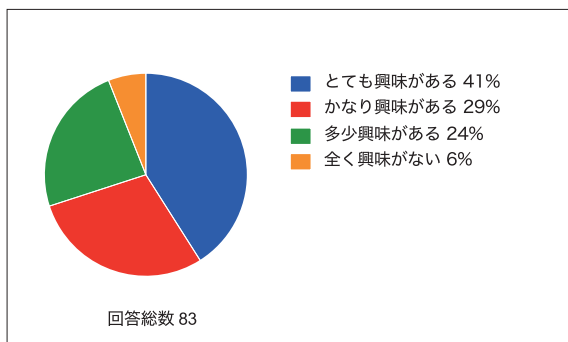
2. 自国で留学候補者の予備審査をすること。



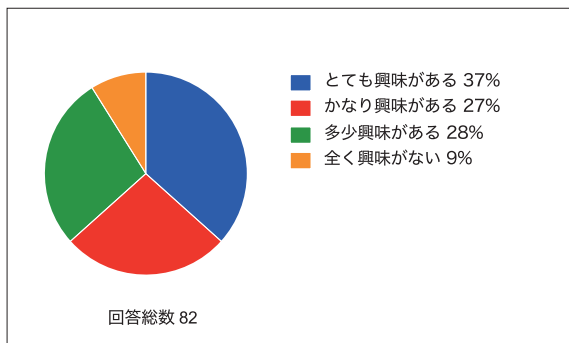
3. 学生のロールモデルとしてあなたのキャリア形成について北大で講演すること。



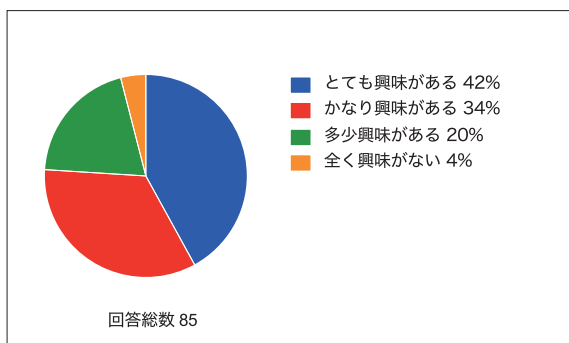
4. 本プログラムの学生に対して就職情報を提供すること。



5. 本プログラムの学生に対して自国での就職の手助けをすること。



6. 上記の事項を意欲的に遂行する“program fellow”を引き受けること。



7. ご自身の言葉でもっと伝えたいことがあれば、ご記入ください。

- ・ There is little publicity about this program in my country.
私の国では、このプログラムについてほとんど宣伝されていません。
- ・ Thank you very much.
ありがとうございました。
- ・ I have been engaging in recruitment for my current company with some universities, including HU's I-Hop office.
私は今の会社のために、北大の I-Hop オフィスを含め、いくつかの大学と採用活動を行っています。
- ・ Please open more opinions from alumni for better HU in the future.
今後、より良い北大にするために、卒業生の意見をもっと聞いてください。
- ・ I really appreciate the opportunity of a lifetime to study at Hokkaido University. I have learned a lot from this program and from my advisor and friends. Of course, I will recommend this program; however, in my current workplace, I teach Master's students, so there are no Bachelor's students I can recommend to the Master's program. That is why for questions 1-2 in this section, I answered 'a little'.
北海道大学で学ぶという一生に一度の機会を与えていただき、本当にありがとうございました。このプログラム、そして指導教官や友人たちから多くのことを学びました。もちろん、私はこのプログラムを推薦しますが、現在の職場では修士課程の学生を教えているので、修士課程に推薦できる学士課程の学生がいません。そのため、このセクションの質問 1-2 では、「少し」と答えました。
- ・ It is possible to recommend graduate students who finish the Master's program to further their study for Ph.D. in Hokkaido, but it is quite hard for the students since they will have only 3 years to study and graduate. From my experience, I think 5 years (2 years for Master's and 3 years for Ph.D.) would be more appropriate since there is enough time to adjust to the new environment before they can focus on their study.
修士課程を修了した大学院生を北海道の博士課程に推薦することは可能ですが、学生にとっては3年間しか勉強できないので、かなり厳しいと思います。私の経験では、5年（修士2年、博士3年）の方が、新しい環境に適応するのに十分な時間があり、勉強に集中できると思います。
- ・ There are so many programs from HU that we can get.
北大のプログラムはたくさんあります。
- ・ I am currently working with a US Biotech company that is a passionate force for global sustainability and improving the lives of all people. Next year we will conduct a research project related to the carbon footprint of several agricultural industries in Indonesia. If possible, we can do cooperation/collaboration, I think it would be great.
私は現在、地球規模の持続可能性とすべての人々の生活の向上のために情熱的な力を持つ、米国のバイオテクノロジー企業で働いています。来年、私たちはインドネシアのいくつかの農業の二酸化炭素排出量に関連する研究プロジェクトを実施する予定です。可能であれば、私たちは協力/コラボレーションを行うことができれば、それは素晴らしいことだと思います。
- ・ The English post-graduate program at HU has created tremendous opportunities for international students to learn cutting-edge research, collaborate with current/future projects, and share advances worldwide. I hope and wish more success for this program and its alumni contributing to the field of science.

北大の大学院英語プログラムは、留学生が最先端の研究を学び、現在あるいは将来のプロジェクトと協力し、その進歩を世界中で共有するための非常に大きな機会を作り出してきました。このプログラムの成功と、科学の分野で貢献する卒業生たちの活躍を願っています。

- ・ I feel my power is not strong enough to give useful help to our program. When I become stronger, I would like to introduce students or give practical help.
私の力不足で、本プログラムのお役に立てないと感じています。もっと強くなったら、学生を紹介したり、実践的な手助けをしたいと思います。
- ・ There are still many things about HU that I didn't understand too well due to my limited Japanese, but I would be happy to help where I can. I am truly thankful to HU for my time there and for the wonderful staff and students.
まだまだ日本語が不自由でわからないことがたくさんありますが、できる限りお手伝いしたいと思います。北大で過ごした時間、そして素晴らしいスタッフと学生たちに心から感謝しています。
- ・ Thank you so much for the opportunity of having a life experience in Japan. I will do anything in my capability to help HU having a good collaboration with Indonesia.
日本で人生経験を積ませていただき、本当にありがとうございました。北大がインドネシアと良い協力関係を築けるよう、私のできることは何でもします。
- ・ Open discussion should be encouraged because it would help to speed up thinking and work progress.
オープンディスカッションは、思考や仕事の進捗を加速させるので、奨励されるべきです。
- ・ I would like to say "Thank you for your support and guidance" to the special program group.
特別プログラムの皆さんには、「ご支援とご指導をありがとうございました」と言いたいです。
- ・ Being a part of the alumni in this program is such an honor, an international academic experience giving many opportunities when I come back to my country. I hope the number of foreign students in HU will continue to increase and have an impact on the education experience in many countries.
このプログラムの卒業生の一員であることは、とても名誉なことであり、国際的な学術的経験は、私が母国に戻ったときに多くの機会を与えてくれます。今後、本学の留学生が増え続け、多くの国で教育体験ができるようになることを願っています。
- ・ 졸업 후 이런 피드백은 너무 좋은 시스템이라고 생각합니다. 감사합니다.
卒業後、このようなフィードバックはとても良いシステムだと思います。ありがとうございます。
- ・ I always want to maintain good communication with my beloved lab. But sometimes, it frustrates me when I don't receive a reply. I would like to request at least a response to our emails so that we understand that our lab didn't forget us.
私はいつも、愛するラボと良いコミュニケーションを保ちたいと思っています。でも、時々、返信がないとイライラしてしまいます。せめてメールの返信があれば、ラボが私たちのことを忘れていなかったと理解できるのですが、お願いしたいです。
- ・ Unfortunately, I didn't have the chance to keep a network at HU since I left Japan. However, I had a great experience at HU and would like to try to reconnect. I have always told people about my experiences there and suggested the Program, and will happily be engaged to spread information about it. For the other tasks, I will gladly help as much as possible, considering my very busy schedule.
残念ながら、私は日本を離れてから北大でネットワークを維持する機会がありませんでした。しかし、私は北大で素晴らしい経験をしましたので、再びつながりを持てるように努力したいと思っています。私はいつも北大での経験について人に話し、プログラムを提案してきました。他の仕事については、私の多忙なスケジュールを考慮し、可能な限り喜んでお手伝いします。
- ・ Nothing else, thank you.
他には何もありません、ありがとうございました。
- ・ The years I spent studying at HU were the best times I can remember.
北大で学んだ数年間は、私の記憶に残る最高の時間でした。
- ・ HU and the Graduate School of Agriculture were really impactful in my life. I'm always grateful.
北大と農学研究科は私の人生に本当に大きな影響を与えました。いつも感謝しています。
- ・ My job is in an academy and almost no contact with students. Therefore, I can only make little for Article F.
私は学会で仕事をしており、学生との接触はほとんどありません。そのため、Fの記事には少ししか書けません。

以上

整理番号	D1010031	
大学名	北海道大学	
プログラム名	包括的先進農学フロンティア育成のための国際教育プログラム	
審査結果	採択	
<p>今回の申請内容は、特別プログラムの趣旨を踏まえた内容となっており、採択となりました。なお、審査委員から下記の所見がありましたのでお知らせします。</p> <p><審査所見></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 留学生への支援が恒常的に運用され、評価体制も学外評価含め確立されている点は高く評価できる。 ○ 従来からの留学生受入れに関する優れた実績に基づく計画が提案されており、実現可能性・持続可能性が十分期待できる。 		
<p>本採択プログラムの優先配置枠数等は下記のとおりです。</p>		
優先配置 枠数 (各年度当り)	A. 修士課程、博士前期課程、又は専門職学位課程：	4 人
	B. 博士課程又は博士後期課程：	4 人
	C. 博士課程（一貫制）：	人
	計	8 人
受入開始時期	2019年10月	
プログラム番号	18001	

図1 英語特別プログラム入学者数の推移(修士課程・経費別)

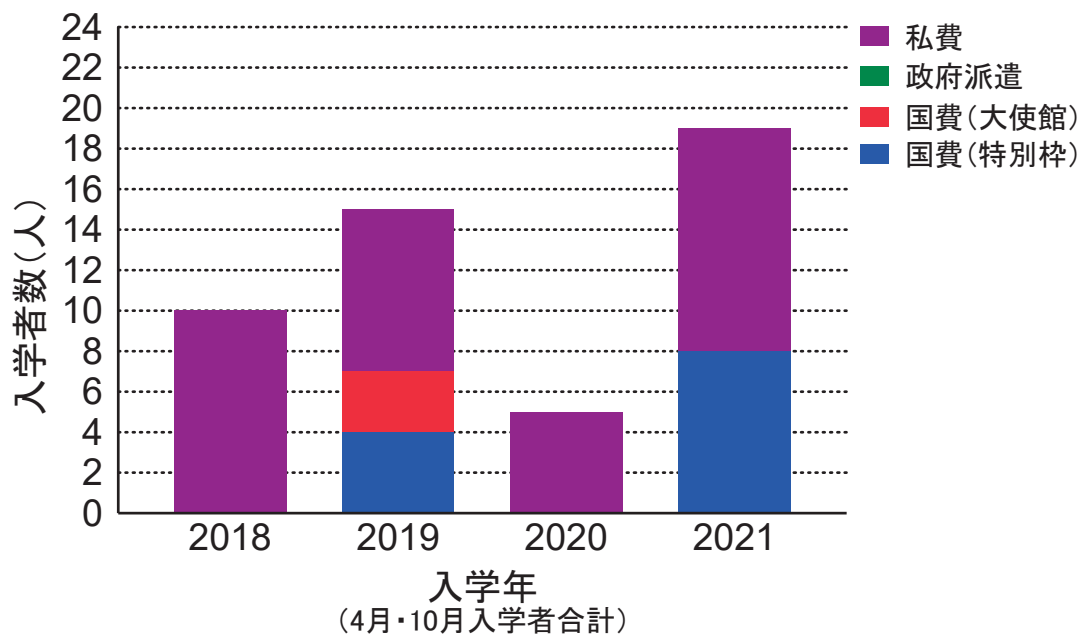


図2 英語特別プログラム入学者数の推移(博士後期課程・経費別)

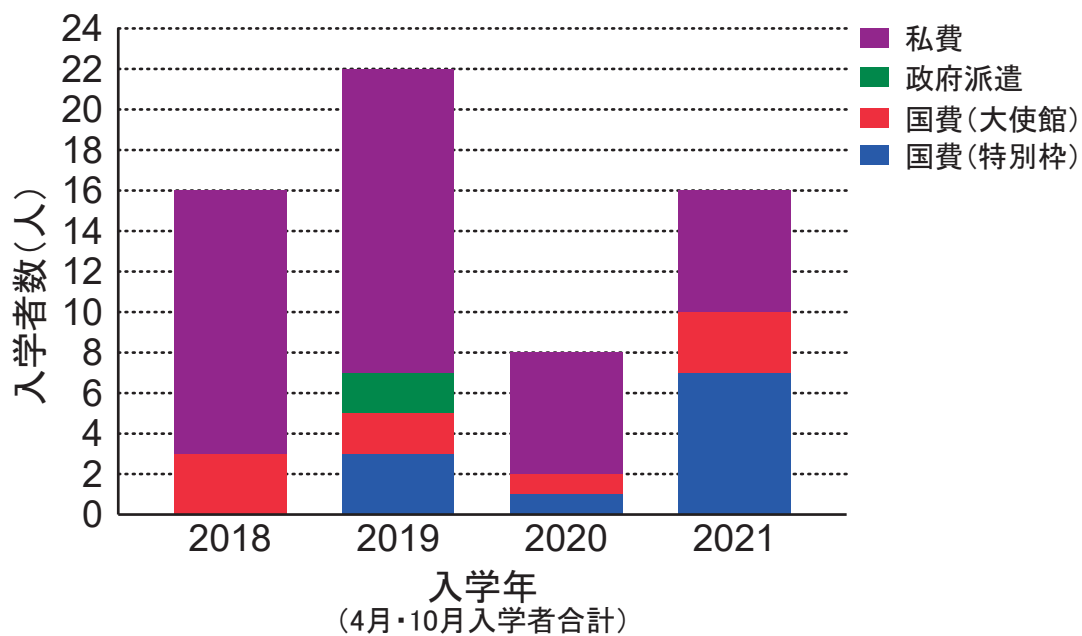
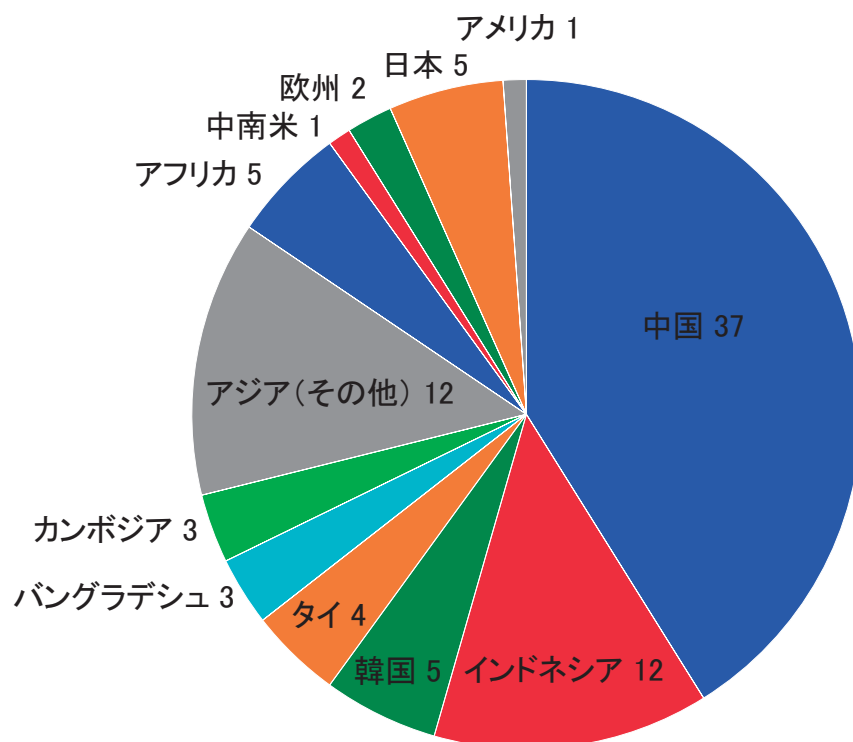


図3 英語特別プログラム入学者数(出身地域別)



2018～2021年4・10月修士・博士後期課程入学者の合計。ただし、前プログラムおよび本プログラムの修士課程修了者でこの期間に博士後期課程に進学した学生は、博士後期課程入学者数に加えない。

図4 英語特別プログラム在籍者数の推移(経費別)

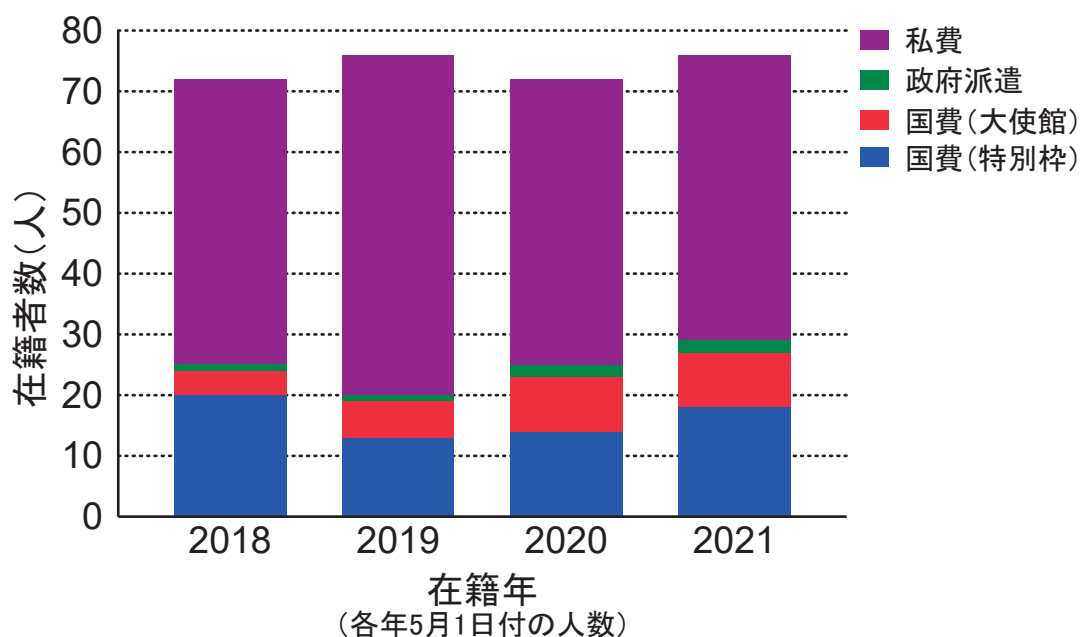


図5 英語特別プログラム在籍者数の推移(出身地域別)

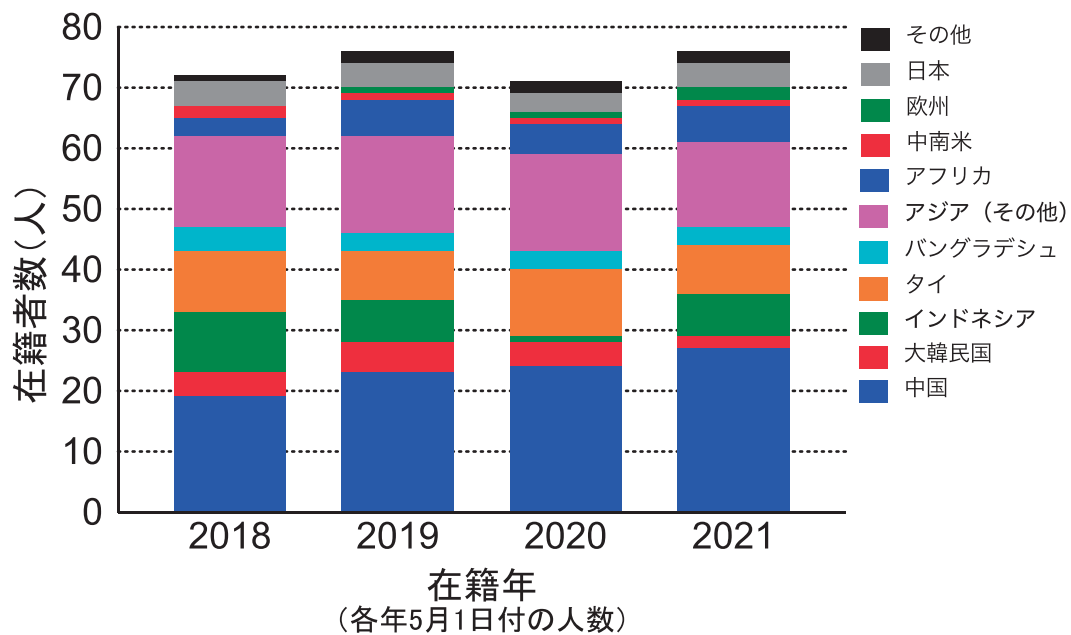


表 1 英語特別プログラム修了状況(2018～2021 年度入学者)

入学年度	課程	入学者数	修了者数 (標準修業年限内)	単位取得 退学	休学	留年	退学	修了率 (%)	単退率 (%)	休学率 (%)	留年率 (%)	退学率 (%)
2018	修士	10	10	0	0	0	0	100	0	0	0	0
	博士	16	14	0	1	2	1	88	0	6	13	6
2019	修士	15	15	0	0	0	0	100	0	0	0	0
	博士	22	22	0	0	0	0	100	0	0	0	0
2020	修士	5	4	0	0	0	1	80	0	0	0	20
	博士	8	—	—	—	1	—					
2021	修士	19	—	—	1	—	—					
	博士	16	—	—	—	—	—					

2018年度博士後期課程入学者のうち、1名が留年、他1名が休学・留年の後に退学。

表 2 英語特別プログラム留学生の研究業績数(2018 年 4 月～2022 年 9 月)

	2018	2019	2020	2021	2022
原著論文数	37	42	56	49	24
総説数	1	0	0	1	0
著書数	1	0	1	2	0
学会発表(国内)	36	33	29	43	13
学会発表(国際)	30	19	7	15	14
受賞数	4	4	5	5	1

表 3 英語特別プログラム修了者の進路(2018～2021 年度入学者)

			人数	
日本国内	大学等	教員	0	11
		研究員	2	
		大学院生	1	
	国立研究所等	研究員	3	
	民間企業	社員	5	
日本国外	大学等	教員	4	14
		研究員	2	
		大学院生	0	
	国立研究所等	研究員	3	
	民間企業	社員	5	
合計			25	25

英語特別プログラム留学生の研究業績一覧（研究室別）

作物栄養学

1. 原著論文

1. Afrida, S., Watanabe, T., and Tamai, Y. Comparison of the ability of several white-rot fungi to biobleach Acacia oxygen-delignified kraft pulp. *Asian J. Biotechnol. Bioresour. Technol.*, **5**, 1-20 (2019).
2. Sha, Z., Watanabe, T., Chu, Q., Oka, N., Osaki, M., and Shinano, T. A reduced phosphorus application rate using a mycorrhizal plant as the preceding crop maintains the soybean seeds' nutritional quality. *J. Agric. Food Chem.*, **67**, 32-42 (2019).
3. Zhang, C., Hiradate, S., Kusumoto, Y., Morita, S., Koyanagi, T.F., Chu, Q., and Watanabe, T. Ionomic responses of local plant species to natural edaphic mineral variations. *Front. Plant Sci.*, **12**, 510-530 (2021).
4. Zhang, C., Tanaka, N., Dwiyantri, M.S., Shenton, M., Maruyama, H., Shinano, T., Chu, Q., Xie, J., and Watanabe, T. Ionomic profiling of rice genotypes and identification of varieties with elemental covariation effects. *Rice Sci.*, **29**, 76-88 (2022).

2. 学会発表（○；国内：3，●；国際：0）

1. ○Zhang, C., Fujiwara, H., Maruyama, H., and Watanabe, T. Different nutritional characteristics between angiosperms and ferns. 日本土壌肥科学会北海道支部秋季大会, 2018年11月, 旭川 (Poster presentation).
2. ○Zhang, C., Maruyama, H., Dwiyantri, M.S., Tanaka, N., Shenton, M., Shinano, T., and Watanabe, T. Ionomic variation of different rice accessions in controlled hydroponic conditions, 日本土壌肥科学会 2020年度岡山大会, 2020年9月8日-10日. 岡山市 (岡山大学, オンライン開催) (Poster presentation).
3. ○Syaifudin, M., Suzuki, M., Maruyama, H., Kubo, K., Watanabe, T., and Shinano, T. A study on potassium application's effect on cesium and strontium uptake in soybean. 日本土壌肥科学会 2022年度東京大会, 2022年9月13日-15日. 東京都 (東京大学) (Poster presentation).

土壌学

1. 原著論文

1. Mukumbuta, I., Uchida, Y., and Hatano, R. Evaluating the effect of liming on N₂O fluxes from denitrification in an Andosol using the acetylene inhibition and N-15 isotope tracer methods. *Biol. Fertil. Soils*, **54**(1), 71-81 (2018).
2. Wang, C., Shang, S., Jia, D., Han, Y., Sauvage, S., Sánchez-Pérez, J.M., Kuramochi K., and Hatano R. Integrated effects of land use and topography on streamflow response to precipitation in an agriculture-forest dominated northern watershed. *Water*, **10**, 633 (2018).
3. Jiang, R., Li, X., Zhu, W., Wang, K., Guo, S., Misselbrook, T., and Hatano, R. Effects of the ridge mulched system on soil water and inorganic nitrogen distribution in the Loess Plateau of China. *Agricu. Water Manag.*, **203**, 277-288 (2018).
4. Naser, H.M., Nagata, O., Sultana, S., and Hatano, R. Impact of management practices on methane emissions from paddy grown on mineral soil over peat in central Hokkaido, Japan. *Atmosphere*, **9**(6), 212 (2018).
5. Desyatkin, A.R., Iwasaki, S., Desyatkin, R.V., and Hatano, R. Changes of soil C stock under establishment and abandonment of arable lands in permafrost area central Yakutia. *Atmosphere*, **9**(8), 308 (2018).
6. Iwasaki, S., Desyatkin, A.R., Fiipov, N., Desyatkin, R.V., Hatano, R. Carbon stock estimation and changes associated with thermokarst activity, forest disturbance, and land use changes in Eastern Siberia. *Geoderma Reg.*, **14**, e00171 (2018).
7. Nagatake, A., Mukumbuta, I., Yasuda, K., Shimizu, M., Kawai, M., and Hatano, R. Temporal dynamics of nitrous oxide emission and nitrate leaching in renovated grassland with repeated application of manure and/or chemical fertilizer. *Atmosphere*, **9**(12), 485 (2018).
8. Chaddy, A., Melling, L., Ishikura, K., and Hatano, R. Soil N₂O emissions under different N rates in an oil palm plantation on tropical peatland. *Agriculture*, **9**(10), 213 (2019).
9. Mukumbuta, I., Shimizu, M., Hatano, R. Short-term land-use change from grassland to cornfield increases soil organic carbon and reduces total soil respiration. *Soil Tillage Res.*, **186**, 1-10 (2019).
10. Jiang, R., Gunina, A., Qu, D., Kuzyakov, Y., Yu, Y.J., Hatano, R., Frimpong, K.A., and Li, M. Afforestation of loess soils: Old and new organic carbon in aggregates and density fractions. *CATENA*, **177**, 49-56 (2019).
11. Chaddy, A., Melling, L., Ishikura, K., and Hatano, R. Soil N₂O emissions under different N rates in an oil palm plantation on tropical peatland. *Agriculture*, **9**(10), 213 (2019).
12. Naser, H.M., Nagata, O., Sultana, S., and Hatano, R. Carbon sequestration and contribution of CO₂, CH₄ and N₂O fluxes to global warming potential from paddy-fallow fields on mineral soil beneath peat in central Hokkaido, Japan. *Agriculture*, **10**(1), 6 (2020).
13. Mukumbuta, I., and Hatano, R. Do tillage and conversion of grassland to cropland always deplete soil organic carbon? *Soil Sci. Plant Nutr.*, **66**(1), 76-83 (2020).
14. Peng, S., Wang, C., Eguchi, S., Kuramochi, K., Kohyama, K., Yoshikawa, S., Itahashi, S., Igura, M., Ohkoshi, S., and Hatano, R. Response of hydrological processes to climate and land use changes in Hiso River watershed, Fukushima, Japan. *Phys. Chem. Earth*, **123**, 103010 (2021).
15. Sukdanont, P., Arunrat, N., Amkha, S., and Hatano, R. Evaluation of CH₄ Emission in Two Paddy Field Areas, Khonkaen and Ayutthaya, in Thailand. *Agriculture*, **11**, 467 (2021).
16. Kitamura, R., Sugiyama, C., Yasuda, K., Nagatake, A., Yuan, Y., Du, J., Yamaki, N., Taira, K., Kawai, M., and Hatano, R. Effects of three types of organic fertilizers on greenhouse gas emissions in a grassland on Andosol in southern

- Hokkaido, Japan. *Front. Sustain. Food Syst.*, **5**, Article649613 (2021).
17. Iwasaki, S., Endo, Y., Hatano, R., and Toma, Y. Factors impacting soil organic carbon pool in different types of Andosols in Toya, Hokkaido, Japan. *Soil Sci. Plant Nutr.*, **67(5)**, 594-605 (2021).
 18. Chaddy, A., Melling, L., Ishikura, K., Goh, K.J., Toma, Y., and Hatano, R. Effects of long-term nitrogen fertilization and ground water level changes on soil CO₂ fluxes from oil palm plantation on tropical peatland. *Atmosphere*, **12(10)**, 1340 (2021).
 19. Imran, Y., Melling, L., Wong, G.X., Hatano, R., Inoue, T., Aeries T.B., Goh K.J., and Mah D.Y.S. Long term dynamics of surface fluctuation in a peat swamp forest in Sarawak, Malaysia. *Environ. Res. Commun.*, **4**, 041001 (2022).
2. 学会発表 (○：国内：21, ●：国際：15)
1. ●Michinobu, Y., Okutariani, O., and Hatano, R. Contribution of microbial biomass carbon to below-ground biomass carbon budget in an agricultural field in Southern Hokkaido, Japan. *21st World Congress of Soil Science*, August12-17, 2018, Rio de Janeiro, Brazil (Poster presentation).
 2. ●Hatano, R., Mukumbuta, I., and Shimizu, M. Effects of land-use change and manure application on greenhouse gas flux dynamics in cornfield and managed grassland. *The Seventh Japan-China-Korea Grassland Conference*, July 8-10, 2018, Sapporo, Japan (Oral presentation).
 3. ●Michinobu, Y., Okutariani, P., and Hatano, R. Contribution of microbial biomass carbon to below-ground biomass carbon budget in an agricultural field in Southern Hokkaido, Japan. *The Seventh Japan-China-Korea Grassland Conference*, July 8-10, 2018, Sapporo, Japan (Poster presentation).
 4. ●Nagatake, A., Kuswandra, V., Nishi, S., Yasuda, K., Takahashi, H., Michinobu, Y., Sugiyama, C., Kawai, M., and Hatano, R. Nitrous oxide emissions and its controlling factor in a grassland renovated with different tillage methods and timing of renovation. *The Seventh Japan-China-Korea Grassland Conference*, July 8-10, 2018, Sapporo, Japan (Poster presentation).
 5. ○Chaddy, A., Hatano, R., Melling, L., and Ishiura, K. Effect of ammonium sulphate on soil CO₂ and soil N₂O fluxes in an oil palm plantation on tropical peatland. *Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition Conference*, August 29-31, 2018. Kanagawa, Japan (Poster presentation).
 6. ○Nugraheni, M., Itoh, M., Hirata, R., Hirano, T., Melling, L., Kusin, K., and Hatano, R. Effect of organic matter quality on anaerobic decomposition of tropical peat soils. *Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition Conference*, August 29-31, 2018. Kanagawa, Japan (Poster presentation).
 7. ○道信有真, Okutariani, O., 長竹新, 宮田明, 藤瀬万里絵, 波多野隆介：北海道南部農耕地の地下部炭素収支と微生物バイオマス炭素の寄与。日本土壌肥料学会 2018 年度神奈川大会, 2018 年 8 月 29 日 - 31 日, 神奈川, 日本 (ポスター発表)。
 8. ○高橋大道, 長竹新, Kuswandra, V., 西颯太, 河合正人, 波多野隆介：管理採草地における草地更新の時期及び耕起方法が温室効果ガス収支に与える影響。日本土壌肥料学会 2018 年度神奈川大会, 2018 年 8 月 29 日 - 31 日, 神奈川, 日本 (ポスター発表)。
 9. ○道信有真, Okutariani, P., 長竹新, 波多野隆介：草地への異なる有機質肥料施用がもたらす N₂O・NO 排出への影響。日本土壌肥料学会北海道支部 2018 年度秋期支部大会, 2018 年 11 月 29 日, 北海道, 日本 (ポスター発表)。
 10. ○Nugraheni, M., Hatano, R., Ishikura, K., Melling, L., and Kitso, K. Effect of disturbance on CO₂ and CH₄ emissions of Indonesian and Malaysian tropical peat soils. *Hokkaido branch conference of Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition*, November 29, 2018. Hokkaido, Japan (Poster presentation).
 11. ○高橋大道, 長竹新, Kuswandra, V., 西颯太, 河合正人, 波多野隆介：管理採草地において異なる更新方法がもたらす CO₂ 排出量および地温, WFPS に対する影響の時期別の評価。日本土壌肥料学会北海道支部 2018 年度秋期支部大会, 2018 年 11 月 29 日, 北海道, 日本 (ポスター発表)。
 12. ○Yang, Y., 安田花穂, 道信有真, 杉山知穂, 八巻憲和, 平克郎, 河合正人, 波多野隆介：有機質肥料施用が草地生態系の炭素収支へ及ぼす影響。日本土壌肥料学会北海道支部 2018 年度秋期支部大会, 2018 年 11 月 29 日, 北海道, 日本 (ポスター発表)。
 13. ○Chaddy, A., Hatano, R., Melling, L., and Ishikura, K. Abiotic factors of soil CO₂ and N₂O emission in N fertilized tropical peatland. *Hokkaido branch conference of Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition*, November 29, 2018. Hokkaido, Japan (Poster presentation).
 14. ○杉山知穂, 長竹新, 安田花穂, 楊倚麟, 平克郎, 八巻憲和, 河合正人, 波多野隆介：草地への異なる有機質肥料施用がもたらす N₂O, NO 排出への影響。日本土壌肥料学会北海道支部 2018 年度秋期支部大会, 2018 年 11 月 29 日, 北海道, 日本 (ポスター発表)。
 15. ●Hatano, R., and Mukumbuta, I. Tillage increases soil organic carbon in land-use change between grassland and upland crop. *8th International Symposium of Interactions of Soil Minerals with Organic Components and Microorganisms*, June 23-28, 2019. Seville, Spain (Oral presentation).
 16. ●Peng, S., Wang, C., Eguchi, S., Kohyama, K., Yoshikawa, S., Itahashi, S., Igura, M., Kuramochi, K., and Hatano, R. Modeling sediment yield response to land use change using SWAT model in Hiso basin, Fukushima, Japan. *14th International Conference of the East and Southeast Aisa Federation of Soil Science Societies*, November 3-8, 2019. Taipei, Taiwan (Oral presentation).
 17. ●Meilania, N., Ishikura, K., Melling, L., Kusin, K., and Hatano, R. Production of CO₂, CH₄ and N₂O in differently disturbed tropical peat soils. *14th International Conference of the East and Southeast Aisa Federation of Soil Science Societies*, November 3-8, 2019. Taipei, Taiwan (Poster presentation).
 18. ●Sukdanont, P., Kimura, A., Amkha, A., Arunrat, N., and Hatano, R. Soil parameters as CH₄ emission factors from Thai paddy soils—Khon Kaen and Ayutthaya. *14th International Conference of the East and Southeast Aisa Federation of*

- Soil Science Societies*, November 3-8, 2019. Taipei, Taiwan (Poster presentation).
19. ○Peng, S., Wang, C., Eguchi, S., Kohyama, K., Yoshikawa, S., Itahashi, S., Igura, M., Kuramochi, K., and Hatano, R. Simulation sediment yield using the SWAT model: A Case Study of Hiso Watershed, Fukushima, Japan. *Society of Soil Science and Plant Nutrition Conference*, September 3-5, 2019. Shizuoka, Japan (Poster presentation).
 20. ○Sukdanont, P., Akari, K., Arunrat, N., Amkha, S., and Hatano, R. The influential of soil characteristic and methane emission in Thai paddy soils in central and northeastern part of Thailand. *Society of Soil Science and Plant Nutrition Conference*, September 3-5, 2019. Shizuoka, Japan (Poster presentation).
 21. ○杉山知穂, 長竹新, 安田花穂, 楊倚麟, 八巻憲和, 平克郎, 河合正人, 波多野隆介: 異なる有機質肥料を施与した黒ボク土壌採草地における N₂O 排出の定量評価および排出機構の探索. 日本土壌肥料学会 2019 年度静岡大会, 2019 年 9 月 3 日 - 5 日, 静岡, 日本 (ポスター発表).
 22. ○Meilania, N., Ishikura, K., Melling, L., Kusin, K., and Hatano, R. Effect of disturbance on CO₂, N₂O, and CH₄ production from tropical peat soils in Indonesia and Malaysia. *Society of Soil Science and Plant Nutrition Conference*, September 3-5, 2019. Shizuoka, Japan (Poster presentation).
 23. ○北村凌佑, 杉山知穂, 安田花穂, 袁依然, 杜靖, 八巻憲和, 平克郎, 河合正人, 波多野隆介: 異なる 3 種の有機質肥料が黒ボク土壌採草地の温室効果ガス排出に与える影響. 日本土壌肥料学会 2020 年度岡山大会, 2020 年 9 月 8 日 - 10 日, 岡山, 日本 (オンライン, ポスター発表).
 24. ●Kitamura, R., Sugiyama, C., Yasuda, K., Nagatake, A., Yuan, Y., Du, J., Yamaki, N., Taira, K., Kawai, M., and Hatano, R. Influence of soil environmental factors on N₂O fluxes just after application of three types of organic fertilizers—4 years study in a grassland on Andosol in southern Hokkaido, Japan. *EGU General Assembly 2021*, April 21-30, 2021 (Online Oral presentation).
 25. ●Namie, H., Shimada, K., Zhao, S.S., Ishiguro, M., and Hatano, R. Influence of tillage practice on major pathways of CH₄ emission in rice paddy field. *EGU General Assembly 2021*, April 21-30, 2021 (Online Oral presentation).
 26. ○Rubin, L., Ishikura, K., Kitamura, R., Fueki, N., Hatano, R., and Toma, Y. Effect of nitrogen management and organic matter application on greenhouse gas emissions in upland field in Tokachi. *Japanese Society of Soil Science and Plant Nutrition Conference*, September 14-16, 2021. Hokkaido, Japan (Poster presentation).
 27. ○Zhao, S.S., Namie, H., Shimada, K., Toma, Y., Ishiguro, M., and Hatano, R. Effect of inter-tillage on the nutrient cycling of paddy fields without application of chemical fertilizers and agrochemicals. *Society of Soil Science and Plant Nutrition Conference*, September 14-16, 2021. Hokkaido, Japan (Poster presentation).
 28. ○浪江日和, 島田かさね, Zhao, S.S., 当真要, 石黒宗秀, 波多野隆介: 水田における除草作業が CH₄ 主要排出経路に与える影響—モデル作成による主要排出経路の特定—. 日本土壌肥料学会 2021 年度北海道大会, 2021 年 9 月 14 日 - 16 日, 北海道, 日本 (ポスター発表).
 29. ○島田かさね, 浪江日和, Zhao, S.S., 当真要, 石黒宗秀, 波多野隆介: 無肥料無農薬水田における多数回中耕除草が温室効果ガス排出に与える影響. 日本土壌肥料学会 2021 年度北海道大会, 2021 年 9 月 14 日 - 16 日, 北海道, 日本 (ポスター発表, 若手ポスター発表優秀賞).
 30. ●Imran, Y., Melling, L., Wong, G.X., Hatano, R., Inoue, T., Aeries, E.B., Goh, K.J., and Mah, D.Y.S. Dynamics of peat surface fluctuation in a Bornean peat swamp forest. *22nd World Congress of Soil Science*, July 29- August 5, 2022. Glasgow, UK (Poster presentation).
 31. ●Melling, L., Wong, G.X., Busman, N.A., Inoue, T., Goh, K.J., and Hatano, R. Mechanical soil compaction: An important agro-environmental management practice on tropical peatland. *22nd World Congress of Soil Science*, July 29-August 5, 2022. Glasgow, UK (Poster presentation).
 32. ●Namie, H., Shimada, K., Zhao, S.S., Toma, Y., Ishiguro, M., and Hatano, R. Influence of tillage practice during the flooding period on major pathways of methane (CH₄) emission in rice paddy field. *22nd World Congress of Soil Science*, July 29-August 5, 2022. Glasgow, UK (Poster presentation).
 33. ●Shimada, K., Namie, H., Zhao, S.S., Toma, Y., Ishiguro, M., and Hatano, R. The effect of multiple inter-tillage weeding on greenhouse gas emissions in paddy field without application of chemical fertilizers and pesticides. *22nd World Congress of Soil Science*, July 29-August 5, 2022. Glasgow, UK (Poster presentation).
 34. ●Busman, N.A., Melling, L., Imran, Y., Hatano, R., and Watanabe, A. Long-term monitoring of carbon dioxide and methane fluxes from different types of tropical peat swamp forests. *22nd World Congress of Soil Science*, July 29-August 5, 2022. Glasgow, UK (Oral presentation).
 35. ○浪江日和, 島田かさね, Zhao, S.S., 当真要, 石黒宗秀, 波多野隆介: 中耕除草作業が水田土壌中に封入されたメタン (CH₄) 動態に与える影響. 日本土壌肥料学会 2022 年度東京大会, 2022 年 9 月 13 日 - 15 日, 東京, 日本 (ポスター発表).
 36. ○島田かさね, 浪江日和, Zhao, S.S., 当真要, 石黒宗秀, 波多野隆介: 無肥料無農薬水田における多数回中耕除草が温室効果ガス排出に与える影響—連続した 2 年間の結果—. 日本土壌肥料学会 2022 年度東京大会, 2022 年 9 月 13 日 - 15 日, 東京, 日本 (ポスター発表, 若手ポスター発表優秀賞).

食品栄養学

1. 原著論文

1. Chen, W., Hira, T., Nakajima, S., and Hara H. Wheat gluten hydrolysate potently stimulates peptide-YY secretion and suppresses food intake in rats. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, **82(11)**, 1992-1999 (2018).
2. Lee, D. G., Hori, S., Kohmoto, O., Kitta, S., Yoshida, R., Tanaka, Y., Shimizu, H., Takahashi, K., Nagura, T., Uchino, H., Fukiya, S., Yokota, A., and Ishizuka, S. Ingestion of difructose anhydride III partially suppresses the deconjugation and 7 α -dehydroxylation of bile acids in rats fed with a cholic acid-supplemented diet. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, **83(7)**,

- 1329-1335 (2019).
3. Yoshitsugu, R., Kikuchi, K., Iwaya, H., Fujii, N., Hori, S., Lee, D. G., and Ishizuka, S. Alteration of bile acid metabolism by a high-fat diet is associated with plasma transaminase activities and glucose intolerance in rats. *J. Nutri. Sci. Vitaminol.*, **65(1)**, 45-51 (2019).
 4. Trakooncharoenvit, A., Tanaka, S., Mizuta, E., Hira, T., and Hara, H. Reply to the Letter: Increased bioavailability of plasma polyphenols via the intestinal fermentation of soybean fibers: a role for gut microbiome? *Eur. J. Nutr.*, **58(6)**, 2563 (2019).
 5. Pinyo, J., Hira, T., and Hara, H. Continuous feeding of a combined high-fat and high-sucrose diet, rather than an individual high-fat or high-sucrose diet, rapidly enhances the glucagon-like peptide-1 secretory response to meal ingestion in diet-induced obese rats. *Nutrition.*, **62**, 122-130 (2019).
 6. Lee, J. Y., Shimizu, H., Hagio, M., Fukiya, S., Watanabe, M., Tanaka, Y., Joe, G. H., Iwaya, H., Yoshitsugu, R., Kikuchi, K., Tsuji, M., Baba, N., Nose, T., Tada, K., Hanai, T., Hori, S., Takeuchi, A., Furukawa, Y., Shirouchi, B., Sato, M., Ooka, T., Ogura, Y., Hayashi, T., Yokota, A., and Ishizuka, S. 12 α -hydroxylated bile acid induces hepatic steatosis with dysbiosis in rats. *Biochim. Biophys. Acta Mol. Cell Biol. Lipids*, **1865(12)**, 158811 (2020).
 7. Shimoda, T., Hori, S., Maegawa, K., Takeuchi, A., Lee, Y., Joe, G. H., Tanaka, Y., Shimizu, H., and Ishizuka, S. A low coefficient of variation in hepatic triglyceride concentration in an inbred rat strain. *Lipids Health Dis.*, **19**, 137 (2020).
 8. Hori, S., Abe, T., Lee, D. G., Fukiya, S., Yokota, A., Aso, N., Shirouchi, B., Sato, M., and Ishizuka, S. Association between 12 α -hydroxylated bile acids and hepatic steatosis in rats fed a high-fat diet. *J. Nutr. Biochem.*, **83**, 108412 (2020).
 9. Hashimoto, N., Matsui, I., Ishizuka, S., Inoue, K., Matsumoto, A., Shimada, K., Hori, S., Lee, D. G., Yasuda, S., Katsuma, Y., Kajimoto, S., Doi, Y., Yamaguchi, S., Kubota, K., Oka, T., Sakaguchi, Y., Takabatake, Y., Hamano, T., and Isaka, Y. Lithocholic acid increases intestinal phosphate and calcium absorption in a vitamin D receptor dependent but transcellular pathway independent manner. *Kidney Int.*, **97(6)**, 1164-1180 (2020).
 10. Hira, T., Pinyo, J., and Hara, H. What is GLP-1 really doing in obesity? *Trends Endocrinol. Metab.*, **31(2)**, 71-80 (2020).
 11. Trakooncharoenvit, A., Tanaka, S., Mizuta, E., Hira, T., and Hara, H. Water-soluble dietary fibers enhance bioavailability of quercetin and a fiber derived from soybean is most effective after long-term feeding in rats. *Eur. J. Nutr.*, **59(4)**, 1389-1398 (2020).
 12. Yoshitsugu, R., Liu, H., Kamo, Y., Takeuchi, A., Joe, G. H., Tada, K., Kikuchi, K., Fujii, N., Kitta, S., Hori, S., Takatsuki, M., Iwaya, H., Tanaka, Y., Shimizu, H., and Ishizuka, S. 12 α -Hydroxylated bile acid enhances accumulation of adiponectin and immunoglobulin A in the rat ileum. *Sci. Rep.*, **11**, 12939 (2021).
 13. Hira, T., Trakooncharoenvit, A., Taguchi, H., and Hara, H. Improvement of glucose tolerance by food factors having glucagon-like peptide-1 releasing activity. *Int. J. Mol. Sci.*, **22(12)**, 6623 (2021).
 14. Trakooncharoenvit, A., Hara, H., and Hira, T. Combination of α -glycosyl-isoquercitrin and soybean fiber promotes quercetin bioavailability and glucagon-like peptide-1 secretion and improves glucose homeostasis in rats fed a high-fat high-sucrose diet. *J. Agric. Food Chem.*, **69(21)**, 5907-5916 (2021).
 15. Pinyo, J., Hara, H., and Hira, T. Diet-induced obesity enhances postprandial glucagon-like peptide-1 secretion in Wistar rats, but not in diabetic Goto-Kakizaki rats. *Br. J. Nutr.*, **126(4)**, 518-530 (2021).
 16. Iwasaki, W., Yoshida, R., Liu, H., Hori, S., Otsubo, Y., Tanaka, Y., Sato, M., and Ishizuka, S. The ratio of 12 α to non-12-hydroxylated bile acids reflects hepatic triacylglycerol accumulation in a high-fat diet-fed C57BL/6J mice. *Sci. Rep.*, **12**, 16707 (2022).
 17. Liu, H., Kohmoto, O., Sakaguchi, A., Hori, S., Tochigi, M., Tada, K., Lee, Y., Kikuchi, K., and Ishizuka, S. Taurocholic acid, a primary 12 α -hydroxylated bile acid, induces leakiness in the distal small intestine in rats. *Food Chem. Toxicol.*, **165**, 113136 (2022).
2. 学会発表 (○；国内：7，●；国際：6)
1. ○Joe, G. H., Iizuka, T., Fujimoto, Y., Kimura, A., Hara, H., and Ishizuka, S. Down-regulation of Cd14 expression in liver by ingestion of megalos-type isomaltosaccharides might be prerequisite for amelioration of LPS-induced liver injury in rats. 日本農芸化学会 2018 年度名古屋大会 2018 年 3 月 15-18 日 名城大学天白キャンパス (名古屋) (口頭発表).
 2. ○橋田 真理, 加茂 佳恵, 趙 佳賢, 原 博, 石塚 敏: コール酸負荷によるラット回腸組織でのアディポネクチン集積 日本農芸化学会 2018 年度名古屋大会 2018 年 3 月 15-18 日, 名城大学天白キャンパス (名古屋) (口頭発表).
 3. ●Lee, D. G., Takahashi, Y., Shimoda, T., Kamo, Y., Hori, S., Hanai, T., Shimizu, H., Kumura, H., and Ishizuka, S. Ingestion of cheese partially recovers cholic acid-induced disorders accompanied by modulation of bile acid metabolism. *Nutrition 2018*, June 9-12, 2018, Boston, USA (Poster presentation).
 4. ○Nur 'Azimatul, H. M., 比良 徹, 原 博: グルコースの腹腔内投与が血漿中 GLP-1 を減少させる, 第 72 回日本栄養・食糧学会大会 2018 年 5 月 12 日, 岡山県立大学 (岡山県総社市) (口頭発表).
 5. ●Pinyo, J., Hara, H. and Hira, T.: Postprandial GLP-1 response in Wistar and Goto-Kakizaki rats during diet-induced obesity. *Asia-Pacific Diabetes and Obesity Study Group, Joint with the 39th Annual Meeting of Japan Society for the Study of Obesity*, October 8, 2018, Kobe Convention Center (兵庫県神戸市) (Poster presentation).
 6. ●Nur 'Azimatul, H. M., Hira, T. and Hara, H.: Intraperitoneal glucose reduces rat GLP-1 concentrations. *Asia-Pacific Diabetes and Obesity Study Group, Joint with the 39th Annual Meeting of Japan Society for the Study of Obesity* October 8, 2018, Kobe Convention Center (兵庫県神戸市) (Poster presentation).
 7. ●Lee, D. G., Hori, S., Kohmoto, O., Kitta, S., Yoshida, R., Tanaka, Y., Shimizu, H., Takahashi, K., Nagura, T., Uchino, H., Fukiya, S., Yokota, A., and Ishizuka, S. Ingestion of difructose anhydride III reduces secondary bile acid concentration in rat large intestine. *Kern Lipid Conference 2019*, August 13-15, 2019, Colorado, USA (Poster presentation).
 8. ○Pinyo, J., Hira, T. and Hara, H.: Long-term effects of high fat/high sucrose diet feeding on postprandial GLP-1 response

in Wistar and Goto-Kakizaki rats. 第4回北海道大学部局横断シンポジウム, January 15, 2019, 北海道大学医学部学友会館フラテホール(北海道札幌市)(ポスター発表).

- Trakooncharoenvit, A., Hara, H., and Hira, T. Combined feeding of α -glycosyl-isoquercitrin and soluble soybean fiber prevents glucose intolerance in rats. *The 9th International Conference on Polyphenols and Health - ICPH2019*, November 30, 2019, Kobe Portopia Hotel (兵庫県神戸市)(Poster and Oral presentation).
- Pinyo, J., Hira, T. and Hara, H. Postprandial GLP-1 response was enhanced in non-diabetic rats, but not in diabetic rats during obesity development. *International Diabetes Federation 2019 (IDF 2019)*, December 6, 2019, Busan Exhibition and Convention Center (BEXCO) (Busan, Korea) (Poster presentation).
- Liu, H., Kohmoto, O., and Ishizuka, S. Small intestinal hyperpermeability is associated with increased primary 12 α -hydroxylated bile acids in the enterohepatic circulation. 第24回腸内細菌学会学術大会 June 11-12, 2020, 札幌サンプラザ(札幌)(Poster presentation).
- 堀 将太, 阿部 隆行, 李 東根, 吹谷 智, 横田 篤, 麻生 菜央, 城内 文吾, 佐藤 匡央, 石塚 敏: 12 α 水酸化胆汁酸と脂肪肝の関係 日本農芸化学会2020年度福岡大会 2020年3月25-28日 九州大学(福岡)(口頭発表)(優秀発表).
- Trakooncharoenvit, A., Hara, H., and Hira, T.: The increment of quercetin bioavailability by feeding α -glycosyl-isoquercitrin with soybean fiber promotes the glucagon-like peptide-1 secretion, and alleviates glucose intolerance in diet-induced obesity rat model. 日本食物繊維学会第25回学術集会, Web開催 November 21, 2020, (Oral presentation, online).

食品機能化学

1. 原著論文

1. Lahrita, L., Moriai, K., Iwata, R., Itoh, K., and Kato, E. Quassinoids in *Brucea javanica* are potent stimulators of lipolysis in adipocytes. *Fitoterapia* **137**, 104250 (2019).
2. Ruangaram, W., and Kato, E. Selection of Thai medicinal plants with anti-obesity potential via in vitro methods. *Pharmaceuticals* **13**(4), 56 (2020).
3. Udomsopagit, T., Miwa, A., Seki, M., Shimbori, E., Kadota, Y., Tochio, T., and Sonoyama, K. Intestinal microbiota transplantation reveals the role of microbiota in dietary regulation of RegIII β and RegIII γ expression in mouse intestine. *Biochem. Biophys. Res. Commun.*, **529**, 64-69 (2020).

2. 学会発表(○:国内:6, ●:国際:3)

1. ○ Udomsopagit, T., Tatsuoka, M., Morimoto, N., and Sonoyama, K. Gut microbiota and host gene expression in mice following microbial transplantation. *Annual Meeting of Japanese Society of Nutrition and Food Science Hokkaido/Tohoku Branch*, November 18, 2018, Hakodate (Oral presentation).
2. ○ Ruangaram, W., and Kato, E. Evaluation on anti-obesity potential of Thai medical plants with in vitro methods, 日本農芸化学会2019年度大会, March 24-27, 2019, 東京 4B1a0ポスター発表7, (Oral presentation).
3. ○ Udomsopagit, T., Shimbori, E., and Sonoyama, K. Fecal microbiota transplantation demonstrates the role of gut microbiota in the reduction of intestinal RegIII β and RegIII γ mRNA levels in mice. *Annual Meeting of Japanese Society of Nutrition and Food Science Hokkaido/Tohoku Branch*, September 1, 2019, Obihiro (Oral presentation).
4. ○ Udomsopagit, T., Shimbori, E., Kadota, Y., Tochio, T., and Sonoyama, K. Gut microbiota transplantation demonstrates the role of gut microbiota in the 1-kestose upregulation of intestinal RegIII β in mice. *Annual Meeting of Japanese Society of Nutrition and Food Science*, May 16, 2020, Sendai, Abstract Book 2I-04a (Oral presentation).
5. ● Ruangaram, W., Zhao, Z., and Kato, E. Saponin from *Acacia concinna* (Wild.) DC. inhibits pancreatic lipase and enhance lipolysis in 3T3-L1 adipocyte, *6th International Electronic Conference on Medicinal Chemistry*, November 1-30, 2020, online (Oral presentation).
6. ● Ruangaram, W., Zhao, Z., and Kato, E. Study of Anti-Obesogenic Potential of Thai Medicinal Plants Using In Vitro Methods, *3rd International Conference on Traditional Medicine, Phytochemistry and Medicinal Plants*, November 2-4, 2020, online (Oral presentation).
7. ○ Udomsopagit, T., Shimbori, E., and Sonoyama, K. Effect of short-chain fatty acids on RegIII β and RegIII γ gene expression in murine intestinal organoids. *Annual Meeting of Japanese Association for Dietary Fiber Research*, November 21, 2020, Tokyo, Japan, online (Oral presentation).
8. ○ Zhao, Z., Ruangaram, W., and Kato, E. Saponin from *Acacia concinna* inhibited pancreatic lipase and enhanced lipolysis in 3T3-L1 adipocyte, 日本農芸化学会北海道支部/日本栄養・食糧学会北海道支部 合同学術講演会, December 12-13, 2020, 札幌 (Oral presentation, online).
9. ● Ruangaram, W., and Kato, E. The mechanism study on the effect of *Acacia concinna* and *Cymbopogon nardus* on lipid metabolism, *The 6th International Conference on Food, Agriculture, and Natural Resources (FANRes) 2021*, August 4-5, 2021, Jakarta, Indonesia (Oral presentation, online).

分子酵素学

1. 原著論文

1. Klahan, P., Okuyama, M., Jinnai, K., Ma, M., Kikuchi, A., Kumagai, Y., Tagami, T., and Kimura, A. Engineered dextranase from *Streptococcus mutans* enhances the production of longer isomaltooligosaccharides. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, **82**(9), 1480-1487 (2018).
2. Ma, M., Okuyama, M., Tagami, T., Kikuchi, A., Klahan, P., and Kimura, A. α -1,3/ α -1,4-glucosidase from *Aspergillus niger* exhibits unique transglucosylation to generate high levels of nigerose and kojibiose. *J. Agric. Food. Chem.*, **67**(12),

3380-3388 (2019).

2. 学会発表 (○：国内：2, ●：国際：0)

- Klahan, P., Okuyama, M., Tagami, T., and Kimura, A. Amino acid residues to govern substrate recognition of trehalose-6-phosphate hydrolase from *Streptococcus mutans* NBRC13955. *The 2019 Annual Meeting of Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry*, March 15-18, 2019, Meijo University, Nagoya. (Oral presentation).
- 猪内 里花子, Klahan Patcharapa, 田上 貴祥, 田口 陽大, 佐分利 亘, 森 春英, 奥山 正幸, 木村 淳夫. 細菌 trehalose 6-phosphate hydrolase の活性中心に結合するリン酸イオンおよび基質との複合体構造の分子解析. 日本応用糖質科学会 2020 年度大会, 9 月 9 日 - 11 日, 2020, オンライン開催 (口頭発表).

生物化学

1. 原著論文

1. Auiewiriyankul, W., Saburi, W., Kato, K., Yao, M., and Mori, H., Function and structure of GH13_31 α -glucosidase with high α -(1 \rightarrow 4)-glucosidic linkage specificity and transglycosylation activity. *FEBS Lett.*, **592**, 2268-2281 (2018).
2. Saburi, W., Jaito, N., Kato, K., Tanaka, Y., Yao, M., and Mori, H., Biochemical and structural characterization of *Marinomonas mediterranea* D-mannose isomerase Marme_2490 phylogenetically distant from known enzymes. *Biochimie*, **144**, 63-73 (2018).
3. Gao, Y., Saburi, W., Taguchi, Y., and Mori, H., Biochemical characteristics of maltose phosphorylase MalE from *Bacillus* sp. AHU2001 and chemoenzymatic synthesis of oligosaccharides by the enzyme. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, **83**, 2097-2109 (2019).
4. Taguchi, Y., Saburi, W., Imai, R., and Mori, H. Efficient one-pot enzymatic synthesis of trehalose 6-phosphate using GH65 α -glucoside phosphorylases. *Carbohydr. Res.*, **488**, 108902 (2020).

2. 学会発表 (○：国内：11, ●：国際：2)

1. ○佐分利 亘, Auiewiriyankul Waraporn, 于 健, 加藤 公児, 姚 閔, 森 春英, *Bacillus* sp. AHU2216 由来 α -グルコシダーゼの基質鎖長特異性の構造基盤, 日本農芸化学会東北・北海道合同支部大会, 2018 年 9 月 22-23 日, 仙台 (東北大学), 要旨 A04 (口頭発表).
2. ●Taguchi, Y., Saburi, W., and Mori, H. Synthesis of trehalose 6-phosphate and its derivative using trehalose 6-phosphate phosphorylase. *29th International Carbohydrate Symposium*, July 14-19, 2018, Universidade de Lisboa, Lisbon, Portugal Abstract P-S60 (Poster presentation).
3. ○田口 陽大, 佐分利 亘, 森 春英, 植物トレハラーゼ間の機能比較と α 11 \rightarrow α 12 ループ上に保存された Thr の Tre6P 分解活性への寄与, 日本農芸化学会 2019 年度大会, 2019 年 3 月 27 日, 東京 (東京農業大学), 要旨 4E2a10 (口頭発表).
4. ○Gao, Y., Saburi, W., and Mori, H. Functional analysis of maltose phosphorylase MalE from *Bacillus* sp. AHU2001 and synthesis of oligosaccharides and sugar phosphates with the enzyme, 日本農芸化学会 2019 年度大会, March 27, 2019, 東京 (東京農業大学), 要旨 4E2a11 (口頭発表).
5. ●Taguchi, Y., Saburi, W., and Mori, H. Biochemical characteristics of plant trehalase hydrolyzing trehalose 6-phosphate. *13th Carbohydrate Bioengineering Meeting*, May 19-22, 2019, Université Paul Sabatier, TOULOUSE III, Toulouse, France Poster#66, Abstract p138 (Poster presentation).
6. ○田口 陽大, 佐分利 亘, 于 健, 姚 閔, 森 春英, *Arabidopsis thaliana* 由来 α -トレハラーゼの X 線結晶構造解析, 日本応用糖質科学会 2019 年度大会, 2019 年 9 月 11 日, 岐阜 (岐阜市文化産業交流センターじゅうろくプラザ), 要旨 C1p-2. (Oral and poster presentation).
7. ○田口 陽大, 佐分利 亘, 森 春英, シロイヌナズナ由来組換えトレハロースホスファターゼの酵素化学的諸性質の解析, 日本応用糖質科学会 2020 年度大会, 2020 年 9 月 11 日, 長野, 要旨 C-12 (Poster presentation, online).
8. ○猪内 里花子, Klahan Patcharapa, 田上 貴祥, 田口 陽大, 佐分利 亘, 森 春英, 奥山 正幸, 木村 淳夫, 細菌 trehalose 6-phosphate hydrolase の活性中心に結合するリン酸イオンおよび基質との複合体構造の分子解析, 日本応用糖質科学会 2020 年度大会, 2020 年 9 月 11 日, 長野, 要旨 C-13 (Poster presentation, online).
9. ○田口 陽大, トレハロース代謝酵素の生化学的性質と物質合成への応用に関する研究, 日本農芸化学会北海道支部学生会員奨励賞受賞講演, 2020 年度日本農芸化学会北海道支部・第 50 回日本栄養・食糧学会北海道支部合同学術講演会, 2020 年 12 月 12 日, 支部学生会奨励賞受賞講演 (口頭発表, オンライン).
10. ○田口 陽大, 加リン酸分解酵素の機能を利用したトレハロース 6-リン酸類の合成および GH37 トレハラーゼの複数の触媒状態の解析に関する研究, 日本応用糖質科学会北海道支部令和 2 年度支部受賞講演, 2021 年 1 月 28 日, 支部奨励賞受賞講演 (口頭発表, オンライン).
11. ○温 宇狃, 佐分利 亘, 森 春英, Functional analysis of the residues in subsite + 1 of *Bacillus* sp. AHU2001 maltose phosphorylase, 日本応用糖質科学会 2021 年度大会, 2021 年 8 月 25 日 - 9 月 10 日, オンライン, 要旨 C-10 (口頭・ポスター発表).
12. ○太田 智也, 佐分利 亘, Linda Jewell, Tom Hsiang, 今井 亮三, 森 春英, 紅色雪腐病菌由来エンド型 β -1,3-グルカン加水分解酵素の特性. 日本応用糖質科学会北海道支部 2021 年度支部講演会, 2022 年 1 月 27 日, オンライン, 要旨ポスター 3 (ポスター発表).
13. ○太田 智也, 佐分利 亘, 今場 司朗, ジュウェル リンダ, シャン トム, 今井 亮三, 森 春英, *Microdochium nivale* 由来 GH55 ラミナリナーゼによるラミナリン分解機構の解明. 日本農芸化学会 2022 年度大会, 2022 年 3 月 15-18 日, 京都, 要旨 2C08-06 (口頭発表, オンライン).

3. その他

受賞：

1. 田口 陽大：日本農芸化学会北海道支部 支部学生会奨励賞受賞, 受賞題名：トレハロース代謝酵素の生化学的性質と物

質合成への応用に関する研究, 令和2(2020)年12月12日

2. 田口 陽大: 日本応用糖質科学会北海道支部 支部奨励賞, 受賞題名: 加リン酸分解酵素の機能を利用したトレハロース6-リン酸類の合成およびGH37トレハラーゼの複数の触媒状態の解析に関する研究, 令和3(2021)年1月28日

生物有機化学

1. 原著論文

1. Masimbula, R., Yamada, A., Takahashi, K. and Matsuura, H. Total synthesis of (8S) and (8R) methyl 8-β-D-glucopyranosyl helianthenate B and their application for other derivatives. *Nat. Pro. Commun.*, **14**, 1-5 (2019).
2. Oki, K., Masimbula, R., Miyawaki, K., Takata, Y., Takahashi, K. and Matsuura, H. 12OHJA, 12OGlcJA, and JA-L-Val as airborne MeJA metabolites. *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, **83**, 1709-1712 (2019).
3. Masimbula, R., Oki, K., Shibata, H., Osawa, H., Kondo, N., Takahashi, K. and Matsuura, H. Ability of plant pathogenic fungi *Gibberella fujikuroi* and *Fusarium commune* to react with airborne methyl jasmonate, *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, **83**, 1650-1654 (2019).
4. Masimbula, R., Oki, K., Takahashi, K. and Matsuura, H. Metabolism of airborne methyl salicylate in adjacent plant, *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, **84**, 1780-1787 (2020).
5. Nakashima, T., Nambu, Y., Inoue, Y., Masimbula, R. and Matsuura, H. Pennelliisides A-C, 2,3,4-Trisubstituted Acyl Glucoses Isolated from *Solanum pennellii*, *J. Nat. Prod.*, **83**, 2337-2346 (2020).

2. 学会発表 (○: 国内: 3, ●: 国際: 1)

1. ● Masimbula, R., Oki, K., Takahashi, K. H., Matsuura, H. Biological effect of airborne methyl jasmonate upon pathogenic fungi *Gibberella fujikuroi* and *Fusarium commune*, and investigation of metabolism of airborne methyl salicylate in plants. *Agricultural Biodiversity conference*, Iowa State University, United States, September 17-22, 2019 (Poster presentation).
2. ○ Masimbula, R., Oki, K., Kondo, N., Matsuura, H., and Takahashi, K. Evaluation of positive feedback system for jasmonic acid biosynthesis using deuterium labelled jasmonic acid, *JSBBA conference*, Tokyo, March 24-28, 2019 (Oral presentation).
3. ○ Masimbula, R., and Matsuura, H. Airborne methyl salicylate and methyl jasmonate as phytochemical regulators, *JSBBA Hokkaido Chapter Joint Academic Lecture*, December 12-13, 2020 (Oral presentation).
4. ○ Masimbula, R., Kobayashi, H., Nakashima, T., Nambu, Y., and Matsuura, H. Isolation, structure determination, and total synthesis of pennelliiside D from *Solanum pennellii*, *JSBBA Hokkaido branch symposium*, Japan, July 24, 2021 (Oral presentation).

3. その他

1. Masimbula, R. Student Encouragement Award - Awarded by JSBBA (Hokkaido branch) for the outstanding researchers that contribute to the progress of agricultural chemistry, JSBBA Hokkaido Branch joint lecture held on December 12-13, 2020 (日本農芸化学会北海道支部学生奨励賞).

生態化学生物学

1. 原著論文

1. Nakagawa, S., Tachrim, Z.P., Kurokawa, N., Ohashi, F., Sakihama, Y., Suzuki, T., Hashidoko, Y., and Hashimoto, M., pH stability and antioxidant power of cycloDOPA and its derivatives, *Molecules*, **23**, 1943 (2018).
2. Wang, L., Tachrim, Z.P., Kurokawa, N., Ohashi, F., Wakasa, H., Sakihama, Y., Hashidoko, Y., Suzuki, T., and Hashimoto, M., Optimization of sucrose 1'-position modification with 3-(trifluoromethyl)diaziriny benzylbromide derivatives for photoaffinity labeling, *Arkivoc*, (7), 58-65 (2018).
3. Tachrim, Z.P., Nakamura, T., Sakihama, Y., Hashidoko, Y., and Hashimoto, M., Application of Appel reaction to the primary alcohol groups of fructooligosaccharides: Synthesis of 6,6,6"-trihalogenated 1-kestose derivatives, *Arkivoc*, (7) 341-348 (2018).
4. Tachrim, Z.P., Oida, K., Ohashi, F., Wakasa, H., Ikemoto, H., Kurokawa, N., Sakihama, Y., Hashidoko, Y., Suzuki, T., and Hashimoto, M., TFA-protected α-amino acid N-hydroxysuccinimide ester: Application for inter- and intramolecular acylation, *Heterocycles*, **97**, 877-893 (2018).
5. Kurokawa, N., Tokoro, Y., Tachrim, Z.P., Wakasa, H., Sakihama, Y., Hashidoko, Y., and Hashimoto, M., Synthesis of chiral N-trifluoroacetyl-methionine derivatives and applying them as acyl donors for Friedel-Crafts acylation, *Arkivoc*, (5), 42-49 (2019).
6. Tachrim, Z.P., Nakagawa, S., Nakamura, T., Ohashi, F., Kurokawa, N., Wakasa, H., Tokoro, Y., Sakihama, Y., Hashidoko, Y., Suzuki, T., and Hashimoto, M., Synthesis of deuterated cyclodopa with hydrogen/deuterium exchange, *Heterocycles*, **99**, 404-414 (2019).
7. Tachrim, Z.P., Kurokawa, N., Tokoro, Y., and Hashimoto, M., Hydrogen-deuterium exchange of histidine and histamine with deuterated trifluoromethanesulfonic acid, *Heterocycles*, **101**, 357-362 (2020).
8. Nakagita, T., Ishida, A., Tachrim, Z.P., Wang, L., Misaka, T., and Hashimoto, M., Asymmetric synthesis of photophore-containing lactisole derivatives to elucidate sweet taste receptors, *Molecules*, **25**, 2790 (2020).
9. Tachrim, Z.P., Oida, K., Ohashi, F., Kurokawa, N., Wang, L., Suzuki, T., and Hashimoto, M., Synthesis of TFA-protected α-Amino Acid Chloride via a Vilsmeier Reagent for Friedel-Crafts acylation, *Lett. Org. Chem.*, **17**(8), 645-653 (2020).
10. Hashinoki, M., Kurokawa, N., Murai, Y., Tachrim, Z.P., Sakihama, Y., Suzuki, T., and Hashimoto, M., Synthesis of trifluoromethyl-diaziriny phenylboronic acid derivatives for photoaffinity labeling, *Heterocycles*, **103**, 392-402 (2021).

2. 学会発表 (○: 国内: 4, ●: 国際: 0)

1. ○中川詩織, Tachrim, Z.P., 崎浜靖子, 橋床泰之, 橋本 誠, cycloDOPA 誘導体の pH 安定性とその抗酸化能, 日本農芸

- 化学会東北・北海道合同支部大会, 仙台, 2018年9月22,23日 (Oral presentation).
- Tachrim, Z.P., Y. Hashidoko, M. Hashimoto, Stereo-controlable α -Amino Aryl Ketone Synthesis via α -Amino N-Hydroxysuccinimide Ester Derivatives, *Japan-Indonesia International Scientific Conference 2018*, Osaka, 27, 28th Oct 2018 (Oral presentation).
 - Tachrim, Z.P., 黒川菜摘, 所百合花, 橋本 誠, α -アミノ酸 N-ヒドロキシスクシンイミドエステルを利用した Friedel-Crafts 反応, 第 115 回有機合成シンポジウム 2019 年【春】, 仙台, 2019年6月3, 4日 (Poster presentation).
 - Tachrim, Z.P., Wang, L., 橋本 誠, Fructooligosaccharide 1 級水酸基の反応性に関する研究, 2019 年度 日本農芸化学会 北海道支部第 1 回講演会, 帯広, 2019年7月20日 (Poster presentation).

3. その他

総説:

1. Tachrim, Z.P., Wang, L., Murai, Y., Hashimoto, M., New trends in diaziridines formation and transformation (a review), *Molecules*, **26**, 4496 (2021).

分子生物学

1. 原著論文

1. Okimune, K., Hataya, S., Matsumoto, K., Ushirogata, K., Banko, P., Takeda, S., and Takasuka, T.E. Histone chaperone-mediated co-expression assembly of tetrasomes and nucleosomes. *FEBS open bio*, **11(11)**, 2912-2920 (2021).

2. 学会発表 (○: 国内: 3, ●: 国際: 0)

1. ○Banko, P., Okimune, K., Nagy, S., Hamasaki, A., Morishita, R., and Takasuka, T. In vitro chromatin assembly platform for *Arabidopsis thaliana*. *Annual Meeting, The Molecular Biology Society of Japan*, December 1-3, 2021, Yokohama (Poster presentation).
2. ○Banko, P., Okimune, K., and Takasuka, T., Co-expression assembly of plant chromatins. *Annual Hokkaido Branch Meeting, The Japanese Biochemical Society*, July 7, 2022 (Oral presentation).
3. ○Banko, P., Okimune, K., Nagy, S., and Takasuka, T. In vitro chromatin assembly platform for *Arabidopsis thaliana*. *Annual Meeting, The Molecular Biology Society of Japan*, November 29-December 2, 2022, Makuhari (Poster presentation).

3. その他

特許:

1. 高須賀 太一, 沖宗慶一, バンコペトラ, 植物クロマチンの試験管内再構築法, 特願 2022-071114

微生物生理学

1. 原著論文

1. Song, I., Gotoh, Y., Ogura, Y., Hayashi, T., Fukiya, S., and Yokota, A. Comparative genomic and physiological analysis against *Clostridium scindens* reveals *Eubacterium* sp. c-25 as an atypical deoxycholic acid producer of the human gut microbiota. *Microorganisms*, **9**, 2254 (2021).

2. 学会発表 (○: 国内: 4, ●: 国際: 2)

1. ○Guo, Z., Shinmori, A., Otsuka, M., Wada, M., and Yokota, A. The reevaluation of pyruvate carboxylase in lysine production by *Corynebacterium glutamicum*. *The 2018 North-Japan branch symposium of the Society for Biotechnology, Japan*, October 5, 2018, Hokkaido University, Japan (Poster presentation).
2. ○Guo, Z. (郭 朕), 大塚 萌音, 新森 彰信, 和田 大, 横田 篤. *Corynebacterium glutamicum* リジン生産変異株における前駆体供給強化の試み. *The 2019 annual Branch Meeting of Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry*, November 22-23, 2019, Hokkaido University, Japan (Oral presentation).
3. ●Song, I., Akari, M., Fukiya, S., Gotoh, Y., Ogura, Y., Hayashi, T., and Yokota, A. Physiological and genomic characterization of forgotten secondary bile acid producer, *Eubacterium* sp. c-25. *ASM Microbe* (American Society for Microbiology), June 18-22, 2020, Chicago, Illinois, U.S.A. (Poster, abstract accepted), CONFERENCE CANCELLED DUE TO COVID-19.
4. ○Song, I., Fukiya, S., Gotoh, Y., Ogura, Y., Hayashi, T., and Yokota, A. Growth, bile acid transformation, and genomic analysis of unknown deoxycholic acid producer, *Eubacterium* sp. c-25. *Japan Lactic Acid Bacteria Society 2020 Conference (JSLAB)*, November 27-28, 2020, Tokyo, Japan (Oral presentation, online).
5. ○Song, I., Fukiya, S., Gotoh, Y., Ogura, Y., Hayashi, T., and Yokota, A. Physiology and genomic analysis of forgotten deoxycholic acid producer, *Eubacterium* sp. c-25. *The 2021 Annual Meeting of the Japan Society for Bioscience, Biotechnology and Agrochemistry*, March 18-21, 2021, Sendai, Japan (Oral presentation, online).
6. ●Song, I., Fukiya, S., Gotoh, Y., Ogura, Y., Hayashi, T., and Yokota, A. Physiological and genomic analysis of forgotten secondary bile acid producer *Eubacterium* sp. c-25. *The 11th Asian Conference on Lactic Acid Bacteria*, November 5-6, 2021, Tokyo, Japan (Oral presentation, online).

木材化学

1. 原著論文

1. Pakkang, N., Uraki, Y., Koda, K., Nithitanakul, M., and Charoensaeng, A. Preparation of water-in-oil microemulsion from the mixtures of castor oil and sunflower oil as makeup-remover. *J. Surfactants Deterg.*, **21(6)**, 809-816 (2018).
2. Wang, L., Uraki, Y., Koda, K., Gele, A., Zhou, X., and Chen, F. Determination of absolute molar mass of acetylated eucalyptus kraft lignin by two types of size-exclusion chromatography combined with multi-angle laser light-scattering detectors. *Holzforschung*, **73(4)**, 363-369 (2019).

3. Ali, M. M. Pakkang, N., Taira, S., Koda, K., Itoyama, K., and Uraki, Y. Direct electrospinning of cellulose acetate onto polyurethane sheet and Effect of its saponification on mechanical properties. *J. Wood Chem. Technol.*, **39(4)**, 282-295 (2019).
 4. Wang, L., Shigetomi, K., Koda, K., Gele, A., and Uraki, Y. A branched structure provides kraft lignins a denser morphology and a high molar mass for a given hydrodynamic radius. *Holzforschung*, **74(6)**, 551-556 (2020).
 5. Pakkang, N., Kumar, M., Taira, S., Koda, K., Shigetomi, K., and Uraki, Y. Preparation of kraft lignin-based activated carbon fiber electrodes for electric double layer capacitors using an ionic liquid electrolyte. *Holzforschung*, **74(6)**, 577-588 (2020).
 6. Lyu, Y., Matsumoto, T., Taira, S., Ijiri, K., Yoshinaga, A., Shigetomi, K., and Uraki, Y. Influences of polysaccharides in wood cell walls on lignification *in vitro*. *Cellulose*, **28(15)**, 9907-9917 (2021).
 7. Lyu, Y., Suzuki, S., Nagano, H., Shigetomi, K., Tamai, Y., Tsutsumi, Y., Uraki, Y., Effects of hemicelluloses on dehydrogenative polymerization of monolignols with cationic cell wall-bound peroxidase. *Carbohydr. Polym.*, **301**, 120305 (2023).
2. 学会発表 (○ ; 国内 : 4, ● ; 国際 : 3)
1. ● Pakkang, N., Koda, K., and Uraki, Y. Development of lignin-based electrode for high performance electric double layer capacitor with ionic liquid as an electrolyte. *ACS National Meeting Spring 2019*, March 31-April 4, 2019, Orlando, USA. (Oral presentation).
 2. ● Wang, L., Shigetomi, K., Koda, K., Gobro, A., and Uraki, Y. Comparison of molar masses obtained by SEC-MALS between technical lignins and 8-O-4' type of polymeric lignin models under two solvent systems. *1st International Lignin Symposium*, September 13-15, 2019, Sapporo, Japan. (Poster presentation).
 3. ● Pakkang, N., Koda, K., Shigetomi, K., and Uraki, Y. Hardwood kraft lignin based-activated carbon fibers as an electrode for symmetric electric double layer capacitor. *The 7th International Conference on Bio-based Polymers*. November 12, 2019, Bangkok, Thailand. (Oral presentation).
 4. ○ Wang, L., Uraki, Y., Shigetomi, K., and Koda, K. Influence of branched structure in kraft lignins on molar mass measurement with SEC-MALS. *The 70th Annual Meeting of the Japan Wood Research Society*, March 16-18, 2020, Tottori, Japan. (Oral presentation).
 5. ○ Pakkang, N., Mineharu, N., Kumar, M., and Uraki, Y. High performance electric double layer capacitor with lignin-derived electrode and ionic liquid electrolyte. *The 70th Annual Meeting of The Japan Wood Research Society*, March 16-18, 2020, Tottori, Japan. (Oral presentation).
 6. ○ Pakkang, N., Taira, S., Koda, K., Shigetomi, K., and Uraki, Y. Electric double layer capacitor assembly with mainly lignin-based materials. *65th Lignin Symposium*, November 5-6, 2020, On-line. (Oral presentation) Presentation Award.
 7. ○ Lyu, Y., Taira, S., Shigetomi, K., and Uraki, Y., Elucidation of hemicelluloses effects on lignification *in vitro*. *66th Lignin Symposium*, November 4-5, 2021, On-line (Oral presentation).

植物病原学

1. 原著論文

1. Atarashi H., Jayasinghe W.H., Kwon J., Kim H., Taninaka Y., Igarashi M., Ito K., Yamada T., Masuta C., and Nakahara K.S. Artificially edited alleles of the eukaryotic translation initiation factor 4E1 gene differentially reduce susceptibility to cucumber mosaic virus and potato virus Y in Tomato. *Front. Microbiol.*, **11**, 564310 (2020).
2. Kwon, J., Kasai, A., Maoka, T., Masuta, C., Sano, T., and Nakahara, K.S. RNA silencing-related genes contribute to tolerance of infection with potato virus X and Y in a susceptible tomato plant. *Virol. J.*, **17**, 149 (2020).

2. 学会発表 (○ ; 国内 : 1, ● ; 国際 : 1)

1. ● Kwon, J., Masuta C., Kasai, A., Sano, T., and Nakahara, K. RNA silencing-related genes are involved in tomato tolerance toward virus infection. *The 38th Annual American Society for Virology Meeting*. July 20-24, 2019, University of Minnesota, Minneapolis, Minnesota, USA. (Poster presentation).
2. ○ Kwon, J., Maoka, T., Masuta, C., Sano, T., and Nakahara, K. Analysis of increased virulence of potato virus X in AGO2-knockdown tomato. *Annual Meeting of the Phytopathological Society of Japan*. March 19-21, 2020, Kagoshima Prefectural Citizens Center (Oral presentation).

根圏制御学

1. 原著論文

1. Atunnisa, R., and Ezawa, T. Nestedness in arbuscular mycorrhizal fungal communities in a volcanic ecosystem: Selection of disturbance-tolerant fungi along an elevation gradient. *Microbe Environ.*, **34**, 327-333 (2019).

2. 学会発表 (○ ; 国内 : 2, ● ; 国際 : 2)

1. ○ Atunnisa, R., and Ezawa, T. Arbuscular mycorrhizal fungal community in volcanic slopes: temporal dynamics under periodic disturbance. *Annual Meeting of Japanese Society for Soil Science and Plant Nutrition*, September 3-5, 2018, Fujisawa (Nihon University), Abstract p. 29 (Oral presentation).
2. ● Atunnisa, R., and Ezawa, T. Disturbance and stability act as selection pressure for arbuscular mycorrhizal fungi in a volcanic ecosystem. *10th International Conference on Mycorrhiza*, June 30-July 5, 2019, Merida, Mexico, Abstract p. 174 (Poster presentation).
3. ○ Cahyaningtyas, A., and Ezawa, T. Life-history strategies of arbuscular mycorrhizal fungi in frequently disturbed ecosystem: spore-mediated and root-direct colonization enables rapid regeneration. *Annual Meeting of Japanese Society for Soil Science and Plant Nutrition*, September 14-16, 2021, Sapporo (Hokkaido University), Abstract p. 36 (Poster presentation).

presentation).

4. ●Cahyaningtyas, A., and Ezawa, T. Selection of the arbuscular mycorrhizal fungi that regenerate rapidly via soil propagules and intraradical mycelia in a sand-dune ecosystem. *11th International Conference on Mycorrhiza*, August 1-5, 2021, Beijing, China, Abstract p. 98 (Oral presentation).

応用食品科学

1. 原著論文

1. Chintagavongse, N., Yoneda, T., Chi, M.-H., Hayakawa, T., Wakamatsu, J., Tamano, K., and Kumura, H. Adjunctive application of solid-state culture products and its freeze-dried powder from *Aspergillus sojae* for semi-hard cheese. *J. Sci. Food Agric.*, **100**, 4834-4839 (2020).
2. Chintagavongse, N., Takiguchi, H., Chi, M.-H., Tamano, K., Hayakawa, T., Wakamatsu, J., Mitani, T. and Kumura, H. A study of lipolysis induced by edible *Aspergillus* sp. adjunct on ripened semi-hard cheese. *J. Sci. Food Agric.*, **102**, 4355-4362 (2022).

2. 学会発表 (○：国内：3, ●：国際：0)

1. ○滝口 颯, Napaporn Chintagavongse, 玉野 孝一, 早川 徹, 若松 純一, 玖村 朗人「麹添加チーズにおけるランシッド誘発性リパーゼに関する研究」日本農芸化学会北海道支部第1回学術講演会 7月24日(2021)札幌 北海道大学 演題番号 A3 (口頭発表).
2. ○Qingyun Huang, Nodoka Miyaki, Zongfei Li, Toru Hayakawa, Jun-ichi Wakamatsu, and Haruto Kumura "Effects of culture condition and strain dependence on the productivity of *Monascus* secondary metabolite, monascin." *Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry Hokkaido Branch Second Academic Meeting* December 12 (2021) Sapporo, Hokkaido University. Program number A8 (Oral presentation).
3. ○宮木 温香, 黄 卿雲, 早川 徹, 若松 純一, 玖村 朗人「紅麹菌 *Monascus ruber* NBRC 32318 のモナシン産生に及ぼす培地成分の影響」日本農芸化学会北海道支部第2回学術講演会 12月12日(2021)札幌 北海道大学 演題番号 A9 (口頭発表).

動物機能栄養学

1. 原著論文

1. Kodithuwakku, K.A.H.T., Owada, H., Miura, H., Maruyama, D., Hirano, K., Suzuki, Y., Kobayashi, Y., and Koike, S. Effects of oral administration of timothy hay and psyllium on the growth performance and fecal microbiota of preweaning calves. *J. Dairy Sci.*, **104**, 12472-12485 (2021).
2. Kodithuwakku, H., Maruyama, D., Owada, H., Watabe, Y., Miura, H., Suzuki, Y., Hieano, K., Kobayashi, Y., and Koike, S. Alterations in rumen microbiota via oral fiber administration during early life in dairy cows. *Sci. Rep.*, **12**, 10798, (2022).
3. Myint, H., Kishi, H., Iwahashi, Y., Saburi, W., Koike, S., and Kobayashi, Y. Functional modulation of caecal fermentation and microbiota in rat by feeding bean husk as a dietary fibre supplement. *Benef. Microbes*, **9**, 963-974, (2018).

2. 学会発表 (○：国内：1, ●：国際：0)

1. ○Heshan Kodithuwakku, 大和田尚, 平野和夫, 三浦広卓, 鈴木裕, 小林泰男, 小池聡. Effect of early roughage feeding on growth and hindgut environment of pre-weaned calves. 日本畜産学会第128回大会, 2021年3月27日-30日, 福岡市(九州大学, オンライン開催), 講演要旨 P1-3. (Oral presentation).

ビークルロボティクス

1. 原著論文

1. Wang, H., and Noguchi, N. Adaptive turning control for an agricultural robot tractor. *Int. J. Agric. & Biol. Eng.*, **11(6)**, 113-119 (2018).
2. Rahman, Md.M., Ishii, K., and Noguchi, N. Optimum harvesting area of convex and concave polygon field for path planning of robot combine harvester. *Intell. Serv. Robot.*, **12(4)**, 167-179 (2019).
3. Wang, H., and Noguchi, N. Navigation of a robot tractor using the centimeter level augmentation information via Quasi-Zenith Satellite System. *Eng. Agric. Environ. Food.*, **12(4)**, 414-419 (2019).
4. Wang, H., and Noguchi, N. Navigation of a robot tractor using the Japanese Quasi-Zenith Satellite System (Part 1) * — Application of Precise Point Positioning Method to a Robot Tractor —. *Journal of JSAMFE*, **81(4)**, 250-255 (2019).
5. Ospina, R., and Noguchi, N. Simultaneous mapping and crop row detection by fusing data from wide angle and telephoto images. *Comput. Electron. Agric.*, **162**, 602-612 (2019).
6. Nguyen, T.T., Ospina, R., Noguchi, N., Okamoto, H., and Ngo, Q.H. Real-time weed detection in rice fields in the Vietnamese Mekong Delta. *Journal of JSAMFE*, **82**, 247-256 (2020).
7. Suxing, L., Ospina, R., Noguchi, N., and Kishima, Y. Development of phenotyping system using low altitude UAV imagery and deep learning. *Int. J. Agric. Biol. Eng.*, **14(1)**, 207-215 (2021).
8. Nguyen, T.T., Ospina, R., Noguchi, N., Okamoto, H., and Ngo, Q.H. Real-time disease detection in rice fields in the Vietnamese Mekong Delta. *Environ. Control. Biol.*, **59(2)**, 77-85 (2021).
9. Udompant, K., Ospina, R., Kim, Y.-J., and Noguchi, N. Utilization of Quasi-Zenith Satellite System for navigation of a robot combine harvester. *Agronomy*, **11(3)**, 483-500 (2021).

2. 学会発表 (○：国内：2, ●：国際：4)

1. ●Wang, H., and Noguchi, N. Precise point positioning for a robot tractor using LEX signal transmission from Quasi-Zenith Satellite System. *XIX CIGR World Congress 2018*, April 22-25, 2018, Antalya, Turkey (Oral presentation).
2. ●Ospina, R., and Noguchi, N. Simultaneous navigation and mapping combining wide angle and telephoto images. *9th*

International Symposium on Machinery and Mechatronics for Agricultural and Biosystems Engineering (ISMAB), May 28-30, 2018. Jeju, Korea (Oral presentation).

- Lyuu, S., Ospina, R., and Noguchi, N. Paddy rice phenotyping analysis: Deep learning based UAV image segmentation. 日本写真測量学会北海道支部平成 30 年度第 37 回学術講演会, March 5, 2019. Sapporo, Japan (Oral presentation).
- Nguyen, T.T., Ospina, R., and Noguchi, N. Weeds detection in rice crops from Vietnam. 日本写真測量学会北海道支部平成 30 年度第 37 回学術講演会, March 5, 2019. Sapporo, Japan (Oral presentation).
- Nguyen, T.T., Ospina, R., and Noguchi, N. Development of a smart spraying system for weeds on rice fields. *13th CIGR VI Technical Symposium FWFNWG and FSWG workshops and 2019 International Joint Conference on JSAM, SASJ*, September 3-6, 2019. Sapporo, Japan (Oral presentation).
- Saha, S., Ospina, R., and Noguchi, N. A vision-based road detection system for the navigation of an autonomous tractor. *Proceedings of the European Conference on Agricultural Engineering (AgEng 2021)*, July 4-8, 2021. Evora, Portugal. P 519-526. (Oral presentation).

循環農業システム工学

1. 原著論文

1. Bakri, S.N.S.B., Iwabuchi, K., Yoshimoto, R., and Taniguro, K. Torrefaction of high moisture content biomass in an industrial rotary kiln combustion type reactor. *Journal of the JSAMFE*, **80**, 123-132 (2018).
2. Shimizu, N., Abea, A., Ushiyama, T., and Öner, E.T. Effect of temperature on the hydrolysis of levan treated with compressed hot water fluids. *Food Sci. & Nutr.*, **8**, 2004-2014 (2020).
3. Itoh, T., Iwabuchi, K., Maemoku, N., Chen, S., and Taniguro, K. Role of ambient pressure in self-heating torrefaction of dairy cattle manure. *PLoS One*, **15**, e0233027 (2020).
4. Mohammed, I.S., Na, R., Kushima, K., and Shimizu, N. Investigating the effect of processing parameters on the products of hydrothermal carbonization of corn stover. *Sustainability* **12**, 5100 (2020).
5. Rajapaksha, D.S.W., and Shimizu, N. Valorization of spent black tea by recovery of antioxidant polyphenolic compounds: Subcritical solvent extraction and microencapsulation. *Food Sci. & Nutr.*, **8**, 4297-4307 (2020).
6. Piash, M.I., Iwabuchi, K., Itoh, T., and Uemura, K. Release of essential plant nutrients from manure- and wood-based biochars. *Geoderma*, **397**, 115100 (2021).
7. Rajapaksha, D.S.W., and Shimizu, N. Development and characterization of functional starch-based films incorporating free or microencapsulated spent black tea extract. *Molecules*, **26**, 3898 (2021).
8. Aliyu, M., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Upgrading the fuel properties of hydrochar by co-hydrothermal carbonisation of dairy manure and Japanese larch (*Larix kaempferi*): product characterisation, thermal behaviour, kinetics and thermodynamic properties. *Biomass Convers. Biorefin.*, <https://doi.org/10.1007/s13399-021-02045-0>, (2021).
9. Li, X., and Shimizu, N. Effects of lipase addition, hydrothermal processing, their combination, and co-digestion with crude glycerol on food waste anaerobic digestion. *Fermentation*, **7**, 284 (2021).
10. Rajapaksha, D.S.W., and Shimizu, N. Pilot-scale extraction of polyphenols from spent black tea by semi-continuous subcritical solvent extraction. *Food Chem., X* **13**, 100200 (2022).
11. Mohammed, I.S., Na, R., Kushima, K., and Shimizu, N. Modeling anaerobic Co-digestion of corn stover hydrochar and food waste for sustainable biogas production, *Fermentation*, **8**, 110 (2022).
12. Piash, M.I., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Synthesizing biochar-based fertilizer with sustained phosphorus and potassium release: Co-pyrolysis of nutrient-rich chicken manure and Ca-bentonite. *Sci. Total Environ.*, **822**, 153509 (2022).
13. Aliyu, M., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Improvement of the fuel properties of dairy manure by increasing the biomass-to-water ratio in hydrothermal carbonization. *PLoS One*, **17**, e0269935 (2022).

2. 学会発表 (○ ; 国内 : 3, ● ; 国際 : 11)

1. ● Abea, A., Ushiyama, T., Öner, E.T., and Shimizu, N. Production of fructo-oligosaccharides from levan treated with compressed hot water fluids. *2018 Americas Conference on Medical Imaging and Clinical Research (AMICR 2018)*, December 23-25, 2018, Panama.
2. ● Li, X., and Shimizu, N. Anaerobic co-digestion of food waste and crude glycerol: Evaluation of substrate ratio and impact of food waste pretreatments (Enzymatic hydrolysis, hydrothermal and combination of two methods). *The 5th Renewable Energy Sources-Research and Business (RESRB) 2020 conference*, September 7-8, 2020, Brussels, Belgium (Oral presentation, online).
3. ● Li, X., and Shimizu, N. Food waste co-digestion with crude glycerol for methane production: maximizing methane yield by combined pretreatments of lipase addition and hydrothermal processing. *The 5th CIGR International Commission of Agricultural and Biosystems Engineering conference*, May 28, 2021, Quebec, Canada (Oral presentation, online).
4. ● Rajapaksha, D.S.W., and Shimizu, N. Pilot-scale extraction of polyphenols from spent black tea by semi-continuous subcritical solvent extraction, *International Conference on Agriculture, Food Technology and Nutrition*, June 7-8, 2021, Singapore (Oral presentation, online).
5. ○ Shin, Y.S., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Potential of dairy manure biochar as a composting amendment to mitigate ammonia volatilization, *The 79th Annual Meeting of Japanese Society of Agricultural Machinery and Food Engineers*, September 13-15, 2021, Fukuoka, Japan (Oral presentation, online).
6. ● Li, X., and Shimizu, N. Recovery strategies for volatile fatty acids-inhibited anaerobic co-digestion of food waste and crude glycerol: effects of reinoculation and biochar addition. *The 13th Japan-China-Korea International Postgraduate Academic Forum*, September 24-25, 2021, Beijing, China (Oral presentation, online, The Bronze Award).
7. ● Gong, P., and Shimizu, N. Adaptive control and system identification of anaerobic co-digestion of food waste. *The 13th*

Japan-China-Korea International Postgraduate Academic Forum, September 24-25, 2021, Beijing, (Oral presentation, online, The Bronze Prize).

8. ● Piash, M.I., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Optimizing the nutrient release from biochar: Co-pyrolysis of nutrient-rich feedstock and Ca-bentonite, *The 5th Asia Pacific Biochar Conference (APBC2021)*, May 11-12, 2021, Hong Kong, China (Oral presentation, online).
9. ○ Shin, Y.S., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Potential of dairy manure biochar as a composting amendment to mitigate ammonia volatilization, *Hokkaido branch meeting of JSMCWM (2021)*, November 26, 2021, Sapporo, Japan (Poster presentation).
10. ○ Mohammed, I.S., Na, R., and Shimizu, N. Development of a control system for anaerobic co-digestion process of biogas from food waste and corn stover hydrochar. *YABEC Symposium*, November 19-20, 2021, Kobe, Japan (Oral presentation, online).
11. ● Aliyu, M., Iwabuchi, K., and Itoh, T. The fate of hydrochar's fuel property by hydrothermal carbonization of the Japanese larch via increasing process temperature and biomass to water ratio, *12th International Conference on Future Environment and Energy (ICFEE 2022)*, January 20-22, 2022, Tokyo, Japan (Oral presentation).
12. ● Piash, M.I., Iwabuchi, K., and Itoh, T. Effective encapsulation of biochar-based fertilizer: Utilizing the grafting potential of chitosan for sustained nitrogen release, *The 22nd World Congress of Soil Science (WCSS2022)*, August 3, 2022, Glasgow, UK (Poster presentation).
13. ● Yuan Y., and Shimizu, N. Enhanced antioxidants and saccharides production of buckwheat waste by ethanol assisted hydrothermal extraction: From lab to pilot scale. *The 14th Japan-China-Korea International Postgraduate Academic Forum*. September 27, 2022, Tsukuba, Japan (Oral presentation, online, The Silver Award).
14. ● Li, F., and Shimizu, N. Comparative effects of mineral fertilizer and digestate on growth, antioxidant system, and physiological characteristics in edible parts of lettuce under the salt stress. *The 14th Japan-China-Korea International Postgraduate Academic Forum*. September 28, 2022, Tsukuba, Japan (Oral presentation, online).

3. その他

著書：

1. Shimizu, N., and Abea, A. Chapter 4: Characterization of Fructans by Size-exclusion Chromatography: A Review. *Agricultural Research Updates* **29**, Nova Science Publishers Inc., 209-236 (2020).

花卉・緑地計画学

2. 学会発表 (○：国内：2, ●：国際：0)

1. ○ Xu, M., and Matsushima, H. Research on Landscape Characteristics of Tianmeng Mountain Scenic Area in Linyi City Based on Landscape Visual Sensitivity Evaluation and SBE method. *ELR2022*, September 20-23, 2022, Tsukuba, Japan (Poster presentation).
2. ○ 松島肇, 黒沢高秀, 島田直明, 平吹喜彦, 岡浩平, 鈴木玲, 大越陽, Xu, M.：宮城県気仙沼市大谷海岸における海岸防潮堤法面への覆砂と自生種導入効果について. *ELR2022*, September 20-23, 2022, Tsukuba, Japan (口頭発表) .

開発経済学

1. 原著論文

1. Nguyen, T.T.H., Morioka, M., and Kondo, T. Linkage between farm and non-farm sectors: Evidence from Vietnam, *The Frontiers of Agricultural Economics*, **22(1)**, 62-73(2020).
2. Nguyen T.T.H., and Kondo, T. Does the non-farm sector affect production efficiency of the Vietnamese agricultural sector? A stochastic frontier production approach. *J. Agric. Rural Dev. Trop. Subtrop.*, **121(2)**, 289-301(2020).
3. Nguyen T.T., H., Xuan H., P., and Kondo, T. The impact of non-farm activities on agricultural investment in Vietnam: the difference made by credit constraints levels. *Stud. Agric. Econ.*, **123(3)**, 141-152(2021).

2. 学会発表 (○：国内：1, ●：国際：0)

1. ○ Nguyen, T.T.H., Kondo, T. Does non-farm sector affects to production efficiency in Vietnam? -A Stochastic Frontier Production Approach-, Japanese Society of Regional and Agricultural Development, June 6, 2018, Nagoya, Japan (Oral presentation).

植物育種学

1. 原著論文

1. Tam, N.T., Dwiyantri, M.S., Koide, Y., Nagano, A.J., Ky, H., Tin, H.Q., Hien, N.L., Dung, L.V., and Kishima, Y. Profiling SNP and nucleotide diversity to characterize Mekong Delta rice landrace in Southeast Asian populations. *Plant Genome*, **12**, 190042. (2019)
2. Zin Mar M., Koide, Y., Ogata, M., Kuniyoshi, D., Tokuyama, Y., Hikichi, K., Obara, M., and Kishima, Y. Genetic mapping of the gamete eliminator locus, S2, causing hybrid sterility and transmission ratio distortion found between *Oryza sativa* and *Oryza glaberrima* cross combination. *Agriculture*, **11**, 268 (2021)
3. Zin Mar M., and Koide, Y. Influence of gender bias on distribution of hybrid sterility in rice. *Front. Plant Sci.*, **13**, 898206 (2022)
4. Wang, S., Koide, Y., and Kishima, Y. How to establish a mutually beneficial relationship between a transposon and its host: lessons from Tam3 in *Antirrhinum*. *Genes Genet., Syst.*, **97**, 177-184 (2022)
5. Tam, N.T., Dwiyantri, M.S., Sakaguchi, S., Koide, Y., Dung, L. V., Watanabe, T., and Kishima, Y. Identification of a *Saltol*-independent salinity tolerance polymorphism in rice Mekong Delta landraces and characterization of a promising line,

Doc Phung. *Rice*, **15**, 65 (2022).

2. 学会発表 (○：国内：3, ●：国際：1)

1. ●Tam, N.T., Dwiyantri, M.S., Koide, Y., Nagano, A.J., Ky, H., Tin, H.Q., Hien, N.L., Dung, L.V., and Kishima, Y. Genomic characterization of the local rice resource in the Mekong Delta of Viet Nam. *The 16th International Symposium on Rice Functional Genomics*, September 5-7, 2018, Tokyo, Japan (Poster presentation).
2. ○Zin Mar, M., Ogata, M., Tokuyama, Y., Hikichi, K., Kishima, Y., and Koide, Y. Genetic mapping of a hybrid sterility locus, S2, in rice. The Japanese Society of Breeding, Japan, March 17-18, 2021. (Oral presentation).
3. ○Zin Mar, M., The hybrid sterility locus, S2, is located on rice chromosome 4. NIG-Joint workshop イネ属近縁野生種研究会 生態・遺伝・進化 Institute of Genetics, Japan, March 8-9, 2022. (Oral presentation)
4. ○Wang, S., Yuasa, I., Hirata, M., Uchiyama, T., Koide, Y., Nakahara, K., and Kishima, Y. Paramutation occurs at New Stabiliser locus to suppress Tam3 transposition. 第93回日本遺伝学会, 2021年9月8-10日, 京都市 (学習院大学) (Oral presentation, online).

農業土木学

1. 原著論文

1. Chey, V., Yamamoto, T., and Inoue, T. Evaluation of water shortages in agricultural water use in the Sangker river basin, Cambodia. *Int. J. Environ. Rural Dev.*, **11**, 32-39 (2020).
2. 学会発表 (○：国内：0, ●：国際：1)
1. ●Chey, V., Yamamoto, T., and Inoue, T. Evaluation of water shortages in agricultural water use in the Sangker river basin, Cambodia. *11th International Conference on Environmental and Rural Development*, February 29-March 1, 2020, Siem Reap, Kingdom of Cambodia (Oral presentation, Award of Excellent Paper).

生態環境物理学

1. 原著論文

1. Kiew, F., Hirata, R., Hirano, T., Xhuan, W., Aries, E., Musin, K., Waili, J., San, L., Shimizu, M., and Melling, L. CO₂ balance of a secondary tropical peat swamp forest in Sarawak, Malaysia. *Agric. For. Meteorol.*, **248**, 494-501 (2018).
2. Wong, G., Hirata, R., Hirano, T., Kiew, F., Aeries, E., Musin, K., Waili, J., Lo, K., and Melling, L. Micrometeorological measurement of methane flux above a tropical peat swamp forest. *Agric. For. Meteorol.*, **256-257**, 353-361 (2018).
3. Wong, G., Hirata, R., Hirano, T., Kiew, F., Aeries, E., Musin, K., Waili, J., Lo, K., and Melling, L. How do land use practices affect methane emissions from tropical peat ecosystems? *Agric. For. Meteorol.*, **282-283**, 107869 (2020).
4. Kiew, F., Hirata, R., Hirano, T., Wong, G.X., Aries, E.B., Kemudang, K., Wenceslaus, J., Lo, K.S., and Melling, L. Carbon dioxide balance of an oil palm plantation established on tropical peat. *Agric. For. Meteorol.*, **295**, 108189 (2020).
5. Cui, R., Hirano, T., Sun, L., Teramoto, M., and Liang, N. Variation in biomass, production and respiration of fine roots in a young larch forest. *J. Agric. Meteorol.*, **77**, 167-178 (2021).
6. Wakhid, N., and Hirano, T. Soil CO₂ emissions and net primary production of an oil palm plantation established on tropical peat. *Mires and Peat*, **27**, Article 13 (2021).

2. 学会発表 (○：国内：2, ●：国際：4)

1. ○Wakhid, N., Hirano, T., Dariah, A., and Agus, F. CO₂ emission through frond decomposition from an oil palm plantation on tropical peat. *TASTE29*, June 15, 2019, Sapporo, Japan (Oral presentation).
2. ●Cui, R., Hirano, T., Sun, L., Teramoto, M., and Liang, N. Dynamics of soil respiration in a young larch plantation. *International Symposium on Agricultural Meteorology 2020*, March 13, 2020 (Oral presentation, online).
3. ○Tanatarakeree, K., Kato, T., Morozumi, T., Nakashima, N., Buareal, K., Wu, L., Ueyama, M., Hirano, T., and Ninomiya, H. Continuous ground measurement of solar-induced chlorophyll fluorescence and its link to ecosystem-level photosynthesis in wetland by high resolution spectrometer, *AGU Fall Meeting 2020*, Dec 1-17, 2020 (Poster presentation, online).
4. ●Cui, R., Hirano, T., Sun, L., Teramoto, M., and Liang, N. Spatiotemporal variation in biomass, production and respiration of fine roots in a young larch forest. *International Symposium on Agricultural Meteorology 2021*, March 18, 2021 (Oral presentation, online).
5. ●Hu, R., Yamashita, S., Sakaguchi, K., Cui, R., Hirano, H., Sun, L., and Liang, N. Spatiotemporal variation in soil methane uptake in a regrowing deciduous forest in northern Japan. *International Symposium on Agricultural Meteorology 2022*, March 18, 2022 (Oral presentation, online).
6. ●Tanatarakeree, K., Kato, T., Morozumi, T., Buareal, K., Ueyama, M., Nakashima, N., Ninomiya, H., Lan, W., and Hirano, T. Ground-Based Measurement of Solar-Induced Chlorophyll Fluorescence in Wetland by High-Spectral Resolution. *JpGU Meeting 2021*, May 30- June 6, 2021 (Oral presentation, online).

土壌保全学

1. 原著論文

1. Ning, Z., Ishiguro, M., Koopal, L.K., Sato, T., and Kashiwagi, J. Comparison of strontium retardation for kaolinite, illite, vermiculite and allophane. *J. Radioanal. Nucl. Chem.*, **317**, 409-419 (2018).
2. Hossain, M.I., and Ishiguro, M. Influence of high pH state of dodecylbenzenesulfonate and dissolved organic matter complex solution on the ultraviolet spectrometry of dodecylbenzenesulfonate. *J. Surfact. Deterg.*, **26**, 73-82 (2022).
3. Hossain, M.I., and Ishiguro, M. Precise estimation of dodecylbenzenesulfonate in aqueous solution containing dissolved organic matter extracted from soil using UV-spectrometry. *Eur. J. Soil Science*, **73(1)**, e13150 (2022).

2. 学会発表 (○：国内：18, ●：国際：3)

- Li, A., Ishiguro, M., and Kosugi, S. Sodium dodecylbenzenesulfonate transport in highly humic soil: influence of water flux. *Colloid and Interface Chemistry Meeting*, September 20, 2018, Tsukuba (Tsukuba University), (Poster presentation).
- Li, A., Ishiguro, M., and Kosugi, S. Influence of contact time on anionic surfactant (Sodium dodecylbenzenesulfonate) transport in highly humic soil under different water flux. *Soil Physics Meeting*, October 27, 2018, Sapporo (Hokkaido University), (Poster presentation).
- Zhou, P., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Kobayashi, S., Tsukakubo, Y., and Soluttanavong, V. Study of inter-tillage weeding in paddy field without fertilizer and agricultural chemical: 2. Nitrogen dynamics. *Soil Physics Meeting*, October 27, 2018, Sapporo (Hokkaido University), (Poster presentation).
- Soluttanavong, V., Araki, H., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Kobayashi, S., Tsukakubo, Y., and Zhou, P. Study of inter-tillage weeding in paddy field without fertilizer and agricultural chemical: 1. Rice growth and yield. *Soil Physics Meeting*, October 27, 2018, Sapporo (Hokkaido University), (Poster presentation).
- Li, A., Ishiguro, M., and Kosugi, S. Influence of water flux on anionic surfactant (sodium dodecylbenzenesulfonate) transport in highly humic soil. *PAWEES International Conference*, November 22, 2018, Nara, (Poster presentation).
- Zhou, P., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Kobayashi, S., Tsukakubo, Y., and Soluttanavong, V. Study of inter-tillage weeding in paddy field without fertilizer and agricultural chemical: 2. Nitrogen dynamics. *PAWEES International Conference*, November 22, 2018, Nara, (Poster presentation).
- Soluttanavong, V., Araki, H., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Kobayashi, S., Tsukakubo, Y., and Zhou, P. Study of inter-tillage weeding in paddy field without fertilizer and agricultural chemical: 1. Rice growth and yield. *PAWEES International Conference*, November 22, 2018, Nara, (Poster presentation).
- Tsukakubo, Y., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Kobayashi, S., Kosugi, S., Soluttanavong, V., and Zhou, P. Study of inter-tillage weeding in paddy field without fertilizer and agricultural chemical:3. Phosphorus dynamics. *PAWEES International Conference*, November 22, 2018, Nara, (Poster presentation).
- Li, A., Ishiguro, M., and Kosugi, S. Effect of water flux on anionic surfactant transport in highly humic soil. *Soil Science Society Meeting*, September 3, 2019, Shizuoka (Shizuoka University), (Poster presentation).
- Soluttanavong, V., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., and Zhou, P. Study of inter-tillage weeding in paddy field without fertilizer and agricultural chemical: First year result. *Soil Science Society Meeting*, September 3, 2019, Shizuoka (Shizuoka University), (Poster presentation). Poster Award.
- Zhou, P., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., and Soluttanavong, V. Nitrogen dynamics of inter-tillage weeding in paddy field without fertilizer and agricultural chemical in 2018 and 2019. *Soil Physics Meeting*, October 26, 2019, Tsukuba (Tsukuba University), (Poster presentation).
- Hossain, I., and Ishiguro, M. Precise estimation of dodecylbenzenesulfonate under the influence of dissolved organic matter using UV- spectrometry. *Soil Physics Meeting*, October 31, 2020, Remote (Tsukuba University), (Poster presentation).
- Zhou, Z., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Ishizuka, H., Fujii, T., and Fujita, K. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer. *Soil Physics Meeting*, October 31, 2020, Remote (Tsukuba University), (Poster presentation).
- Hossain, I., and Ishiguro, M. Precise estimation of dodecylbenzenesulfonate (DBS) concentration from DBS-DOM complex solution using UV- spectrometry. *Soil Science Society Meeting*, September 14, 2021, Remote (Hokkaido University), (Poster presentation).
- Zhou, Z., Ishiguro, M., and Kashiwagi, J. Influence of many times inter-tillage weeding on rice growth and nutrient dynamics in the paddy field without fertilizers and agricultural chemicals: From 2018 to 2020. *Soil Science Society Meeting*, September 14, 2021, Remote (Hokkaido University), (Poster presentation).
- Zhu, Y., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., and Zhou, Z. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: 2. Nitrogen dynamics. *Soil Physics Meeting*, October 30, 2021, Remote (Mie University), Abstract Book SP63P21 (Poster presentation).
- Zhou, Z., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., and Zhu, Y. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: Rice growth and yield. *Soil Physics Meeting*, October 30, 2021, Remote (Mie University), Abstract Book SP63P20 (Poster presentation).
- Hossain, I., and Ishiguro, M. Influence of higher pH condition of DBS-DOM complex solution on the UV spectroscopic measurement of DBS (Dodecylbenzenesulfonate). *Soil Physics Meeting*, October 30, 2021, Remote (Mie University), (Poster presentation).
- Zhiduo, Z. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer. *The Conference on Biodiversity and Agro-ecological Environment 2021*, December 16, 2021, Kummin, China (Oral presentation, Remote).
- Zhu, Y., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., and Zhou, Z. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: 2. Nitrogen dynamics. *World Congress of Soil Science 22nd*, July 31-August 5, 2022, Glasgow, United Kingdom (Poster presentation).
- Zhou, Z., Ishiguro, M., Kashiwagi, J., Araki, H., and Zhu, Y. Study of inter-tillage weeding in paddy field without agricultural chemical and fertilizer: Rice growth and yield. *World Congress of Soil Science 22nd*, July 31-August 5, 2022, Glasgow, United Kingdom (Poster presentation).

造林学

1. 原著論文

1. Abu Elela, S.A., Agathokleous, E., Ghazawy, N.A., Amin, T.R., Elsayed, W.M., and Koike, T. Enzyme activity modification in adult beetles (*Agelastica coerulea*) inhabiting birch trees in an ozone-enriched atmosphere. *Environ. Sci. and Pollut. Res.*, **25(32)**, 32675-32683 (2018).
2. Agathokleous, E., Kitao, M., Qingnan, C., Saitanis, C.J., Paoletti, E., Manning, W.J., Watanabe, T., and Koike, T. Effects of ozone (O₃) and ethylenediurea (EDU) on the ecological stoichiometry of a willow grown in a free-air exposure system. *Environ. Pollut.*, **238C**, 663-676 (2018).
3. Abu Elela, S.A., Agathokleous, E., and Koike, T. Growth and nutrition of *Agelastica coerulea* (Coleoptera: Chrysomelidae) larvae changed when fed with leaves obtained from an O₃-enriched atmosphere. *Environ. Sci. and Pollut. Res.*, **25(13)**, 13186-13194 (2018).
4. Agathokleous, E., Araminiene, V., Belz, R.G., Calatayud, V., De Marco, A., Domingos, M., Feng, Z., Hoshika, Y., Kitao, M., Koike, T., Paoletti, E., Saitanis, C.J., Sicard, P., and Calabrese, E.J. A quantitative assessment of hormetic responses of plants to ozone. *Environ. Res.*, **176**, 108527 (2019).
5. Kitao, M., Tobita, H., Kitaoka, S., Harayama, H., Yazaki, K., Komatsu, M., Agathokleous, E., and Koike, T. Light energy partitioning under various environmental stresses combined with elevated CO₂ in three deciduous broadleaf tree species in Japan. *Climate*, **7(6)**, 79 (2019).
6. Agathokleous, E., WaiLi, Y., Ntatsi, G., Konno, K., Saitanis, C.J., Kitao, M., and Koike, T. Effects of ozone and ammonium sulfate on cauliflower: emphasis on the interaction between plants and insect herbivores. *Sci. Total Environ.*, **659**, 995-1007 (2019).
7. Agathokleous, E., Anav, A., Araminiene, V., De Marco, A., Domingos, M., Kitao, M., Koike, T., Manning, W.J., Paoletti, E., Saitanis, C.J., Sicard, P., Vitale, M., Wang, W., and Calabrese, E.J. Commentary: EPA's proposed expansion of dose-response analysis is a positive step towards improving its ecological risk assessment. *Environ. Pollut.*, **246**, 566-570 (2019).
8. Agathokleous, E., Kitao, M., Komatsu, M., Tamai, Y., Saito, H., Harayama, H., Uemura, A., Tobita, H., and Koike, T. Effects of soil nutrient availability and ozone exposure on container-grown Japanese larch seedlings, and the role of soil microbes. *J. For. Res.*, **31(6)**, 2295-2311 (2020).
9. Hoshika, Y., Paoletti, E., Agathokleous, E., Sugai, T., and Koike, T. Developing ozone risk assessment for larch species. *Front. For. Glob. Change*, **3**, 45 (2020).
10. Sugai, T., Okamoto, S., Agathokleous, E., Masui, N., Satoh, F., and Koike, T. Leaf defense capacity of Japanese elm (*Ulmus davidiana* var. *japonica*) seedlings subjected to a nitrogen loading and insect herbivore dynamics in a free air ozone-enriched environment. *Environ. Sci. and Pollut. Res.*, **27**, 3350-3360 (2020).
11. Masui, N., Mochizuki, T., Tani, A., Matsuura, H., Agathokleous, E., Watanabe, T., and Koike, T. Does ozone alter the attractiveness of Japanese white birch leaves to the leaf beetle *Agelastica coerulea* via changes in biogenic volatile organic compounds (BVOCs): An examination with the Y-tube test. *Forests*, **11(1)**, 58 (2020).
12. Agathokleous, E., Kitao, M., Wang, X., Mao, Q., Harayama, H., Manning, W.J., and Koike, T. Ethylenediurea (EDU) effects on Japanese larch: an one growing season experiment with simulated regenerating communities and a four growing season application to individual saplings. *J. For. Res.*, **32**, 2047-2057 (2021).
13. Novriyanti, E., Watanabe, M., Mao, Q., and Koike, T. Growth performance of eucalypts and acacia seedling under elevated CO₂ load in the changing environment. *Earth Environ. Sci.*, **918(1)**, 012030-012030 (2021).
14. Masui, N., Agathokleous, E., Mochizuki, T., Tani, A., Matsuura, H., and Koike, T. Ozone disrupts the communication between plants and insects in urban and suburban areas: An updated insight focusing on plant volatiles. *J. For. Res.*, **32**, 1337-1349 (2021).
15. Feng, Z., Agathokleous, E., Yue, X., Oksanen, E., Paoletti, E., Sase, H., Gandin, A., Koike, T., Calatayud, V., Yuan, X., Liu, X., De Marco, A., Jolivet, Y., Kontunen-Soppela, S., Hoshika, Y., Saji, H., Li, P., Li, Z., Watanabe, M., and Kobayashi, K. Emerging challenges of ozone impacts on Asian plants: Actions are needed to protect ecosystem health. *Ecosyst. Health Sustain.*, **7(1)**, 1911602 (2021).
16. Novriyanti, E., Mao, Q., Agathokleous, E., Watanabe, M., Hashidoko, Y., and Koike, T. Elevated CO₂ offsets the alteration of foliar chemicals (n-icosane, geranyl acetate, and elixene) induced by elevated O₃ in three taxa of O₃-tolerant eucalypts. *J. For. Res.*, **32**: 789-803 (2021).
17. Wang, W., Tian, P., Zhang, J., Agathokleous, E., Xiao, L., Koike, T., Wang, H., and He, X. Big data-based urban greenness in Chinese megalopolises and possible contribution to air quality control. *Sci. Total Environ.*, **824**, 153834 (2022).
18. Novriyanti, E., Watanabe, M., and Koike, T. The Atmospheric Concentration of Common Greenhouse Gases in the Pulpwood Plantation in Riau Province, Indonesia. *Earth Environ. Sci.*, **950(1)**, 012007-012007 (2022).
19. Agathokleous, E., Barceló, D., Rinklebe, J., Sonne, C., Calabrese, E.J., and Koike, T. Hormesis induced by silver iodide, hydrocarbons, microplastics, pesticides, and pharmaceuticals: Implications for agroforestry ecosystems health. *Sci. Total Environ.*, **820**, 153116 (2022).
20. Agathokleous, E., Kitao, M., Shi, C., Masui, N., Abu-ElEla, S., Hikino, K., Satoh, F., and Koike, T. Ethylenediurea (EDU) spray effects on willows (*Salix sachalinensis* F. Schmid) grown in ambient or ozone-enriched air: Implications for renewable biomass production. *J. For. Res.*, **33**, 397-422 (2022).
21. Agathokleous, E., Kitao, M., and Koike, T. Ethylenediurea (EDU) effects on hybrid larch saplings exposed to ambient or elevated ozone over three growing seasons. *J. For. Res.*, **33**, 117-135 (2022).
22. Agathokleous, E., Kitao, M., and Koike, T. Ethylenediurea (EDU) effects on hybrid larch saplings exposed to ambient or

- elevated ozone over three growing seasons. *J. For. Res.*, **33**, 117-135 (2022).
23. Masui, N., Agathokleous, E., Tani, A., Matsuura, H., and Koike, T. Plant-insect communication in urban forests: Similarities of plant volatile compositions among tree species (host vs. non-host trees) for alder leaf beetle *Agelastica coerulea*. *Environ. Res.*, **204**, 111996 (2022).
2. 学会発表 (○; 国内: 1, ●; 国際: 16)
1. ●Agathokleous, E., Kitao, M., and Koike, T. Novel methodologies for forest health and ecological services sustainability. *International Symposium on Forests and Health and Forum for Under-Forestry Economic Industry*, August 2-5, 2018, Harbin, P.R. China (Oral presentation) [Invited].
 2. ●Masui, N., Mochizuki, T., Tani, A., Agathokleous, E., and Koike, T. Leaf beetle activities on Japanese white birch grown under elevated O₃. *International Conference on Ozone and Plant Ecosystems*, May 21-25, 2018, Florence, Italy (Oral presentation).
 3. ●Sugai, T., Kam, D.-G., Agathokleous, E., Watanabe, M., Kitao, K., and Koike, T. Non-linear responses of two larches species exposed to four ozone levels. *International Conference on Ozone and Plant Ecosystems*, May 21-25, 2018, Florence, Italy (Oral presentation).
 4. ●Agathokleous, E., Belz, R.G., Calatayud, V., De Marco, A., Hoshika, Y., Kitao, M., Saitanis, C.J., Sicard, P., Paoletti, E., and Calabrese, E.J. Hormesis for predicting the effect of ozone on vegetation. *Preconference workshop "Agriculture and Animal Husbandry in a Changing Climate"*, "Climate Change in the Mediterranean and the Middle East: Challenges and Solutions", May 16-17, 2018, Nicosia, Cyprus (Oral presentation).
 5. ●Agathokleous, E., Kitao, M., Komatsu, M., Tamai, Y., Saito, H., Harayama, H., Uemura, A., Tobita, H., and Koike, T. Japanese larch seedlings grown in containers under the interaction of nutrient availability and ozone. *International Symposium on Forests and Health and Forum for Under-Forestry Economic Industry*, August 2-5, 2018, Harbin, P.R. China, Extended Abstracts p.56 (Poster presentation) [Invited Speaker].
 6. ●Agathokleous, E., De Marco, A., Kato, T., Kitao, M., Koike, T., Manning, W.J., Ntatsi, G., Paoletti, E., Saitanis, C.J., Sarneel, J., Sicard, P., and Vitale, M. How does elevated ozone affect the decomposition process in deciduous tree communities? *International Symposium on Forests and Health and Forum for Under-Forestry Economic Industry*, August 2-5, 2018, Harbin, P.R. China, Extended Abstracts p.57 (Poster presentation) [Invited Speaker].
 7. ●Agathokleous, E., Kitao, M., and Koike, T. The new generation Free Air Controlled Exposure (FACE) system for exposing communities of deciduous tree species to ozone in Japan. *International Symposium on Forests and Health and Forum for Under-Forestry Economic Industry*, August 2-5, 2018, Harbin, P.R. China, Extended Abstracts p.58 (Poster presentation) [Invited Speaker].
 8. ●Agathokleous, E., De Marco, A., Kitao, M., Koike, T., Manning, W.J., Ntatsi, G., Paoletti, E., Saitanis, C.J., Sarneel, J., Sicard, P., and Vitale, M. Elevated O₃ affects the decomposition process in different types of soil. *International Conference on Ozone and Plant Ecosystems*, May 21-25, 2018, Florence, Italy (Poster presentation).
 9. ●Okamoto, S., Sugai, T., Agathokleous, E., and Koike, T. Plant-insect interaction of elm seedlings treated with (NH₄)₂SO₄ spray grown under free-air O₃ fumigation. *International Conference on Ozone and Plant Ecosystems*, May 21-25, 2018, Florence, Italy (Poster presentation).
 10. ●Agathokleous, E., Kitao, M., Saito, H., Harayama, H., Uemura, A., and Koike, T. Japanese larch seedlings grown in containers, inoculated with ectomycorrhizal fungi, and exposed to ozone. *International Conference on Ozone and Plant Ecosystems*, May 21-25, 2018, Florence, Italy (Poster presentation).
 11. ●Agathokleous, E., Kitao, M., Komatsu, M., Tamai, Y., Saito, H., Harayama, H., Uemura, A., Tobita, H., and Koike, T. Container-grown Japanese larch seedlings treated with fertilizer, inoculated with ectomycorrhizal fungi, and exposed to ozone-enriched atmosphere. *Preconference workshop "Mediterranean & Middle East Air Pollution In A Changing Climate"*, "Climate Change in the Mediterranean and the Middle East: Challenges and Solutions", May 16-17, 2018, Nicosia, Cyprus (Poster presentation).
 12. ●Agathokleous, E., Kitao, M., and Koike, T. The new generation Free Air Controlled Exposure (FACE) system for exposing communities of deciduous tree species to O₃ in Japan. *Preconference workshop "Mediterranean & Middle East Air Pollution In A Changing Climate"*, "Climate Change in the Mediterranean and the Middle East: Challenges and Solutions", May 16-17, 2018, Nicosia, Cyprus (Poster presentation).
 13. ●Agathokleous, E. New insights into the ecophysiology of plants with examples from environmental pollution studies. *IUFRO Nanning 2019, Harmonized Growth, Cleaner Environment and Sustainable Forests*, May 13-17, 2019, Nanning, P.R. China (Oral presentation).
 14. ○Agathokleous, E., Kitao, M., Harayama, H., Komatsu, M., Uemura, A., and Koike, T. Interactive effects of ectomycorrhizae, fertilization and drought on growth and physiology of container-grown larch. *The 130th Conference of the Japan Forest Society*, March 20-23, 2019, Niigata, Japan, Program and abstracts, p.270 (Poster presentation).
 15. ●Agathokleous, E. Ozone effects on plant communities, plant-insect interactions and plant-soil feedbacks: threats to terrestrial biodiversity. *International conference "Air Pollution threats to Plant Ecosystems"*, October 11-15, 2021, Paphos, Cyprus, Program and Abstracts p.85, 137p. (Oral presentation).
 16. ●Agathokleous, E. Breathing toxins without mask filtering: frontiers in the research of ozone effects on plant ecosystems. *8th Balkan Botanical Congress*, July 4-8, 2022, Athens, Greece, Book of Abstracts p.121 (Oral presentation) [Invited Lecture].
 17. ●Agathokleous, E. Ozone impacts on plant communities, plant-insect interactions, and plant-soil feedbacks. *35th Task Force Meeting of the UNECE ICP Vegetation for Europe Convention on Long-Range Transboundary Air Pollution*, February 21-23, 2022, Program and Abstracts pp.13-68, Online (Oral presentation).

3. その他

受賞：

1. Agathokleous, E. Awarded the mdpi Forests 2019 Travel Award for postdocs.
2. Agathokleous, E. Awarded a Publons Peer Review Award 2018 as one of the top 1 per cent of peer reviewers in Plant & Animal Science (2018).
3. Agathokleous, E. Awarded a Publons Peer Review Award 2018 as one of the top 1 per cent of peer reviewers in Environment/Ecology (2018).
4. Agathokleous, E. Awarded the mdpi Agronomy 2018 Travel Award for Junior Investigator (2018).
5. Agathokleous, E. Awarded the prestigious Outstanding New Investigator Award 2018 of the International Dose-Response Society. The plaque was presented at the 17th Annual International Conference, 'Preconditioning in Biology and Medicine-Mechanisms and Translational Research' held at the University of Massachusetts, Amherst, MA on April 17-18, 2018 (2018).
6. Agathokleous, E. Awarded a Publons Top Peer Reviewer Award 2019 as one of the top 1 per cent of peer reviewers in Cross-Field (2019).
7. Agathokleous, E. Awarded a Publons Top Peer Reviewer Award 2019 as one of the top 1 per cent of peer reviewers in Environment and Ecology (2019).
8. Agathokleous, E. Awarded a Publons Top Peer Reviewer Award 2019 as one of the top 1 per cent of peer reviewers in Plant and Animal Science (2019).
9. Agathokleous, E. The Excellent Associate Editor Award "for excellent work and great contribution to Journal of Forestry Research during 2018 and 2019" (2019).
10. Agathokleous, E. The Excellent Associate Editor Award "for excellent work and great contribution to Journal of Forestry Research in 2020".
11. Agathokleous, E. The 2020 Mass Innovation and Entrepreneurship Program award (Shuang Chuang; 双创博士) of Jiangsu Province (Individual): "The High-level Talent Program for Innovation and Entrepreneur" of Jiangsu Province, China (provincial) (2020).
12. Agathokleous, E. The Excellent Associate Editor Award "for excellent work and great contribution to Journal of Forestry Research during 2019 and 2020" (2020).
13. Agathokleous, E. The 2021 Jiangsu Distinguished Professor (2021 年江苏特聘教授) award, Jiangsu Province, PR China (2021).
14. Agathokleous, E. Included in the Stanford University list "2021" with the world's top 2% scientists (both career-long and single year impact). The top ranked higher-level Science-Metrix categories for author were Environmental Science (subfield) and Earth & Environmental Science (field) (2021).

本のチャプターの分担：

1. Qu, L., Wang, Y., Masyagina, O., Kitaoka, S., Fujita, S., Kita, K., Prokushkin, A., Koike, T.: Larch: A Promising Deciduous Conifer as an Eco-Environmental Resource. "Conifers - Recent Advances (eds, by Gonçalves, A.C., Fonseca, T.F.)" IntechOpen (London, UK), pp.1-37, June 2022.

雑誌の特集号編集：

1. Agathokleous, E., Carrari, E., and Sicard, P. Special issue of Climate, "Air Pollution and Plant Ecosystems", *Climate*, **8**, 91 (2020).

WORKING GROUPS：

1. Agathokleous, E. WG 7.01.09 Ground-level Ozone, RG 7.01.00 Impacts of Air Pollution and Climate Change on Forest Ecosystems, International Union of Forest Research Organizations (IUFRO), Deputy Coordinator and founding member, Sep 2017-Oct 2019.
2. Agathokleous, E. WG 8.04.05 Ground-level Ozone (previous WG 7.01.09), RG 8.04.00 Impacts of Air Pollution and Climate Change on Forest Ecosystems, International Union of Forest Research Organizations (IUFRO), Coordinator, Nov 2019 - to date.

PROGRAM CHAIR：

1. Agathokleous, E. International conference "Air Pollution threats to Plant Ecosystems", 11-15 October, 2021, Paphos, Cyprus (2021).

SCIENTIFIC COMMITTEE MEMBER：

1. Agathokleous, E. International Conference on Ozone and Plant Ecosystems, 21-25 May 2018, Florence, Italy (2018).
2. Agathokleous, E. IUFRO Nanning 2019, Harmonized Growth, Cleaner Environment and Sustainable Forests, 13-17 May 2019, Nanning, P.R. China (2019).
3. Agathokleous, E. IUFRO Nanning 2022- 8th Balkan Botanical Congress, 4-8 July 2022, Athens, Greece (2022).

CHAIRMAN - RAPPORTEUR：

1. Agathokleous, E. Chairman of Group A "Plant metabolism for higher tolerance to air pollution" [rapporteur: Prof. Elina Oksanen, University of Eastern Finland] of the 4th Asian Air Pollution Workshop (AAPW-4), 20-22 October 2018, Nanjing, P.R. China. (2018).
2. Agathokleous, E. International Conference on Ozone and Plant Ecosystems, Session 2 "How plant ecosystems respond to ozone exposure", 21-25 May 2018, Florence, Italy. (2018).
3. Agathokleous, E. Chairman of Group D "Role of environmental factors in air pollution sensitivity" [rapporteur: Assoc. Prof. Makoto Watanabe, Tokyo University of Agriculture and Technology] of the 5th Asian Air Pollution Workshop (AAPW-5), 5-7 November 2019, Varanasi, India (2019).

4. Agathokleous, E. 2021- Chairman of Section 6 “Genetic, biochemical, and physiological mechanisms underlying stress responses of vegetation” of the international conference “Air Pollution threats to Plant Ecosystems”, 11-15 October, 2021, Paphos, Cyprus (2021).

雑誌の編集など：

Agathokleous, E.

1. Advisory Board, *Sci* (October 2018- date).
2. Associate Editor, *J. For. Res.* (May 2018- December 2019).
3. Editorial Board, *Sci. Total Environ.* (November 2019- date).
4. Associate Editor-in-Chief, *J. For. Res.* (January 2020- date).
5. Associate Editor, *For. Res.* (November 2020- date).
6. Editorial Board, *Plant Stress* (August 2020- date).
7. Editorial Board (founding), *Water Emerging Contaminants and Nanoplastics* (September 2021- date).
8. Editorial Board, *Curr. Opin. Environ. Sci. Health* (July 2021- date).
9. Editorial Board, *J. Environ. Sci. Health, Part A: Toxic/Hazardous Substances and Environmental Engineering* (Dec 2021- date).
10. Editorial Board, *J. Environ. Sci. Health, Part B: Pesticides, Food Contaminants, and Agricultural Wastes* (Dec 2021- date).
11. Editorial Board, *Pub. Health Tox.*, European Publishing (Apr 2022- date).
12. Review Editor, *Tox. Pollut. Environ.*, specialty section of *Frontiers in Environmental Science* (April 2022- date).
13. Associate Editor, *Crit. Rev. Environ. Sci. Technol.*, Taylor & Francis Group (Oct 2022- date).
14. Subject Editor, *Ecosyst. Health Sustain.* (November 2022- date).
15. Associate Editor, *Sustainable Horizons* (October 2022- date).

食品加工工学

1. 原著論文

1. Cambaza, E., Koseki, S., and Kawamura, S. The use of colors as an alternative to size in *Fusarium graminearum* growth studies. *Foods*, **7**, 100 (2018).
2. Cambaza, E., Koseki, S., and Kawamura, S. *Fusarium graminearum* colors and deoxynivalenol synthesis at different water activity. *Foods*, **8**, 7 (2018).
3. Kan, K., Chen, J., Kawamura, S., and Koseki, S. Characteristics of D-tryptophan as an anti-bacterial agent: Effect of sodium chloride concentration and temperature on *Escherichia coli* growth inhibition. *J. Food Prot.*, **81**, 25-30 (2018).
4. Chen, J., Kudo, H., Kan, K., Kawamura, S., and Koseki, S. Growth inhibitory effect of D-tryptophan on *Vibrio* spp. in shucked and live oysters. *Appl. Environ. Microb.*, **84**, e01543-18 (2018).
5. Cambaza, E., Koseki, S., and Kawamura, S. *Fusarium graminearum* growth and its fitness to the commonly used models. *Int. J. Agric. Environ. Food Sci.*, **3**, 10-14 (2019).
6. Iweka, P., Kawamura, S., Mitani, T., and Koseki, S. Online milk quality assessment during milking using near-infrared spectroscopic sensing system. *Environ. Control Biol.*, **58**, 1-6 (2020).
7. Chen, J., Kawamura, S., and Koseki, S. Effect of D-tryptophan on the psychrotrophic growth of *Listeria monocytogenes* and its application in milk. *Food Control*, **110**, 107048 (2020).
8. Lee, K., Shoda, M., Kawai, K., and Koseki, S. Relationship between glass transition temperature, and desiccation and heat tolerance in *Salmonella enterica*. *PLoS ONE*, **15**, e0233638 (2020).
9. Lee, K., Koyama, K., Kawai, K., and Koseki, S. Why does *Cronobacter sakazakii* survive for a long time in dry environments? Contribution of the glass transition of dried bacterial cells. *Microbiol. Spectr.*, **9**, e01384-21 (2021).
10. Iweka, P., Kawamura, S., Mitani, T., Kawaguchi, T., and Koseki, S. Cow milk progesterone concentration assessment during milking using near-infrared spectroscopy. *Eng. Agric. Environ. Food*, **14**, 30-36 (2022).

2. 学会発表 (○；国内：1, ●；国際：5)

1. ●Iweka, P., Kawamura, S., Mitani, T., Okatani, T., and Koseki, S., Bovine Milk Progesterone Determination Using Near-infrared Spectroscopy during Milking. *19th World Congress of CIGR (International Commission of Agricultural and Biosystems Engineering), Sustainable Life for Children*, April 22-25, 2018, Antalya, Turkey Granada Congress Center. (Oral presentation)
2. ○Iweka, P., Kawamura, S., Mitani, T., and Koseki, S., 2018. Milk Quality Assessment during Milking Using Near-infrared Spectroscopic Sensing System. *Japanese Society of Agricultural, Biological and Environmental Engineers and Scientists*, Tokyo University of Agriculture, September 18-21, 2018, Tokyo, Japan. (Oral presentation)
3. ●Iweka, P., Kawamura, S., Mitani, T., and Koseki, S., 2018. Non-destructive Online Real-time Milk Quality Determination in a Milking Robot using Near-infrared Spectroscopic Sensing System. *12th CIGR Section VI International Technical Symposium, Innovations and Technologies for Sustainable Agricultural Production and Food Sufficiency*, International Institute of Tropical Agriculture, October 22-25, 2018, Ibadan, Nigeria. (Oral presentation)
4. ●Cambaza, E., Koseki, S., and Kawamura, S. (2018a). *Fusarium graminearum* colors and deoxynivalenol synthesis at different temperatures. *The 2nd International Conference on Food Quality, Safety and Security (FOOD QualSS)*, October 25-26, 2018, Colombo, Sri Lanka. (Oral presentation) Award: Best presentation
5. ●Chen, J., Kudo, H., Kan, K., Kawamura, S., and Koseki, S. Growth Inhibitory Effect of D-tryptophan on *Vibrio* spp. in broth culture, seawater and live oysters. *International Association for Food Protection Annual Meeting 2018*, July 8-11, 2018, Salt Lake City, Utah, USA. (Poster presentation)

- Lee, K., Shoda, M., Kawai, K., and Koseki, S. Investigation of relationship between desiccation tolerance of *Salmonella* spp. and glass transition temperature. *International Association for Food Protection 2019 Annual meeting*, July 8-11, 2019, Louisville, USA. (Poster presentation)

生物情報分子解析学

1. 原著論文

1. Laksana Anugerah A., Fukuda, S., and Fukushi Y. The structures of cyclic amins from aldehydes and “roofed” mono-*N*-sulfonyl *cis*-diamines *Biosci. Biotech. Biochem.*, **84**, 2425-2428 (2020).

基礎環境微生物学

1. 原著論文

1. Itoh, H., Jang, S. (co-first author), Takeshita, K., Ohbayashi, T., Ohnishi, N., Meng, X.-Y., Mitani, Y., and Kikuchi, Y. Host—symbiont specificity determined by microbe—microbe competition in an insect gut. *Proc. Natl. Acad. Sci. U. S.A.*, **116**, 22673-22682 (2019).
2. Tu, Z., Lopes, H.F.S., Hirota, K., and Yumoto, I. Analysis of the microbiota involved in the early changes associated with indigo reduction in the natural fermentation of indigo. *World J. Microbiol. Biotechnol.*, **35**, 123 (2019).
3. Tu, Z., Lopes, H.F.S., Igarashi, K., and Yumoto, I. Characterization of the microbiota in long- and short-term natural indigo fermentation. *J. Ind. Microbiol. Biotechnol.*, **46**, 1657-1667 (2019).
4. Takeshita, K., Jang, S., and Kikuchi, Y. Complete genome sequence of *Burkholderia* sp. strain THE68, a bacterial symbiont isolated from midgut crypts of the seed bug *Togo hemipterus*. *Microbiol. Resour. Announc.*, **9**, e00041-20 (2020).
5. Kikuchi, Y., Ohbayashi, T., Jang, S., and Mergaert, P. *Burkholderia insecticola* triggers midgut closure in the bean bug *Riptortus pedestris* to prevent secondary bacterial infections of midgut crypts. *ISME J.*, **14**, 1627-1638 (2020).
6. Jang, S., and Kikuchi, Y. Impact of the insect gut microbiota on ecology, evolution, and industry. *Curr. Opin. Insect Sci.*, **41**, 33-39 (2020).
7. Jang, S., and Kikuchi, Y. Re-opening of the symbiont sorting organ with aging in *Riptortus pedestris*. *J. Asia-Pac. Entomol.*, **23**, 1089-1095 (2020).
8. Quaiyum, S., Igarashi, K., Narihiro, T., and Kato, S. Microbial community analysis of anaerobic enrichment cultures supplemented with bacterial peptidoglycan as the sole substrate. *Microbes Environ.*, **35**, ME20002 (2020).
9. Hirota, K., Hironaga K., Tu, Z., and Yumoto, I. Comparison between wet and semi-dry anaerobic biogas diester under thermophilic and mesophilic conditions: methane productivity and analysis of microbiota. *African J. Microbiol. Res.*, **14**, 319-331 (2020).
10. Ishigami, K., Jang, S., Itoh, H., and Kikuchi, Y. Insecticide resistance governed by gut symbiosis in a rice pest, *Cletus punctiger*, under laboratory conditions. *Biol. Lett.*, **17**, 20200780 (2021).
11. Jang, S., Mergaert, P., Ohbayashi, T., Ishigami, K., Shigenobu, S., Itoh, H., and Kikuchi, Y. Dual oxidase enables insect gut symbiosis by mediating respiratory network formation. *Proc. Natl. Acad. Sci. U.S.A.*, **118**, e2020922118 (2021).
12. Sato, Y., Jang, S. (co-first author), Takeshita, K., Itoh, H., Koike, H., Tago, K., Hayatsu, M., Hori, T., and Kikuchi, Y. Insecticide resistance by a host-symbiont reciprocal detoxification. *Nat. Commun.*, **12**, 6432 (2021).
13. Lopes H.F.S., Tu Z., Sumi, H., and Yumoto, I. Analysis of bacterial flora of indigo fermentation fluids utilizing composted indigo leaves (sukumo) and indigo extracted from plants (Ryukyuu-ai and Indian indigo). *J. Biosci. Bioeng.* **132**, 279-286 (2021).
14. 佐々木章晴, Tu Z., 湯本勲: 北海道東部火山性草地土壌における人為的要因による土壌炭素含有率への影響 日本土壤肥料学雑誌 **92**, 181-191 (2021).
15. Tu Z., Lopes H.F.S., Narihiro, T., and Yumoto I. The mechanisms underlying of long-term stable indigo reduction state in indigo fermentation using sukumo (composted polygonum tinctorium Leaves). *Front. Microbiol.* **12**, 698674 (2021).
16. Lopes H.F.S., Tu Z., Sumi, H., Furukawa H., and Yumoto I. Indigofera tinctoria leaf powder as a promising additive to improve indigo fermentation prepared with sukumo (composted Polygonum tinctorium leaves). *World J. Microbiol. Biotechnol.* **37**, 179 (2021).
17. Tu Z., Lopes H.F.S., and Yumoto I. *Fundicoccus fermenti* sp. nov., an indigo-reducing facultative anaerobic alkaliphile isolated from indigo fermentation liquor used for dyeing. *J. Syst. Evol. Microbiol.*, **72**, 005239 (2022).

2. 学会発表 (○; 国内: 8, ●; 国際: 1)

1. ○Jang, S., and Kikuchi, Y. A novel function of Duox in insect-microbe gut symbiosis: development of trachea network and stabilization of symbiont colonization. 第63回日本応用動物昆虫学会大会, Mar. 26, 2019, Ibaraki, Japan (Oral presentation).
2. ○Tu, Z., Lopes, H.F.S., Hirota K., and Yumoto I. Characterization of the bacterial flora associated with indigo reduction in extreme alkaline fermented fluid. 極限環境生物学会2019年度年会, November 17, 2019, Kyoto Japan (Poster presentation [P-48]).
3. ●Quaiyum, S., Igarashi, K., Sone, T., and Kato, S. Investigation of Peptidoglycan Degradation by Anaerobic Bacterial Communities. *Applied and Environmental Microbiology, Gordon Research Conference*, July 17, 2019, Mount Holyoke College, MA, USA (Poster presentation).
4. ○Xie, RY., Takashino, M., Igarashi, K., and Kato, S. The rare earth elements-mediated methanol dehydrogenase switch in a methanotrophic bacterium *Methylococcus capsulatus* Bath. 日本農芸化学会2020年度大会, March 27, 2020, Fukuoka, Japan (Oral presentation).

5. ○Quaiyum, S., Igarashi, K., and Kato, S. Anaerobic degradation of bacterial whole cells by methanogenic microbial communities. 日本農芸化学会 2020 年度大会, March 27, 2020, Fukuoka, Japan (Oral presentation).
6. ○Jang, S., Ishigami, K., Ohbayashi, T., Matsuura, Y., Mergaert, P., and Kikuchi, Y. Homeobox 遺伝子によって調節される共生器官の驚くべき形態変化. 日本進化学会第 23 回東京大会, Aug. 19, 2021, Tokyo, Japan (Oral presentation).
7. ○Putcha J.P., Igarashi, K., Kato, S., and Kitagawa, W. Microbial community analysis of plastic-degrading bacteria. *Annual meeting of Society of Genome Microbiology, Japan*, March 6. 2021, Online, (Oral presentation).
8. ○Yan, H., Nobu, M.K., Igarashi, K., and Kato, S. Thermophilic formate-driven syntrophy among subsurface bacterium and methylotrophic methanogen. 日本微生物生態学会第 34 回大会, Oct. 30-Nov. 2, 2021, Niigata, Japan (Poster presentation).
9. ○Xie, R.Y., Takashino, M., Igarashi, K., Kitagawa, W., and Kato, S. The rare earth elements-mediated methanol dehydrogenase switch and putative rare earth element chelator production in *Methylococcus capsulatus* Bath. 日本微生物生態学会第 34 回大会, Oct. 30-Nov. 2, 2021, Niigata, Japan (Poster presentation).

3. その他

総説:

1. Aino, K., Hirota, K., Okamoto, T., Tu, Z., Matsuyama, H., and Yumoto, I. Microbial communities associated with indigo fermentation that thrive in anaerobic alkaline environments. *Front. Microbiol.*, **9**, 2196 (2018).

動物生態学

1. 原著論文

1. Yatsuyanagi, T., Ishida, R., Sakata, K. M., Kanbe, T., Mizumoto, H., Kobayashi, Y., Kamada, S., Namba, S., Nii, H., Minamoto, T., and Araki, H. Environmental DNA monitoring for short-term reproductive migration of endemic anadromous species, Shishamo smelt (*Spirinchus lanceolatus*). *Environmental DNA*, **2**:130-139. (2020).
2. Yatsuyanagi, T., and Araki, H. Understanding seasonal migration of Shishamo smelt in coastal regions using environmental DNA. *PLoS One*, **15**(10), e0239912. (2020).

2. 学会発表 (○; 国内: 13, ●; 国際: 0)

1. ○八柳 哲, 神戸 崇, 水本寛基, 小林由美, 鎌田頌子, 南波聡子, 新居久也, 源 利文, 坂田雅之, 荒木仁志. 環境 DNA を用いた北海道固有種シシャモ *Spirinchus lanceolatus* の河川遡上パターン検出. 第 1 回環境 DNA 学会, 東京都・日本科学未来館, 2018 年 9 月 (Poster presentation).
2. ○八柳 哲, 水本寛基, 神戸 崇, 坂田雅之, 源 利文, 新居久也, 荒木仁志. シシャモを追って: 自然産卵河川の発見及び遡上動態把握の試み. 2018 年度日本生態学会北海道地区大会, 札幌市・北海道大学環境科学院, 2018 年 12 月 (Oral presentation).
3. ○八柳 哲, 水本寛基, 神戸 崇, 坂田雅之, 源 利文, 新居久也, 荒木仁志. シシャモを追って ~回遊生態の全容把握へ向けて~. 第 40 回魚類系統研究会, 札幌市・北海道大学農学研究棟, 2018 年 12 月 (Oral presentation).
4. ○八柳 哲, 荒木仁志. 環境 DNA を用いた生物分布推定とシシャモ遡上分布への応用. 第 4 回北海道水産海洋研究集会, 札幌市・かでの 27, 2019 年 1 月 (Oral presentation).
5. ○八柳 哲, 神戸 崇, 水本寛基, 小林由美, 坂田雅之, 源 利文, 石田良太郎, 新居久也, 荒木仁志. 環境 DNA から探る, 日本固有種シシャモの遡上と分布. 第 66 回日本生態学会大会, 神戸市・神戸国際展示場, 2019 年 3 月 (Poster presentation).
6. ○八柳 哲. “本シシャモ”の謎を追って: 河川遡上と海域回遊. 第 2 回環境 DNA 学会 自由集会「オール北海道: 北海道を舞台にした環境 DNA 研究」, 神戸市・神戸大学鶴甲第 2 キャンパス, 2019 年 11 月 (Oral presentation).
7. ○八柳 哲, 荒木仁志. シシャモを追って早 2 年: わかってきたことと, 今後の展望. 第 41 回魚類系統研究会, 札幌市・青少年山の家, 2019 年 12 月 (Oral presentation).
8. ○Yatsuyanagi, T., and Araki, H. Understanding the seasonal migration of Shishamo smelt in coastal regions using environmental DNA. 第 67 回日本生態学会大会, 名古屋市・名城大学天白キャンパス, 2020 年 3 月 (Oral presentation).
9. ○八柳 哲, 神戸 崇, 水本寛基, 福島路生, 中嶋信美, 荒木仁志. Environmental DNA metabarcoding characterizes the distribution and phylogeography of a primary freshwater fish, Siberian stone loach. 日本進化学会第 22 回大会, オンライン開催, 2020 年 9 月 6-9 日 (Poster presentation).
10. ○Yatsuyanagi, T., Kanbe, T., Mizumoto, H., Fukushima, M., Nakajima, N., and Araki, H. MiFish metabarcoding characterizes haplotypes and phylogeography of Siberian stone loach in Hokkaido. 環境 DNA 学会第 3 回大会・第 36 回個体群生態学会合同大会, オンライン開催, 2020 年 11 月 14-16 日 (Poster presentation).
11. ○八柳 哲. 環境 DNA から回遊魚の謎に迫る: キュウリウオ科を中心に. 2020 年度サケ学研究会 若手企画集会, オンライン特別セミナー, 2020 年 12 月 5 日 (Oral).
12. ○Yatsuyanagi, T., Kanbe, T., Mizumoto, H., Nakajima, N., Fukushima, M., and Araki, H. Phylogeographic analysis on Siberian stone loach based on environmental DNA 日本生態学会第 68 回全国大会, オンライン開催, 2021 年 3 月 17-21 日 (Poster presentation).
13. ○Yatsuyanagi, T., Kanbe, T., Mizumoto, H., Inoue, S., and Araki, H. Understanding biogeography of rockfishes (genus *Sebastes*) in northern Japan using an eDNA metabarcoding approach. 第 69 回日本生態学会大会, オンライン開催, 2022 年 3 月 14-19 日 (Poster presentation).

3. その他

著書:

1. 八柳 哲, 峰岸有紀, 水本寛基, 荒木仁志 “種特異的環境 DNA 手法の事例: 回遊魚研究とモニタリング”. In: 土居秀幸, 近藤倫生 編集. 環境 DNA —生態系の真の姿を読み解く—. 共立出版, 東京. pp.83-106, ISBN: 978-4-320-05816-3

(2021).

遺伝繁殖学

1. 原著論文

1. Talukder, M.A.S., Balboula, A.Z., Shirozu, T., Kim, S.W., Kunii, H., Suzuki, T., Ito, T., Kimura, K., and Takahashi, M. Activation of lysosomal cathepsins in pregnant bovine leukocytes. *Reproduction*, **155(6)**, 515-528 (2018).
2. Li, G., Otsuka, Y., Matsumiya, T., Suzuki, T., Li, J., Takahashi, M. and Yamada, K.A. Straightforward substitution strategy to tune BODIPY dyes spanning the near-infrared region via Suzuki-Miyaura cross-coupling. *Materials (Basel, Switzerland)*. **11(8)**, 1297 (2018).
3. Bai, H., Shabur, T.M.A., Kunii, H., Itoh, T., Kawahara, M., and Takahashi, M. Evaluation of the immune status of peripheral blood monocytes from dairy cows during the periparturition period. *J. Reprod. Dev.*, **65(4)**, 313-318 (2019).
4. Li, G., Li, J., Otsuka, Y., Zhang, S., Takahashi, M., and Yamada, K.A. BODIPY-based fluorogenic probe for specific imaging of lipid droplets. *Materials (Basel, Switzerland)*, **13(3)**, 677 (2020).
5. Li, J., Maeji, M., Balboula, A.Z., Aboelenain, M., Fujii, T., Moriyasu, S., Bai, H., Kawahara, M., and Takahashi, M. Dynamic status of lysosomal cathepsin in bovine oocytes and preimplantation embryos. *J. Reprod. Dev.*, **66(1)**, 9-17 (2020).
6. Li, J., Balboula, A.Z., Aboelenain, M., Fujii, T., Moriyasu, S., Bai, H., Kawahara, M., and Takahashi, M. Effect of autophagy induction and cathepsin B inhibition on developmental competence of poor quality bovine oocytes. *J. Reprod. Dev.*, **66(1)**, 83-91 (2020).
7. Balboula, A.Z., Aboelenain, M., Li, J., Bai, H., Kawahara, M., Abdel-Ghani, MA., and Takahashi, M. Inverse relationship between autophagy and CTSK is related to bovine embryo quality. *Reproduction*, **159(6)**, 757-766 (2020).
8. Fan, W., Homma, M., Xu, R., Kunii, H., Bai, H., Kawahara, M., Kawaguchi, T., and Takahashi, M. The use of a two-step removal protocol and optimized culture conditions improve development and quality of zona free mouse embryos. *Biochem. Biophys. Res. Commun.*, **577(5)**, 116-123 (2021).
9. Ho, K.T., Homma, K., Takanari, J., Bai, H., Kawahara, M., Nguyen, K.T.K., and Takahashi, M. A standardized extract of *Asparagus officinalis* stem improves HSP70-mediated redox balance and cell functions in bovine cumulus-granulosa cells. *Sci. Rep.*, **11(1)**, 18175 (2021).

2. 学会発表 (○：国内；●：国際)

1. ○唄 花子, Talukder, M.A.S., 国井 宏樹, 伊藤 月乃, 川原 学, 高橋 昌志, 乳牛の分娩前後における末梢血単核球のストレスおよび免疫関連因子の解析. 第111回日本繁殖生物学会大会, 9月12日 - 16日, 2018. 上田市, 長野 (Poster presentation).
2. ○Li, J., Balboula, A.Z., Aboelenain, M., Fujii, T., Moriyasu, S., Bai, H., Kawahara, M., and Takahashi, M. Expression pattern of cathepsin B gene and protein in ICM and TE of bovine blastocyst. 第112回日本繁殖生物学会大会, 9月12日 - 16日, 2019. 札幌市 (Poster presentation).
3. ○Ho, K.T., Homma, K., Takanari, J., Bai, H., Kawahara, M., and Takahashi, M. Effect of extract of asparagus stem on non-heat shock induction of HSP70 in relation with antioxidant defense in bovine cumulus cells. *The 113th Meeting of the Society for Reproduction and Development*. Miyagi, Japan. September 23-25, 2020 (Poster presentation).
4. ○Ho, K.T., Homma, K., Takanari, J., Bai, H., Kawahara, M., Nguyen, K.T.K., and Takahashi, M. Effect of EAS on P4 production pathway of bovine CG cells in relation with hsp70. *The 114th Meeting of the Society for Reproduction and Development*. Kyoto, Japan. September 21-24, 2021 (Poster presentation).
5. ○Ho, K.T., Homma, K., Takanari, J., Bai, H., Kawahara, M., Nguyen, K.T.K., and Takahashi, M. Effect of EAS on HSP70 related progesterone synthesis in bovine cumulus-granulosa cells, *The 128th Annual Meeting of Japanese Society of Animal Science*. Kyushu, Japan. March 27-30, 2021 (Poster presentation).
6. ○Ho, K.T., Homma, K., Takanari, J., Bai, H., Kawahara, M., Nguyen, K.T.K., and Takahashi, M. Effect of EAS on post freezing viability of heat stressed bovine cumulus granulosa cells in relation with redox balance. *The 129th Annual Meeting of Japanese Society of Animal Science*. Miyagi, Japan. September 13-16, 2021 [III-15-09] (Oral presentation).
7. ○Fan, W., Bai, H., Kawahara, M., and Takahashi, M. Effect of two-step combined zona pellucida removal on developmental competence of mouse embryos. *The 129th Annual Meeting of Japanese Society of Animal Science*. Miyagi, Japan. September 13-16, 2021 [III-15-08] (Oral presentation, English Presentation Award).

生態系管理学

1. 原著論文

1. Furukawa, F., Morimoto, J., Yoshimura, N., and Kaneko, M. Comparison of Conventional Change Detection Methodologies Using High-Resolution Imagery to Find Forest Damage Caused by Typhoons. *Remote Sens.*, **12(19)**, 3242-3242 (2020).
2. Morimoto, J., Aiba, M., Furukawa, F., Mishima, Y., Yoshimura, N., Nayak, S., Takemi, T., Haga, C., Matsui, T., and Nakamura, F. Risk assessment of forest disturbance by typhoons with heavy precipitation in northern Japan. *For. Ecol. Manag.*, **479**, 1-9 (2021).
3. Laneng, A.L., Nakamura, F., Tachiki, Y., and Vairappan, C.S., Camera-trapping assessment of terrestrial mammals and birds in rehabilitated forest in INIKEA Project Area, Sabah, Malaysian Borneo. *Landsc. Ecol. Eng.*, **17(2)**, 135-146 (2021).
4. Furukawa, F., Laneng, A.L., Ando, H., Yoshimura, N., Kaneko, M., and Morimoto, J. Comparison of RGB and Multispectral Unmanned Aerial Vehicle for Monitoring Vegetation Coverage Changes on a Landslide Area. *Drones*, **5(3)**, 97-97 (2021).

5. Furukawa, F., Morimoto, J., Yoshimura, N., Koi, T., Shibata, H., and Kaneko, M. UAV Video-Based Approach to Identify Damaged Trees in Windthrow Areas. *Remote Sens.*, **14**(13), 3170-3170 (2022).
 6. Laneng, A.L., Tachiki, Y., Akamatsu, R., Kobayashi, K., Takahata, C., and Nakamura, F. Seasonal home range and habitat selection patterns of sika deer *Cervus nippon* in southern Hokkaido, Japan. *Wildlife Biol.*, in press.
2. 学会発表 (○; 国内: 6, ●; 国際: 1)
1. ○森本淳子, 高野宏平, 中川考介, Flavio Furukawa, 饗庭正寛, 小黒芳生, 吉村暢彦, 古川泰人, 三島啓雄, 小川健太, 伊東瑠衣, Sridhara Nayak, 佐々井崇博, 竹見哲也, 柴田英昭: 人工林の風倒リスク推定に基づく森林計画—現在気候下での風倒モデリング—. 第130回日本森林学会大会, 2019年3月20日, 新潟, 日本 (口頭発表).
 2. ●Morimoto, J., Aiba, M., Furukawa, F., Mishima, T., Terada, F., Yoshimura, N., Nayak, N., and Takemi, T. Assessment of windthrow risk by successive typhoons with heavy rain in northern Japan. *The 9th International Wind and Trees Conference*, February 27, 2020, Rotorua, New Zealand (Oral presentation).
 3. ○Li, J., Morimoto, J., Suzuki, S., Owari, T., and Nakane, T. Combined impacts of Windthrow and Subsequent management on forest structure in cool temperate forests. 第68回日本生態学会大会, 2021年3月19日, 岡山, 日本 (口頭発表). English Presentation Audience Award (EPAA) 受賞.
 4. ○Li, J., Morimoto, J., Suzuki, S., Owari, T., and Nakane, T. The 30 years' Impacts of Wind Disturbance and Management Approaches on Forest Structure Recovery in Hemi-boreal Forests, Hokkaido. *GLP 2021 Asia Conference*, September 14, 2021, Sapporo, Japan (Oral presentation).
 5. ○Furukawa, F., Laneng, A.L., Ando, H., Yoshimura, N., Kaneko, M., and Morimoto, J. Comparison of RGB and Multispectral Unmanned Aerial Vehicle for Landslide Characterization. *GLP 2021 Asia Conference*, September 14, 2021, Sapporo, Japan (Oral presentation).
 6. ○安藤宏明, Flavio Furukawa, 森本淳子, 中村太士: 北海道胆振東部地震により発生した表層崩壊地での初期の植生回復プロセス. 第133回日本森林学会大会, 2022年3月27日, 山形, 日本 (ポスター発表).
 7. ○Laneng, A.L., Tachiki, Y., Akamatsu, R., Kobayashi, K., Takahata, C., and Nakamura, F. Seasonal home range and habitat selection patterns of sika deer *Cervus nippon* in southern Hokkaido, Japan. 日本哺乳類学会 2022年度大会, 2022年8月29日, 津, 日本 (口頭発表).

昆虫体系学

1. 原著論文

1. Akimoto, S., Li, Y., Imanaka, T., Sato, H., and Ishida, K. Effects of radiation from contaminated soil and moss in Fukushima on embryogenesis and egg hatching of the aphid *Prociphilus oriens*. *J. Heredity*, **109**, 199-205 (2018).
2. Li, Y., and Akimoto, S. Evaluation of an aphid-rearing method using excised leaves and agar medium. *Entomol. Sci.*, **21**, 210-215 (2018).
3. Tong, X., and Akimoto, S. Female-female competition leads to female-biased sex allocation and dimorphism in brood sex composition in a gall-forming aphid. *Funct. Ecol.*, **33**, 457-466 (2019).
4. Tong, X., Takata, Y., and Akimoto, S. Seasonal changes in cuticular hydrocarbons in response to polyphenism in the host-alternating aphid *Prociphilus oriens*. *Entomol. Sci.*, **24**, 18-26 (2020).
5. Parven, N., Yao, I., Kanbe, T., and Akimoto, S. Heat shock alters aphid-*Buchnera* interactions in the pea aphid: negative allometry of *Buchnera* gene density with aphid gene density. *Entomol. Exp. Appl.*, **169**(5), 462-471 (2021)
6. Suzumura A.L., Kobayashi N. and Ôhara M. Revision of the beach-dwelling Species of *Cercyon* Leach (Coleoptera: Hydrophilidae) of the West Coast of North America. *The Coleopterists Bulletin*, **73**(3), 473-493 (2019).
7. Suzumura A.L., New record of *Sphaeridium lunatum* (Coleoptera: Hydrophilidae) from Hokkaido, Northern Japan. *Elytra, Tokyo, New Series*, **10**(2), 343-347 (2020).
8. Ôhara M., Nakaoka T., Takagi H., Ogawa N., Kikuchi N., Yamamoto H., Leschen R., Satô R., Suzumura A.L., and Sawada Y. Report of the entomofauna research in Toyoni Lake area, Erimo Town, Hokkaido, Japan. IV, Coleoptera (3). 北海道えりも町豊似湖周辺ほか昆虫調査報告. IV. 甲虫類3 (2021).
9. Cheng, Z. and Yoshizawa, K. Functional morphology of *Trichadenotecnum* male and female genitalia analyzed using μ CT (Insecta: Psocodea: Psocomorpha). *J. Morphol.*, **280**, 555-567 (2019).

2. 学会発表 (○; 国内: 13, ●; 国際: 3)

1. ○Tong, X., and Akimoto, S. Female-biased sex allocation in *Tetraneura sorini*. *Annual meeting of the Hokkaido Branch of the Entomological Society of Japan*. January 18, 2017, The Hokkaido University Museum (Oral presentation).
2. ○Tong, X., Takata, Y., and Akimoto, S. Difference in cuticular hydrocarbons among generations in the eriosomatine aphid, *Prociphilus oriens*. *Annual meeting of the Hokkaido Branch of the Entomological Society of Japan*. January 24, 2018, The Hokkaido University Museum (Oral presentation).
3. ○Tong, X., Takata, Y., and Akimoto, S. Difference in cuticular hydrocarbons among generations in the eriosomatine aphid, *Prociphilus oriens*. *62th Annual Meeting of the Applied Zoology and Entomology of Japan*, March 26, 2018, Kagoshima University, Kagoshima (Poster presentation).
4. ○Tong, X., and Akimoto S. Strong mothers favor daughters: A case study of the Trivers-Willard hypothesis in a gall-forming aphid with reversed sex roles, The 21st Annual Meeting of the Society of Evolutionary Studies, Japan, 2019/08/04, Sapporo, Japan (Oral presentation).
5. ○Tong, X., and Akimoto S. Reproductive performance manipulated by gall-formers in one *Tetraneura* aphid: gall site selection or silver spoon effect? The annual meeting of Japanese Society of Applied Entomology & Zoology, 2019/03/26, Tsukuba, Japan (Oral presentation).
6. ○Tong, X., Kobayashi Y., and Akimoto S. Shigenobu S., Genome sequences of endosymbiotic bacteria *Buchenra aphidicola*

- in tripartite symbioses in aphid-galling systems, The annual meeting of Entomological Society of Japan, 2021/09/04 (Oral presentation, online).
7. ○[Tong X.](#) Female-female competition leads to female-biased sex allocation in a gall-forming aphids, Aphid Special Interest Group meeting, Royal Entomological Society. 2021/04/16 (Oral presentation, online).
 8. ○[Tong X.](#) The 68th Annual Meeting of Ecological Society of Japan, Foreign students studying Ecology in Japan during COVID-19, 2021/03/17 (Oral presentation, online).
 9. ○[Tong X.](#), Kanzaki N., and Akimoto S. First record of a mermithid (Nematode: Mermithidae) parasitizing sexuparae of the gall-forming aphids (Aphididae: Eriosomatinae), The annual meeting of Entomological Society of Japan, Hokkaido Branch, 2021/01/21 (Oral presentation, online).
 10. ●[Suzumura A.](#), and Ôhara M. Transoceanic dispersal and biogeography of littoral *Cercyon* Leach (Hydrophilidae) across the Northern Pacific. *39th Annual Meeting of the Taiwan Entomological Society*, October 20-21, 2018. Tainan, Taiwan, (Oral presentation) (Presentation Award in Systematic Taxonomy, Population genetics, and Evolution section)
 11. ●[Suzumura A.](#), and Ôhara M. Revision of littoral *Cercyon* (Leach) species of Washington and British Columbia. *ESA, ESC and ESBC Joint Annual Meeting*. November 11-14, 2018. Vancouver, British Columbia. (Poster presentation)
 12. ○[Suzumura, A.](#) "Diversity of Marine *Cercyon* Leach (Coleoptera: Hydrophilidae) of the Northern Pacific." 北海道応用動物・昆虫研究会 . 12 Jan. 2019. Hokkaido University Museum, Sapporo, Hokkaido, Japan. (Oral presentation)
 13. ●[Suzumura A.](#) Relationships between littoral *Cercyon* (Coleoptera: Hydrophilidae) across the Northern Pacific. *37th Symposium and Annual Meeting, Association of Systematic Biologists of the Philippines*. May 29-31, 2019. Puerto Princesa, Philippines. (Oral presentation (1st in the Young Systematic Biologists Forum—Graduate Category, Session B))
 14. ○[Suzumura A.](#) Untangling the taxonomy of *Sphaeridium* (Coleoptera: Hydrophilidae) of Asia, *Online Conference of General Entomology, Entomological Society of Japan*. July31, 2020. Japan. (Oral presentation, online)
 15. ○[Suzumura A.](#) Comparative morphology and distribution of the northern trans-Pacific genus *Phaleromela* (Coleoptera: Tenebrionidae). *2nd Online Conference of General Entomology, Entomological Society of Japan*. February 2, 2021. Japan. (Oral presentation, online)
 16. ○[Suzumura A.](#) Morphological characters of the terrestrial coprophilous water scavenger beetle genus *Sphaeridium* (Coleoptera: Hydrophilidae). *The 11th Annual Meeting of the Coleopterological Society of Japan*. December 4-5, 2021. Japan. (Oral presentation, online)

北海道大学 大学院農学研究院

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

電話番号 : 011-706-4119 (事務部)

電子メール : kyomu@agr.hokudai.ac.jp

公式サイト : <https://www.agr.hokudai.ac.jp/>

自己点検評価報告書タスクフォース

リーダー : 園山 慶

環境保全領域 : 当真 要 齋藤 秀之

食品科学領域 : 玖村 朗人 吹谷 智

食料生産領域 : 上田 宏一郎 呉 成真

生命科学領域 : 浦木 康光 橋本 誠

発行 : 2023年3月31日

印刷 : 株式会社アイワード

